

あり。

△愛知縣丹羽郡丹陽村野村久之丞の長男、明治十四年生る、當年知命に入る五歳也。益々元氣にして、今は手腕、人格共に練達して老熟の域に達し、「醫は仁術也」をモットーとして、診療に熱心に力め親切と誠意とを以てす。一面又人と接するに快活にして圓滿、愛情あり同情に富む、蓋し性格の反映にして其の篤き聲望を増し、克く今日の成功を贏得たる所以知るべき也。

加藤豊彦

△臺灣嘉義市榮町六ノ六に開業せる加藤豊彦博士は、大阪醫大の出身、學位は九州帝大より獲得せる外科専門家にして、特に内臓疾患を最も得意とする名醫博也。猶公職としては嘉義市協議會員、市政調査委員、衛生委員等に擧げられ、臺灣總督府專賣局嘉義支局醫務囑託、第一生命保險、安田生命保險、大同生命保險、太平生命保險、三井生命保險等の醫務を囑託せらる。人と爲り穩健篤實、患者に對するに眞摯にして親切なりとの評判を聞く。

△廣島縣双三郡萩原村加藤直隆の養嗣子にして、明治二十六年生る、大正九年大阪府立醫大卒業後、直ちに九州帝大醫學部副手囑託、外科學第二講座教室勤務を被命、同十年七月任同大學助手、同十五年一月依願免本官、同時に九州帝大醫學部專攻生として入學、引續外科學第二講座教室にて研究を續け、傍ら佐賀縣西唐津港にて開業、同年十二月學位受領、昭和二年夏前記開業を閉鎖し臺灣總督府醫院醫長に被任、臺中醫院外科部長として赴任す、昭和四年八月依願職を辭し嘉義市醫に就任す。

△學位主論文は「胸腸腔内ニ流出シタル血液ノ凝固セザル理由並ニ同腔内ニ於ケル血液凝固防止性物質ノ本態ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)胃、大腸下垂症ニ對シテ固定術ヲ施シタル經驗、(2)「エーテル」ノ外科的應用ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究、(3)クルムスキ氏液ノ外科的應用ニ關スル實驗的及臨床的研究の三篇なり。

高木四郎

△滿洲安東縣滿鐵醫院に外科部長として高木四郎博士あり。博士は京大系の外科専門家にして恩師猪子止才之助博士に就きて斯學の蘊奥を究め、又森島及び尾崎兩教授の指導を受けて藥物學を研究し、大學院を卒業して母校より學位を獲得せる名醫博也。

△更に學歴より見たる博士は、大正六年京都帝大醫科大學卒業後、直ちに猪子外科教室に入り、同八年十月迄研究、それより神戸市佐野病院副院長兼外科部長就任、同十年二月神戸製鋼所醫務囑託、同十一年二月同所の依頼に依り兵庫縣相生町に於て播磨病院を創設し院長となる、同十三年四月之を辭し、同年七月より十五年六月迄大學院學生として母校藥物學教室に於て森島、尾崎兩教授の指導を受く、退學後直ちに日赤岐阜支部斐太療院長に就任、同十五年十二月學位受領、昭和三年春日赤を辭し、高知市楠病院外科部長として赴任し、同六年九月現職に轉任今日に至る。

△主論文は「諸種藥品ノ局所麻酔作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1)心臓房室間相互ニ於テ興奮ノ兩義傳導ニ成立スルカ(2)「クロラール」心臓ニ就テノ實驗(3)「クロラール」心臓ニ於ケル電氣刺戟實驗並ニ「ストロファンチン」ノ心臓刺戟傳導路ニ對スル作用ノ研究、(4)藥物ニ由ル「クロラール」心臓ノ恢復ニ就テの三篇なり。

△富山縣富山市惣曲輪高木喜兵衛の四男、明治二十三年生る。年壯の意氣益々壯んにして學識、手腕、人格共に圓熟の域に達す。勵精恪勤の人にして、至誠以て公に奉じ、仁術の爲め最善を盡し努力精進する所あり。一面又人と接するに、溫厚篤實、能く人を愛し、理解あり同情を以てす、以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に其の崇高なる人格を敬慕せしむ。滿洲安東縣山手町三一號に住む。

筒井省二

△鶴岡市莊内病院院長兼外科部長として筒井省二博士のあるは、既に久しく其の地方に喧傳す。博士は九大系の外科學者にして、大學院卒業に依り母校より學位を獲得せる名醫博也。指導教授は母校の中山森彦博士及び後藤七郎博士にして恩師の薰陶に負ふ所多し。多年蘊蓄せる學殖と共に實地の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。

△埼玉縣北葛飾郡富多村大字立野筒井源次郎の長男、明治二十三年生る。一高を経て、大正五年九州帝大醫科大學を卒業へ、直ちに副手囑託となり第二外科教室に勤務、同七年五月任同大學助手、同年九月滿鐵職員となり遼陽醫院に赴任し、同九年十月滿鐵公主嶺醫院、同十年八月滿鐵大連醫院に轉勤す、同十二年四月依願同社辭職、同年七月九州帝大大學院入學、後藤教授指導の下に外科學研究、同年九月九州帝大附屬醫院醫員を被命、同年十二月大學副手囑託、第二外科教室勤務、同十五年六月醫員及び副手を辭し大學院を退學す、同年七月鶴岡市莊内病院に奉職し、副院長兼外科部長として就任し、昭和六年五月院長となり、今日に至る、斯間昭和二年二月學位を授與せらる。

△學位主論文は「諸種細菌ニ對スル腎臟機能ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)頑固ナル「アメーバ」赤痢ヲ蟲樣突起瘻ニヨリ治癒セシメタル經驗、(2)脾脫疽ノ四例ニ就テ(3)外腸性大腿骨肉腫ノ一例ニ就テの二篇なり。其他論著夥多。

△賦性穩健篤實、學者タイプの風貌凛々として威嚴を有し、平和の裡に一掬の温情を藏す。研究以外、運動、寫眞、繪畫に多大の趣味を有し、又能く讀書して常に精神の修養に力む。鶴岡市馬場町に住む。

陰山 実

△日本赤十字社病院治療主幹(外科並整形外科擔任)としての陰山実博士の噴々たる名聲を聞くや既に久矣。博士は東大系の外科及び整形外科學者にして、整形外科界の權威たる恩師田代義徳博士に就きて斯學の

蘊奥を究め、又長與及び緒方兩教授に就きて病理學を専攻し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。嘗ては歐洲大戰中の歐米を視察し、後に又歐洲に留學してアショッフ教授の門に入り研鑽大に得る所あり。今や帝都醫博界に於ける斯科の大家として矚目せらるゝ一人物たるを否むべからず。

△顧みて其の今日ある博士の學歷及び閱歷を公開すれば、福岡縣嘉穂中學校、五高を経て、大正二年東京帝大醫科大學を卒業、直に日赤本社病院外科醫局に入る、同八年六月社命を帯び歐洲大戰に際し米、英、佛、白、伊諸國の戰線醫務狀況を視察し翌九年一月歸朝す、同十年日赤本社病院外科治療主任となる、同十二年二月東大田代整形外科教室に入りて研究、傍ら長與、緒方兩教授の下に病理學教室にて研究、同年十一月日赤病院より歐洲留學を命ぜられ、獨佛、瑞、澳、洪諸國に學び、同十四年九月歸朝、爾來引續現職に在り、昭和二年三月學位を受領す。

△主論文は「結核菌感染ニ際シ網狀織内皮細胞系統ノ初期反應ニ就テ、並ニ二十日鼠ノ鳥、牛兩結核ニ於テ結核菌體內感染ニ關スルゴールドマン氏細胞輸送説ノ批判」にして、參考論文なし、他に論著夥多、枚擧の遑なし。

△大分縣臼杵町海添の人、明治二十二年生れにして當年不惑に入る七歳也。大學卒業後日赤病院に終始し、至誠一貫今日に至る功績は決して尠からず、今や同病院の重鎮として篤き信望を博するも亦偶然ならず。賦性篤實敦厚、眞面目にして恭謙禮節に厚く、寛容能く人を容れ部下を愛撫す。學究的温厚の紳士として、其の高邁なる人格を慕はる。研究以外の趣味としては弓術を好み、健康の増進と共に心身の鍛鍊に餘念なきが如し。東京市麻布區筈町一六八に住む。

藤田 小五郎

△社會事業の急先鋒たる前の大阪市財團法人弘濟會弘濟病院(大阪市東區粉川町)外科醫長兼醫務係長として實費診療團の爲め盡瘁活動しつゝありし藤田小五郎博士は、昭和九年四月父の急死に依り辭職東上以來

家政の整理旁々研究に従事しつゝあり。博士は大阪醫大系より出色せる外科専門の大家として既に斯界に定評あり、殊に其最も得意とする創傷傳染病に至りては獨歩の觀あり、到底他の追隨を許さずとの評判也。

△博士は東京麻布中學を経て、大阪府立高醫へ入學し大正六年大阪府立醫大を卒ゆ、直に醫化學教室に止まり、同年十二月助手兼病院醫員拜命、外科教室勤務、同八年二月辭職同時に、大阪市天王寺にて開業の傍ら母校の研究科へ入學、同九年四月より附屬病院實驗診療科に於て微生物學研究、同十年爲病氣診療閉業、同十一年十一月京都帝大專修科へ入學、皮膚科教室にて松本教授指導の下に研究、昭和二年四月退學、同年學位受領、同三年三月頭書の弘濟病院外科醫長拜命、同時に同看護婦養成所教師囑託、同五年一月同所幹事、同四年十一月より五年一月迄大阪慈善病院醫長兼職、同七年四月弘濟病院醫務係長兼職を命ぜらる、同九年四月辭職以來東京に移り今日に至る。

△學位主論文「實驗的鼠咬症ノ血清化學的研究補遺」(英文) 參考論文、(1)加熱及非加熱組織「エキス」ノ非徑口的注入ニ關スル研究、(2)實驗的再歸熱「マウス」ノ血清化學的研究補遺、(3)實驗的家兔鼠咬症ノ豫防藥ノ試驗、外六篇あり。他に論著夥多。

△感想の一片を吐露して曰く「治療の爲めの醫學、醫學の爲めの治療を主體となすは最も醫界振興の理想たるべし」云々、高邁なる理想として傾聴に値す。博士は明治二十六年東京にて生る、當年四十有三歳也。學究的溫厚の紳士にして、思慮あり識見に富む、外科系疾患の實驗及び臨床醫學研究所の設立は多年博士の希望する所なりと聞く。趣味としては風俗地理歴史を愛好し、考古學の研究家として知られ、西谿は其號なり。性格は極めて短氣なれども、心底には一片の蟠りなく又毫も悪意の存することなし、深く長く交際ある人には厚誼友情の染々たるものあるを味はる、著者も亦其一人として博士に對する敬慕の念を歳と共に深からしむる者なり。東京市芝區三田小山町五に住す。

石川 一 佐久

△外科界近來の名醫博たる石川一佐久博士は、東京市瀧野川區瀧野川二〇七六に在り内科、小兒科及び外科を以て著聞する兄弟經營の石川病院に得意の外科を擔任する外、千葉醫大講師として學生の指導に努力しつゝあり。博士は東大の出身、外科界現代の權威佐藤三吉博士の愛弟子にして、多年恩師の指導を受くる所厚く、又藥物學は母校の林春雄及び田村憲造兩恩師に就きて專攻せる結果、學位は母校より獲得せる所謂東大系の名醫博たるに耻ぢず、嘗て獨、佛、米に留學して歸朝後は、助教授として千葉醫大の教壇に立ち、其の蘊蓄を披瀝して只管學生の指導に盡す所ありしも、今は講師として之を續け、自己の病院に於て日々診療に勵しみ、獨特の手腕を發揮する所あり、特に其の最も得意とする内臓外科の領域に至つては、益々好評裡に民衆の人望を集中しつゝあり。

△博士の學歷よりすれば、大正五年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに佐藤外科教室に入り、同八年四月迄佐藤教授指導の下に外科學專攻、同八年四月任臺灣總督府技師、南支那出張を命ぜられ財團法人福洲博愛會醫院外科醫長として同十年六月迄南支那に於て活動す、それより東京帝大醫學部藥物學教室に入り林教授及び田村教授に就き藥物學研究同十一年六月東大大学院入學、同十三年九月任千葉醫大助教授、兼同附屬醫院第二外科醫長を命ぜらる、同十四年十月外科學研究の爲め獨、佛、米、諸國へ留學を命ぜられ、昭和二年四月學位受領、同年五月歸朝、同三年十月依願免本官、更に千葉醫大講師となり、同時に石川病院外科長として就任今日に至れり。

△學位主論文は「腸管ノ蛋白體透過性ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。其他論著夥多。將來醫界に對しては「醫界の當局には、學識、體験を具備せる臨床家であり、最も人格ある醫政家をして當らしめよ」との抱負を持ち、又「日本醫界の現状よりして、醫學界と一般開業醫界との間に緊密なる相互連絡を最も肝要と思考す」との持論者也。

△明治二十四年新潟縣にて生れ、東京市に本籍を有す。學究的溫厚の紳士、今は最も得意時代にて腕の冴え盛也。人

と接するに圓滿にして、和氣溫情に富み、能く人を愛し後進を親しむ。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、運動を好み殊に劍道を能くす、又寫眞に堪能なり。春秋猶豐富にして、研究に醫療に餘念なき前途は益々輝かし、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇
名倉英二

△整形外科界新進の大家として名倉英二博士の名聲は、帝都醫博界に嘖々として聞くや既に久し矣。現に博士は昭和醫專教授兼同附屬病院整形外科部長たるの外、千住名倉分院（神田區駿河臺四丁目二番地）副院長として活躍する所あり。博士は九大系の出身、整形外科界の泰斗住田正雄博士及び神中正一教授の高弟にして、恩師指導の下に斯學の蘊奥を究め、又嘗て歐洲を視察し、母校より學位を得たる斯科界近來の少壯名醫博也。今や其の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、學生の指導と相俟つて臨床に精進し、獨特の新手腕を發揮して益々信望を博し、超然として斯界に獨歩の觀あるを見る。

△博士は東京府立一中、一高を経て、大正十一年九州帝大醫學部卒業後、直ちに同學部整形外科教室に勤務、昭和二年一月歐洲見學、同年三月學位受領、同年七月歸朝後、直ちに築地聖路加國際病院整形外科主任として就職す、翌三年四月同病院を辭し、昭和醫專教授となり整形外科を擔任す、其傍ら、同六年五月より整形外科名倉分院副院長として診療に従事し今日に至る。

△學位主論文は「縫合並ニ移植ニ關スル實驗的研究（其組織學的探究及び臨床的治驗）」にして、參考論文は、(1) 我教室十年間ニ於ケル上膊骨下端骨折ノ治驗、(2) 自家考案脊柱彎曲測定器及び其測定法ニ就キテ、(3) 腫移植及び縫合ニ就キテ、(4) 皮下腫切斷手術ニ關スル實驗的研究特ニ「アヒリス」腫ノ治癒現象ニ就キテの四篇なるが、其後發表せる論著又夥からざるものあり。

△東京市足立區本町（舊千住）五丁目、接骨醫界の名門名倉謙藏次男にして、名古屋醫大教授名倉重雄博士の弟たり明治二十九年生れにして年齒漸く四十歳也。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、少壯の意氣に燃え、研究心に富む人と爲り穩健篤行、志操堅實にして高邁なる人格を備ふ。學成りて後敢て自己の才學を衒はず、淡々として只管己を虚うし、人に厚うする謙遜なる態度は多とすべき也。趣味としては柔道（四段）を好み、又謡曲を樂しむ。東京市神田區駿河臺一ノ八ノ十五に住む。

◇
鈴木保壽

△水戸市下市東臺に私立下市病院あり、父兄弟の共立病院にして開業古く、内部の設備整ひ、當市診療界の王座を占む。院長は博士の嚴父鈴木鍊平氏にして、博士の令兄鈴木善衛氏及び鈴木保壽博士は副院長として院長を輔佐し共に診療に従事す。博士は外科を擔任し、博士獨特の手腕を發揮して餘す所なく、父兄の手腕聲望と相俟つて好評益々當地方を風靡し、遠近よりの外來患者日々輻輳し盛況を極む、蓋し其の今日の繁榮を見るもの、父子和合協力結晶の美談として推獎し祝福すべき也。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、恩師男爵高木喜寬博士に就きて外科學を、同寺田正中博士に就きて細菌學、血清學並に膠質化學を研究し、慈惠醫大より學位を獲得せる外科界近來の名醫博也。

△博士は茨城縣立水戸中學校を経て、大正五年東京慈惠會醫院醫專を卒へ、同年四月より十二月迄母校外科助手を被命高木教授に師事す、同年十二月一年志願兵として宇都宮歩兵第五十九聯隊へ入隊、翌六年十一月滿期除隊、翌七年二月父兄と共に私立下市病院を創設開業す、同八年五月より三ヶ月間泉橋慈善病院に於て片山國幸博士よりX光線科の講習を受く、同九年三月任陸軍三等軍醫、同十年四月茨城縣立水戸中學校々醫囑託、同十三年十月東京慈惠醫大研究科學生として入學、寺田教授の指導を受く、同十五年四月より昭和二年八月迄研究の傍ら吉川春次郎博士に就き外

科の指導を受く、昭和二年六月學位受領、同年九月私立駒澤病院外科部長就任、傍ら慶大醫學部に於て茂木博士の外科手術を傍觀生として見學す、同三年十二月以來専ら下市病院に於て診療に従事し今日に至る。其間昭和七年二月二十三日上海事變急なるや、突如動員の下命に接し、直に出征し二ヶ月にして復員となり凱旋す、直に二等軍醫に昇進し從七位に叙せらる。

△主論文は、(1)自然凝集反應 (Spontaneous Agglutination) ノ本態ニ關スル研究にして二篇より成る。細菌免疫反應上に於ける甚だ興味ある一新事實として認めらる。参考論文は、(1)電解質殊ニ金屬類加寒天培地ニ發育シタル菌ノ被凝性變化ニ就テ、(2)牡蠣灰ノ蝮蛇毒ニ對スル解毒效果ノ有無ニ就テの二篇なり。

△水戸市下市東臺の人、父は鍊平(醫師)、母はみね其の二男にして、明治二十二年生る、善術の弟にして、且つ慈惠醫學士にして洋畫家たる良三の兄也。温厚の紳士にして學究的篤學者たり。其の今日ある閱歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。今は腕の冴え盛にて學識、手腕、人格共に圓熟して一段の貫祿を備え、眞面目にして熱心なる臨床家としての評判高し。運動に多大の趣味を有し殊にベースボールを好み、又尺八を能くし、盆栽を楽しむ。妻はせき子にして一男あり、昭和三年歐洲へ留學す。

崔日文

△大邱府東雲町に著名なる樂山醫院あり、外科界の新進大家崔日文博士の經營にして、充實完備せる内容の設備と相俟つて、嘖々たる診療手術の好評は益々遠近の人氣を吸收し、今や當地方診療界に卓然として群を抜く。博士は京城醫專出身の篤學者にして、外科界現代の權威たる東大教授鹽田廣重博士に就きて斯學の蘊奥を究め、又細菌學界の泰斗東大教授竹内松次郎博士指導の下に斯學を専攻せる結果、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たるに耻ぢず。研鑽多年、學術の研究と共に、臨床の實修に不斷の努力精進を續け、今や獨特の手腕を發揮して餘す

所なく、年次成功の地盤を築きつゝあり。殊に博士は鮮人出身者中の代表者として重きを爲すは、博士界の爲め大人意を強からしむるに足る。

△顧みれば、博士は大正五年京城醫專卒業後、直ちに忠清南道公州慈惠醫院醫員を拜命し外科に勤務す、同七年六月慶尙北道大邱慈惠醫院醫員拜命、同十二年より官命に依り東京帝大醫學部外科學教室にて鹽田教授の指導を受け外科學研究、同十三年慶尙北道大邱慈惠醫院に復職、同年九月より慶尙北道立醫學校講師の囑託を受け外科學を講義す、同十四年九月より東京帝大醫學部細菌學教室にて竹内教授指導の下に細菌學研究、同十五年二月慶尙北道立安東醫院醫官に任じ外科部長を命ぜらる、昭和二年六月學位受領、昭和三年一月大邱道立醫院外科部長拜命、昭和五年五月辭職以來、現住地に於て開業今日に至れり。

△主論文は「水瀉ニ就テ」にして、参考論文は「「ノーマ」病屍體心血ヨリ分離シ得タル小桿菌ニ就テ」なるが、水瀉の原因に就きては諸種細菌説あるも未だ不明に屬す、尙ほ其の病理解剖、死因等に就きては未だ定説を聞かず、殊に動物實驗に成功の士なし、著者の實驗に依りて始めて其の結果を發表せるもの、即ち本主論文の學問的價値の存在する所以なり。

△朝鮮慶南金海郡業面花田里の人、明治二十五年生る。學究的篤學の好紳士にして、其の今日ある閱歷は燦として博士の前半生史に輝く。年齒正に四十有四歳、年壯の意氣益々壯にして、今は學識、手腕、人格共に圓熟の域に達し、最も得意時代として活躍する所なり。殊に博士の特徴として擧ぐべきは、眞面目なる臨床家として、其の態度の眞實にして熱心なると、飽迄親切を盡し患者をして徹底的に信頼せしむる點にあり。一面又人と接するに恬淡として自己の才學を衒はず、快活にして和氣温情に富む。惠軒は其號にして、書畫を愛し音樂を好む。當世博士界中異彩に富む、立志傳的人物として茲に推獎し、敬意を表す。

岡田實秋

△宇和島市立宇和島病院に外科部長として岡田實秋博士あり。長崎醫專の出身、學位は長崎醫大より獲得せる篤學の士なるが、專攻外科中特に得意とすべきはなきも、甲狀腺手術及び蟲様突起炎手術には特に興味を有し獨特の手腕を有す。今や四國診療界に重きを爲す名醫博たるに耻ぢざる一人物と爲す。

△長崎市城山町岡田實の長男、明治二十八年生れにして、大正七年長崎醫專卒業後、直ちに長崎縣立病院醫員を命ぜられ、同十一年四月任同校附屬醫院助手、外科勤務、同十二年四月長崎醫大副手囑託、外科勤務、間もなく任長崎醫大助手、生理學教室に轉ず、同十四年再び外科學教室勤務、昭和二年七月學位受領、同年九月長崎醫大講師となり、直ちに釜山鐵道病院外科部長として赴任するに及び講師を辭す、次で現職に轉じ今日に至る。

△主論文は「甲狀腺ノ生理補遺」にして、(1)甲狀腺製劑ノ鶏胎兒發育ニ及ボス實驗的研究、(2)甲狀腺摘出後出汁ニ現ハルル變化補遺の二篇より成り、參考論文は、(1)肝臓内筋肉移植ニ就テ、(2)軟骨移植ニ關スル實驗的研究、(3)異物造形術ニ關スル實驗的研究、(4)甲狀腺ト體溫調劑トノ關係、(5)血液ノ糖分及ビ殘餘窒素含量ニ及ボス甲狀腺ノ影響、附甲狀腺ト二三ノ内分泌腺トノ相互關係、(6)過敏症ト甲狀腺トノ關係ニ就テの六篇なり。指導教授は母校の緒方大象教授にして恩師の薰陶に負ふ所多し。

△性格より打診して博士の長所と見るべきは、溫和從順なること、謙讓なること、感動的なること等々は見逃すべからず。若し強ひて言はしむれば、心配性なること、或は決斷力に乏しき嫌なきかと思ふ。以前は文學を好みしも近來は文學にはあまり興味なく、科學殊に生物學に興味を有し、醫學書の外には生物學の書を多く讀破し、又克く精神の修養と徳操の堅持とを心掛け自強息まざるの概あり。宇和島市榊形町一九九九に住む。

泉山幸吉

△樺太豊原町大通四丁目二番地に共立泉山病院あり、院長泉山幸吉博士の主宰する所、高壯なる結構と相俟つて内部の設備整ひ、當地診療界に頭角を抜き、樺太私立病院中の首位を占む。博士は東北帝大系の錚々たる外科學者にして、嘗て講師として母校の教壇に立ち、學生を指導して勵精克く其の任を盡し、母校より學位を得たる斯科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。

△學歷より見たる博士は青森縣立八戸中學校、二高を経て、大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに任同大學助手、外科學教室勤務、昭和二年三月東北帝大醫學部講師囑託、同年五月日本外科學會評議員に擧げらる、同年七月學位受領、同年同月日赤宮城支部病院副院長兼外科醫長に就任、同時に東北帝大講師囑託を解かる、同五年六月辭職、樺太豊原町に共立泉山病院を設立し院長として今日に至る。

△主論文は、(1)開放性氣胸ノ呼吸運動ニ關スル實驗的研究、(2)變壓呼吸ニ關スル實驗的研究第一回報告(人體實驗) (3)同上第二回報告(犬及家兎ニ於ケル實驗)の三篇より成れり。參考論文は、(1)赤血球沈降速度ノ變化ニ關スル研究、(2)急性膀胱壞死ノ三例、(3)蛔蟲填充ニヨル外鼠蹊「ヘルニア」ノ箝頓症ニ就テの三篇なり。此他に發表せる論著澤山あり。

△青森縣三戸郡八戸町の人、明治二十八年生る。當年四十一歳にして少壯の意氣益々壯也。温厚の紳士にして、學究的臨床家として既に定評ある如く、診療甚だ熱心にして克く誠實と親切とを盡し、其の態度の眞摯にして熱情あり温味ある點は、敦厚篤實なる性格と相俟つて其の人格を敬慕せしむるの徳を有す。趣味としては繪畫觀賞にして、且つ油繪、日本畫をよくし素人の域を脱すとの評あり。醫學博士は數多いがその内でも外科醫は比較的少ない、又外科醫學博士にても臨床方面で學位を獲得せらるゝ人は更に僅少である、従つて博士の如く實地臨床に堪能なる仁を樺太の如き避地に置くのは何としても惜しい氣がする云々と評せる人あり、然し博士は猶春秋に富むを以て、今後の活躍は

期待す可く、幸ひ健在にして自重加餐を祈ると共に、樺太治療界の爲め益々努力盡瘁あらんことを望む。

◇

渡邊 完

△大阪市電氣局病院副院長にして、外科及びレントゲン科を主宰し、兼ねて同院附屬看護婦養成所主任として勵精克く其の任務を果たし、至誠以て公に奉じ治療界の爲め不斷の精進を續けつゝあるは渡邊完博士也。學系は京都府立醫大系の先輩にて、學位は東北帝大より獲得せる斯科界の名醫博なるが、曾て獨逸に留學して外科學及びレントゲン學の泰斗ルハルシュ、ビツケル博士に師事して造詣する所あり、又近くば昨年第四回國際放射線學會に日本代表委員として出席、旁々歐米各國を視察せり。研鑽多年の學識は言はずもがな、經驗豊富にして獨特の手腕を有す。特に其の最も得意とする手術及びレントゲン胸腹部内臟診斷に至つては他の追隨を許さず、斯道の大家として自他共に許す所にして、多士濟々たる浪速杏林界に拮指を屈せらるゝ一異彩たるを失はざる也。而して博士は昭和五年以來、市長の許可を得て職務の余暇、夜間自宅診療を開始して公衆の爲め仁術の最善を盡すことに努力盡瘁しつゝあり。

△博士は和歌山中學を経て、明治四十三年京都府立醫專卒業、直ちに日赤大阪支部病院外科勤務、大正二年日赤和歌山支部病院外科轉勤、同四年再び日赤大阪支部病院外科へ歸り、同九年三月まで勤續、此間大正八年には日赤救護醫員として東部西比利亞に出征し列國傷病兵救護に従事し、翌九年叙勲六等、同院辭職後は大阪島瀉病院に勤め、同十一年二月同院より海外留學を命ぜられ、主として獨逸柏林大學病理學及實驗生物學教室にてルバルシュビツケル教授の許に病理學、外科學及レントゲン學研究の後、歐米各國の斯學教室を見學して同十三年四月歸朝す、同時に同院を辭し大阪市電氣局病院院長となる、同十四年一月學位を得、同十五年十二月チエツコスロバキア國よりワールクロス勳

章を贈與せらる、昭和五年以來現職に就任の傍ら市長の許可を得て餘暇夜間自宅診療に従事す、昭和九年五月大阪市より視察の爲め歐米各國に出張を命ぜられ、旁々第四回國際放射線學會に日本代表委員として出席、同年十二月歸朝せり。

△主論文は「胃ノ運動機能ニ關スル病理的生理」にして、原著は獨逸文なり、外に參考論文として獨逸文原著四篇あり。其他自著論文夥多。博士の感想に曰く「醫政方面には暗く又それには適せざるが、醫學を基礎とする醫術を施す醫人少きこと、徒らに學に囚はれて人格陶冶を疎することは歎しく思はれる」云々と。一服の清涼劑として三思傾聴すべき也。

△大阪市の人、明治二十一年生る。舊和歌山藩士漢詩人近藤美長（號古拙）孫眞の長男、幼少にして近親渡邊家の養嗣子となる。學究的温厚の紳士、臨床家としての立派なる人格者也。博士が餘暇夜間自宅診療を始めたは、只町内の爲め忠實なる健康相談醫として、又衛生顧問として防疫其他に従事せんが爲めにして、同僚の發展を聲援するとも毫も阻害せず、又決して羨しいとも思はず淡々として働き、以て醫者の天職として自ら之を安ずるの概あるは奇特とせざるを得ず。而して博士自身の抱負としては、將來時期を得れば自己の欲する研究に没頭し、又た獨逸のツアンデルインストゥート式のものゝ設備と共に理想的レントゲン診療に従事せんことを期待せるやに聽く。性格謹嚴にして正邪の區別嚴峻なり、而かも人に對するに理解あり同情を以てし、能く部下を愛し指導に努む、やゝもすれば親分式の義侠心あるやに見らる。趣味は謡曲（寶生流）寫眞、登山等とす。著者は更めて其の人格を敬慕する一人なるを特筆し置く。自宅は大阪市東區南久寶寺町一ノ四七に在り。

◇

松岡 元治郎

△和歌山市寄合町一九に松岡外科皮膚科醫院あり、院長松岡元治郎博士は岡山醫專出身の一異彩

京都帝大の耆宿故伊藤隼三教授の門下生として、久しく博士の指導を受けて外科學の蘊奥を究め、岡山醫大より學位を得せる外科界現代の逸物也。和歌山の刀圭界にて第一流の外科醫を物色せば、先づ松岡博士に拇指を屈せざるべからず。由來和歌山には日赤支部ありて立派な外科醫が揃つて居るに拘らず、同病院の入院患者にして轉じて松岡博士の治を乞ふもの枚舉に遑あらずといふ、盛なりと云ふべし。

△博士は三重縣立第二中學校を経て、大正二年岡山醫學專門學校へ無試験入學、同六年同校卒業、同時に縣立岡山病院第一内科有給助手拜命、七年依願退職、直ちに京都帝大醫科大學專修科に入り伊藤隼三博士の下に外科學を習得す、八年更に同大學醫學部研究科に入學斯學の研究を續く、十二年指導教授に伊藤弘博士を追加整形外科一般を研究す、十四年學位受領、十五年京都帝大醫學部副手囑託、間もなく之を辭し恩師伊藤隼三博士經營の鳥取市伊藤病院に勤務、昭和二年和歌山市金森病院に轉勤、同三年十一月以來獨立開業今日に至る。

△學位主論文、(1)皮膚消毒藥トシテノ「ピクリン」酸ノ價値ヲ論ジ併テ沃度丁幾(グロツシツヒ氏法)トノ優劣比較ニ及ブ、(2)皮膚消毒藥タル「ピクリン」酸ニ因スル皮膚並ニ衣類ノ黃染斑除去ニ就テ。參考論文、(1)雄性生殖器ノ生體色素攝取知見補遺、外五篇あり。其他論著夥多。博士録後發表せる論著としては、(1)「モレクラ」、(2)「マゲネシウム」を以てする痔核の注射療法に就て、(3)淋菌性肋膜炎に就て、(4)輸血に關する知見補遺、(5)二十年前に左足蹠より潛入せる縫針の興味ある摘出例等あり。

△感想に曰く「醫業の繁榮と醫療社會化の偕和點は社會と醫業界が之に認識を徹底して共存共榮の途を確く履み行くの外はない即國家は醫業者の身分を確認し、其の業權を保護し、殊に其の團體的活動を充分に扶翼す可く、醫業者は高等なる天職に省み高尚なる醫風を確保し、殊に國家の社會的施設に獻身的の努力を捧ぐ可し、而して醫業者と社會との接觸は互に團體的活力の發揮によりて之を共榮的に結合し、相利用するに在りて存す、要するに醫業が國策遂行

上の重心に發展し國家社會の敬重を全する事を得ば、その繁榮は傳統の地位を失はざる事を得んと思ふ」云々。
△博士は京都市上京區紫野御所田町の人、明治二十五年生る。藝術に興味を有し詩歌をよくす、又花卉を愛し、園藝に親しむ。篤實温厚の紳士にして、人に篤く、患者を待つに親切、治療に當りては専ら病を對照とし金錢を顧慮せず病を治癒せしめざれば止まざるの熱意を以てす。肉身の血を取りて患者に輸血し又職員看護婦の申出を入れ瀕死の病人に輸血し其生命を取り止めたる事實あり、或は瀕死の弟を救はんとして貧困者の娘が身を賣りて治療費に當てんとするを聞き治療費の全額五百餘圓を免除したる事實あり、傳へ聞きたる諸新聞は近來稀に見る美舉として賞讃し各小學校の先生は好箇の修身教材として取扱たりと云ふ。其他美談佳話擧げて數ふべからず。澆季の世稀に見る奇特の士として表彰すべきに値す。

ト部 義雄

△埼玉縣大里郡深谷町大字深谷に有名なるト部病院あり、院長ト部義雄博士の經營する處にして最近(昭和七年九月)病院の新築成り、内臓外科、耳鼻科、レントゲン科、婦人科其他の設備を完備す、外觀の美装と内容の充實と相俟つて、斷然頭角を抜き當地方診療界の王座を占む。博士は東京帝大系の逸才にして、多年の造詣深く、該博なる知識と共に實地の經驗に富み、今や外科専門の大家として其の存在を認めらる。殊に其の最も得意とする内臓外科に至りては獨特の怪腕を振ひ、近郷を風靡するの概あり。

△博士は獨逸協會中學、一高を経て、大正二年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに開業試験附屬永樂病院外科に勤め、同五年十月辭して現住所に開業、同十二年七月より同十四年六月まで、東京帝大醫學部法醫學教室に於て三田教授の指導を受けて血清學研究、同十五年七月東京帝大より學位を得、同年九月病院設立、昭和七年九月新築落成と共に移轉し今日に至る。

△主論文は「生体内ニ於ケル沈降原及び沈降素ノ結合ニ關スル實驗的研究並ニ過敏抗体ノ本體ニ就テノ研究」參考論文なし。他に自著論文澤山あり。

△埼玉縣兒玉郡大澤村大字猪俣亡卜部泰堂の二男にして、明治二十一年生る、年齒正に不惑有八歳、篤實温厚、人格崇高なる年壯の紳士也。貴公子然たる風貌に、學者らしき威嚴を備え、而かも人に接するに尊大振らず、又敢て城壁を築かず、應答應接すべて丁寧にして、人をして好感を抱かしむるの徳望を有す。従つて診療に臨むや頗る親切を盡し、患者をして信頼と尊敬の念を深からしむ、地方博士界中に逸すべからざる好箇の臨床家として茲に推獎する所以也。

今吉政吉

△前の佐世保海軍病院長にして、現在英彦山公園期成同盟會長、豊前山岳會長、福岡縣築上郡八屋町明仁堂病院長たる海軍々醫少將今吉政吉博士は、福岡縣築上郡東富島村今吉與四郎の二男、明治十七年生る。明治三十七年東京慈惠會醫專在學中、醫術開業免狀を得、同年海軍少軍醫候補生被命、海軍病院船西京丸乗組、日露戰役從軍、同年任海軍少軍醫、同三十九年任中軍醫、同四十年軍艦宗谷乗組韓國皇太子殿下帝國御渡航護衛、次で練習艦兼警備艦として巡航、同四十二年任大軍醫、同四十三年舞鶴海軍病院附兼看護術練習所教官、同四十四年補第三艦隊旗艦新高軍醫長、大正二年海軍々醫學校甲種學生、同三年卒業、同年航空母艦若宮軍醫長として日獨戰役從軍、同四年任軍醫少佐、補練習艦等置軍醫長、同七年十二月海軍々醫學校選科學生、滿二ヶ年間外科學研究、同八年任海軍々醫中佐、同九年補佐世保海軍病院附、同十年補佐世保海軍病院副官兼部員、同十一年二ヶ年間獨逸へ留學許可、同十二年一月より三月迄伯林オスカ、ヘンネ、ハイムにて院長ビーザルスキー教授の下に整形外科學研究、同年四月より十三年七月迄伯林大學第二外科教室にてヒルデブランド教授の下に外科學專攻、同十二年五月より十四年一月迄

ウルパン病理室にてコツホ教授の下に病理學專攻、同十二年任海軍々醫大佐、同十四年三月歸朝、同年四月補佐世保海軍病院第一部長兼教官、同十五年八月慈惠醫大より學位受領、次で補佐世保海軍病院長、任海軍々醫少將、昭和六年十二月豫備役に編入せらる。

△主論文は「臍再生ニ關スル實驗的研究」にして獨逸文を以て著はす。外に、參考論文、(1)腹腔内酸素注入ニヨル腹腔臓器ノ「レントゲン」検査ニ就テ、(2)蟲様突起ノ「レントゲン」検査ニ就テの二篇あり。他にも論著夥多。専門は外科にして特に内臓外科を得意とす。

△現代學界又は醫師界に對する感想を叩けば「そんな廣い事は小生には見へない。唯、醫學界と治療界と受療界は三位一體であれば理想的だが現状は全く連絡を缺くと云つてよいと思ふ、ソコで醫學界は世界をリードする位だが治療界は非醫學者や、非醫者の方が却つて治療がうまい、ソコで受療界は全く迷信的になつて醫學的でない妙な現象だ」云々。

△在職中の博士は、職務即ち趣味として至誠一貫盡忠を全ふせるは勿論、海軍外科の發達に貢獻せし所甚大なり、即ち盲腸炎の早期手術を隨時手術に完成したるが如き、骨折の即時觀血手術、臍の移植による機能復興療法、胸腔のレントゲン診斷による胸膜炎と肺結核との關係調査の如き、其一例なり又、部下後進の指導誘掖に盡し博士の指導を受けたる人にして、現在海軍外科界の錚々たる地位に就ける者少からず。現役を退くや家族を東京に残し孤影漂然故郷に歸り老母に仕へる傍、明仁堂病院を開院せり。現在社會衛生の改善は婦人の衛生思想の發達に在りとして専ら看護婦の養成に務め婦人會の衛生講話、其他公共團體の爲め指導啓發する所多し。又農村の疲弊は全く農民の無智と無節制に因するものなりとし、之が匡救に務め、思想善導は敬神にありとの見識の下に歸郷するや、先づ郡内の縣社に歸郷奉告祭を行ひ、社會的事業を發企する毎に必ず神社に奉告祭を行ひ、自ら範を郷黨に示せるを以て、神域は公園化

され、地主小作の對立は緩和され、我利一片の人々も漸く協同一致するに至り、今はなくてはならぬ人として地方民の尊敬と信頼とを一身に集め、氏も亦「良醫は國を醫す」との信念の下に、先づ其第一步として郷里の改善啓發に獻身的努力を拂ひ以て公に奉ずるの念鬱勃として禁ぜざるものあり。登山に趣味を有し、豊前山岳會長として北九州の山々にてかくれたる景勝を顯彰する事多く、又草木植物昆蟲類の珍らしきものを發見し斯界に紹介せしこと一再ならず。東京市澁谷區若木町三三、病院所在地福岡縣築上郡八屋町。

下川 繁次

△治療界の一勢力たる日本赤十字社秋田支部病院に外科醫長として、多年内外の信望を博しつゝある下川繁次博士は、京都帝大派の名醫博たる外科學者にして、内臓外科特に蟲様突起炎の専門大家として仰がれ、學徳相俟つて評判極めて良好なるは、地方治療界の爲め甚だ多幸とす。

△博士は佐賀縣立小城中學校を経て、大正七年長崎醫專卒業後、直ちに縣立長崎病院醫員を命ぜられ外科勤務、同九年七月三菱鑛業株式會社に轉勤、同社芦別鑛業所病院外科部長として就任、同十一年七月同社を辭して京都帝大醫學部專修科へ入學、昭和二年四月學位を得、同時に同學部專修科を退學して同學部副手となり附屬醫院外科部へ勤務す幾何もなく同年九月副手を辭し日赤秋田支部病院外科醫長として就任今日に至る。

△主論文「虎疫流行ノ狀況ニ鑑ミテ「コレラ」菌ト水質トノ關係ヲ論ズ」其一、二、三、四より成る。參考論文、(1)「酸類及鹽基類ノ性質ト殺菌力トノ關係」其一、二、三より成る。(2)「環境ノ理學的性質就中溫度ノ高低ガ消毒劑ノ效果ニ及ボス影響ニ就テ」(3)「フオルマリン」室内消毒法ニ對スル石灰壁ノ影響ニ就テ」外五篇あり。他に自著論文澤山あり。

△博士將來の希望としては「百萬の富を貯へやう等とは思はない、又其の必要も認めない、自己に所期以上の富は自己のみならず、其の子孫に至るまで害こそあれ益はないものと思ふ。故に生活の安定さへ得れば萬民の爲に所謂「醫は仁術也」を標示したい念願である」云々。希くば其の時期の到來を待望して止まず。又現代醫師界に對する感想としては博士曰く「萬事眞面目にやる可きだと思ふ。「正直の頭に神宿る」をモットーとしたい。醫師は技術は勿論ながら人格の修養を第一とすべきだと思ふ」云々。至囑々々、亦以て他山の石に値す。

△佐賀縣小城町の人、亡下川寛之助の五男にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達す、學究的少壯の紳士也。多趣味の人にして凡ての運動を好み、學生時代は庭球及び劍道の選手たり、殊に庭球界に於ては其の當時、天下に其の名を謳はれし程なれば、特に庭球(目下硬球)に興味を持つ、又撞球、圍碁、寫眞、カルタ等々の外、室内娛樂の一般をも樂しむ風あり。嗜好品中の一つは煙草にして、酒は一滴だに飲めぬ程嫌ひの方なり。人と爲り謹直にて篤實、寛厚能く人を容れ、人に對する同情心に富む、やゝもすれば同情し過ぎて却つて數々の事態を生ずる事往々あるやに聽く、以て其性格を窺はれ人格を敬慕すべき也。秋田市保戸野八丁新町に住む。

浦上 愛夫

△日赤三重支部山田病院外科醫長として多年信望を博し、勵精克く斯道治療界の爲に努力盡瘁しつゝある浦上愛夫博士は、東京帝大系の雋才、學位は九州帝大より獲得せる名醫博にして、長き歲月の間實地の經驗を練り、又學理方面は九州帝大の石原教授及び三宅教授等に師事して其の深奥を究はめ、斯科専門の大家として既に江湖に著聞す。殊に其の最も得意とする腹墜外科の手術に至りては、獨特の好評噴々たるものあるは既に世人の周知する處也。

△兵庫縣津名郡生穂村中ノ内組玄潮の次男にして明治二十二年生る。大正四年東京帝大醫科大學卒業、翌五年二月日赤本社病院醫員となり外科勤務、八年五月本社病院在籍の儘日赤三重支部山田病院に補助勤務、外科醫長就任、九年

八月本社病院に復歸、同年十一月第二次東部西伯利亞派遣日赤救護班醫長を被命、浦潮斯德に出征、同地に於て日赤救護病院勤務、十年十二月内地歸還、十一年一月日赤本社病院勤務、十一年一月日赤三重支部山田病院に復歸外科醫長となる、十四年一月日赤本社より滿二ヶ年間九州帝大醫學部へ留學を命ぜられ、同年九月九州帝大大學院入學、昭和二年一月迄石原教授、三宅教授指導の下に生理學及び外科學研究、學位を得、大學院退學、日赤三重支部山田病院へ歸任今日に至る。

△主論文「小腸ノ運動ト「アウエルバツハ」神經叢トノ關係ニ就テ」參考論文、(1)小腸粘膜炎筋ノ運動ニ就テ、(2)「胃石」昆學士共著。

△人と爲り謹直恪勤の士にして、識見に富み主張を藏す、而して其の間自ら親切あり、禮意あり、人に對するに寛容にして能く人を容るゝの雅量を有す、臨床家として好個の人格者たるを尊敬す。博士の年齒今や不惑に入る七歳、學識、手腕、相俟つて愈々圓熟の域に入り、最も活躍の時に在り。切に自重加餐を祈る。宇治山田市常盤町西世古三一四に住む。

小林大乗

△東京市神田區旭町一に在る小林外科醫院は、小林大乗博士の經營する所にして、外科、内臟外科、整形外科を専門とす。新潟縣南蒲原郡三條町の人にして、明治二十四年生る。四高を経て、大正八年京都帝大醫學部卒業、直ちに同大學附屬醫院外科教室に入り實地研究の後、十年三重縣津市立病院外科部長となり、居ること二年餘、十二年四月以降再び母校に歸り、大學院學生として外科研究室にて伊藤(弘)教授、鳥瀉教授等の指導を受け整形外科並に外科一般を研究し、十五年六月京都帝大にて學位を得て、岐阜縣立病院外科部長として赴任す、其後職を辭し東京して現地に開業今日に至る。

△主論文「實驗的動脈外壁交感神經切除術」二篇より成る、外參考論文五篇あり。

△屋外運動旅行を趣味す。博士曰く「近頃醫師の中には「醫は仁術」と云ふ天職に對しての信念はどうかと案ぜられる者がないだらうか。醫師と云ふ尊い使命を忘れかけて居る者がありはせまいか等と考へさせられることどもを見聞する」云々。

目良亮三

△札幌市南四條西一丁目に保全病院あり、院長は目良亮三博士にして、博士の經營する私立病院也。外觀内容充實し、博士自ら診療に勵しみ日々繁忙を極む。博士は東大系大正七年組の一異彩にして、外科界の權威近藤教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受け造詣する所深く、嘗て歐洲に留學し、母校より學位を得たる東大派の名醫博也。博く學識を有し、臨床に堪能にして、獨特の手腕を有す。今や斯科の大家と仰がれ、當地診療界に重きを爲す。

△和歌山縣の人にして、明治二十五年生る。七高を経て、大正七年東京帝大醫學部を卒へ、引續き近藤外科に勤務、同十年札幌病院に轉じ外科勤務、同十三年渡歐、ウキン大學血清學研究所にて研究、同十五年歸朝、札幌病院に復歸して外科醫長に就任す、昭和二年七月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「等種並ニ異種抗體形成ニ對スル抑制並ニ促進現象ニ就テ」研究せるものにして、其の學問的價値は既に學界に定評あり。

△學究的溫良の紳士にして、當年不惑に入る四歳、年壯の意氣益壯にして、圓熟せる手腕と相俟つて今は最も得意の時代也。當世博士界中好箇の臨床家として推獎し、高邁なる其の人格を尊重す。

關 市 衛

△外科、レントゲン科を専門の旗標として、近來益々人氣を集め、年と共に益々向上發展しつゝあるは關市衛博士也。博士は豫備海軍々醫大佐にして、その診療所は東京市杉並區和泉町三四一（京王電車代田橋下車）に在り、病院向に新築されたる結構は、完備せる内部の設備と相俟つて快朗なる感じを起さしめ、日々外來患者の輻輳すること他の追隨を許さざる觀あり。顧みて博士の今日ある過去奮闘の人生史を緝いて觀るに、博士は山形縣西置賜郡豊川村高峰の出身、明治十五年生にして、同三十五年醫術開業試験に合格し、直ちに海軍に入り累進大正十一年海軍々醫大佐に任ぜられ、同十二年豫備役編入、同年より慶大醫學部外科教室に入り外科學研究の傍ら臨床細菌學を研究し、昭和二年慶大より學位を受領す、それより北海道小樽市立病院に暫く勤務し、五年秋辭職歸京して從來の住宅たる現住地に醫院新築六年五月より開業今日に至れり、正五位勳三等功五級を有す。醫術開業試験より早くも身を起して其成功を贏ち得たるもの、立志傳的篤學の士として推獎するに足り、その潤飾たる奮闘の半生史は後學頂門の一針として可也。

△學位主論文は「手術後胃腸出血トウエルシ菌ノ關係ニ就テ」にして第一、二報告より成る。參考論文としては、(1)ウエルシ菌ノ簡便分離法ニ就テ、(2)ウエルシ菌様毒性嫌氣菌ニ因ル敗血症ノ一例、(3)「プレソヨード」及其外科的疾患ニ對スル効果ニ就テの三篇あり。外ニ「近世戰傷論」其他論著澤山あり。昭和三年四月學位主論文「手術後胃腸出血トウエルシ菌ノ關係ニ就テ」及び「ウエルシ菌ノ簡便分離法ニ就テ」の二篇に對し淺川賞を授與せられたるは有名にして、如何に本論文が優秀なるかを物語るに足る。世人周知の如く、淺川賞は故北里研究所部長醫博淺川範彦氏の獎學基金により、毎年日本全國の細菌學に關する論文の最優秀なるものに對し、委員銓衡の上授與さるゝものにして、優秀論文無ければ授與されない年もあり、昭和三年には關博士と傳研部長細谷省吾博士が共選に入り、昭和八年などは志蟲病の研究篤學者に授與せられたるが、大分問題となり新聞紙上にも紛々たる論議されたる如く

兎に角該賞は相當名譽のもので、細菌學研究の専門大家多士濟々の中に博士の如き外科専門の臨床家としてやつた業績に對し、かゝる名譽の賞牌（金製メタルに現金一〇〇圓附）を授與されたる事は異常の光榮にして博士の面目を語るに充分也。

△感想としては「醫業に對する問題の多い事今日より甚だしきはあるまい。之に對する感想は多々あれど簡單には書けない。されど要するに醫業の本質は患者對醫師の相互信用が基本となるのであつて例へば警察や役場の仕事の様にとの區域の人は何處の醫病院へ行けなど、強制さるべきものではない（醫業國營とし或は國民全體を健保にでもすれば格別）と同時に安いから……設備がよいから……宣傳したからとて必ずしも患者が集まり且つ永續するものではない。故に一般開業醫は安價診療所などの出現に恐れず飽く迄技術本位、親切本位で病苦を癒し患者の信用を得るに努めさへすればイクラ開業受難の時代でも必ず夫れだけの効果はあるものと信する」云々と述べ居れり。

△學者タイプの風貌は凛々しき裡に溫容を包み、中肉中脊の引締りたる體格の持主にして、極めて平民主義で開放的な所に快朗を覺えしめ、人格高潔也。一度び其醫咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、餘り多くを語るを欲せずと雖も、語調溫和にして言葉に表裏なく、自ら守るべきを守つて低く己を持するの態度は、その眞面目を語りて餘蘊なし。

吉 富 正 一

△高田市高田病院に外科部長として吉富正一博士あり。熊本醫專出身の秀才にして、學位は京都帝大より獲得せる名醫博なるが、斯間の指導教授は京都帝大名譽教授故伊藤隼三博士、同猪子止才之助博士、京大教授鳥潟隆三、同磯部喜右衛門、同伊藤弘等の諸博士也。感想を寄せて曰く「醫者の天職は申す迄もなく患者の病氣を治す事であると思ふ、徒らに理屈ばかり云つて治療の方は第二とする所謂自稱醫學者があつたとすればそれは天職の

本分をやまつた者と云ふべきであると思ふ、近來醫學研究が盛になつた事は結構な事だし基礎的研究の範圍と奥行の擴大した事も喜ぶ可き現象には違ひないが、私は直接の治療醫學の研究がもつと盛んになつてもいゝものではないかと思ふ、近頃の學位論文を拜見すると治療醫學は殆んど縁の遠い基礎の基礎と云つた内容のものが大部分を占めてゐる様に思ふ是等基礎醫學的研究は一部少數の純學者換言すれば終世研究のみを以て終る學者に御願して世界大多數の醫師は直接治療に關係ある醫學の研究に没頭して欲しいと思ふ。それには特に大學の研究室も必要としない、市井の開業の片手間でもいゝ病院勤務の餘暇でもいゝ吾々が日常患者を扱つて困る場合や氣付く點は數へ切れぬ程起るものである。こんな事を今少し熱心に突込んで研究してもらへたら、其の恩恵は獨り病床に悩む患者のみではなからうと思ふ」云々。

△山口縣大島郡家室西方村の人、明治二十五年生る。京都府立第一中學校を経て、大正六年熊本醫專を卒へ、直ちに京都帝大醫學部醫院外科教室勤務、同七年四月德島縣牟崎町生田病院長として赴任、同八年四月辭職、京都帝大醫學部醫院整形外科教室勤務、同年十一月より十年三月迄山口縣大島郡吉富病院外科部長勤務、同十年四月東京市電氣局療養所外科勤務、同十三年九月三度び京都帝大醫學部外科研究室に入り伊藤教授の指導を受く、昭和二年十二月學位受領、同時に岐阜縣高山町日赤支部病院長として就職、昭和三年八月山口縣吉富病院長、昭和五年八月現職に轉じ今日に至る。

△主論文は「末梢神經傳導遮斷ニヨリ發現スル下肢ノ血流變化ニ就テ」と題し二篇より成れり。參考論文は、(1)神經切斷後ト離切斷後ニ於ケル腓腸筋ノ「クレアチン」含有量ノ比較研究(第一回報告)(2)同上(第二回報告)(3)狭心症ニ對スル外科的療法トシテノ交感神經切除術或ハ迷走神經抑制枝切斷ノ價值ニ關スル實驗的批判、(4)家兎ノ心臟ニ於ケル求心性交感神經性疼痛傳達路ノ分布ニ關スル補遺、(5)纖維性骨炎ノ血液「カルシウム」含有量及上肢小體製劑

ノ是ガ消長ニ及ボス影響ニ就テ外二篇あり。

△資性濃厚篤實、篤學者にして眞面目なる學究的紳士也。學者タイプの風貌は凛々として威嚴を有し、高邁なる品格を備ふ。年壯の意氣と共に學識、手腕、人格愈々圓熟して篤き聲望を博す。趣味としては各種の運動を好む。平和なる家庭は妻尙子との間に二男一女あり。實兄吉富又平醫博は先年死亡、可惜也、實弟は海軍少佐にして驅逐艦卯月艦長(聯合艦隊)たり。高田市西城町三ノ六二に住む。

岡崎 儀四郎

△東京市牛込區早稻田大學前に岡崎病院あり、内科、小兒科、内臟外科、レントゲン科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、傳染病科、専門を以て著聞す。院長は岡崎正見氏にして内、外科の大家として徳望あり。岡崎儀四郎博士は副院長として院長を能く補佐し、得意の外科を擔當す。外に小兒科に、江口勝二博士、其他各科擔任の専門醫あり。岡崎博士は新潟醫專の出身にて、學位は京都帝大より獲得せる斯科界近來の名醫博也。多年研鑽の結果、經驗に富み卓越せる手腕を有す、其の玲瓏たる診療手術の好評は、氏が溫良なる性格と相俟つて益々人氣を博し、大衆より多大の信頼と尊敬を受けつゝあり。現に早稻田大學校醫たる肩書は氏の信用と位地とを裏書する表徴たるべし。△博士の今日ある略歴を紹介すれば、佐賀縣の出身にして、明治二十六年生る。大正七年新潟醫專を卒へ、引續き母校の附屬病院に於て外科助手として勤め、次で京都帝大醫學部附屬醫院に於て、大正十三年九月より昭和三年五月まで専ら研究に従事し、同年六月京都帝大より學位を授與せらる、爾來現住地にて開業の傍ら暫く東京帝大醫學部鹽田外科に勤務す、又た早稻田大學校醫を囑託せられ今日に至る。

△學位論文は「聽神經節細胞ノ人工的變化ニ關スル實驗的研究」にして、其の學問的批判は既に學界に定評あり。△當年不惑に入る三歳、學究的溫厚の紳士也。臨床家として多年其の腕を磨き、手腕今や壯熟の域に入る、今は最も

得意の時代にして極めて人望あり。讀書家にして書見を唯一の楽しみとし、今猶精研に餘念なく又克く精神の修養に力む。



別所正恭 △神戸診療界は近時頗る醫博人物に富む、其間に介在して年次著るしく擡頭しつゝあるは別所正恭博士なるか、博士の經營せる別所外科醫院は林田區御藏通五ノ七三にあり、一般外科及び整形外科を専門とし、レントゲン其他理學的療法の設備全く整ひ、超然として群を抜く。博士は愛知醫專出身の整形外科及び解剖學者にして、整形外科界の重鎮前の九州帝大教授住田正雄博士に就て斯學の蘊奥を究はめ、又愛知醫大教授淺井猛郎博士指導の下に解剖學を専攻し、大阪醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△兵庫縣津名郡江井町垂井別所伊藤太の長男にして、明治二十九年生る。大正九年愛知醫專を卒へ、直に九州帝大醫學部整形外科助手に任命、同十二年四月辭して愛知醫大解剖學教室助手に任命、昭和三年十月學位受領、同四年一月辭して大阪市外科住田病院勤務、同五年一月以來現地にて開業今日に至る。

△主論文は「副腎ノ組織學的並組織發生學的研究」にして、參考論文は「脊椎「カリユス」ノ統計的觀察」なり。他の論著中「脊椎「カリユス」及副腎組織」の一篇は博士會心の作と見て可也。戶外運動を趣味とし、且古代美術、工藝品の鑑賞を樂しむ。住田正雄博士は叔父、大山稻三郎博士は義父に當る。



劉 四 朗 △青森縣五所川原町西北病院長として、農村醫療報國の爲め奮盡活躍しつゝある劉四朗博士は、東北帝大出身の外科學者にして、外科界の權威恩師關口審樹教授の指導を受ける所厚く、母校より學位を獲得せる所謂東北帝大派の名醫博たる一人物也。西北病院は當地方診療界に於ける産業組合病院として模範的のものにして、現

在博士三名、學士九名、女醫一名を抱擁して各科を分擔せしめ、本院は病室九十五室の外深部診療用レントゲン設置其他太陽燈、赤外線、デアテルミー、モノポール等内部の施設完備す、外に三診療所を有しレントゲン、赤外線、太陽燈等の設備亦整ふ。博士は外科を擔任するの外院長として院務を統轄す、其の責任や重且つ大と云ふべし。

△更に學歴より見たる博士は、大阪府立北野中學校、名古屋八高を経て、大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに助手に任命、同學部外科勤務、同十三年九月關口外科醫局長、昭和二年三月東北帝大醫學部講師囑託、同月講師依願解囑、同年四月日本赤十字社病院外科勤務、同三年八月米澤三友堂病院外科勤務、同年十二月學位受領、同七年四月西北病院病院長として赴任現在に及ぶ。

△主論文は獨逸文の原著に「Ueber die Wirkung verschiedener Hormonpräparate, Subkutaninjektionslösungen und I-amostatica auf die Blutgerinnbarkeit und ihren zeitlichen Verlauf」と題す一篇なり、外に參考論文として、(1)急性化膿炎症ニ於ケル一過性糖尿ノ發現並ニ食餌性糖尿ノ定量的検査(共著)(2)所謂腹膜腔内壓ノ測定ニ就テ第一報、第二報、(3)カチユボルフア氏腹壁造窓法ニ據ル腸管運動ノ觀察並ニ二、三蠕動誘起劑ノ之レニ及ボス定性的觀察ニ就キテ、外獨逸文の原著一篇あり。

△感想の一片を披瀝して曰く「眞面目なる治療は醫療國營に非ずんば不能と考へ好んで産業組合病院に職を奉ず、殊に農村不況の實景を見ては都市に於ては健康保險法による施設或は遞信省簡易保險相談所或は施料病院等輕費治療の實施せらるゝに拘らず、農村に於てこれに代りて輕費治療を行ふ立場にあるものは組合病院の外、他なきを考へ出來得る限りの輕費治療を行ひ農村醫療を全部組合病院組織化し、やがて醫療國營の前提たらしめんと希望す、即ち醫療報國は醫を職とするものの責務なりと思惟す。殊に本年より北津輕郡某村に醫師なきを氣の毒に思ひ病院より醫學士一名を村醫として派遣し收支を公表し剩餘金を生じたる場合は殆ど全部を同村の施料費に或は醫療に關する公共事業

に寄附せんとする一方法は本病院の方針、即ち醫療報國を行はんとする一表現にしてこの方法はやがて日本農村醫療更生法として國內諸所に實施せらるべきものと考ふ」云々。

△京都市中京區堺町鞆藥師下ル劉小一郎（京都市より選ばれて齋藤仙也、新宮涼亭等三人と共に東京大學に入學し明治十六年卒業の醫學士）の四男にして、明治二十九年生る。當年漸く四十一歳、少壯の意氣益壯にして、妥協性に富む、温厚の紳士也。熱心なる農村の醫療報國を主義として今は全心全力をそれに注ぎ、活躍奮闘大に斯道の爲め貢獻的努力しつゝあるは甚だ多とすべき也。碁、將棋、麻雀、運動競技等を趣味とす。因に兄弟五人、長兄醫學士劉威一（大阪華中堂病院長）次兄農場經營在朝鮮、三兄醫學博士（京大講師、大阪北野病院内科々長）ありと。青森縣五所川原町旭町に住む。

◇ 宮田 量之助

△茨城縣下館町に宮田醫院あり、外科を専門とす、院長宮田量之助博士の經營にして、診療所及び病室を有し十五名を收容し得、文光線、太陽燈、赤外線其他諸種の設備整ふ。博士は千葉醫專出身の外科學者にして、千葉醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博なるが、其間母校の恩師三輪徳寛、高橋信美、松村肅、平松濤平、高木憲二等の諸博士に就きて指導を受け造詣する所深し、既にして深淵なる學識は言はずもがな、臨床に多年の經驗を有し、卓越せる手腕は愈々獨特の妙技を發揮して益々人望を集め、今や當地方診療界に於ける一流を占め日増盛況を極めつゝあり。

△茨城縣結城郡豐加美村の人、明治二十二年生る。大正元年千葉醫專を卒へ、直に同附屬醫院三輪外科助手勤務、同六年水戸市濟生病院外科部長就任、同八年茨城縣下館町に病院開設、同十四年病院を閉鎖して千葉醫大衛生學教室副手囑託となり、昭和三年十二月千葉醫大より學位を受領す、同年外科教室（高橋外科）副手轉勤、翌四年千葉醫大を

辭し、次で東京泉橋病院内科、東京帝大醫學部整形外科に轉じ、同五年現在の地に再び開業今日に至る。

△主論文は、「醗酵性球菌ノ研究」にして、本論文によりて、醗酵性球菌就中連鎖狀球菌の二大分類を確實にせり。

参考論文としては、(1)皮膚移植ニ就テ（獨文）(2)薦骨部畸形腫外一篇あり。

△眞面目なる學究的温厚の紳士にして、好箇の臨床家としての特質を備へ、診療と手術そのものに趣味を集中して、誠心誠實を盡す點に、博士の最も特徴とする長所を見出さる。讀書家にして書見を業餘の楽しみとす。

◇ 百瀬 丑之助

△風光明媚なる宮崎縣土々呂港土々呂病院跡に、外科特に内臓外科を以て著聞せる、百瀬病院は院長百瀬丑之助博士の經營にして四十有餘の入院室を有し、高級なるレントゲン機をはじめとして、内部の設備全く整ひ、當地方隨一の私立病院として首位を占む。博士は九州帝大系の錚々たる外科學者にして、特に内臓外科を最も得意とし、母校より學位を得たる外科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。

△博士は獨逸協會中學より一高を経て、大正九年九州帝國大學醫學部を卒へ、後藤外科教室に入り教授、軍醫監、後藤七郎博士の膝下に外科學を研鑽すること多年、更に大正十五年大學院に學び、恩師後藤博士を指導教授として潰瘍の成因に關して實驗的に研究を専鍊、昭和四年春學位を得、昭和五年春恩師の命によりて、宮崎縣土々呂港土々呂病院に院長として着任以來頗る名聲を馳せたるにも拘はらず、經營者側と意志の疏通を缺き、着任後十ヶ月一旦歸學と決したるも、地元有志等の懇望もくし難く、一時棧橋通りの自宅にて開業すること約一年、遂に土々呂病院を購入し百瀬病院と改稱して今日に至る。

△主論文は「胃腸吻合術後ニ發生スル所謂消化性空腸若クハ胃空腸潰瘍ノ成因ニ關スル實驗的研究」にして、外に、参考論文として、(1)胃又ハ十二指腸潰瘍、膽囊炎及蟲樣突起炎ノ合併——所謂腹部「トリアス」(三主徴)ニ關スル

外科的經驗ニ就キテ、(2)所謂術後消化性空腸潰瘍ノ興味アル治驗例ニ就テの二篇あり。

△感想としては「こんな田舎に開業しやうとは夢にも想ひませんでした、人間の運命なんて一寸先も分からないもんですネ、土々呂病院に着任後間もなく狭い自宅で開業を餘儀なくされ、博士、學士が顔を揃えて居る土々呂病院を相手に鎬を削つたのですからネ、それが僅か十ヶ月足らずで閉鎖され、遂に私が其の病院を購入した時の愉快さは、一高に入學した時以來の嬉しさでしたよ。何しろ此の病院は翡翠の如き土々呂灣港を一望の中におさめ、太平洋上遙かに浮ぶ漁船の影、點々として果しもなく、後は綠蔭濃かなる小山を脊負ひ、夏涼しく冬暖かく、實に病院としては理想郷です、兎も角患者本位に一層努力しませう」云々と。折角の努力奮勵を望むや切也。

△氏は生粹の江戸ツ子にして、明治二十二年當時の接骨家百瀬久長氏の次男として生る。今年齒四十有七歳にして年壯の意氣益壯也。勤勉勵精の人にして、診療に臨む態度の眞摯にして熱情あるは、患者に好感を與へ其の人格を敬慕せしむ。趣味は水泳にして夏季は患者を待たせつゝ水青き土々呂の海に特意の拔手をきりて涼をとるといふ。

◇
來須正男 △京都府立醫大助教授として母校のため精研克く教壇に勵み、兼ねて第一外科副部長として附屬醫院に於て其の診療に従事しつゝあるは來須正男博士也。新進なる外科學者として京都府立醫大派の少壯醫博たるに耻ぢず。

△學位主論文は「腦血管ノ神經支配ニ就テ」にして、參考論文としては、(1)肝臟ノ海綿様血管腫、(2)脾臟囊腫、(3)血友病、(4)「アドレナリン」ノ腦髓ニ及ボス影響ニ就キ其ノ呼吸停止並ニ血壓下降ノ本態ニ就テ、等あり。

△島根縣那賀郡石見村長見の人、金作の長男にして、明治二十八年生れ也。大正八年京都醫專卒業、爾來外科教室醫員、助手を経て十四年京都府立醫大講師となり、昭和四年六月京都府立醫大より學位を得、翌五年助教授に任ぜられ

今日に至る。専攻は外科學にして恩師河村叶一教授、望月成人教授等に師事して造詣する處あり。

△學者肌の少壯紳士にして、年齒漸く四十有一歳、英氣潑刺として研究心に富み、其の熱心と眞摯なる態度とは、尙洋々たる前途に囑望せらるゝ處益々深し。志操堅實、謙讓の姿に富み、克く己を持して人に厚く、又た學生提攜のため能く盡す。京都市上京區小山中溝町一九ノ二に住す。

◇
下村一郎

△外科學現代の大家として其の名聲を馳せつゝある下村一郎博士は、神戸下山手病院長として、多士濟々たる神戸診療界に割據躍進して、今や牢固たる地盤を有し、好評嘖々の裡に年次堅實なる發展振を示しつゝあり。學系は長崎醫專の出身にて、京都帝大教授磯部喜右衛門博士に就て外科學を専攻し、京都帝大より學位を獲得せる斯科の大家たるに耻ぢず、特に其の最も得意とせる肛門外科に至りては獨特の評判専ら也。

△學歴よりすれば、大正四年長崎醫專卒業後、直ちに大阪回生病院外科に勤務、大正十四年より昭和四年まで京都帝大醫學部外科教室にて研究、昭和四年六月學位を授與せらる。

△主論文は「輸尿管逆流ニ關スル實驗的研究」にして七篇より成り。參考論文としては、(1)上行性腎臟傳染ニ關スル實驗的研究、(2)大網膜癒着ニ關スル實驗的研究あり。

△静岡縣田方郡伊東町玖須美の人、下村龜太郎の長男にして、明治二十三年生る。年齒正に不惑に入る六歳、年壯銳氣にして學識、手腕、人格共に漸く圓熟して今は最も重望せらるゝ時代に在り、其の得意や想ふべき也。熱心なる研究家にして、刀圭多忙の業餘今猶精研に餘念なく、診療に臨むや誠意誠實を以てし、多大の信望を博す。一面又人と接するに親切にして同情に富む、以て其の性格の一端を窺はれ、高邁なる人格を敬慕せしむ。研究以外の趣味としては長唄と圍碁とにあり。神戸市中山手通り二ノ八三に住む。

飯森正夫 △金澤市堅町に在る飯森病院は、外科専門にして病室二十三、レントゲン科、其他の設備整ひ、内容の充實と共に其評判極めて高し。院長飯森正夫博士は東京帝大派の學風を汲み、曩年渡歐の際は獨逸外科學界の權威者レーン教授に親しく師事して造詣する所あり。研鑽多年の経験と共に手腕、今や圓熟し最も得意の時代に在るが如し。

△博士は金澤の人、飯森益太郎の養嗣子にして、明治二十七年生る。大正九年東京帝大醫學部を卒業し、直に同附屬醫院近藤外科教室に勤務し、近藤次繁教授の指導を受く、十二年廣島縣立病院外科部長として赴任、十五年渡歐留學の途に上り、昭和二年歸朝以來開業今日に至る。其間昭和四年六月東京帝大より學位を得たり。

△主論文は「嫌氣性細菌ノ研究」にして、參考論文に「瓦斯壞疽ノ治療法ニ就テ」あり。

△感想を叩けば、博士曰く「日本の醫學會と稱するものは、實際開業醫師には縁遠いものとなつて來た、開業醫が多く集る様な學會にしたいものです。尙ほ醫師會にはもつと權威あらしめ醫師を統制指導しもつと社會的に有爲なる事業をなし大衆から信頼される様に努めなければならぬ」云々と。博士が學界と併せて醫師界に對する抱負の一片として氣を吐ける所甚だ多とすべし。

△愛読家にして、又スポーツファンの一人也。年齒不惑に入る二歳、漸く壯熟の期に入る、臨床家としては腕の最も冴えたる全盛時代にして一段の重望を加ふ。少壯氣鋭にして、春秋猶頗る豊富なるの秋、宜しく自重して切に加餐を祈ると共に、益々發奮活躍あらん事を。

佐藤盛二

△横濱診療界に進出してその最も得意とせる外科、皮膚科、泌尿科を以て立ち、中區尾上町三丁目三十六番地（尾上町電車交又點附近）に陣して獨立開業せる佐藤外科醫院長佐藤盛二博士は、慶大醫學部出身の錚々たる外科學者にして、母校の恩師阿部教授及び茂木教授に師事する事多年、更に京都帝大磯部教授及び大阪帝大岩永教授の薰陶を受け、研鑽多年の経験と共に手腕圓熟の域に入り、玲瓏たる診療手術の評判は益々その人氣を集め、遠近よりの外來患者日に輻輳し院內常に賑ふ。同醫院は類焼後昭和八年秋再興せるものにして、尙院内に横濱性病豫防協會を置き、着々其の豫防事業にも努力盡瘁しつゝあるは多とすべき也。

△更に顧みて其學歷より博士のプロフェッショナル年歴を公開すれば、博士は大正十三年慶大醫學部を卒へ、直ちに渡米衛生學研究を計畫せしが、慶大藥物學教室阿部教授の下に研究し、尙外科學教室茂木教授の下に助手として研鑽し、更に大阪帝大外科學教室、京都帝大外科學教室に學び傍ら諸大家に就きて皮膚泌尿科を研究せり。昭和四年六月醫學博士の學位を得、同七年五月横濱市尾上町三丁目三十六番地に、佐藤外科醫院を開設す。

△主論文「鹽素代謝ノ中樞性調節ニ就テ」及び數篇の參考論文を提出して慶大より學位を獲得せる所謂慶大派の名醫博たるに耻ぢざる一人物也。

△感想としては氏の懷抱せる一片を吐露して曰く、「諸種傳染病に比して、最も必然的罹患性のある花柳病に對する豫防事業が徹底せないのは、國家としても遺憾な事であつて、此種疾患が強壯青年者を冒す關係上、國防、産業、經濟に亘る損失は測り識れざるものがある。昭和二年公布の花柳病豫防法規は、嚴として存在するけれども、チフス豫防法等の如く、一片の命令のみで實行出来る。白晝公然の豫防方法ではないのだから、何等其成績は舉らない。花柳病國禍を豫防する意義ある敷設は性及び性病に關する一般人の常識を正しくする事で、此意味に於て余は、當を得たる性教育即時實施を要望する」云々と。

△博士は福島縣伊達郡川俣町の人、當年漸く不惑に達す、少壯氣鋭にして多量の分別を有す、手腕漸く圓熟して今は

最も活躍の時代に入る。學究的温厚の臨床家にして、その診療に當るや熱心能く患者の心理を捕捉して誠意、親切を以てす、その厚き聲望を博する所以決して偶然ならざるを思ふ。春秋猶豊富にして、前途洋々たり、切に自重加餐を祈る。

池田孝男

△帝都醫療界多士濟々又その競争も激甚なりと云はん乎。京橋區越前堀二丁目に靈岸島病院あり恰も聖路加國際病院と相峙するかの觀とまでは行かざるも、錚々たる病院として斯界既に定評あり。その病院の外科部長の椅子を持するは池田孝男博士也。博士は東大系の外科學者にて、現東京帝大名譽教授佐藤三吉博士に師事して多年恩師の指導と薰陶を受け、又獨逸留學中主としてブリードベルグ教授に就て免疫學を專攻せり、歸朝後「免疫沈降反應ニ於ケル二重輪現象ノ研究」なる學位論文を提出して、母校より學位を獲得せる所謂東京帝大派の名醫博たる一人者也。多年日本醫科大學教授として學界に見參、克く學生の指導に精勵相勤めたるも後これを辭し、帝都醫療界に精進して以來、拮据奮勵、獨特の手腕を揮ひ、老練なるメスの評判は嘖々として既に斯界に公評あるが如し。△千葉縣山武郡千代田村の出身にして、明治十七年生る。一高を経て明治四十四年十二月東京帝國大學醫科大學卒業直に同大學助手として勤め、大正五年十月まで外科學を專攻せり、それより日本醫學專門學校教授に聘せられ十三年四月までその職にあり、同年六月より十五年九月まで歐米へ留學す、歸朝後は再び日本醫大教授として昭和五年三月まで勤務、斯間昭和四年八月學位を得、爾來頭書の現職にありて一般診療に従事しつゝあり。

△醫界に對する感想を寄せて曰く「醫師の質を良くする爲に所謂「指定」制度を全廢して平等に國家試験制度を實施することが緊要と考へます。又、學位はつまらぬものながら此の制度が現存し世の人が之に信を置く以上は人格の銜を厳密にすることを各教授會に切望します、背徳漢が往々博士の中から出るのは教授會にも大いに責任がある」云々

△と。此處にも亦醫界淨化の強き叫びあり、大に三思傾聽に値す。

△博士は多趣味の方なれど、可成自己の職業の中に趣味を求めんと努むる方なり。若しそれその性格を打診すれば温實誠行の士、謙遜家にして己れの識學を衒はず、名利に恬澹として自己を紹介せらるゝが如きを好まず、而かも居常人に對するに眞摯にして應答の禮を重んじ、其態度の寛量にして紳士的なるは敬意を表すべき也。猶春秋豊富なれば、幸に健康と共に折角の加餐を祈り、此後共斯道淨化のため益々活躍し多幸あらんことを切望す。東京市麴町區富士見町二ノ一に住す。

龜谷敬三

△宇治山田市常磐町に二十有六年の歴史を有し、私立病院中に斷然一頭角を顯はせる龜谷病院あり。當院は博士の父の創設せしものにして、病床五十有餘を有する地方屈指の大病院なるが、現在にては院長龜谷敬三博士の主管經營に移り、その結構の宏大にして内部の設備の完全と共に、院長自ら外科を擔當し博士獨特の手術振は有名にして、加ふるに新進の渡部喜平博士内科を擔當せるあり。兩々相俟つて好評嘖々の裡に繁榮を永らへつゝあるは祝福すべき也。

△博士は宇治山田市岩淵町龜谷環の養嗣子なり、明治三十二年生れにして、八高を経て、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直に附屬醫院近藤外科に勤務、昭和三年愛知醫大助教に就任し桐原外科教室に勤む、同四年八月東京帝大より學位受領、翌五年養父の急逝により依願退官し、頭書の自己病院の經營と共に一般の診療に従事し今日に至る。斯間母校在學中は恩師近藤次繁教授、青山徹藏教授等の指導を受け外科を專攻せり。

△學位主論文は「植皮ニ關スル實驗的研究」にして參考論文なし。

△若し夫れ博士の抱負を叩けば、堂々氣を吐いて曰く「我國現今の醫師の社會的地位は漸次下落しつゝあるに非ざる

か。世人の醫師に對する尊敬は地を拂つたと云はる、政治家、學者と同様又は其以上の努力と修學を經來つた醫師が斯くも社會より輕視さるゝ所以は那邊に存するか、惟ふに現在の醫師には向上の目標が缺けて居る、現在の醫師は何を理想とし目當てとして活動して居るかといふに、玄關が繁昌して收益の増大する事がそれであらう。そして殆んど全國開業醫の凡てに共通の唯一の理想であらう、幸運と手腕相俟つて到達したる彼岸は結局或額の蓄財（財界の成功者とは比べ物にならぬ微細な額）に過ぎぬ、如何に才能あり如何に努力精進を續くとも、此を一步も出る事は出來ぬであらう。さて此より一步出でんとするか即ち邪道に踏み入るのである。成功せる醫師にして精力餘ある者の進む道は大凡そ行手は決つて居る、一縣市國會の議員に出で、社會的名譽心を満足せしめんとする者、二、肉體的精力を邪道に注ぎ込む者、三、蓄財を書畫骨董に注ぎ込む者、此等が醫師中の成功者の歩み來れる常道であらう。成功者の落着く彼岸が斯の如きものである事を見極むる時、若き醫人は最早行手の希望を認めぬ緊禪一番の必要を認めぬ、故に大學卒業直後と二三十年後との間に何等の進歩を認めぬ。此では醫師が社會の尊敬を受け得ぬのは當然である、茲に於て吾人は何か新しき崇高なる目標を定め向上を計る事の必要を痛感するものである、開業醫と雖も日進の醫學の普及乃至改善に精進し或は保健衛生乃至救療的社會事業に勞を吝まず協力して寄與をなす等、醫人の地位を向上する道は幾多求め得べしと信ず」云々。

△以上博士の前半生たる三十有七年史を緋けば、象牙の塔を勇退して洋々たる醫療界に身を投じて以來、その今日あるを首肯せしむるに足り、博士の面目を語るに充分なり。而かも前途最も有爲なる少壯醫博の今後の躍進は更に大に期待せらる。望むらくば臨床家として餘り小事に拘泥せず、宜しく大人物たるの度量と社會に對する理解と同情とを以て益々發奮精進あらん事を切望して止まず。

佐伯 正之進

△宇都宮市旭町一丁目（本丸）に佐伯外科醫院あり、一般外科及泌尿器外科、臨床に關する病理、細菌、化學及理學的診斷治療上の施設完備して、診療手術の好評と相俟つて門前常に賑ひ、當市診療界に於ける一流病院としての地位を占む。院長佐伯正之進博士は東北帝大系（専門部出身）の外科學及レントゲン科學者にして、特に内臓、泌尿器外科を最も得意とし、東北帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。嘗て陸軍に出仕して陸軍一等軍醫（豫備）の印綬を帯び、西伯利事變に次で上海事變に出動參加して活躍する所あり、依功正七位勳五等たり。

△博士は朽木縣立宇都宮中學校を経て、大正六年東北帝國大學醫學專門部卒業、直ちに同大學醫學部杉村外科教室に勤務、同年九月見習醫官を命ぜられて陸軍に出仕、同十三年八月任陸軍一等軍醫、翌十四年九月依願豫備役被仰付、其間大正八年四月より二ヶ年歩兵第五十九聯隊附軍醫として西伯利事變に参加、ハバロフスク、チタに轉戦、又陸軍々醫學校に於てレントゲン學を專攻す、而して大正十二年九月關東地方大震災に際し第八師團衛生隊に在り、東京戒嚴地救護に従事せり。軍職を退官後再び東北帝大醫學部杉村外科教室に復歸し、助手として勤務の傍ら外科學專攻、昭和四年五月東北帝大講師囑託、同年八月東北帝大より學位受領、同年十一月頭書の現住地に外科醫院を開設す、同七年二月上海事變に動員應召、第十四師團第一野戰病院附として上海、嘉定方面に出動、次で第三野戰病院に轉じ北滿、ハルビン綏化に行動す。專攻は外科學及びレントゲン學にして、主として東北帝大教授杉村七太郎博士及び前陸軍々醫學校教官軍醫總監岩崎小四郎博士の指導を受け造詣する所深し。學位主論文は「外科的腎疾患ニ於ケル尿及び血中ノ「クレアチニン」定量ニ就テ」にして、原著は獨逸文より成る、外に參考論文六篇あり。幾多論文中博士の最も得意とするは「腎臓外科上ニ於ケル化學的レントゲン學的病理學的研究」なり。

△感想の一端を披瀝して曰く「現下醫學界に於て臨床醫學上の研究業績の重んぜらるゝに至れるは愉快とする所、一

方實際上には確實なる基礎醫學上の檢索方法と雖も餘り運用せられざるは遺憾なり。將來臨床醫家の學術的研究方法及手技鍊磨の愈々必要なるを思惟す」云々。著者曰く至極同感なり、近時此の傾向益々濃厚となり、一般的に最も重要尊重せらるゝに至れるは臨床醫學界の爲め欣幸とする處なり。宇都宮市三條町佐伯庄之助の長男、明治二十八年生る、當年漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣益壯也。讀書家にして書見を業餘の道樂とし、又た外語の研究に多大の趣味を有す。春秋猶頗る豊富、輝しき學位の前途は洋々として益々多望也。

◇

城島千尋

△山口縣宇部市東新川驛前に城島外科あり、病室十四、クロマイエル氏燈設置完備、城島千尋博士の經營する處なり。博士は福岡縣山門郡東山村大字本吉の人、城島二郎の長男にして、明治三十四年十二月生る。學系は長崎醫專の出身にて、學位は九州帝大より獲得せる外科専門家也。大正十二年長崎醫專卒業後一年志願兵として歩兵第五十六聯隊へ入營、大正十四年陸軍三等軍醫任官、翌十五年一月九州帝大醫學部後藤外科教室入局、外科學一般専攻生を許可せらる、昭和四年三月學位を得、同五年七月以來現住地にて開業今日に至る。一般外科を専門とす恩師後藤七郎博士に就て造詣する所深し。

△主論文は「血管結紮ノ組織ニ及ボス實驗的研究」にして、參考論文は、「十二指腸潰瘍百例ノ外科的經驗」なり。弓術音楽に趣味を有す。開業漸く數年に及び、診療手術の好評と相俟つて、年次堅實なる發展を見るに至り、今や相當の地盤を有す。眞面目なる臨床家として篤き信望あり。

◇

中島明

△埼玉縣北足立郡戸田村大字下戸田にて外科専門を以て開業せる中島明博士は、京都府立醫專の出身にして、慶大派の少壯醫博として名聲を博す。埼玉縣比企郡八和田村字上横田の人、敬三の長男にして、明治二十七年生る。大正六年京都府立醫專卒業後、東京帝大醫學部佐藤外科、恩賜財團濟生會大阪府病院、東京鐵道病院等に歷任して、慶大醫學部解剖學教室助手として岡島敬治教授の指導を受け、昭和四年學位を得、爾來現住所に於て開業今日に至る。指導教授は慶大教授岡島敬治博士にして、解剖學及び外科學を研究し、専門としては外科を以て立つ△主論文「兩棲動物ニ於ケル脾臟ノ組織學的研究」(獨文)、參考論文「腎臟皮下損傷ニ就テ」外獨逸文原著四篇あり。

△感想に曰く「白を黒と云ひ、又は徒に前醫を誹謗して自己を高くしやうとする者が多いのに驚く。一定の經過を見ねば診斷の不明の疾病に對し、なんだ斯んなものが診斷がつかぬと云ふ様な口吻で云つたり、無暗に手遅れと云ふて暗に自分の處に早く來なかつた(實際は不治の者でも)からと云ふ連中が居るので不愉快な事がある」云々。と亦以て他山の戒しめともならんか。喜怒哀樂を顔に出し易い癖あり、或は短所とも見るべきか。居常の趣味としては釣魚を樂しみ、又たスポーツファンたり。眞面目なる學究的臨床家として敬意を表す。附記す、東京市日本橋區兩國中島醫院長中島明博士とは同名異人也。

◇

長坂清人

△長坂清人博士の經營せる長坂病院は、本院を中央線木曾奈良井驛(長野縣西筑摩郡檜川村奈良井)に置き、郡下の中心地たる木曾福島町驛前に長坂病院福島分院を置く。分院は新築にて本院より規模擴大、敷地約千五百坪各科設置、綜合病院にして經營は本院と同じく、自炊入院に重きを置き、輕費診療を以て醫療の大衆化普及を目ざし、診療界の淨化、醫療機關の充實擴充に奉仕的努力を以て邁進せんとするが、博士の理想とする所也。其の規模の宏大、且つ内部の設備が完備せる點に於て、木曾谷地唯一の私立病院として既に其の存在を認めらる。博士は九大系の外科學者にして、恩師後藤七郎博士に就きて内臟外科を、同神中正一博士に就きて整形外科を研究し、母校

より學位を獲得せる斯界の名醫博也。開業日猶淺少にも拘はらず、診療手術の好評は博士が奉仕的努力と相俟つて、繁榮年と共に博士の理想を實現しつゝあるは、地方診療界淨化の爲め欣幸とする處也。

△博士は大正十四年九州帝大醫學部卒業後、直ちに母校副手となり、順次累進、醫局長、助手、講師拜命、昭和四年學位受領、同五年招かれて宮崎縣延岡市黒木病院副院長となりしが、同六年末退職歸郷、七年春より診療所開設現在に至る。尙昭和六年以降日本整形外科學會評議員として同會の爲に盡瘁す。

△主論文は「ペルテス氏病論」にして、参考論文は、(1)彈撥膝ニ於ケル軟骨所見、(2)肺臟心臓等ニ轉移セル上脛骨肉腫ノ一例、(3)窒扶斯性脊椎炎ニ就テ、(4)腰椎横突起骨折ニ就テ、(5)脊椎棘狀突起疼痛論、(6)脊腰痛患者ノ血球沈降速度ト其診斷的價値、(7)腸「チフス」ノ整形外科的後遺症ニ就テ、(8)遊離移植セラレタル生筋膜ノ運命の八篇なり。

主論文は組織學的檢索症例數、世界文獻の半數に及び、昭和四年日本整形外科學會長より感謝され、又日本醫學會の爲め氣を吐くに足ると稱せられたり(日本醫事新誌)、又帝國學士院研究補助費をも受領せり。参考論文中の(5)は恩師神中教授との共著にて貴重なる文獻として斯界の注目を引けり。

△感想に曰く「完全なる醫療は畢竟「ブルジョア」の專有なりとの感を抱かしむるが如きは、要するに醫師が自己の道を梗塞するに過ぎずとの考へを有し、方法によりては、輕費にて充分完全なる醫療を受くる事の可能を實證せんとする意味に於て診療所を開設、入院は自炊制度を本態として一面社會奉仕的經營をなすを以て門前常に市をなすの盛況にて余の考へは誤りならずと私に快哉を叫びつゝあり」云々と。診療界淨化の急先鋒として大に歡迎すべき也。

△現住地奈良井の亡長坂昌作の長男、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳也。博士の經營する診療所は、社會的奉仕の意味に於て、輕費を本位とし且患者を遇するに徹底的に誠實と親切とを盡すことゝ、研究に對する態度甚だ熱心にして粘り強く眞剣なる事は、賢明なる博士の長所と見るべき乎、但しやゝもすれば果斷を缺く事がないとも云へ

ない。研究以外にはスポーツと刀劍に興味を有す。

◇

吉川 春次郎

△帝都の中心、群醫割據の本場たる日本橋區茅場町二ノ一四に堂々の陣を張り、外科を標榜して

大衆の人氣を獲得しつゝある外科吉川病院は、院長吉川春次郎博士の經營にして開業拮据十三、四年の歴史を有す。

博士は千葉醫專出の一先輩にして、嘗て獨逸に留學するや、ギーセン大學にてポツペルト教授に就き外科特に内臟外科を專攻し、慈惠醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。經驗豊富にして既に老熟せる手腕を有す、玲瓏たるメスの評判は、多年の聲望と相俟つて今や牢乎たる地盤を築き、大衆より其の大なる存在を認められ老大家として仰がる。

△神奈川縣高座郡相原村の出身にして、明治十五年生る。同三十六年千葉醫專卒業後、直に同校附屬なる縣立千葉病院外科に入り主任三輪德寛博士に師事す、同三十八年十月より東京築地の外科林病院(院長林驥醫學士)勤務大正十一年に至る、林病院在勤中院費にて獨逸留學(明治四十一年五月出發、四十三年六月歸朝)、主としてギーセン大學にて外科教授ポツペルト氏に就き研究(昭和八年九月二十三日發行東京醫事新誌二八四六號「ポツペルト先生を弔ふ」吉川春次郎参照)、同大學にてドクトル、メヂチーネを得、大正十二年三月日本橋區茅場町に外科吉川病院を開く、同年九月大震災に遭ひ焼失す、同年九月一日より十三年三月三十一日まで東京市臨時醫員囑託、下谷池ノ端簡易療養所病院外科主任として勤務、同十三年四月前地に吉川病院再開今日に及ぶ、診療の餘暇、大正十四年秋より昭和四年に亘り慈大病理學教室に於て、悪性腫瘍の研究に従事し、昭和五年一月學位を受領せり。

△主論文は「家鶏肉腫ノ免疫學的研究」にして、参考論文は(1)皮下腎臟破裂(獨逸文)、(2)結腸腫瘍、(3)色腫肉腫等なり。著書、(1)實驗外科學、(2)蟲様突起炎等。

△年齒知命に入る四歳、健康にして元氣益々旺盛也。誠意、誠實を以て終始し、眞面目なる臨床家として仁術を貫行

する處に博士の貴き使命あり、春秋猶豊富、切に自重加養を祈り、益々努力奮闘あらんことを。趣味は旅行と俳句。

阿部 恭一

△福岡縣田川郡赤池鑛業所病院長阿部恭一博士は、九州帝大出身の整形外科學者にして、母校の恩師前教授住田博士、現教授神中博士、現名譽教授田原博士、現教授兒玉博士等の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる九大派の名醫博たる一人物也。暫く講師として母校の教壇に起ち學生教導の任にありしも、象牙の塔を勇退して診療界に進出するや、得意の領域に獨特の手腕を展べ、熱誠克く院務を統率して治療界の爲め盡瘁しつゝあるは甚だ多とすべき也。該病院は全科診療の設備整ひ、各科は専門の醫師之を擔任す、博士の責任や重且つ大なりと云ふべし。

△博士は一高を経て、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部整形外科教室に入り、助手より助手に進み、同十二年五月同教室を辭して兵庫縣洲本町洲本病院外科部長として赴任、昭和二年九月同病院を辭し、九州帝大大學院學生として神中、田原兩教授指導の許に整形外科學一般の研究に従事、同四年九月滿期退學後は同教室の助手より講師を囑託せられ、同五年八月學位を受領せり、同六年五月講師を辭し現職に就き今日に至る。

△學位主論文は「尙儂病性骨端部變化ノ成立機轉並ニ骨長徑發育ニ及ボス機能的影響ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)實驗的家兔尙儂病ノ燐並ニ「カルシウム」代謝ニ關スル研究、(2)麻痺ヲ伴フ急性化膿性脊椎骨髓炎ニ就テの二篇あり。他の論著中、(1)九州附近ニ於ケル尙儂病ニ就テ、(2)室内換氣ノ尙儂病豫防効果ニ關スル實驗的研究等は最も主要なるものゝ如し。

△岡山縣淺口郡里庄村の人、明治二十七年生る、當年漸く不惑に入る二歳。「醫師對患者の間に今少し緩みがあり度きものなり」とは、博士の述懐の一片なるが、それだけに患者に對する博士の態度が、親切にして熱情あり、誠實にして露々たる混味あるは、博士の性格と相俟つて其の特徵を窺はる。一面又博士は何事も自分で爲さねば氣の濟まぬ性質なり。趣味としては魚釣りを好む。福岡縣田川郡上野村赤池四三二に住む。

古川 久米

△神戸市上橋通四丁目七一に於て自宅開業を爲し、外科を標榜して漸次その地盤の擴張に努めつゝある古川久米博士は、熊本縣鹿本郡廣見村の出身にして、明治八年生る。五高を経て、明治三十五年東京帝大醫科大學卒業、同大學附屬醫院近藤外科副手、助手を歴て、三十七年九月三重縣桑名町病院長となり、三十八年六月兵庫縣立姫路病院外科醫長、三十九年三月同病院長となる、四十一年三月廢院と同時に日赤兵庫支部姫路病院長兼外科醫長となる、大正十年社命にて海外見學、翌十一年歸朝、十二年二月兵庫縣立神戸病院副院長兼外科醫長、昭和三年六月依願免職、同年九月より開業今日に至る。

△主論文「種々ノ毒物ニ因ル筋組織變化ニ關スル系統的實驗的研究」及び參考論文「貧血ニ對スル自家輸血法ノ實驗的研究」を提出して、昭和五年八月東京帝大より學位を受領せり。

△醫博古川繁人の兄にして、老來五十五歳を以て學位を獲得せる博士の如きは、近來稀に見る所にして學界の美譚とす、その篤學的精神は學ぶべき也。今高齡耳順に入る一歳、而かも猶矍鑠として壯者を凌ぐの勇氣と、老熟せる手腕とを以て、今や獨立せる自由の立場より混沌たる診療界淨化の爲めに起ち、天職として大に將來に待つあらんとす。その獻身的努力と不撓の精神は更に尊し。幸に健康と共に折角の自重加養を祈る。

高橋 涉

△名古屋鐵道病院長高橋涉博士は、東大系の外科學者にして、外科界現代の權威近藤次繁博士の高弟として知られ、恩師の指導を受けて斯學の蘊奥を究はめ、東北帝大より學位を獲得せる名醫博として既に江湖に

著聞す。嘗て歐米を視察し、博く學識を有し識見に富む。久しく鐵道治療界の爲め奮盡活躍する所あり、其の篤き今日の聲望と、併せて勢力とを扶植せるもの又偶然ならざるを思ふ。

△仙臺市東七番町高橋孝哉の長男にして、故高橋久醫博及び高橋徹の兄たり。明治二十一年生れにして、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、卒業後引續き近藤外科教室に勤務、同五年六月長岡病院外科部長として赴任、同八年九月鐵道に入り、仙臺、札幌の各鐵道病院を経て現職に就任す、昭和四年十二月より五年十一月迄歐米各國出張（鐵道省）同五年九月學位を授與せらる。

△主論文は「アドレナリン」分泌中樞局所性ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)體溫調節ヲ失セシメタル家兎體溫ニ對スル「ベータ、テトラヒドロナフチールアミン」ノ作用ニ就テ、(2)家兎副腎ノ「アドレナリン」含有量ニ對スル「ストリヒリン」並ニ冷刺ノ影響ニ就テ、(3)無麻酔犬ヲ窒息セシメタル場合ニ於ケル「アドレナリン」分泌ニ就テ（共著）、(4)「アドレナリン」分泌ニ對スル「エフェドリン」ノ作用ニ就テ（共著）、(5)赤血球沈降速度ニ關スル實驗的研究、並ニ外科的疾患ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ、等なり。

△當年不惑に入る八歳、年壯の意氣益旺にして、勵精恪勤の人として信望を博し、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮せんとし、今は最も得意の時代ならん。名古屋市大曾根鐵道官舎に住む。

久米久之

△福岡縣田川郡添田町に在る宮城病院外科に久米久之博士あり、専ら整形外科術に堪能なるを以て知らる。長崎醫專の出身にして、大正十一年卒業後十一年より十四年まで、福岡縣後藤寺町三井病院に勤め、十二年より昭和五年まで、長崎醫大の病理學及び外科學教室に於て斯學の研究に没頭し、五年九月長崎醫大より學位を受

△主論文は「乳糜尿ノ原因ニ關スル研究」にして、參考論文としては、(1)「アトファン」胃潰瘍、(2)實驗的胃十二指腸潰瘍、等あり。

△「貪慾を捨て安逸を顧みず自己を没却して病者に接するに常に熱を以てするは世の名醫たるの秘訣なり」云々とは、氏の感想の一片なるを知ると共に、氏が名醫たるの存在である所以を首肯せしむ。博士は熊本縣上益城郡乙女村久米泉平の四男、明治二十九年生にして當年漸く不惑に達す。居常盆栽を愛で、暇を得れば登山を好み、高山を逍遙して自然に親しむ、又た酒を嗜しむ風あり。福岡縣添田町に住す。

村手順吉

△青森縣八戸市利用組合三八城病院副院長村手順吉博士は、愛知縣中島郡千代田村坂田亡村手竹三郎の五男、明治三十年生れにして、愛知縣立三中、八高を経て、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直に鹽田外科教室に入り外科專攻、同十四年一月より昭和二年三月迄、日赤長野支部病院外科醫長、同年四月より四年五月迄東京帝大醫學部細菌學教室に入り竹内教授の下に細菌學研究、同年五月より五年九月迄再び鹽田外科教室に入り外科專攻、同年九月より八年四月迄東京海軍共濟組合病院外科醫長、同年四月より現職に就任す、斯間昭和五年十二月母校より學位を授與せらる。主論文は「「テレビン」油屬藥物ノ細菌ニ對スル作用」にして、參考論文なし。

△感想の一片を寄せて曰く「時世に伴ひ醫業の營業化せらるゝは止むを得ずとするも醫師本來の義務若くは職分を忘れてたゞ醫院又は病院の經營にのみ汲々として務むるもの多きは實に慨嘆すべく此點につき醫師の覺醒を望むや切なり」云々。著者曰く、同感の士にして博士の此の説に共鳴する人は多々あらん、況んや近時益々實費診療に近き醫療機關が盛んに跋扈して、醫師の地盤を蠶食しつゝある現代に於てをや。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又散歩を好む風あり。八戸市山伏小路三八城病院内公舎に住む。

柿田俊光 △東京市淺草區小島町に歴史あり、外科、整形外科、泌尿器科、X光線科、齒科を以て高名なる樂山堂病院あり、外科、皮膚科界の先覺者故宇野朗博士の創立せる私立病院にして、宇野俊夫學士現院長たり。外科の大家柿田俊光博士は外科及び皮膚 尿科を擔任して克く院長を補翼する所あり。同病院の依然として繁榮を持續し歳と共に益々向上隆盛の偉觀を呈しつゝあるもの、博士の力亦與つて大なりと云ふべし。附記す、同病院には院長宇野俊夫學士、柿田博士の外、金子魁一博士、宇野孝齒科學士等々あり。博士は千葉醫大系（専門部出身）の錚々たる外科學者にして、北海道帝大より學位を得たる近來の少壯名醫博也。

△博士は大正十四年千葉醫大専門部卒業、直ちに附屬病院の外科教室に残り、助手として現學長高橋信美博士の下に二年臨床を學ぶ。然るにこの間外科醫として病理學の必要を痛切に感じ、次で北大醫學部の今教授の下に走り病理解剖學を研究する事三年、再び臨床に返り北大醫院第二外科に轉じ柳壯一博士の指導を受く。昭和五年秋釧路市博濟病院外科醫長として赴任し、外科及び皮膚、泌尿科に屬する患者の一般診療に従事せり。同五年十二月學位を得、次で淺草區小島町の樂山堂病院に轉じ現在に至る。

△主論文は「諸臓器内尿素ノ組織化學的研究」にして、(1)組織内尿素ノ證明法ニ就イテ、(2)生理的狀態ニ於ケル腎臟ノ尿素排泄ニ就イテ、(3)病的狀態ニ於ケル腎臟ノ尿素排泄狀況ニ就イテの三篇より成る。參考論文は、(1)肝臟ノ尿素生成及び其排泄ニ就イテ、(2)膽色素生成ニ關スル知見補遺、(3)組織ノ硫化水銀顆粒發現部位ニ就イテの三篇なり。

△北海道釧路市の人、明治三十三年生る、年齒未だ三十六歳の少壯にして、新進の意氣に燃え志操堅實也。今は最も得意時代にて「醫は仁術也」を平生のモットーとし、臨床に熱心勵精し克く誠實と親切とを盡す。蒲田區女塚町一八に住む。

堀田 慎之

△海軍燃料廠醫務部に在勤中の海軍々醫大佐堀田慎之博士は、金澤醫專出身の逸才にして、外科

レントゲン科を専攻し、嘗ては歐米を視察し、慶大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博なるが、研鑽多年の間、海軍部内部外の先輩指導者として恩恵を受けたる人は枚舉の遑なしと雖も、別けても「レ」線界に興味を起したるは小林幹海軍々醫少將の肝煎りにて、大正十四年海軍々醫學校選科學生時代より始まり、次で高橋通磨軍醫少將の指導を受け、同少將故小池博士の縁故にて不圖した機會より、慶大藤浪剛一教授に知遇を得て以來、同教授の厚き指導を受けたる。蘊蓄せる學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して活躍する所、博士の面目の躍如たるものあり。

△博士は小樽中學校を経て、大正二年金澤醫專を卒へ、直ちに海軍に入り任海軍小軍醫、日獨戰役に參加、同九年叙勳四等授旭日小綬章、同十一年米國に出張、昭和四年叙勳三等授瑞寶章、同五年十二月慶大より學位受領、同八年十一月任海軍々醫大佐、練習艦隊軍醫長として軍艦磐手に乗込み土耳其、希臘、伊太利、馬耳塞、西班牙等航海し、此間佛、獨、英を歴訪、伊、佛、西三國より叙勳の名譽を得、歸朝の後、同九年九月大分縣龜川海軍病院第一部長に補せられ、次で現職に就けり。

△主論文は(1)「ヨード」油ノ腹腔内吸收ニ關スル「レ」學的研究、(2)同 Hysterosalpinggogaphie ニヨリ腹腔内ニ洩レタル「ヨード」油ノ運命、(3)自家製「ヨード」油 (Kerjoto) ノ實驗並臨床成績、の三篇より成る。參考論文は(1) Lipiodol-Iafay ヲ應用セル「レントゲン」診斷、(2)後頭骨下穿刺 (小腦延髓槽……蜘蛛膜下腫大槽穿刺) 並其應用ニ就テ、(3) Lipiodol-Iafay ニ依ル子宮喇叭管攝影法ノ臨床的價値、附子宮喇叭管攝影法ヲ喇叭管通過検査 (喇叭管通氣法) ニ應用スルノ適否ニ就テ、(4)横痃膿汁ヨリ感染セルバリノー氏結膜炎並其原因說ニ關スル考案、(5)立體鏡ノ新

考案第一、二、三報、(6)異物ノ部位測定法トシテ「レントゲン」立體寫真法の六篇なり。

△感想を寄せて曰く「レ」線立體寫真法……立體觀察法は「レ」線發見の翌年から提唱せられ體內異物摘出術の上に一大光明を點じた。それ以來戰役毎に異物摘出の問題が論ぜらるゝと必ずこれが一番に重寶がられて來たが、其の割合に平時は甚だしく閑却せられて居た。然るに近頃漸くこれが異物問題以外に各種の診斷に其の必要性を認識せられ實際化されて來た事は喜ばしい事ではあるが、未だ特殊扱にされる傾向を持つて居るのは斯學の發展上嘆かばしいと思ふ世の中には食はず嫌といふのがある。面倒といふ不經濟といふ、それはやり方である、利益は擧げて數ふべからずである。「レ」線装置のある所必ず立體觀察装置を伴ふべきで「レ」線の有する一〇〇%の價値は此方法に依て初めて發揮せしめ得る事と確信を以て提唱する」云々。「レ」線造影劑と立體鏡、殊に「レ」線立體寫真に關しての造詣深く、多大の興味を以て今猶精研に餘念なき博士にして、始めて斯言ありと云ふを得べき乎。

△博士は富山市鹿島町の出身にして、明治二十三年生る。學究的濃厚の紳士にして篤學者たり、其の今日あるは輝しき閱歷よく之を物語りて餘蘊なし。殊に多年海軍々醫界に活躍して奮盡せる功績は言はずもがな、今は腕の冴え盛にて、年齒漸く不惑に入る五、年壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に達して最も得意の時代に在り。猶春秋豊かにして、至誠一貫、盡忠以て國家に奉ずるの外亦他事を顧みず、拮据黽勉、孜孜として精研に餘念なき前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり、幸に健康と共に、海軍々醫界の爲め益々努力奮闘あらん事を望むや切也。

佐田 正人 △九州診療界に於ける内臟外科界の新進大家にして、特に急性腹膜炎、腸閉塞症を最も得意とする佐田正人博士は、貝島病院長として奮盡努力する所あり、名實俱備名病院長として噴々たる好評を聞く。貝島病院

は貝島炭礦株式會社の附屬病院にして、本院を福岡縣宮田町菅平田に置き、分院を同町桐野、同町満之浦、福岡縣遠賀郡香月村、佐賀縣東松浦郡嚴木村の四ヶ所に置き、本院には各科擔任醫師あり、收容患者數八十名、各分院には收容患者數各三十名内外、本院及分院には各レントゲンの設備あり、本院及分院の連絡は病院自家用の患者輸送自動車

を以てし、當地方に於ける最大最有力なる治療機關たり。
△博士は九州帝大醫學部出身にして、大正十四年卒業後直ちに第一外科教室に入り、教授三宅速博士につき外科學を研究す、後年三宅教授辭任後赤岩教授につき引續き外科學を研究す、昭和五年七月同教室を辭し、福岡縣鞍手郡宮田町大之浦第二病院長に赴任す、同六年一月九州帝大より學位受領、同七年大之浦第一、第二、第三病院大辻病院及岩屋病院の五病院を貝島病院となして院長となり現在に及ぶ。指導教授は主として母校の恩師三宅速博士、赤岩八郎博士、板垣政參博士等とす。

△學位主論文は「急性腹膜炎ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究」にして、他に參考論文三篇あり。
△山口縣熊毛郡平生町佐田俊雄の長男、明治三十二年生れにして當年三十有七歳也。濃厚なる學究的少壯の紳士にして、高邁なる人格を備ふ、臨床家としての態度の眞摯にして、熱情あり親切なるは篤き聲望を博す。趣味としては劍道四段、中學時代より初め現在に至る。福岡縣鞍手郡宮田町に住む。

川崎 禎太郎

△優生病院長として日々其の診療に勵しみつゝある川崎禎太郎博士は、愛知醫大の出身にして、大正十五年同大學卒業後、直ちに母校の桐原外科教室(指導教授桐原眞一博士)に入る、同年五月副手、昭和二年五月助手、同六年三月愛知醫大より學位受領、同年九月名古屋醫大講師、外科學擔當、同七年四月和歌山縣新宮病院外科

△主論文は「火傷ニ對スル輸血ノ効果實驗的並ニ臨床的研究」にして、參考論文は、(1)火傷毒ノ實驗並ニ臨床的研究
 (2)陰囊水腫ノ悲觀血的療法ニ就テ、(3)「ガングリオン」ノ悲觀血的療法ニ就テなり。
 △新潟縣南蒲原郡三條町の人、川崎長次郎の長男、明治二十八年生れにして、當年四十有一歳也。少壯銳氣にして手腕漸く壯熟の域に入る、居常人に對するに敢て城壁を設けず、快活にして能く人を愛す、又た患者に對するに甚だ親切なり、其の眞摯にして寛量なる態度は多とすべき也。現住所は東京市牛込區新小川町二ノ一〇江戸川アパート一
 一番なり。

平山利弘

△千葉市吾妻町二丁目外科仁靜堂病院あり、院長平山利弘博士の經營する私立病院にして、地所四百坪、建坪二百坪餘、外科手術室、レントゲン科其他各室の施設完備し、博士獨特のメスの好評と相俟つて當地方を風靡す。學系は千葉醫專の出身にて、恩師三輪德寛教授、高橋信美教授、瀨尾貞信教授、福田得志教授等の指導を受け、研鑽多年の末、主論文「諸種藥物ノ下腿酸素消費量ニ及ボス影響ニ就テ」を完成、千葉醫大より學位を獲得せる名醫博たる新人物也。

△博士は大正八年千葉醫大の前身醫專卒業後、直に東京市神田區阿久津病院に迎へられ誠意診療に勤む、大正十一年より昭和二年迄千葉醫大外科學教室に入り、更に同二年より五年まで藥物學教室に於て研究を續け、五年十月より頭書の病院を經營、六年四月學位を受領せり。

△東京市本郷區湯島、林謙次の三男、千葉醫專卒業後現姓となる、明治三十年生れにして、當年三十有九歳也。少壯にして勇氣滿々たる裡に愛想を浮べ、讀書を愛好し、暇を得れば撞球を趣味す。其専門に關する學識の深遠なるは言はずもがな、多年の經驗と共に手術今や壯熟の域に入り、益々其妙技を發揮して今は最も得意の時代に在り、而かも

春秋猶頗る豊富なれば、切に自重加餐を祈ると共に、前途の大成を待望して止まず。

寺師正樹

△香川縣綾歌郡坂出町に外科を以て著聞する寺師病院あり、寺師正樹博士の經營する私立病院にして、内容充實す。博士は九州帝大の出身にして、外科を以て立ち、特に内臓外科輸血を最も得意とす、母校の恩師高山正雄博士、三宅速博士、赤岩八郎博士等に親炙して研究の結果、母校より學位を得たる所謂九大派の名醫博也。外科學講師として暫く母校の教壇に立ち、學生指導の爲め精勵甚だ務むるところありしも、一度び象牙の塔を退いて以來治療界に進出して獨立せるが、開業日尙淺少にも拘はらず、圓熟せる診療、手術の好評は著るしく人氣に投じ、年次向上隆盛の活氣を呈しつゝあり、なほ輝しき前途の發展は更に大に期待せらる。

△博士は七高造士館を経て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに三宅外科に入局し、大正十二年三月釜山府立病院外科部長として赴任し、昭和三年四月九州帝國大學大學院に入學し、昭和六年七月學位を得、引續き同醫學部赤岩外科に於て講師として臨床に従事し、同年十一月丸龜市吉田病院の招聘に應じて當地に赴任し、翌七年十二月より現住地に於て開業し現在に及ぶ。

△主論文は「正常血液輸血ト枸橼酸曹達ト血液輸血ノ比較」にして、外に參考論文二篇あり。其他の論著夥多。
 △鹿兒島縣川邊郡知覽村南別府の人、明治二十四年寺師愼の二男に生る、當年四十有五歳也。年壯銳氣、學究的濃厚
 の紳士にして、平生努力主義をモットーとして診療に精進し、熱心克く誠實と親切とを以て終始し倦むことなし、好箇の臨床家として歡迎すべき也。

後藤 誠

△山形縣大石田町に連綿二十代の歴史を有し、著名なる後藤醫院あり、後藤誠博士は之を經營主

幸し、其の専門とせる外科を擔當す、外に祖父内科、小兒科を擔當し、眼科、耳鼻科は専門醫を出張せしめ、別にレントゲン科を有し、入院室の設備有り、其の規模の堂々たる結構と相俟つて、内容の設備充實せる點に於て、名實相伴ふ私立病院として當地方診療界に頭角を抜く。博士は東北帝大系の錚々たる外科學者にして、斯學の權威關口蕃樹教授の愛弟子として知られ、恩師の指導を受けて造詣する所深く、特に内臓外科を最も得意とし、母校より學位を得たる斯科界近來の名醫博たるに耻ぢず。今や斯科の新進大家と仰がれ、大衆より多大の信頼と尊敬とをその一身に集めつゝあるは、地方診療界の爲め甚だ多幸とす。

△博士は仙臺二中、第二高等學校を経て、大正十四年東北帝大醫學部を卒へ、以後昭和六年六月迄同上學部關口外科にて引續き外科專攻、同六年四月母校より學位を授與せらる、同年六月本籍地に開業、一般外科の診療に従事し今日に至る。

△主論文は「レントゲン」線ノ白血球喰菌作用ニ及ボス影響ノ實驗的並ニ臨床的研究」にして原著は獨逸文なり。外に參考論文としては、(1)二三非特异性刺戟體注射「レントゲン」線並ニ人工高山太陽燈放射ノ喰菌作用ニ及ボス影響ノ臨床的並ニ實驗的研究、(2)肘靜脈ノ走行型ニ就テ(獨文)、(3)結核性腹膜炎ノ一異例、(4)關口外科教室十ヶ年間ニ於ケル蟲樣突起炎ノ統計的觀察の四篇あり。

△博士は、明治三十三年宮城縣松島の近郷利府にて鈴木春吉の三男に生る、後山形縣北村山郡大石田町後藤源太郎の孫養子となる、年齒未だ三十有六歳にして少壯の意氣益壯也。熱心なる臨床家にして「醫者は一人の患者でも眞面目に患者を治療する醫者であり度い」との信念を以て、常に診療に臨む態度の眞摯にして熱心なるは、博士の篤き徳望を博する所以と見るべき也。趣味としては尺八を能くし、蒼龍を號とす、又た弓道に堪能にして健康と共に心身の鍛錬に力む。猶春秋に富む博士の前途や洋々、光る學位の力と相俟つて益々多幸あれ。

渡邊傳二

△神戸赤十字社病院(湊東區楠町七丁目)外科醫長として活躍し、内外の信望を博しつゝある渡邊傳二博士は、大正十五年岡山醫大を卒へ、卒業後引續き母校赤岩外科、次で泉外科教室にて研究、昭和五年四月神戸赤十字社病院外科醫長に赴任今日に至る、同六年六月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「實驗的結核感染ニ對スル網狀織内被細胞系統ノ意義ニ就テ」にして、參考論文六篇あり。

△「醫學博士粗製の聲八ヶ間敷き折柄學位なるものを今少し慎重に取扱ふを要す、特に學位論文審査機關を最も權威あらしむべし」云々とは、氏が吐露せる感想の一片なり、以て氏の抱負の一端をも窺はる。出身地は岡山縣川上郡中村長地にして、渡邊常三郎長男、明治三十五年生る、年齒漸く三十有四歳也。終始醫療に勵精し以て自己の天職と爲し、研究と併せて唯一の趣味とせるが如し。未だ少壯にして春秋猶頗る遼遠なれば、向後の活躍と相俟つて洋々たる前途を待望せんとす。博士は前金澤醫科大學々長故須藤憲三博士の女婿なることを附記す。神戸市須磨區行幸町一ノ六に住む。

奥田義正

△北海道帝大助教授にして第二外科教室に在る奥田義正博士は、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、母校附屬醫院柳外科の助手となり専ら臨床の研鑽に勉む、傍ら柳教授の指導により創傷の治療に就て研究し入局後五年半にして、昭和六年六月母校にて學位を得、同年七月市立釧路病院に外科部長として赴任し、次で現職に任ぜられ今日に至る。

△學位主論文は「創傷治療ニ關スル研究」なり。富山縣の人、明治三十年生る、當年三十九歳也。未だ少壯にして研究心潑濶たり、今や母校の教壇に起ちて、勤勉勵精倦むことを知らずと云ふ。折角の努力奮闘を望む。

文 穆 圭

△朝鮮の出身者にして近年醫學博士の學位を得たる篤學者亦尠しとせず、その中にも文穆圭博士の如きは、最も異彩に富む京都帝大派の名醫博たるに耻ぢず、外科學者としては錚々たる一人物たるを慶ぶ。殊に内臓外科に至りては獨特の手腕を有し、博士の最も得意とする所にして斯界に既に定評あり。現在にては朝鮮江原道立江陵醫院副院長兼外科部長として、内外の信望を博し、朝鮮診療界の爲め拮据龍勉大に氣勢を昂げつゝあるは多幸とす。

△博士は三高を経て、大正十五年京都帝大醫學部を卒へ、昭和二年六月京城帝大醫學部助手に任ぜられ、四年一月より同大學大学院に於て研究、杉原德行教授、松井權平教授の指導を受く、六年七月京都帝大より學位を得、專攻は藥物學及び外科學にして、特に内臓外科に興味を有す。

△主論文は「吸入麻醉時ニ於ケル家兎腸管運動ニ就テ」にして、原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)家兎吻合腸管ノ藥物學的反應、(2)藥物作用上ヨリ視タル嘔吐、血糖及尿酸調節中樞ノ相互關係ニ就テ、(3)胃軸旋ノ手術治驗及其知見補遺、(4)微毒性脾腫ニ就テの四編なり。

△感想に曰く「近代の醫學は *analytischen* 分析化する感あり。今後は之れの *synthetischen* 合成化する必要ありと思惟す」云々。亦以て該博なる識見の一端を窺はる。

△博士は京城府授恩洞の人、文容周三男、明治三十年生る、當年三十九歳也。學究的少壯なる紳士として其の人格を尊ぶ。趣味としては乗馬、音樂、ビンボン等を業績の外に楽しむ風あり。緒方洪庵翁抄譯「扶氏醫戒」十二章を自警となして修養する所あり、自ら其の品格の崇高なるを想はしむ。長兄文澤圭は辯護士にして、博士の妻鄭子英は女醫として活躍し、目下京城府授恩洞九二進誠堂醫院に於て内科、小兒科、産婦人科専門診療に従事す。名門なる文博士

家の多慶にして、共に俱に學界に進出して文化貢獻の爲め努力精進しつゝあるを、著者は衷心祝福する一人也。幸に健康と共に、朝鮮診療界の爲め益々健闘盡力あらんことを翹望して止まず。現住所江原立江陵醫院醫局。

牧野内 良

△八戸市八戸病院に副院長(兼外科部長)として内外の信望を博し、地方診療界の爲め努力精進しつゝある牧野内良博士は、新潟醫大(専門部出身)系の新進にして、母校の恩師中田瑞穂博士、本島一郎博士、工藤得安博士等に親炙して外科、整形外科の蘊奥を究め、後に又大阪外科界の大家大野良藏博士にも師事する所あり學位は新潟醫大より獲得せる名醫博たる一人物也。

△博士は大正十三年新潟醫大附屬醫學專門部を卒へ、直ちに副手として母校の整形外科教室に勤め後ち助手となる、次で日赤長野支部病院外科醫員として赴任の後、再び新潟醫大助手となりて解剖學教室に勤め、次で同大學講師となる、昭和六年八月學位を得、それより大阪市外科大野病院(院長大野良藏博士)に勤めたる後、八戸市八戸病院外科部長に就任し次で副院長となり、目下勤務中。

△主論文は「肢及び肢帶ノ發生學的並ニ比較解剖學的研究」にして、參考論文は、(1)日本人ノS字狀結腸部ニ就テ、(2)日本人ノ坐骨結節ニ就テの二篇なり。

△博士曰く「自ら研究もせず、更に弟子の指導も致さざる大學教授は、學界の爲め引退して欲しい。否何か社會で引退さず方法なきか」云々と。著者曰く、現代學界に對する感想としての斯言は、獨り博士のみと言はず、同感の學者多々あるを信す。由來因習に囚はれたる我國の學者は、兎角自ら早老を以て安んずる微候なしとせず、否な時と場合とに依りては自ら進んで自分は學界を隱退せりと言ひたがる癖なしとせず、斯の如き弊風は宜しく自他相互に自覺して、時代の進運に順應し、老いて益壯なる氣風を養成し、以て大に後進の誘掖に努むると同時に、學界乃至社會の

爲め益々發奮貢獻する所あるべきが、蓋し現代學者としての本分かと思ふ。

△博士は長野縣下伊那郡下久堅村の人、明治三十五年生れなれば、當年三十有四歳也。年齒未だ少壯にして新進の氣概に富み、居常の趣味としては研究と醫療そのものにおいて、今猶研究を捨てず精研克く勉むる所あり、多とすべき也。八戸市類家外中居に住す。

堤 丈夫

△大阪市東區東阪町四九〇に新興せる堤外科あり、堤丈夫博士の自營に成る私立小病院にして、博士自ら精進して日々診療に勵しみ、其の専門とする外科特に内臓外科に至りては、博士獨特の評判益々高く、加ふるに副院長として同僚の手腕家、青山文雄博士ありて院長を輔佐するに厚く、兩博士の手腕、聲望、相俟つて、開業日尙淺きも、近來著るしく擡頭して益々發展の進境に在り。

△更に其の學歴及び閱歷を紹介すれば、博士は大正十四年千葉醫大附屬醫學專門部卒業後、歩兵第八聯隊に一年志願兵として入營、翌十五年十二月より大阪外科大野病院に勤む、昭和三年八月千葉醫大解剖學教室に入り研究に従事し同六年一月より再び大野病院に勤務す、同年八月千葉醫大にて學位を授與せらる、同九年一月大野病院を辭し、前記の現住所に於て開業今日に至る。

△學位論文は「Trionyx Japonicus (japanische dreikrallige Lippenschidkröte) の頭骨並ニ Hyobranchialskeletton 發生學的的研究」にして、參考論文なし。

△博士は大阪市東成區の人、明治三十四年生る。當年三十有五歳、少壯にして進取の氣象に富み、將來有爲の臨床家として囑望せらるゝ所多し。業餘の趣味としては銃獵、テニスを好む。

末岡 悟

△大阪市此花區春日出町下二丁目二番地に外科末岡病院あり、院長末岡悟博士の經營する所に於て、内部の設備全く成る小病院なり。開業日尙淺きも、從前春日出町附近に外科専門の病院なく、大阪市内でも有名なる工場地帯（汽車會社、瓦斯會社、住友系諸會社工場等櫛比す）なるにも拘はらず、非常なる不利不便なる爲め、其の地の利を得て博士獨特の評判は益々人氣を昂め、日々患者の輻輳するもの多く極めて盛況を呈す。尙從前阪神甲子園附近に設けある外科専門の自宅診療所は、分院として之亦相當の地盤を有し依然として繁榮を續けつゝあり、蓋し近來の成功と云ふべき乎。博士は岡山醫大系、津田外科を巢立ちたる新進の名醫博にして、特に内臓外科、整形外科を最も得意として、斯界にデヴューし自己の存在を確立せり。

△博士は山口高校を経て、昭和三年岡山醫大卒業、直ちに津田外科教室に入りて引續き外科學を専攻し、六年八月母校より學位を得、翌七年二月以來大阪市長谷川病院副院長として、勤務の傍ら甲子園附近に自宅診療所を設け、外科一般の診療に従事しつゝありしが、同八年七月長谷川病院を退き、前記の現住所に末岡外科病院を開院今日に至る。斯間母校恩師津田誠次、生沼曹六兩博士に指導を受け學位論文を完成す。

△主論文は「體溫調節中樞ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1) 一年有餘生存セル脊髓横斷犬ノ一例、(2) 外科的結核症ノ血清「リパーゼ」並ニ之ガ赤血球沈降反應トノ關係ニ就テ、(3) 外科的結核ノ「ツベルクリン」療法ナリ。

△感想に曰く「一、學閥打破、二、開業醫のみならず官公立病院の職員をも包含する醫師界を作り以て醫師界の擴大強固を圖ること」云々と。以て博士の抱負の一端をも窺はる。出身地は山口縣都濃郡富田町にして、明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳の年少也。音樂趣味の人、又スポーツファン也。性格は凝性の方にて、善惡結果より見て、之が博士の長所ともなり、或は短所ともなる場合をも考へらる。潔白濫行の少壯紳士、春秋猶豊富にして其前途や洋

々たり、益々自重加餐あつて、治療界浄化の爲め一層の奮發あらん事を祈る。現住地、阪神沿線今津高潮二七。

鳥居 環

△豫備陸軍二等軍醫正鳥居環博士は、金澤醫專出身の錚々たる外科及びレントゲン科學者にして陸軍々醫總監岩崎小四郎博士、金澤醫大教授石川昇博士、同岡本規矩男博士等の指導を受くる所厚く、金澤醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。多年陸軍々醫界に活躍し盡忠の功績尠しとせず、曩に病氣の爲め、豫備に編入せられ、爾來靜養に力めつゝあり。

△博士は大正元年十一月金澤醫專を卒へ、同二年六月任陸軍三等軍醫、補歩兵第三十五聯隊附、同十一年八月補陸軍々醫學校部員、レントゲン教室勤務、同十二年三月免本職補陸軍々醫學校教官、同十五年八月任陸軍三等軍醫正、免本職補廣島衛戍病院附、昭和四年八月免本職補金澤衛戍病院附、同年同月以降勤務の餘暇、金澤醫大石川外科教室及び岡本解剖學教室に於て研究、同六年九月學位受領、同七年八月任陸軍二等軍醫正、待命被仰付、次で同年同月豫備役編入せらる。

△主論文は「肺臟及氣管支淋巴系統ニ關スル解剖學的研究」にして、參考論文としては、(1)所謂健康者ノ胸部潜在性結核病竈ニ關スル「レントゲン」學的研究、(2)畸形性膝關節炎ノ發生原因ニ關スル知見補遺、附正常脛骨顆間關節ノ形態ニ關スル研究、(3)所謂「キンク」様十二指腸狹窄症ニ就テ、(4)「レントゲン」學上ヨリ見タル脛腺結核ト氣管支腺結核トノ關係ニ就テ、(5)「レントゲン」放射ニ依ル内分泌腺ノ血糖量ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究、(6)所謂「トロムメルシュレーゲルフィンゲル」(鼓桴狀指)ノ「レントゲン」所見ニ就テ、(7)胸腺「レントゲン」刺戟放射ニ依ル尋常性乾癬ノ治癒補遺、(8)實驗的骨假骨形成ニ及ボス「レントゲン」線ノ影響ニ就テ、(9)慢性蟲樣突起炎ノ「レントゲン」所見ニ就テ、(10)頸腺結核ノ統計的觀察並氣管支腺結核トノ關係ニ就テ、(11)肺結核ノ「レントゲン」療法ニ就テ等。

△博士は金澤市の人、明治二十二年生る、當年不惑に入る七歳也。年壯不幸にして近來健康を害し、暫く活社會より離れて自適悠々の裡に靜養に力めつゝありと聞く。折角の自重加餐を祈ると共に、應て健康の恢復と相俟つて再び診療界への躍進を望むや切也。人と爲り高潔にして篤實、恬淡として毀譽褒貶を顧みず、謙遜克く自抑して人に厚く、應答また能く禮を重んじて世務を缺ぐことなし。金澤市上本多町二番丁六ノ二四に住む。

高橋 正義

△埼玉縣越ヶ谷町に整形外科、レントゲン科を以て斷然頭角を抜き、名聲噴々、同地方診療界を風靡して餘す所なき高橋診療所あり。所長高橋正義博士の私立小醫院にして、手術室其他内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵しみ日々忙殺されつゝあり。博士は日本醫專出身の篤學者にして、整形外科界現代の權威東大教授高木憲次博士に就きて斯學の蘊奥を究め、東京帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。新進にして獨特の新手腕を有し玲瓏たる診療手術の好評は益々遠近の人望を集め、外來患者常に輻輳して日々盛況を極む。

△博士は獨逸協會中學を経て、日本醫專卒業後、東京帝大醫學部整形外科教室に入り、高木教授指導の下に研究、次で東京市衛生試験所レントゲン科に勤務、又日本大學醫學科講師として物療、レントゲン科を擔任せり、昭和六年九月學位受領後、現住地にて開業今日に至る。

△學位論文は「肩胛關節運動(肢位)ト血管走行ノ變化ニ就テ(「レントゲン」ニ依ル)」が主論文にして、參考論文なし。

△感想に曰く「醫師お互がもつと自覺し合つて共存共榮のために協力しなければならぬ。顯微鏡の世界を見てゐたのではだめ」云々。醫師界浄化の叫び喧々囂々たるの秋、亦以て一服の清涼劑とすべきか。博士は奈良縣宇陀郡三本松

村大野高橋元次郎長男、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歳にして進取の氣象に富み、少壯の意氣益旺也。其の今日ある篤學は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、今や手腕漸く壯熟の域に入り、診療に甚だ熱心なり。性格は短氣なれども、直情徑行にして同情に富み、克く人を愛し人に親しまる、其の高邁なる人格は敬慕すべき也。春秋猶頗る豊富にして、勵精餘念なき前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。尙令弟に正彌博士あり、京都帝大出身にして耳鼻科を専攻中なり、尙福井正憑博士及び中井卓次郎博士とは親戚の間柄なりと聽く。

賈雨田

△滿洲國醫療界の最高機關たる滿鐵大連醫院分院同壽醫院に於て、外科主任として内外一般の信望を博し、東京帝大派の名醫博として活躍しつゝある賈雨田博士は、滿洲醫大系南滿醫學堂出身の逸才にして、又た東京帝大系の巨擘鹽田廣重教授の愛弟子として外科を以て著聞す。殊に滿洲國人としての博士は、代表的學者として我博士人物界に輝しき新彩を添えたるを多幸とす。

△博士は大正十年南滿醫學堂を卒へ、直ちに任黒龍江官醫院醫官、翌十一年八月滿鐵撫順醫院職員外科醫員被命、十五年九月滿洲醫科大學より獎學資金を以て東京帝大醫學部へ留學被命、同學部專攻科へ入學、鹽田外科教室に於て鹽田教授及び土井保一博士の下に外科學研究、昭和三年四月撫順醫院外科に復歸し、同年十月大連醫院に轉勤す、翌四年正月大連醫院金州分院外科主任として赴任し、同六年九月學位を授與せられ、同九年四月現職に就任す。

△主論文は『出血並ニ種々ノ等張溶液注入後ニ於ケル血量ノ調節ニ就テ』にして原著は英文なり、外に參考論文として(1)急性十二指腸閉塞時ニ於ケル血液變化ニ就テ、(2)骨折ノ研究、(3)靜脈瘤之純酒精注射療法、(4)中華民國人ノ健康時ニ於ケル血液像ニ就テの四篇あり。

△現代の醫界に對する感想を叩けば、博士其の一片を吐露して曰く「醫師相互間の連絡を取り大なる團結力を以て社會國家に對する平和貢獻をなすこと」云々と。今後滿洲國の文化發展と日滿兩國の親善の爲め、日滿醫學の提携上、將來大に博士の力に俟つものあらん、折角の奮闘努力を祈る。因に博士は、昭和七年十月名古屋古屋市に於て開催の日本學術協會第八回大會に際し滿洲國學者代表として派遣され、又た學術協會よりも招待されたる事ありと。

△博士は滿洲國奉天省法庫縣團山子の人、賈永興次男、光緒二十四年(明治三十一年)生る、當年三十有八歳也。年齒未だ少壯にして新進の氣慨に富み、切磋卓勵、研學の念今猶壯ん也。學生時代よりの讀書家にして、書見を唯一の樂しみとし、研究以外、品性陶冶の修養に力む。賦性謹直にして敦厚、學究的少壯の紳士として崇高の人格を具ふ。

得能倫二

△宇都宮衛戍病院外科にある陸軍一等軍醫得能倫二博士は、曩に滿洲出動中、滿洲齊々哈爾第十四師團陸軍病院に在勤して、重大なる任務を果たして功績を擧げ、今は内地に歸還して熱誠克く臨床に勵しみ、至誠奉公の念に燃えつゝあり。博士は金澤醫大系専門部の出身にして、外科を以て立ち、岡山醫大教授故泉伍朗博士指導の許にて研究の結果、岡山醫大より學位を得たる近來の新進醫博也。未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、濼刺として將來の活動を大に期待せらる。

△博士は大正十三年金澤醫大醫專部を卒へ、同年六月陸軍三等軍醫に任ぜらる、爾來盛岡騎兵二十三聯隊、陸軍々醫學校及平壤衛戍病院に勤務、昭和二年四月金澤醫科大學專攻生として入學、同年八月任陸軍二等軍醫、同三年四月岡山醫科大學專攻生として轉校(指導教授岡山醫大に轉任につき)、同四年四月同校專攻生を免ぜられ、爾來岡山歩兵十聯隊及陸軍造兵廠大阪工廠に勤務す、同五年八月任陸軍一等軍醫、同六年九月岡山醫大より學位受領、同六年十二月滿洲に出動、齊々哈爾陸軍病院に勤務す、其後内地に歸還して現職に在り。

△主論文は「脾臓ノ一般網狀織内被細胞系統ニ及ボス一新知見ニ就テ」にして、参考論文は、(1)「二、三内分泌臓器ノ「コレステリン」新陳代謝ニ及ボス影響」、(2)「脾臓ノ「コレステリン」新陳代謝ニ及ボス影響」、(3)「汎發性急性性腹膜炎ノ手術的療法」、(4)「ベルテス氏病ニ就テ等なり」。

△博士は金澤市材木町二丁目得能太一郎の二男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳の少壯にして、新銳の意氣益壯也。勵精恪勤、熱心なる研究家を以て聞ゆ、春秋猶頗る豊富にして、研究不倦の前途は綽々として博士の後半生史を語るに餘裕あり。賦性謹嚴にして高潔、清淡にして名聞を求めず、快活にして能く同僚に親しみ部下を愛撫す、又た人に對するに應答禮を厚ふして時務を怠ることなし、其の眞摯にして霽々たる情味あるは、博士に對する人格の尊重を高調するの秋甚だ多とす。趣味としては運動を好む。

増田 正徳

△朝鮮診療界近來醫博人物に富む、茲に批判せんとする増田正徳博士は、仁川道立醫院外科醫長として活動し内外の信望を博す。博士は京城醫專出身の一異彩にして、外科を以て立ち、特に内臓外科を得意とす、京城帝大教授小川及び杉原博士の親しき指導の許にて研究を重ね、長崎醫大より學位を得たる新進の名醫博也。臨床的實驗に富み圓熟せる手腕を有し、玲瓏たる診療、手術の好評噴々たるものあるを聞く、而かも少壯にして潑刺たる研究心を有し、致々として精研に餘念なき前途は、更に大に期待するものあるを翹望して止まざる也。

△顧みて博士の學歷及び閱歴を公開すれば、博士は京城中學校を経て、大正十三年京城醫專を卒へ、朝鮮總督府醫院醫務、副手として外科に勤務、翌十四年二月皮膚科へ轉勤、同年四月より昭和三年三月迄京城府に於て開業、同年四月より再び朝鮮總督府醫院醫務、副手として外科に勤務す、同年六月同醫院は京城帝大醫學部附屬醫院となり、小川外科教室に於て、小川教授指導の下に外科學一般の研究に従事す、同四年二月京城帝大醫學部助手となり、小川及

び杉原藥物學教室に於て兩教授の指導を受く、同六年六月朝鮮道立醫院醫官となり、黃海道立醫院外科醫長となる、同年十月長崎醫大にて學位授與せらる、同七年五月京畿道立仁川醫院に轉勤今日に至る。

△主論文は「人工的ニ機械的腸閉塞症ヲ惹起セル家兔ノ腸管運動ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。参考論文は、(1)「イレウス」ト肝臓並ニ腎臓、其ノ一、腸閉塞ト蛋白膽汁並ニ蛋白尿ニ關スル實驗的研究、(2)同上、其ノ二、「イレウス」動物ニ於ケル血中輸入異種蛋白ノ膽汁内排泄ニ關スル研究、(3)急性腸閉塞症ノ死因ニ關スル實驗的研究、其ノ四、高位腸閉塞症ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價值ニ就テ、A、高位腸閉塞症ト血液食鹽量、(4)同上、其ノ四、高位腸閉塞ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價值ニ就テ、B、高位腸閉塞症ニ於ケル血液食鹽量減少機轉ニ對スル考察、其ノ四、高位腸閉塞症ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價值ニ就テ、C、生理的食鹽水並ニ等張葡萄糖溶液體内輸入ノ高位腸閉塞ニ對スル治療的價值、(6)生體ニ於ケル腸管運動検査法ノ一新法ニ就テ(獨文)(7)廻腸廻腸重積症ノ二例ニ就テ、(8)Harmolikaverschlussノ一例等なり。

△「我々田舎者は二、三年に一回約一ケ年或は半ケ年位教室或は大病院に於て臨床上の腕を磨く必要あり、しからざれば漸次人後に墜ん」云々とは、博士の感想の一片なり。

△博士の出身地は東京市芝區高輪南町にして、明治三十五年増田遊龜四郎の長男に生る、年齒未だ三十有四歳也。少壯の意氣に富み、殊に責任感強き人にて、辛棒強きことは長所たるべく、但だ短氣なれば或はそれが短所とも云へるが、今は最も働盛にして勵精甚だ務むる所あり、其の平生の態度の眞摯にして和氣溫味あるは、將來有爲の臨床家としての特徴を具備する人格者たるを至囑す。讀書家にして趣味としては書見と音楽を好む。朝鮮仁川府山手町三丁目三に住す。

神川一格 △秋田市古川端反町秋田組合病院長としての醫博神川一格の名聲は、既に其の地方に著聞し衆望を博す。博士は慈惠醫大の出身にて、東京帝大派の名醫博たる一人物として其の存在を認めらる。博士その抱負の一端を披瀝して曰く「實地と學問とを併行なして行く醫者の少ないことを慨く事實醫者の良心を破つて見たら、自分自からあざむいて、患者を口でごまかしてゐる醫者があるだらう、博士等と云ふものは醫者と云ふ肩書にすぎぬ。只専門的技術をあくまで眞面目に働かさねばならぬ」云々、以て博士の診療に對する態度の眞摯なるを察せらる。又曰く「近頃醫療組合でやかましく云ふけど、やかましく云ふ價值なし。又醫者が財政の頭をはなれて、病人を一つの生物として生物學的に醫學的に解決して病氣を直して行かうと努力するのは當然だ。醫者は醫術技術者としてやとわれて、財政を考へないで、眞面目な治療をやると云ふこと等は開業醫だつて左様でなければならぬ、眞面目に病氣を民衆が考へて豫防醫學を講じて、眞に治療醫學よりはなれて、病氣がなくなり治療をする醫者の不必要となることそれ自身が醫者のつとめではないか」云々、亦以て傾聴に値す。

△博士は大正十四年東京慈惠醫大を卒へ、直ちに金杉病院に勤め、十五年愛知醫大に轉じ、次で名古屋醫科大學にて名倉重雄教授に就て整形外科を、齋藤眞教授の下にて手術外科を研究、かたわら血管撮影の研究に手を染め辛苦數年、終に氏の獨創的生體血管撮影法を完成し世界の學界に發表、注目を引ききたるとき齡未だ二十九歳、その眞摯なる學究的態度を賞讃さる。主論文「生體血管ノ「レ」線撮影法及び其ノ臨床的應用」及び參考論文七編を完成、東京帝大醫學部に提出して、昭和六年十一月學位受領、翌七年現職に就任す。

△博士の出身地は三重縣飯南郡機殿村にして、明治三十五年生る、當年三十有四歳也。年齒未だ少壯にして、手腕、人格共に漸く壯熟して最も得意の時代に入る、加ふるに天資闊達氣鋭、學者肌にして清淡、眞摯力行の性格と相俟つて益々人望を集め、民衆より多大の信頼と尊敬を受く。強ひてその缺點の一端を指摘せしむれば、惜むらくは世事

にうとく、財政の頭腦に缺けたるは氏の缺點と見るべきも、或はこは先天的ならんか。君が父節君は先年死去されたるが、亡父も財を顧みず公共の事業につくし、盛大なる村葬を営まれたる程なるも、赤貧にして常に家政に苦しみたると云ふ。春秋猶豊富にして、洋々たる前途は綽々として餘裕あり、向後の活躍と相俟つて更に大に期待せらる。趣味として運動は偏らず、これをこのみ保健上の資とす。別に特別の趣味なけれども創作をなし、日本音楽を好み、長唄、小唄を特に好む。著者を以て云はしむれば、氏の如きは目下の如き現職に非らず、貧なるも學究を以て立つがその當を得たるものならん。



佐藤英一 △岐阜縣關町に私立療院を經營して、外科一般の診療に従事しつゝある醫博佐藤英一は、同町の出身にして、明治二十九年生る。大正八年金澤醫專卒業、直ちに岐阜縣立病院勤務、昭和三年より愛知醫大助手として藥理、外科教室に於て研究、六年十二月名古屋醫大にて學位を得。斯間林亥之助教授、相原英一教授等に師事して藥理學及び外科學を專攻し、外科専門を以て起てり。

△主論文「交感神經系統切斷ノ糖代謝ニ及ボス影響」外參考論文、(1)交感神經系切斷ノ滲透壓ニ及ボス影響、(2)血液ノ葡萄糖分解力ニ就テ(英文)、(3)頸部交感神經節切除後ニ於ケル血糖量ノ消長。

△「現代學界に於ける眞剣味に對し一般社會人の認識は極めて不足せり、殊に論文一篇の文章を書き上げる者と解するに至つては言語同斷なり、又學位を受領したる苦しき經驗なくして傍觀のまゝ、而かも成功の最後の一見を見て難易を批判せんとする傾向あるは現代醫師界の通弊に非ざる歟」とは博士の意見なるが如し、同感の士敢て尠少ならざるを思ふ。然かも又一面より觀察するに、學位獲得後は吾不關焉の態度を持していやに學者振り、殆んど社會と沒交渉にて自惚すぎる淺慮なる學徒も尠からざるを觀る、斯の如き傾向も亦排除すべき博士界の通弊に非らざるかを著者

は痛感するもの也。前途有爲の臨床家としては、宜しく襟度を大にして自己に囚はれず、世相の推移に順應して共存共榮の爲め亦克く他愛主義を尊重すべき乎。博士は物に熱し易く、兎角熱中し過ぎる方なり。趣味としては繪畫と野球を好み、又克く讀書靜修す。白井數馬醫博とは親戚の間柄なりと聽く。現住所岐阜縣關町。

笠原親之助

△關東廳旅順醫院醫官、外科部長としての笠原親之助博士の名聲は既に江湖に著聞し、關東診療界に於ける學究的臨床家としての大なる存在を認めらる。博士は九州帝大系の新智識にして、母校の恩師三宅速博士及び赤岩八郎博士に親炙して外科（特に内臓外科）を造詣する所深く、又た進藤篤一教授に師事して解剖學を研究せり、殊に膽道、消化器外科は博士の最も得意とする所にして、學位は母校より獲得して所謂九大派の名醫博として、其の名を耻しめざる所に博士の面目躍如たるものあり。

△博士は宇都宮中學、四高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに三宅外科に入局、以來副手、助手を歴て昭和六年醫局長となり九月旅順に赴任す、其間大正十三年十二月より一年志願兵として宇都宮歩兵第六十六聯隊に入營、現在豫備役三等軍醫たり。在學中は三宅教授停年後も引續き赤岩教授後任となりて教室へ赴任以來指導を受けたり、途中解剖學教室にて研究し第一研究室（主任進藤教授）に籍を置けり、昭和六年十二月學位を受領す。

△主論文は「哺乳動物並ニ人胆道ノ形態學的研究 附臨床的意義」にして、參考論文は、(1)後頭部減壓手術ニ依り一時的意外ノ好果ヲ得タル小腦腫瘍例ニ就キテ、(2)邦人胆道動脈知見補遺、二篇なり。

△博士は宇都宮市旭町一丁目ドクトル、メヂチネ笠原親文長男、明治三十一年福岡縣若松市（當時親文若松病院長たり）にて生る、當年三十有八歳也。生來眞面目にして馬鹿正直と云はるゝ位正直の方なり、従つて臨床に臨む態度の眞摯にして熱心なる勵精振りは極めて評判良し。又た否々と云はれぬ眞なるが、稍やもすれば怒りやすき癖あり。而

かも人に對するに、熱情と同情とを以てすれば人に親しまる。趣味としては柔道及び音楽を好む。聞説、法博横田秀雄は母の長兄にして、醫博岩永仁雄は妻の義兄なりと。旅順市鮫島町二に住す。

町井秀成

△大連診療界は多士濟々たり。大連醫院外科に在る町井秀成博士は、大阪醫大派の新手腕家として氣焰を昂げ、至誠以て勵精努力する所あり。研鑽多年の經驗に富み、臨床的手術の評判良く、今や斯科の新進大家として大連診療界に重きを爲す。學位論文は京都帝大教授森島康太、同尾崎良純兩博士指導の下に完成せるもの也。

△博士は大正十二年大阪醫大を卒へ、直ちに大連醫院外科に入る、自昭和三年一月至同五年三月、京都帝大藥物學教室にて研究、七年一月大阪醫大に於て學位受領、引續頭書の現職に在り。

△學位主論文は「「アドレナリン」ノ作用ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)胎兒腸管ノ生理學的並ニ藥物學的研究、(2)胃ノ全剝出ニ就テ、(3)外傷性神經症ノ研究、(4)畢丸癌腫ニ就テ、(5)壓搾氣ニヨル腸管ノ破裂ニ就テの五篇あり。

△博士曰く「現代醫界がも少し腹を太くし學問關係を一掃し氣持よく働ける様になることを望む」云々とは、博士が懷抱せる感想の一片なり。獨り博士のみと言はず、此説に共鳴雷同する學究の士決して尠しとせず、此の機會に於て亦た一服の清涼劑として、茲に特筆し置くも徒爾ならざるを信す。

△博士は三重縣一志郡神原村、町井博の長男にして、明治二十九年生れなれば當年四十歳也。少壯氣鋭にして精力主義の人、手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る。賦性溫厚にして篤實、清淡にして功名榮達を意に介せず、謙和にして克く自抑し人を愛す。その寛容なる態度の紳士的なるは、學究的臨床家として其の人格を尊ぶ。趣味としては日本音楽を好む。大連市青雲臺一二三に住す。

溝口壽雄 △横濱診療界に於ける横濱三島堂病院は私立病院中の一勢力たり。溝口壽雄博士は幹部の一人にして外科を擔任す。博士は新潟醫大系（専門部出身）の外科學者として錚々たるもの、大正十二年卒業後直ちに新潟醫科大學助手として外科教室に勤め、十五年二月北海道岩見澤病院外科醫長に就任、昭和三年三月再び新潟醫大に歸學し、同大學助手、講師として解剖學教室に勤務の傍ら研究に従事す、昭和六年より上京し東京同愛記念病院外科に一年有半勤務、名實兼備の手腕を獲得せる後、昭和七年七月より前記の病院に就任す。其間、昭和七年一月新潟醫大にて學位を授與せらる。

△主論文は「内分泌ノ發生ニ就テ」にして、外に參考論文二篇あり。長野縣諏訪郡下諏訪町の人にして、明治三十一年生る、當年三十有八歳、學究的少壯の紳士也。拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々たり。切に自重加餐を祈る。東京市豊島區池袋三丁目一二六二に住む。

鈴木孝二 △千葉縣佐原上新町に外科の大家として著名なる鈴木孝二博士あり。氏は明治二十五年生にして大正五年東京慈惠醫專を卒へ、同時に同校醫院外科部助手勤務、七年北米合衆國へ留學、十年歸朝、十一年六月より十二年十一月まで宮崎縣東郷病院長として就任、十二年十二月より十五年四月まで九大後藤外科教室にて後藤七郎教授の下に外科學專攻、同時に板垣政參教授の下に血液生理學を專攻す、十五年五月九州帝大にて學位受領、東京慈惠醫大外科學講師囑託、横濱市山下病院を經營し、同時に東京市幸樂堂病院外科顧問として就任せり。

△學位主論文「アルカロリズムニ關スル實驗的研究」參考論文、(1)「レントゲン」線深部治療ノ血液「アルカリ」度ニ及ボス影響、(2)失血液「アシドーシス」ニ就テ、(3)脾臟血管結紮ノ脾臟ニ及ボス影響ニ就テ。學究的年壯の紳士にして、臨床家としての經驗に富み、今や外科界の手腕家として矚目せらるる一人物たるを失はず。

木谷裕寛 △廣島遞信局診療所主任木谷裕寛博士は、金澤市の出身にして、明治十八年生る。明治四十一年金澤醫專を卒へ、直ちに陸軍に入り、四十二年任三等軍醫、四十四年任二等軍醫、大正四年任一等軍醫、七年日赤篤志看護婦人會廣島支會講師を囑託せらる、十二年任三等軍醫正、其後病院及隊附勤務の他、姫路及似島俘虜收容所附として前後三年半に亘り、獨、填人の診療に従事す、十二年二月より十三年十月まで獨逸に留學、外科及病理學を研究し歸朝後退職を希望し、十四年豫備役に編入せらる、同年十二月廣島遞信診療所主任醫被囑託、十五年七月金澤醫大にて學位を受領し今日に至る。當年知命に入る一歳、益々元氣にして、壯來愈々圓熟の域に達し、今は最も重望せる年輩に在り。

△學位主論文「水腎性削瘦力將タ水腎性萎縮腎カ腎臟水腫ニ就テノ實驗的檢索」(獨文)、參考論文、(1)腎臟及輸尿管皮下損傷ノ臨床的並病理解剖的觀察(獨文)、(2)坐骨神經ニ發生セル神經纖維肉腫ノ一例ニ就テ(獨文)、(3)腹部挫傷ニ因スル腸管皮下損傷ノ臨床的並實驗的研究補遺特ニ其ノ「メハニスムス」並病理解剖的及診斷的觀察、(4)蟲様突起炎ニ就テノ一二ノ研究、(5)所謂外傷性化骨性筋炎ニ關スル二三ノ知見、外四篇あり。著書、(1)臨床外科類症鑑別、(2)詐病及鑑定法。其他論著夥多あり。

上田寛一 △大阪市大同病院(梅田新道)外科醫長として内外の信望を博し、多年浪速治療界に活躍しつゝ、ある上田寛一博士は、京都市寺町廣小路下ル上田勝行の長男、明治十九年生にして、明治四十三年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大醫科大學外科に介補として勤務、大正二年前橋市日赤群馬支部病院醫員を命ぜられ、四年京都東

山病院外科部長となる、十五年七月京都帝大にて學位受領、昭和二年大阪市大同病院外科皮微科醫長を命ぜられ今日に至り。濃厚謙和の紳士にして、臨床家としては多年の経験に富み、犀利なるメスの評判極めて良好也。

△學位主論文「非細菌性類脂體ト共存スル超化學的蛋白質體ノ立證、附抗類脂體抗體說ノ實驗的吟味」、參考論文、(1)局所麻痺法、(2)局所麻痺藥ニ因スル末梢有鞘神經纖維ノ變化ニ就キテ。

塚本 亮太郎

△四日市市沖島局前通外科専門を以て開業せる塚本亮太郎博士は、三重縣三重郡羽津村の人、明治二十四年生にして、四十四年醫術開業免狀下附、四十五年日本醫學校を卒へ、大正元年東京帝大病理學教室に入り病理學研究、三年傳染病研究所に轉じ第一部にて細菌學專攻、五年傳染病研究所を辭し三重縣羽津病院に就職、十年渡歐ベルン大學生理學教室アツシヤ教授の下に實驗生理學專攻、ベルリン大學癌研究所にてビツケル教授の指導を受け實驗的生物學、ハルベルスツタ講師及ブルメンタール教授の下にレントゲン科を研究し、次でカイゼルウイヘルム研究所にてハルトマン教授の指導を受け實驗的生物學を研究、十三年歸朝、引續き羽津病院に副院長として就職、昭和二年三月東京帝大にて學位を受領す、同月羽津病院を辭し、四日市市に開業以て今日に至る。今や當地方診療界に於ける外科の大家と仰がれ、多年の聲望手腕と相俟つて抜くべからざる勢力を有す。

△學位主論文「肝臟ヲ「レントゲン」線ニテ照射シタル後ニ見ル新陳代謝障礙ニ就テ」(獨文)、參考論文、(1)「ヴィタミン」含有食飼ニテ發育スルモノニ於ケル「イオン」ノ特異作用ニ關スル研究(獨文)、(2)「メゾトリウム」及「レントゲン」放射線ノ單細胞生體「ゴニウムベクトラール」ニ對スル作用ニ就テ。

角田 靜男

△横須賀市立病院に外科醫長として角田靜男博士あり、千葉醫大系の新人にして、母校より學位

を得たる近來の少壯醫博也。未だ少壯にして洋々たる前途を語るに遑遠なりと雖も、既にして臨床的多年の経験を有し、玲瓏たる手腕に俟つ評判良く、今や新進手腕家として内外の信望を博し、同市診療界に重きを爲す一人物たるを至囑す。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、博士は大正十三年千葉醫大卒業後、引續き同大學附屬醫院外科に於て研究途中、一年志願兵として歩兵第一聯隊に入隊、昭和二年三月除隊後再び前記外科に戻り研究繼續、昭和六年十月同所を巢立ち横須賀市立病院外科に赴任現在に及ぶ、其間、昭和七年二月學位を受領せり。

△主論文は「所謂睡眠中樞ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)小腸ニ發生セル「シムバチコグラストム」ノ一例(2)幸運ナル轉歸ヲ取レル腦濃場ノ一例の二篇なり。他に實地臨床上の業績として擧ぐべきは、(1)角田氏間接輸血器、(2)「フルメヨーデン」(殺菌劑)實驗及醫界への紹介等見逃すべからず。

△博士の出身地は山梨縣北巨摩郡駒城村にして、明治三十五年生る、當年漸く三十有四歳也。少壯にして診療界に進出以來、日尙淺くも、熱心にして眞摯なる忠勤振りは、博士獨特の手腕と相俟つて篤き聲望を博す。猶向後の活躍に期待するもの益々大なるを想ふの秋、博士の努力奮闘を望むや切也。趣味は彫刻、寫眞等。横須賀市公卿町田方一九五一に住む。

荒木 豊吉

△東京市蒲田區羽田町二丁目一一〇に外科専門を以て嘖々たる好評を博し、外來患者常に輻輳しつゝある羽田療院あり、院長荒木豊吉博士の經營する私立病院なり。氏は岡山醫大系醫專時代の出身、又一面には外科學の碩學、京都帝大名譽教授猪子止才之助博士の門弟中の一人物也。多年恩師猪子博士に師事して外科學の蘊奥を究め、學位は東京帝大より獲得せる外科學者として其の手腕を認められ、今や學識、經驗共に愈よ圓熟の域に入り

て最も得意の時代に在り。

△學歴よりすれば、大正四年岡山醫專を卒へ、京都帝大醫學部第一外科教室及び皮膚科泌尿器科教室に勤め、次で千葉醫大法醫學教室及び東京帝大法醫學並に泌尿器科教室に勤務の傍ら研究に従事す、昭和七年二月學位受領、爾來頭書の病院を設立し診療に従事す。主論文は「肝臟機能ニ關スル生物化學的研究」にして參考論文なし。

△博士の出身地は愛媛縣宇和島市裡町にして、明治二十四年荒木市郎平の六男に生る、當年四十有五歳也。年壯にして多年の經驗を有し、臨床家としては今が最も腕の冴えたる全盛時代に在り。殊に博士の特徴とするは、専門は外科なれど研究は多方面に涉りて各科に精通せる點にあり、即ち其の最も得意とする外科學に就ては恩師猪子及び高橋兩博士に負ふ處大なり、同時に又内科學は島蘭教授、皮膚科泌尿器科學は松本教授及び遠山教授、法醫學は三田教授の指導を受けて造詣する所あり。人と爲り溫雅にして氣品高く、學者として頑強の癖なく、刻苦自修して以て圓滿の妙境に到れるを見る。

萩崎 爲行

△九州帝大醫學部出身の新進にして、外科特に内臟外科を最も得意とする萩崎爲行博士は、宮崎縣飫肥町鈴木病院に勤め、外科部長として新手腕を發揮し、患者の信望極めて篤く、嘖々たる評判あるを聞く。

△學位論文は「膽道手術ニ對スル腹壁切開法並ニ術後直腹筋麻痺ニ關スル實驗的研究」が主論文にして、參考論文は「囊腫性脊椎破裂症ニ就テ」なり、學位は母校たる九州帝大より獲得せり。氏の論著中「膽道外科」は博士の最も得意とするもの也。

△博士は鹿兒島縣立第一中學校、七高を経て、大正十四年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに母校の三宅外科教室へ入局次で同赤岩外科教室へ轉じて研究を續け、昭和六年四月同教室を退局して現職に就任し今日に至る、七年二月母校に

て學位を受領せり。指導教授は母校の恩師三宅速名譽教授、赤岩八郎教授、田原淳教授（病理）等にして、外科を專攻し特に内臟外科に長ず。

△博士の出身地は鹿兒島縣嶺南郡岩川町中之内にして、明治三十三年生る、當年三十有六歳也。スポーツを趣味とする所に博士の健康を窺はる。人と爲り溫厚にして篤實、快活にして能く人を愛し、寛容にして親切なるとは、今の學者にして往々自己の邊幅を修飾して、僅かに得意たる者の比に非ず。年齒未だ少壯にして、今猶研究に對する熱心と、不斷の努力とは、洋々たる前途に猶輝々として餘裕あり。宮崎縣飫肥町前鶴に住す。

井出 欽一

△在米健闘約二十年、而かも夫婦相和し、俱に研究に次で實地醫家として懸命の努力精進を續け、今や北米合衆國ワシントン州シヤトル市メイン街に卓然として群を抜き、外科及び産婦人科井出病院長として活躍しつつあるはドクトル井出欽一博士なり。加ふるに夫人ドクトル井出ひろ博士あり、夫婦協力して創立せるものなるが開業拮据十數年、欽一博士は得意の外科を擔當して犀利のメスを揮ひ、ひろ博士は産科婦人科を擔當して獨特の妙技を發揮し、兩々相俟つて好評嘖々の裡に抜くべからざる繁榮を永らへ、古き歴史と共に牢乎動かすべからざる地盤を有するに至る、成功と云ふべき也。博士は金澤醫專出身の篤學者にして、在米研學多年の後、論文を東京帝大に提出して同大學より學位を獲得せる外科界近來の名醫博也。其の今日あるもの博士の得意や想ふべき也、況んや名譽ある夫婦博士の名譽を海外に馳せ、兩性相俟つて大に世界的氣を吐けるに於てをや。

△博士は大正五年金澤醫專卒業後、母校より岩島病院にて約六ケ年間研究の後、大正九年夫婦にて渡米、ワシントン大學に學び翌十年ドクトルを得、夫婦にてシヤトルに開業、昭和二年費府ペンシルバニヤ大學に入り、附屬ウイスタ―研究所にて二年六ケ月研究、同七年二月醫學博士の學位を受領せり。

△主論文「正中坐骨神經、腰髓及ソレ等ニ含マレタル最大神經纖維ノ横斷面積ノ生後成長ニ關スル兩性ノ比較研究」にして、參考論文なし。其他内外にて發表せる論著夥多。

△博士の出身地は長野縣南佐久郡川上村にして、明治二十一年井出喜重の三男に生る、竹内茂代博士の實弟にして竹内甲平博士の義弟たり、大正九年ひろ博士と結婚す。一家より二組の夫婦博士を出だせるは我國最初の事にして、立志傳的篤學者揃ひの餘慶ある家柄として表彰に値す。博士は學究的温厚の紳士にして、學者タイプの風貌は凛々として威嚴を存し、温容の裡に謹厚そのものゝ性格を包み、高邁なる品格を備ふ。年齒今や不惑に入る七、年壯氣鋭にして研究心に燃え、學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入り最も活躍の全盛時に在り。而かも猶春秋豊かにして拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々として更に博士の將來を語るに餘裕綽々たり。切に自重加餐を祈ると共に益々奮盡活躍あつて、日米親善上、日米醫學の提携發展に一層の努力あらんことを望む。 No. 519 Main St, Seattle, Wash., U. S. A. 2住す。

◇
中野秀孝

△福井縣坂井郡高椋村一本田福町に病室十八其他諸般の設備全く整ひ、外科、産婦人科を以て著聞する中野醫院あり、院長中野秀孝博士の經營也。博士は京都府立醫專出身の外科學者にして、母校の恩師藤井猪十郎教授に藥物學を、望月成人教授に外科學の指導を受け、京都府立醫大より學位を得たる少壯醫博也。既にして開業以來多年の聲望を扶植し、圓熟せる手腕は銳利なるメスの好評と相俟つて遠近に喧傳し、歳と共に益々繁榮を持續しつゝあるは、地方治療界の爲め欣幸とす。

△博士は福井縣立福井中學校を経て、大正六年京都府立醫專を卒へ、直ちに福井縣立病院外科勤務、八年四月辭職、以降本籍地にて開業、昭和三年六月京都府立醫大選科入學、四年七月研究科入學、藥物學及び外科學を専攻、七年二月學位を受領す。

△主論文は「牛精蟲ノ「メチーレンブラウ」ニ及ボス作用」にして、(1)牛精蟲ノ「デヒドロゲナーゼ」ニ就テ、(2)「イラン」ノ影響、(3)諸種藥物ノ影響の三篇より成る。參考論文は、(1)「テトラヒドロ、ベータ、ナフチールアミン」ノ循環系統ニ及ボス作用及び其ノ血壓下降作用ノ本態ニ就テ、(2)二三種毒素ニ對スル肝臟ノ解毒現象ニ就テ、(3)「アセントログルコーゼ」ノ藥理作用の三篇なり。

△博士曰く「今回再び郷里に歸つて開業し痛感したことは、以前とは著しく開業醫の數が増加したる爲めつまらぬ競争をやつてゐることである。例へば醫師會の規約を無視して往診料を取らずに押賣的に盛んに往診をしてゐる、それも眞に患者の負擔を軽くする意味ならば容赦すべきであるが、一方に於て不必要なる注射を盛んにやつたり、五十錢にてすむ注射を一圓も二圓もとつたり、又手術料を非常に高くとつたりして却つて患者の負擔を重くしてゐる。弱き者は患者である、何も知らずに有難く思つてゐる、實に氣の毒な次第である。醫師はよろしく親切と熱心とを以て治療に當り出來得る限り患者の負擔を軽くすべきであると思ふ」云々と、感想の一片を吐露せり。

△博士は福井縣坂井郡高椋村の人にして、明治二十七年生る、當年四十有二歳也。年壯氣鋭、平生刀圭甚だ多忙なるに拘らず、精力主義をモットーとして、熱心甚だ力め、誠實と親切とを以て終始す、其の態度の賢明にして眞摯なるは、學究的臨床家たる人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。

◇
吉葉庄作

△日本醫科大學助教授兼日本醫大第二醫院外科部長として、母校の爲めに新勢の氣焰を揚げつゝあるは醫博吉葉庄作なり。日本醫大系に屬し醫專時代の出身にして、學位は東京帝大より獲得せる少壯醫博なるが、東京帝大の重鎮鹽田廣重博士門弟中の新智識と知られ、且つ母校出身者中最初の外科主任として其の手腕を認めら

る。學位主論文は「急性十二指腸閉塞時並ニ急性廣汎性穿孔性腹膜炎時ニ於ケル腎臟機能ニ關スル實驗的研究」にして、参考論文なし。

△博士は大正十一年日本醫專を卒へ、直ちに東京帝大醫學部外科教室に入り、鹽田教授指導の下に實地外科學の研究中、昭和四年十月日本醫大講師を命ぜられ、翌五年一月日本醫大第二醫院外科部長を命ぜられ、次で日本醫大助教授となり今日に至る、七年三月學位を受領す。

△茨城縣猿島郡八俣村東山田の人にして、明治三十三年吉葉安藏の四男に生る、當年三十有六歳也。少壯氣鋭、學究的篤學の士にして、志操堅實、今猶孜孜として研究に餘念なし、猶その洋々たる前途は更に大に期待せらる。魚釣を趣味とし、時に太公望を極め込むことありと。醫師會等に對する感想としては、勤務病院の性質上、直接醫師會等と接觸する機會少きため格別有せざるが如し。性格より打診すれば速刻決斷の勇に乏しく、従つて熟考の後に非ざれば速答等を欲せざる性質なり。又人と接するに國訛りを頻發して往々言語の明瞭を缺ぐの癖あるが如し、而かも何等人格に及ぼす關係毫もなし、博士たるもの聊かも之を氣にするほどのことなからん。前途有爲の士、幸に健康と共に自重を祈り、輝しき將來の向上發展に向つて邁進あらん事を望む。本郷區西須賀町一〇に住す。

遠藤 正人

△廣島縣比婆郡東城町に細川病院あり、遠藤正人博士の兄細川省三經營の私立病院にして、各科の完備と共に内容充實し、評判極めて高く、近郷よりの外來患者常に輻輳す。遠藤博士は外科方面を擔任し、外科部長として人望を集め、獨特の手腕を發揮しつゝあるは、地方治療界の爲め幸福とす。

△博士は鳥取縣日野郡江尾村遠藤正陽の長男にして、明治三十四年生る。鳥取縣立米子中學校を経て、昭和三年東京慈惠會醫科大學卒業後、岡山醫大副手として衛生學教室に勤め、血清學の研究に従事し、同五年津田外科教室に轉勤

し、同七年三月岡山醫大にて學位を得、同年四月より現職に就任す。指導教授は岡山醫大外科主任津田誠次教授にして、外科一般を專攻す、又血清學に多大の興味を以て造詣する所深し。

△主論文「微量抗原反覆注射ニ依ル沈降素產生」二篇、参考論文、(1)局所過敏症ニ就テ、(2)臟器免疫血清ノ特異性及ビ其ノ作用ニ就テ、(3)大腸菌「アンチウイルス」研究補遺、(4)所謂「ポトリオミコーゼ」ニ就テ。

△博士曰く「信念のある醫者でありたいことだ。信念の無い醫療は世を毒する。保守的主張でもよい、新進的主義でもよい、要は眞の自己の信念によつて働くことだ。御互に徒な鬭争を止める事だ、吾々は人類幸福に關する事の大なるを知らねばならぬ信念に生きよ」云々とは、現代醫療界に對する博士の懷抱する感想の一片なり。以て他山の戒とすべき乎。

△讀書家にして文雅の嗜しみ深く、殊に短歌を能くす、香蘭同人は其の號なり。年齒未だ少壯にして研究心に富み、忙中閑を得れば努力研鑽克く究はむる所あり。人と爲り濃厚篤實、信念に強き人にして、自己の信念によつて親切能く患者に臨み、又能く人に接して好感を抱かしむ。岡山醫大教授遠藤中節及び伏見病院長安藤克巳の兩博士は從兄の間柄なり。

富士原 誠一

△京都府福知山町宇東長一二に在る富士原醫院は、外科専門にて、院長は富士原誠一博士也。博士は大正十四年大阪醫大出身の外科學者にして、恩師岩永仁雄博士に就きて斯學の蘊奥を究め、同村田宮吉博士に就きて病理學を研鑽し、昭和七年三月母校より學位を獲得せる少壯醫博也。新進にして獨特の新手腕を有し、昭和七年十月より獨立開業せり、日尙淺きも勵精其の業務に勵み、日増盛況を呈しつゝある前途は頗る囑目に値す。

△學位主論文は「副睪丸結核ノ發生ニ關スル實驗的研究」にして、参考論文は、(1)坐骨神經痛ノ注射療法、外六篇あり

り。出身地は京都府福地山町にして、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳也。猶春秋頗る豊富にして、拮据黽勉精研に餘念なきが如し、折角の自重奮勵を祈る。

山川忠雄

△桐生市永樂町一ノ一二八五に於て、外科専門を以て開業せる山川忠雄博士は、豫備陸軍三等軍醫正の印綬を帯び、學系は東京帝大の出身にて、學位は九州帝大より獲得せる名醫博たる一人物也。専門は外科學にして東大教授鹽田廣重博士、秋山軍醫總監、九州帝大教授後藤七郎博士等に師事せり。

△主論文は「皮下並ニ腹腔内ニ流出シタル血液ノ性状特ニ外科的意義ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)陰囊内容タル腸管ノ外傷性損傷ノ一例、(2)顔面ノ上皮癌ヲ併發シタル色素性乾皮症ノ一例、(3)若年者胃癌二五例ノ統計的觀察の三篇なり。

△博士は大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、四年任陸軍二等軍醫、五年より七年に亘り二年間、東京帝大附屬醫院分院に於て外科專攻、七年任一等軍醫、十三年任三等軍醫正、昭和二年依願豫備役被仰付、三年より七年迄四年間九州帝大醫學部にて研究、七年學位を得、八年五月桐生市に於て開業。

△博士の感想に就て聞けば、謙遜なる博士は「淺才微力何等爲すなきを耻づるのみ」云々と。博士の出身地は東京市神田區橋本町にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。賦性敦厚、謙和にして、溫良親切なり。

福島正

△東京市技師にして、廣尾健康相談所長として内外の信望を博し、斯道の爲め盡瘁努力しつゝあるは福島正博士也。博士は東大出身の整形外科學者にして、斯科界現代の權威たる恩師高木憲次教授に就きて斯學の淵奥を究め、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、新進有爲の學究として更に大に期待せらる。

△博士は前橋中學校、水戸高校を経て、昭和二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部整形外科教室副手、同三年九月同教室助手拜命、同四年十月依願免官と同時に東京市衛生試驗所レントゲン主任拜命、同七年四月學位受領、同年五月任東京市技師、廣尾健康相談所長拜命、現在に及ぶ。

△主論文は「麻痺性下腿捻轉症」にして、參考論文は、(1)パロー氏麻痺、(2)「クリュツベル」「ツェールング」(群馬縣下小學校)(相川博士共著)、(3)小兒麻痺患者ニ見タル下腿捻轉ニ就テ、(4)小兒兒童下腿捻轉度ニ就テの三篇なり。△前橋市南曲輪町福島元一郎の長男にして、明治三十五年生る。學究的少壯の紳士、熱心なる研究家として知られ、事に當るや眞劍にして、至誠一貫、克く機敏に處理するの人たるは人皆稱する處也。今や其の蘊蓄を傾倒して東京市の健康、保健、衛生上の指導啓發に務めつゝあるは、適所に適材を得たりと言ふべき也。年齒漸く三十有四歳にして猶頗る春秋に富む前途は洋々たり。澁谷區伊達町一八に住む。

仙波嘉清

△松山市二番町に著名なる仙波外科病院あり、外科の大家仙波嘉清博士の經營にして、當地診療界に於ける一流に在り。氏は愛媛縣溫泉郡小野村の人、明治二十一年生にして、大正三年長崎醫專を卒へ、同年十一月より五年十月迄九州帝大醫科大學第一外科教室在勤、同年十一月小倉市に於て開業、十三年醫業休止、九大三宅外科教室並に解剖學教室に入り、三宅(速)教授、進藤教授、田原教授の指導を受く、昭和二年四月九州帝大にて學位受領、引續き三宅外科教室にて研究を爲し、其後現住地にて開業今日に至る。讀書家にして、劇、圍碁を趣味す。

△學位主論文「淋巴管系統ニ關スル研究、第一篇直腸淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究、附直腸癌ノ轉移ニ就テ、第二篇、肝臟淋巴管系統ニ關スル解剖學的研究」參考論文、(1)外科的療法ヲ施セシ蟲様突起炎四百三十例ノ成績ニ就テ

(2) 膽囊ノ淋巴管ニ就テ。

田平榮造

△九州醫學專門學校整形外科學教授にして、兼ねて九州帝大醫學部講師たる田平榮造博士は、九州帝大系整形外科界の泰斗神中正一教授の愛弟子にして、恩師の親しき指導の許にて研究の結果、母校より學位を得たる少壯醫博也。専門は整形外科學にして該博なる智識を有し、教壇に立つや熱誠克く學生の提撕に努む。外に日本整形外科學會評議員として斯道の爲め盡瘁する所あり。年齒未だ少壯にして、研學に餘念なき潑刺たる前途は更に大に期待せらる。

△博士は鹿兒島二中、七高を経て、昭和二年九州帝大醫學部卒業、引續き整形外科教室に勤務、神中教授指導の許にて研究、昭和七年五月學位受領、豫備役陸軍三等軍醫の印綬を帯び、現在頭書の要職に在り。

△主論文は「ローゼル氏骨改質層ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1) 上膊骨野球骨折ノ四例並ニ其成立機轉ニ就テ、(2) 腸「チフス」ノ經過中ニ於ケル特發性股關節脱臼ニ就テ、(3) 畸形性股關節炎ノ改造手術遠隔成績、(4) 關節「オステオヒョンドロマトーシス」ニ就テ、(5) 足關節制動手術ニ就テ等なり。

△博士の感想に曰く「世人が我整形外科を非常に狹義に解してゐるが甚だ廣い範圍に伸ぶべき學問である事を知らしむべく努力したいものです」云々。博士は鹿兒島市中外郡宇村宇宿田平畷助二男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳也。少壯氣鋭にして熱心なる研究家を以て知らる、志操堅實にして高潔、識見あり思慮に富む、平生人と接するに快活にして人を愛し、又た能く學生を愛撫す、其の態度の眞摯にして温情の掬すべきものあるは、博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とす。運動好にして殊に野球、テニス、ビンポンを趣味し、又た寫眞を好む。博士や春秋猶願る豊富にして、輝しき前途は益々有爲多望也。幸に健康と共に將來の大成を翹望して止まず。久留米市南薰町一五五九に住す。

市南薰町一五五九に住す。

野副道彦

△陸軍一等軍醫正にして、先年來支那天津に於て活躍せる野副道彦博士は、東大系大正三年組の一人物にして、秋山陸軍々醫總監、岩崎陸軍々醫總監、後藤七郎教授指導の下に研究の結果、主論文「神經病性關節症ノ成因ニ關スル實驗的研究」及び參考論文「デーキン氏液研究」その他五篇を完成して、九州帝大より學位を獲得せる外科界の名醫博也。

△博士は一高を経て、大正三年東京帝大醫科大學を卒業す、翌四年任陸軍二等軍醫、同七年任一等軍醫、同十二年任陸軍三等軍醫正、昭和四年陸軍二等軍醫正に累進し、同七年五月學位を得、同八年三月陸軍一等軍醫正に任ぜらる。正六位勳三等なり。

△感想に曰く「醫師の使命が現代に於ては専ら疾病を對照としてのみ進行しつゝあるのは醫學其もの、對人類價値を損するものと思考す、須く將來の醫師は肉體的生命の良醫師たると共に半面に於て心靈的醫術即ち宗教的觀念の修養に勉め其の昔釋尊やキリストが不幸の病者を見舞つて、肉體的に又心靈的に並び施術して絶對的の信頼を受け醫術の完璧を期し得たる底の人格者たるべきものとの理想を有す」云々と氣を吐けり。博士の言や眞なり、希くば博士の理想とせるところ普く醫療界に實施せられんことを祈る。

△博士は佐賀市松原町の人、野副本太郎の長男にして、明治二十一年生る、年齒漸く四十有八歳の年壯、圓熟の期に入りて益々博士のメス研ゆ。恬淡にして潔白、接する者をして好感を抱かしむ、又、應答の禮儀厚く、尊敬せらる徳多分なり。猶春秋豊富なれば、斯道に益々精進して明日の外科を把握せられんことを望んで止まず。福岡市大圓寺町二十二に住す。

佐々木 猛次 △多士濟々たる浪速醫博界を一瞥して茲に品隣せんとする佐々木猛次博士は、大阪市西成區橋通三丁目阪南病院に、外科部長として日々診療に精勵し、今や獨特の新手腕を發揮して益々好評を博し、多大の信望と尊敬とを其の一身に集めつゝあるは心強し。博士は金澤醫大系の錚々たる外科専門醫にして、京都帝大より學位を得たる新進の名博士として其の手腕を認められ、近年大阪診療界に精進躍如たるの概あり。たま／＼著者に感想の一片を寄せて曰く「貴家の如き燃ゆる熱意を以て如斯「ツイスタンド」に迄自己養成に精進可仕候」云々。健實なる臨床醫家として立つ博士の心境も亦察せらる。

△博士は大正十四年金澤醫大専門部を卒へ、昭和四年二月より七年五月迄、京都帝大醫學部整形外科教室にて、斯科の泰斗伊藤弘博士に師事し、同七年五月學位を受領せり。

△學位主論文は「血清沃度酸反應物質及血糖ニ對スル肝臟ノ意義」と題し四篇より成り、外に參考論文八篇あり。

△博士の出身地は島根縣穩地郡都萬村にして、明治三十五年生る、同地方醫界の長老佐々木友太郎の二男也。年齒未だ三十有四歳、少壯の意氣に燃え、學究的臨床家として今は手腕漸く壯熟の域に入り、診療に臨むや甚だ熱心にして、其の眞摯なる態度は、將來ある博士をして大ならしむる所以、前途益々有爲多望也。幸に健康と共に治療界淨化の爲一層の發奮活躍あらん事を祈るや切也。住居は大阪市住吉區住吉町二七二、即、帝塚山の丘陵地、灣頭の風光を一望し得るの地なり。

黒田 倭民

△大阪市今福町三〇七に新興の黒田醫院あり、外科及び産婦人科専門を以て著聞す、院長黒田倭民博士の經營にして、新装せる諸般の設備整ひ内容充實す。博士は大阪醫大の出身にて、學位は京都帝大より獲得せ

る名醫博として其の存在を認められ、久しく三菱系筑豊鑛業所に於て醫務主任として活躍し、醫務、診療の兩方面を擔當主管し、筑豊炭田の診療界の爲め努力貢獻する所ありしが、退職後再び學究生活に入り、大阪帝大産婦人科教室にて研究の後、今や診療界に躍進して独自の地盤を開拓するに餘念なく、開業日猶淺きも、手腕、聲望相俟つて益々人氣を集め、近時著るしく發展隆盛の好況を呈しつゝあり。

△博士は大正十三年大阪醫大卒業、直ちに岩永外科教室に入り大正十五年一月助手となり、昭和三年四月秋田縣公立北浦病院長に就任し、昭和四年十月三菱鑛業株式會社に入り筑豊鑛業所總田炭坑醫師となり、同五年八月同炭坑醫務主任となり、同七年六月學位を受領し、翌八年三月筑豊鑛業所醫務主任となり、四ヶ病院を統括し醫務職員八十人あり、炭坑に赴任するや診療のみを職務とする炭坑醫師の從來の陋習を破り、産業醫學に没頭し衛生設備の改善、衛生志の鼓吹に努力し、炭坑醫師の面目、炭坑醫局の面目を一新するに至れり、翌九年二月三菱鑛業株式會社筑豊鑛業所を辭し、大阪帝大醫學部産婦人科教室に勤務す、次で前記現住所に於て開業一般診療に従事しつゝあり。

△學位主論文は「非特異性抗原ノ研究」にして、外に參考論文九篇あり。氏が學究の跡を顧みて、たま／＼感想の一片を寄せて曰く「研究は大阪大學でやり引續き秋田の病院で研究し更に總田炭坑醫局に於て多忙中の寸暇を研究にさき而も社交方面の事柄に欠席することなく人一倍の努力をつづけて完成したる研究で、之れは自活の傍の研究實に苦しかつた」云々、斯くありてこそ光る學位は尊し。

△出身地は廣島縣比婆郡山内北村にして、明治三十年生る、當年三十有九歳也。年壯銳氣、學究的臨床家として熱意あるところに極めて人望あり。居常人と接するに快活にして、敢て學者として尊大振なく、能く愛し能く談ず、また應答禮を以てし時務に怠ることなし。

林

文

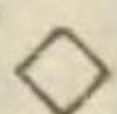
△福井縣敦賀町北澤内に獨立し、林醫院長として躍進せる林文博士は、其の専門とせる外科を標榜して堂々の陣を張り、新装せる内部の設備と相俟つて日々診療に臨み、拮据勤勉、孜孜として独自の地盤を開拓するに餘念なし。博士は福井縣武生町に在る歴史あり著名なる林病院長林一治博士の令弟にして、學系は京都府立醫大系に屬し、學位は京都帝大より獲得せる名醫博として其の存在を認めらる。

△博士は明治四十三年京都府立醫專を卒へ、同年八月より大正元年十月迄同校附屬療病院醫員奉職、大正元年十一月より翌年十一月迄京都帝大附屬病院に見學、大正二年十一月より昭和三年十月迄林病院にて診療に従事、同年十月より京都帝國大學醫學部專修科に入學、外科學教授島瀉隆三博士指導の下に研究に従事し、昭和七年四月歸院、同年七月京都帝大にて學位を授與せらる、次で前記の現住地にて獨立開業せり。

△主論文は「赤痢本型菌「アチワクチン」ノ免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)赤痢本型菌「アナワクチン」ノ含有スル「イムペデン」ノ立證、(2)赤痢本型菌「アナワクチン」ノ含有スル「イムペデン」ヲ破却スルニ必要ナル好適煮沸時間ニ就テ、(2)傳研製赤痢「ワクチン」中ノ菌體ハ「イムペデン」ヲ含有スルの三篇なり。

△博士曰く「現今の醫學は既に治療醫學の範圍を脱し豫防醫學の道程にあり、其我國の實施に當りては聽て官營に移管するやの傾向を示す、即ち當該施設に健康保險あり、簡易保險相談所あり殊に後者にありては醫業分業の前哨線となす甚だ快とすべきなり。さは言へ醫師當今の生活線上より之れを觀れば、醫師自體の其對策を要するや言を俟たざるなり。該傾向の死活は一つに専ら醫師會員の双肩に擔るや明かにして、衆知をして醫師會の人格を認めしむるに吝かならざるものあり、轉た其責めの重きを覺ゆ。尙傳染病豫防の如きも直接醫師自體に委するの妥當なる余の年餘の主張にして、醫師會の發奮醫權の發動を促して止まざる亦久しきものなり」云々。以て博士の感想の一片を窺はる。
△出身地は福井縣南條郡前日野村島の人、林一治博士の弟にして、明治二十年生る、當年四十有九歳也。賦性謙和にして誠實、清淡にして名聞を求めず、只管診療界の爲め精進して仁術を以て任す、其の眞摯篤厚なる態度は、茲に實

兄林一治博士の人格と相俟つて、兄弟兩博士の健康を視すると共にその徳を彰し、併せて診療界淨化の爲め益々奮闘盡力あらん事を翹望して止まず。趣味は謡曲、銃獵、刀劍等なり。



菊地 正三

△南滿醫學堂出身の錚々たる外科醫にして、九州帝大派の名醫博たる菊地正三博士は、在奉天滿洲醫大城内分院長として滿洲診療界の爲め拮据精進しつゝあり。

△博士は、大正六年南滿醫學堂を卒へ、直に同校外科學教室に入り、其後新京滿鐵醫院、關東廳旅順醫院、樺太廳眞岡醫院等の外科を擔任し、昭和二年滿洲醫科大學病理學教室に入る、昭和六年城内分院長拜命今日に至る。斯間昭和七年七月學位を授與せらる。

△主論文は「膽汁性肝硬變症ノ成因ニ關スル實驗的研究、特ニ所謂網狀壞死竈ノ運命ニ就テ」にして、參考論文は、「汞毒性大腸炎ノ成因ニ關スル實驗的研究特ニ肝臟ノ意義ニ就テ」なり。

△博士曰く「滿洲國其後順調なる發展慶賀に不堪、非常時日本徒なる空理空論を排し醫學の立場より心からなる日滿融和の實を擧げたし」云々。至言にして博士の熱誠努力に待つや切也。博士は山形縣東置賜郡小松町の人、明治廿九年生る、當年四十歳也。學究的濃厚なる紳士にして、恪勤勵精の人也。其の診療に臨むや熱心にして眞摯なるは人皆稱する處、また人に接するに敢て城壁を設けず、恬澹として能く附合ひ、世務に對しては應答禮を以てす。博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とすべき也。滿洲奉天彌生町二五に住す。

大井 不二夫 △大井不二夫博士の經營する大井病院は福島縣雙葉郡浪江町に在り、外に昭和八年四月より本縣相馬郡中村町に分院を置けり。外科一般を専門とし、特に甲状腺外科を最も得意とす。但診療科目は内臓外科、一般外科、整形外科、内科、小兒科、レントゲン科に別れ、醫員二名、レントゲン技師一名、ベット十三を有し、内容充實す、博士自ら日々臨床に勵しみ、各科擔當醫員を督勵し、協力して地方診療界の爲め努力貢獻する所あり。名實相伴ふ私立病院として當地方を風靡する盛況を呈す、蓋し成功と云はざるを得ず。

△學歷よりすれば、大正十一年愛知醫專卒業後、同年六月より十一月迄愛知醫大杉外科教室勤務、同年十二月より一年志願兵として歩兵第二十九聯隊に入隊、同十三年一月より同年十二月迄東北帝大關口外科教室勤務、同十四年一月より昭和四年二月迄現住所に開業病院經營、大正十四年四月任陸軍三等軍醫、昭和四年三月より同七年六月迄東北帝大關口外科教室勤務、昭和七年六月以來現住所に開業、同年八月東北帝大に於て學位を授與せられ今日に至る。斯間外科を専攻し特に甲状腺外科を最も得意とし、指導教授は關口蕃樹教授なり。

△主論文は「腹腔内輸血ノ諸種血液性狀ニ及ボス影響ニ就テ」(獨文)、參考論文は、(1)腹腔内輸血ノ總血液像ニ及ボス影響(獨文)、(2)手術前後ニ於ケルパセドウ氏病患者ノ基礎新陳代謝ニ及ボス「レントゲン」線並ニ二、三藥物ノ影響(3)パセドウ氏病患者ノ諸種血液性狀ニ就テ、(4)甲状腺「レントゲン」線放射ノ赤血球抵抗度並ニ赤血球沈降速度ニ及ボス影響、(5)腸管囊腫様氣腫ニ關スル知見補遺等なり。他の論著中、(1)投球ニ因スル上膊骨折ノ一例並ニ其ノ成立機轉ニ就テ、(2)急性扁桃腺炎並ニ扁桃腺周圍膿瘍ニ對スル「トリパフラビン」注射療法、(3)火傷ニ對スル「ブナノール」療法ニ就テ等、最も重要なものとして擧ぐべく、其他枚舉の遺なし。

△感想に曰く「余は必ずしも急速なる實現は期待し居らざるも、醫業は須く國營とすべきものなりと信ずる、之れにより現今叫ばれつゝある醫育統制問題、醫藥分業問題、輕費診療問題、或は詳細制衡的に散在する大小病醫院の競争

的暗闘、又は經營困難の悲鳴等は直ちに消失解決するならん、種々なる事情に餘儀なくさるゝ對症療法必ずしも不可ならざるも時期到來せば斷乎として根治的の「メス」を加へられん事を爲政者に希望するものなり」云々。

△現住地の出身にして、明治三十三年生、當年未だ三十有六歳、努力主義の人にして、少壯の意氣益壯也。平生徳操の堅持を志し、終生自己完成の爲め努力して精神の修養を怠らざるの概あり。多趣味の人にしてスポーツ、音樂、文學、洋畫、釣り、カメラ、俳句等を好む。春秋猶頗る豊富なるの秋、折角の自重加餐を祈る。

西郷 一恵

△熊本市縣廳前通りに西郷外科病院あり、院長西郷一恵博士は、熊本醫大系の學流を汲む少壯醫博にして、外科専門醫として錚々たるもの也。大正十二年熊本醫專を卒ゆるや、東京市御茶の水順天堂病院外科並に東京警視廳醫務課に勤め、大正十四年三月熊本醫科大學萩原外科教室に入り、昭和七年八月同大學にて學位を受領し、翌八年五月同教室を辭し熊本市水道町三七番地に於て開業、今日に至る。

△主論文は「本邦人ノ上肢諸關節ニ於ケル化骨機轉ニ就テ」(レントゲン)解剖學トソノ臨床的意義」にして、參考論文は、(1)自家考案ニヨル口角、開唇鉤ニ就テ、(2)熊本地方在住者血液型ノ統計的觀察、(3)本邦人肩峰突起化骨機轉ニ就テ「レ」線の檢索、(4)煮沸免疫ノ療法ニ依リ治癒シタル「チフス」性尺骨々膜炎ノ一例等其他二編あり。

△博士の出身地は鹿児島縣川邊郡知覽町にして、明治三十一年西郷惠の二男に生る、當年三十有八歳也。少壯にして潑刺たる研究心を有し、學究生活より診療界に躍進して以來、日尙淺少なれども、拮据黽勉、孜々營々として診療に勵みつゝある前途は大に期待せらる。折角の努力奮闘を望むや切也。

大園 正人

△九州診療界に於ける小倉記念病院は、私立病院に對する一大敵國の偉觀を呈す。茲に品隣せん

とする大園正人博士は、外科部長にして小倉記念病院の中堅たり。熊本醫專大正九年の出身にして、小倉市記念病院副島博士の指導を受け、昭和四年より京都帝大醫學部の外科研究室に於て磯部、伊藤兩教授指導の下に研究、同七年八月京都帝大より學位を受領せり。主論文は「中樞神經ノ被刺戟性ニ對スル酸及ビ「アルカリ」ノ影響ニ就テ」にして外に參考論文十部あり。

△佐賀縣神埼郡蓮池村の人、明治三十年生る、當年三十有九歳也。勵精恪勤の人にして、少壯の意氣と共に熱誠克く院是に従ひ努力精進する所あり、賦性敦厚にして人に篤く、清淡にして功名榮達を意に介せず、其の態度の眞摯にして親切なるは、内外の評判良好なりと聽く。小倉市紺屋町七丁目二二一に住す。



宮崎松記

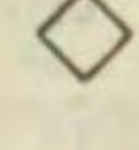
△我邦癩療養界の中堅として九州癩療養所長に新進の宮崎松記博士あり。京都帝大系近來の名醫博にして、明日の癩療養界に矚目さる新人物なり。學歷より觀れば大正十三年京都帝大醫學部を卒へ、爾後母校の外科教室に止まり副手、助手を歴任して勤務の傍ら研究を積み、同十五年より日赤大阪支部病院醫長として外科を擔任し、最近現職に就きて今日に至れり。斯間昭和七年八月京都帝大にて學位を授與せらる。專攻は外科學にして、母校恩師鳥潟教授、磯部教授、伊藤教授並びに日赤大阪支部病院前外科醫長澤村榮美博士等の指導を受けたり。

△學位主論文は「肋軟骨外科ノ解剖學的病理學的及ビ臨床學的研究」にして、參考論文は、(1)胸骨化骨ノ「レントゲン」學的研究、(2)肋軟骨化骨ノ「レントゲン」學的研究、(3)一種ノ非炎症性肋軟骨疾患ニ就テ、(4)先天性胸骨破症ノ一例、(5)稀有ナル肋膜腔内異物例及ビ平壓開胸術追加、等五編なり。

△博士の感想に曰く、「疾病の診斷は所詮一種の鑑定なり。書畫骨董の鑑定は理論に非ず、一つにても多くの物に接して眞物に對する眼識を養ひて、以て眞偽の判別をなす。机上の空論紙上の知識は要をなさず、吾人の疾病の診斷に當

りても理論を超越したる所謂「曰く言ひ難し」の點あるを覺ゆ。これは一人にても多くの症例に接し、周到なる注意と鋭敏なる觀察の結果を以てして、はじめて悟了し得らるゝものなり。現代の醫人には實驗的研究理論的の考察に於て缺ぐるところなしとするも、臨床家に最緊要なるこの醫學的眼識の獲得に對する努力に於て缺ぐる所なきか」云々。

△博士は熊本縣八代郡八代町の人宮崎好徳の養嗣子にして、明治三十三年生る、年齒未だ三十有六歳の少壯也。新進の意氣に燃ゆる學究的濃厚の紳士にして、診療に臨むや熱心甚だ力め、能く誠實と親切とを盡す、人に接するに快活にして温情あり同情に富む。春秋頗る豊富にして、光る學位の前途は猶洋々として頼もし、幸に健康と共に、爲斯界益々發奮盡力あらむ事を切望して止まず。熊本市外清水村實園二九五ノ四に住む。



後藤覺平

△東京市豊島區西巢鴨二丁目一八九〇に堂々の陣を張り、外科を以て斷然頭角を抜き、著名なる宮仲病院あり、院長後藤覺平博士の經營する私立病院にして、鐵骨コンクリートの建坪二百五十坪を有する洋風の建物嚴かめしく、病床二〇、レントゲン室、手術室、研究室、病室等々、充實せる内部の設備整ひ間然する所なし。博士は外科の大家として既に斯界に定評ある如く、嘗て獨、瑞に留學するやフライブルグ大學にてはマイエンブルグ教授に師事し、チューリッヒ大學にてはクレイモン教授の指導を受け病理學及び外科學を研究し、歸朝後は慈惠醫大教授木村哲二博士指導の許にて病理學研究の結果、慈惠醫大より學位を得たる近來の名醫博にして、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮して餘す所なく、玲瓏たる診療、手術の好評は、和氣霽々たる博士の性格と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、日々向上發展の盛況を呈しつゝあるは成功と云はざるを得ず、祝福すべき也。

△博士は東京醫專卒業後、順天堂醫院外科に勤務、昭和二年一月渡歐、主として前記獨、瑞の兩大學にて外科、病理

學を研究す、同四年六月歸朝後、直ちに東京慈惠醫大病理學教室研究科入學、木村教授の下に病理學研究、同七年八月同大學より學位を受領せり。

△主論文は「皮膚、腱及び關節囊ニ實驗的ニ發生セシメタル異物性肉芽腫ニ就テ(キサントーム性肉芽腫實驗的研究)」にして、參考論文は、(1)先天性肝臟製溝ノ發現頻度ト或種ノ疾患ニ對スル關係ニ就テノ研究、(2)肝臟製溝ノ發現頻度ト二三ノ疾患ニ對スル關係ニ就テ、(3)男子ノ肝臟ニ原發セル惡性脈絡膜上皮細胞腫ニ就テ、(4)腸原發性結核ニ續發セル興味アル肝臟結核症ノ剖檢例ニ就テ等なり。就中「キサントーム」性肉芽腫ニ就テは博士會心の論文と見るべし。△博士の感想に曰く「醫學雜誌の統一を望む、例へば病理學方面の業績などは、各大學で發行する雜誌に發表するよりも二三の機關雜誌を通じ各大學の論文を發表する様にしたら文獻を見る上に於ても多大の便利あらんと思ふ。醫師界方面の感想としては、醫師は全部國家試験に依ることが統一されて良いと思ふ、近頃流行してゐる實費診療と云ふ様な名稱は無くして貰ひたいと思ふ、而して醫業類似業者を充分に取締つて貰ひたい、醫師に非ざる者には醫業行爲は禁止したら良いと思ふ。それから醫藥分業を希望す」云々。参考とすべき也。

△博士は東京市現住地の人、後藤二三郎の長男にして、明治三十一年生る、當年三十有八歳也。少壯にして今日の成功ある輝しき閱歴は當世博士界に異彩を放ち見ゆ、頂門の一針として可也。勵精家にして努力主義を以て起ち、不撓不屈の精神に富む。今は最も得意時代にして、少壯の意氣と共に日夜倦むことを知らず、患者を待つに眞摯にして誠實と親切とを以てす。やゝもすれば少々短氣の方なれども、務めて自ら抑制することに修養努力する風あるを見る。讀書家にして書見を業餘の樂しきとし、又た圍碁を趣味すと云ふ。

福島慶之助

△多年練磨せる獨特の手腕と、堅き自信とを以て、競争激甚なる帝都治療界に躍進せる、慈惠派

の新人福島慶之助博士は、瀧野川區田端一七三に外科専門を以て獨立開業して以來、日尙淺きも、拮据艱勉、日夜倦むことなく孜々營々として診療に勵しみ、誠實と親切とをモットーとして努力精進せる結果、的確にして銳利なるメスの好評と相俟つて、年次牢固たる地盤を開拓して門前常に賑ひ、今や堅實なる發展振りを示しつゝあるを見る。

△博士は大正十三年慈惠醫大卒業後、同年四月同大學附屬東京病院外科勤務、昭和五年十二月同大學外科講師となる同六年四月外科學見學の爲め歐米に留學、同七年八月歸朝、同年同月母校より學位を得、同年十一月現住所に外科一般にて開業今日に至る。斯間主として指導を受けたるは母校の恩師男爵高木喜寛教授と、獨逸伯林大學外科ザウエルブルフ教授なり。

△學位主論文は「溫浴並ニ溫泉浴ノ生體ニ及ボス影響ニ關スル研究」にして、外に參考論文二篇あり。本論文に對する學問的批判は既に學界に定評あれば、贅言の要なしと雖も、學究生活中の努力研鑽の跡を物語るものとして、氏の面目の躍如たるものあるを窺はる。氏の出身地は埼玉縣北埼玉郡騎西町にして、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歳也。少壯の意氣を以て診療に一路邁進しつゝある前途は、潑刺として將來の大成を期待せらる。賦性溫厚にして穩健を以て自ら持し、居常能く禮節を尙び、患者に對し人と接するに親切あり同情ある、其の紳士的態度と、其の人格の美なるとは、良醫としての將來を大ならしむる所以かと推獎するに吝ならず。趣味はスポーツなりと聽く。



佐藤義房

△千葉醫大派の學流を汲み、外科學を専修して巢立せし壯少醫博佐藤義房は、曩に教室を勇退して今は八戸市八戸病院に在りて外科を擔任し、手腕、聲望相俟つて、其の熱心なる診療振は躍如として新進の氣鋭を示せり。學系よりすれば大正十二年千葉醫大前身醫專を卒業し、直ちに岩手縣花巻共立病院外科へ勤め、昭和三年十月以來、東北帝大醫學部副手となり外科教室に勤務す、同七年九月東北帝大より學位を得て後研究を續け、現職に赴

任せり。指導教授は東北帝大外科学教授關口蕃樹博士、同病理学教授木村男也博士にして外科学を専攻せり。
 △主論文は「腹腔内吸収ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。外に参考論文として、(1) 蟲様突起内神経節細胞並ニ其ノ配列ニ就テ(獨逸)、(2) 諸種麻醉藥ノ腹腔内吸収ニ及ボス影響ニ就テ、(3) 諸種麻醉藥ノ腎臟排泄器能ニ及ボス影響ニ就テ、(4) 蟲様突起靜脈内淋巴球充實ニ就テ、の四篇あり。

△博士の出身地は栃木縣那須郡那須村湯本にして、明治三十二年佐藤房之助の二男に生る、當年三十有七歳也。花巻共立病院長たる佐藤隆房博士の弟にして、兄弟兩醫博の前途や多望なり。賦性温厚にして篤實、謙和にして克く自抑し人に厚く、人に對するに應答禮を以てし時務を缺ぐことなし、其の眞摯にして寛量なる態度は、人をして好感を覺えしむる徳を有す。著者茲に東北醫療界兄弟兩博士の健康を祝すと共に、自重加餐あつて、暗澹たる治療界淨化の爲め益々發奮努力あらん事を祈るや切也。青森縣八戸市吹上に住む。

◇
根岸喜代助 △京都衛戍病院長にして、陸軍一等軍醫正たる根岸喜代助博士は、東京帝大系の外科学者にして北海道帝大より學位を得たる年壯醫博として錚々たるもの也。多年陸軍々醫界に活躍して功績を擧げ、今猶至誠奉公を念として國家の爲め奮盡努力し、新銳の英氣と獨特の手腕を發揮して、大に將來に待つあらんとする所に、博士の大なる存在を認めらる。

△博士は大正元年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに陸軍々醫を奉職し、後陸軍々醫總監岩崎小四郎博士の薰陶を受け、次で病理學の權威福士政一博士に師事し血液病理學を修め、引續き陸軍にありて、札幌衛戍病院長、陸軍航空本部員を歴任して今日に及べり、斯間、學位論文を北海道帝大醫學部へ提出して、昭和七年九月學位を受領せり。
 △主論文は「白血球像ヨリ觀タル蟲様突起交」にして、外に参考論文八編あり。出身地は埼玉縣北埼玉郡牛子林村にして、明治十八年生る、當年五十有一歳、年壯銳氣にして元氣益々旺盛也。至誠奉公の念に燃え、勵精格勤の人にして潑刺たる前途は、猶洋々として更に大に期待せらる。賦性謹厚にして高潔、謙抑にして能く人を愛す、恬澹として功名榮達を求めず、専念職務に忠勤を盡し以て自ら樂しむの概あり。京都市伏見區深草芳水町六六六に住す。

◇
松尾弘 △尾道市立診療所外科主任として活躍し、地方診療界の爲め努力貢獻しつゝある松尾弘博士は、長崎醫專の出身にして、外科を標榜して立ち、母校の恩師林郁彦博士に親炙して病理學を専攻し、長崎醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。専門的學識と相俟つて多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮する立場に在りて、内外の信望を博す。

△博士は鹿兒島縣第一中學校出身にして、大正九年長崎醫專を卒へ、直ちに佐賀縣立病院好生館外科へ勤務、在職二年半にして、高松市日本赤十字社香川支部病院に轉じ在勤三年餘、次で神戸市私立津田病院の招聘を受け赴任、在職三年餘の後、昭和四年八月母校長崎醫科大學病理學教室に入り、林博士指導の下に地方病「フィラリア」に就て研究し後同大學外科学教室に勤務す、昭和七年九月學位を授與せられ、翌八年一月現尾道市立診療所外科主任として赴任今日に至る。

△主論文は「「フィラリア」性淋巴腺炎ニ就テ」にして、参考論文は、(1) 諸毒物ニヨル淋巴腺ノ組織反應ニ就テ、二篇、(2) 淋巴腺浸出液ニ關スル實驗的研究、二篇、(3) 心臟破裂ヲ來タセル心臟瘤ノ一剖檢例、(4) 腸「チフス」病ノ經過中ニ小舞踏病様運動ヲ伴ヒシ症例及其病理ニ就テ、(5) 諸所ニ轉移セル放線狀菌病ノ一例等なり。

△感想に曰く、(1) 近時世人の醫師觀必ずしも昔日と同一ならず。これ社會狀態變遷の然らしむる所とは云へ亦その責の一半は醫家の負ふべきものなるを思はしむ、巧利のみに走り宣傳これ事とする一部の士に災さるゝ事大なり、各自

反省すべきの要あるを痛感す。(2)醫學就中臨床醫學の如く経験を至上とするものにおいて高齡即ち博識なる場合多し、惜むらくは現今の状態にては醫家一般不規則なる業務に餘暇少く新知識獲得の餘裕乏し。何等かの制度改革によりて醫家の研究餘暇と併せて休養の時間を設くる事は必須事たり」云々。

△長崎縣南高來郡の人、明治二十八年生る、當年四十有一歳也。少壯の意氣益壯にして、壯熟せる手腕と相俟つて今は最も活躍の時代に入り、潑刺たる前途の飛躍は更に大に待望せらる。賦性溫厚にして謙和、人に對し患者を待つに親切なり、同情と理解とを以てす。尾道市十四日町一六七に住す。

成松清敏

△福岡縣嘉穂郡桂川村平山鑛業所病院院長兼外科部長たる成松清敏博士は、大阪醫大出身の外科學者にして、慶大醫學部に於て茂木教授の指導を受けること二ケ年餘、最近九大整形外科神中教授の指導を受けて、斯學の蘊奥を究め、外傷特に骨折を最も得意とする、九州帝大派の名醫博として其存在を認めらる。研鑽多年の學殖と共に外傷臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、當地方診療界に最も囑望せらるる一人物たるは、博士界の爲め大に人意を強からしむるに足る。

△博士は大正八年大阪醫大卒業後、一時大阪府警察部衛生課に勤務、大正九年五月より同十一年六月迄慶應義塾大學醫學部助手拜命、外科學教室にて茂木教授指導の下に勤務す、その後福島縣白河町白河病院外科部長に就任す、大正十三年四月以來福岡縣下の安川家經營の炭坑病院院長に就任し今日に至る。その間昭和六年六月より二ケ年九州帝國大學醫學部專攻生入學、主として下田及神中兩教授の指導を受け、同九年一月同大學にて學位を授與せらる。

△主論文は「末梢神經「レチチン」ニ就テ」にして、外に參考論文として、(1)「ミエログラム」ニ現ハレタル正常硬膜終末囊ノ形狀及び高程ニ就テ、(2)外傷性神經症患者ノ病前性格ニ就テ、(3)限局性脊髓膜炎ニヨル坐骨神經痛ニ一例ノ

追加、(4)丹毒ノ「レントゲン」線療法ニ就テ、(5)肺臟ニ穿孔セル横隔膜下濃瘍ノ一例等あり。

△博士の感想に曰く「災害醫學の勃興、殊に醫科大學の講座に災害醫學を加ふることを待望す」云々と。聽て災害醫學の實現を見るの日も近からんか。

△佐賀縣佐賀郡東川副村成松清三郎の二男にして、明治二十六年生る。賦性篤實敦厚、學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入りて今は最も得意時代に在り。性秉短氣にして偏執的なるは、或は後者が氏の長所であり、且短所でもあらんかと思はしむ。研究以外、美術趣味豊かにして殊に西洋畫を好み、登山、園藝にも親しむ。福岡縣嘉穂郡桂川村平山鑛業所社宅に住む。

大槻正路

△帝國女子醫藥專教授團に大槻正路博士あり、錚々たる新進の外科學者にして、専ら女子醫育界に盡瘁しつゝある近代的活動家也。而して又教鞭を取る傍ら自宅蒲田區新宿町三六九に小醫院（X光線、太陽燈の設備あり）を開業して外科一般の診療に従事しつゝあり。日夜繁忙を極め、殆ど席暖まるの暇なきもその意氣益々旺盛にして、致々營々として倦むことなき元氣は敬服に値する。其卓越せる手腕の好評は既に巷街に噴々たるを聞く。

△博士は明治四十五年東京學院中學部卒業、大正五年東北帝大醫學專門部卒業、自大正十年至十四年慶應義塾大學醫學部外科教室助手勤務、大正十四年より現職に在り、昭和七年十一月東京帝大より學位を受領せり。斯間の指導教授は慶大外科學の重鎮茂木藏之助博士、帝國女子醫專校長内科の泰斗額田晋博士にして專攻は外科學なり。

△學位主論文は「細菌性發熱並ニ該發熱時ニ於ケル尿中窒素排出量ニ對スル微量異種細菌ノ影響ニ就テ」にして、參考論文獨文二篇あり。(1)Ueber die Schnaukrungen der Resistenz gegen Steptokokkeninfektion nash Immunisierung mit Heterobakterien. (2)Experimentelle untersuchungen über die Einflüsse minimaler menge von

Heterobakterien auf das Fisher durch Pneumokokken.

△博士は宮城縣伊具郡金山町の人、大槻精の三男にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳、學究的温厚の紳士にして情誼篤し。令兄に東京帝大助教授大槻菊男博士あり、令弟に京都帝大教授大槻正男、及び東京女子高師教授大槻虎男あり、共に俱に現代學界に異彩を放つ兄弟として羨望さる。博士は運動家にしてスケート、ゴルフを能くすと聞く。猶洋々たる前途、益々自重して加餐あらんことを望んで止まず。自宅は東京市蒲田區新宿町三六九なり。

李 祖 蔚

△中華民國の代表的學者にして、廣西省政府衛生委員會委員たる醫學博士李祖蔚は、現に廣西省南寧廣西省立醫學院外科教授として勵精活躍し、嘖々たる名聲と共に日本醫學の爲め氣を吐きつゝあるは、醫博界の爲め大に人意を強からしむるに足る。博士は千葉醫大出身の外科學者にして、斯科界の泰斗恩師瀨尾貞信博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる醫學の少壯名醫博也。新進にして其の蘊蓄を披瀝し、以て祖國學生の指導に務め、一面には又獨特の新手腕を發揮して外科治療界の爲め盡し、診療手術の好評と共に兩々相俟つて、益々内外の信望を博す。最近第九回（昭和九年）日本醫學會會頭入澤達吉博士の招電により上海の來賓として列席し、今や中民醫界に於ける新進大家として、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは中日の親善上欣幸とする處也。△博士は中華民國の出身にして、昭和二年千葉醫大卒業後、直に千葉醫大研究科入學、外科學研究、同七年十一月同大學より學位受領、中華民國二十年九月上海東南醫學院教務長兼上海東南醫院外科主任として赴任し、昭和九年八月現職に轉任今日に至る。

△主論文は、(1)「膀胱縫合ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)腸「チフス」ノ外科的合併症、(2)釀母菌ノ外科的意義、(3)胃痛早期診斷研究殊ニ胃液内ノ脂肪含有細胞ノ證明ニ就テ等三篇なり。論文中「膀胱切除後ニ於ケル

縫合法」は博士の最も得意とせるものとして特筆すべきを要す。

△感想の一片を寄せて曰く「人間の生命は無限に非ず研究に従事する私共は出来るならば、最も人類生死問題に密接なる關係ある重要問題に向つて努力すべきと思ふ。難易及び成敗とは恐るゝに足らず」云々。此の意氣や壯とすべき也。博士は中華民國福建省莆田縣人李樹棠長男、光緒二十一年生る。學究的温厚の紳士にして、少壯の意氣に燃え、熱心なる研究家として知らる。而かも謙遜家にして志有餘力不足を以て自任し、人と接するに恬淡として敢て衒はず、寛厚克く人を容れ、部下を愛し能く學生を指導す、又應答禮を厚うして、尺牘温雅甚た親しむべき也。趣味としては音楽を愛し、運動を好む。幸に健康と共に民國醫界の爲め、益々活躍盡力あらん事を遙に翹望して止まず。

中村友輔

△京城帝大派の新興勢力の一人物たる中村友輔博士は、朝鮮平壤鐵道病院外科醫長として精勤數年に及び、半島診療界に於ける重要人物たる存在を認めらる。學系は昭和二年東京帝大醫學部の出身にして、京城帝大外科松井博士に師事す、昭和六年現職に就任し、同七年十二月京城帝大にて學位を受領せり。

△主論文は「家兔腎臟分泌面積減少ニ於ケル水分代謝ニ就テ」にして、外に參考論文三篇あり。
△出身地は新潟縣古志郡十日町村にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳也。少壯なる學究的臨床家としての意氣を以て起ち、學を鍊り腕を磨くに餘念なき前途は、向後の活躍と相俟つて、博士の將來を語るに綽々として餘裕あり。朝鮮平壤竹園町一に住す。

松波賢吾

△岐阜縣羽島郡笠松町にて獨立開業せる、松波外科醫院長松波賢吾博士は、岡山醫大系の新進、泉外科を巢立ちて學位を獲得せる少壯の名醫博にして、其の最も得意とする内臟外科の大家として特に著聞す。同病

院は内臓外科、其他外科一般に適切なるレントゲン科、物理診療科等の装置並に入院の設備等完成す。博士の専門的學識は言はずもがな、圓熟せる手腕の好評は益々遠近の人氣を吸収し、今や牢乎たる地盤の上に日増堅實なる發展を遂げ、當地方診療界に頭角を抜きつゝあり。

△博士は昭和三年岡山醫大を卒へ、引續き助手として泉外科教室に勤め、泉教授指導の下に研究を續け、同七年十二月岡山醫大にて學位を得、同八年三月以降現住地にて開業、松波外科醫院を經營今日に至る。主論文は「副腎ノ「コレステリン」代謝機能ニ就テ」にして、外に参考論文「急性膽囊炎ノ早期手術ニ就テ」外七篇あり。

△博士の感想に曰く「田舎で開業してみると、一般開業醫の無責任と、そして一般人の醫學常識缺乏と無理解とに驚かざるを得ない」云々と。以て博士の責任感に強き人たと同時に、診療に臨む態度の如何に眞摯にして誠實なるかを窺はる。好箇の臨床家として、更に洋々たる前途を期待して止まず、折角の努力奮闘を望むや切也。

△出身地は岐阜縣稻葉郡加納町にして、明治三十六年松波與太郎の長男に生る。亡父與太郎は三高醫學部の出身にて岡山醫大より醫學博士の學位を得、獨逸グライスフルド大學に留學すること二回、ドクトルの學位を得、外科の大家として仰がれたる學者なりしが、昭和三年九月二十六日逝く、惜むべき也。賢吾博士は、當年三十有三歳、年齒未だ少壯にして霸氣に富み、嚴父の遺鉢を享けて、溫良謹嚴、極めて眞面目にして正直すぎる方也。

安田陸郎

△東北帝大醫學部講師より轉任して秋田縣大館町公立病院外科に勤務中の安田陸郎博士は、東北帝大派の新進にして、恩師杉村七太郎教授に就きて外科學一般を專攻し、母校より學位を得たる手腕家として認められ、今や其の職務に勵精努力して、自由に其の手腕を發揮し得るの立場に在り、向後の活躍と相俟つて、發刺たる前途の發展大に期待せらる。

△學歴及び閱歷を概括すれば、宮城縣立佐沼中學校より、二高を経て、昭和三年東北帝大醫學部を卒へ、翌四年六月より六年六月迄東北帝大大學院に在學す、同七年七月東北帝大醫學部講師となり、同年十二月學位を授與せられ、次で現職に赴任し今日に至る。

△主論文は「腎臟結石ノ化學的及鑛物學的研究並ニ其ノ成因ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。参考論文としては、

(1) 結核患者ノ血液及尿中「リパーゼ」量ニ就テ (獨逸文) (2) 腎牀「ブノイモラジラファイ」ニ就テ、(3) 外科的腎疾患ニ對スル靜脈内性腎、腎盂、輸尿管攝影法ノ經驗等あり。

△仙臺市國分町の人、明治三十六年生る、現釜山府榮町八丁目開業醫 (前朝鮮慶尙北道道立金泉醫院長) 佐藤千三郎博士の實弟也。年華未だ三十有三歳の少壯にして、霸氣滿々たる書生氣質の人也。兄弟兩博士の輝しき前途は祝福すべく、幸ひ健康にして、折角の努力奮闘を望むや切也。秋田縣大館町三九に住む。

石川昇

△現代外科界の權威たる石川昇博士は、世人周知の如く、金澤醫大教授にして兼ねて附屬醫院長として、最高學府に重きを爲す純眞の學者にして、特に内臓外科を最も得意とする外科學者たり。學系よりすれば九大系にして、恩師三宅速教授に就て外科、内臓外科を、同板垣政參教授に就て自律神經に關する生理を、同進藤篤一教授に就て自律神經に關する解剖を專攻し、又嘗て文部省在外研究員として海外留學中、ザウアーブルツフ教授に就て肺臓外科を、エンデルン教授に就て内臓外科を、ゴツセ教授に就て内臓外科を、キユネオ教授に就て一般外科を研究せり、而して最近再度の歐米視察より歸朝後の博士は、更に日新月歩の新知見を齎らして教室の改善、學生の指導、其他最も新らしき一生面を啓發する上に最善の努力を拂ひつゝあり。

△更に博士の學歴より概括して見れば、大正六年九州帝大醫科大學卒業後、直ちに同學三宅外科教室副手、次で助手

として勤務、同十二年七月母校にて學位授與せられ、同十三年一月文部省在外研究員として獨、佛、英、米各國へ留學を被命、同十四年四月任金澤醫大教授、昭和六年歐米を視察せり、以て今日に及べり。

△學位主論文は「大腸殊ニ下半部ノ神經支配ニ關スル實驗的研究」歐文「Experimentelle Untersuchung über die Dickdarminnervation, insbesondere Colon descendens et Sigmoidum」トシテ、參考論文は、(1)結腸巨大症ノ發生原因ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究(歐文)、(2)蛔蟲卵腫腸炎並ニ蛔蟲卵性大網膜肺腫瘍ノ組織的變化等ニ就テなり。他の論著中、(1)肺結核外科(學會宿題報告)、(2)肺結核ノ外科的療法、(3)腹部内臓外科ニ於ケル局所麻酔法並ニ内臓ノ痛覺ニ關スル研究、(4)胃癌ノ診斷並ニ療法、(5)移動性内臓疾患ノ外科等は博士會心の作にして、最も重要なものとして見るべき也。

△感想に曰く「學問の弊は眞の學問技術の進歩發達を妨げる。競争は一面には進歩發達の刺戟となるが、現在の事實は寧ろ弊害多し。専門の弊また擡頭せるに非るか、殊に内科、外科、レントゲン科の領域に於て。醫學に著しく進歩せるの觀あるも果して醫術はこれに相當した進歩發達を遂げてゐるであらうか。尙一層の研磨努力と熟慮を要すると思ふ、殊に學界と醫師界との連絡の密なるを要すると思ふ」云々。

△博士の本籍は大分縣宇佐郡安心院村字原にして、明治二十六年生れ、石川喜十郎の養子也。純學者肌の年壯の紳士耶生は其號にして、俳句を能くす、又旅行好きなり。性格は正直にして、勤勉努力主義の人、常に徳操を堅持して克く自ら修養に務む、毀譽褒貶など毫も意に介せざれば、強ひて言へば或は社交には下手の方ならんか、また游泳術の駄目なるを御當人はいやに氣にして居らるゝが如し。人格者として著者更めて敬意を表す。博士の年齒今や不惑に入る三歳、前途洋々たるの秋、幸ひ健康にして、爲學界折角の自重加餐を祈るや切也。

齋藤 眞

△名古屋醫大教授にして外科學を擔任し、齋藤外科の今日をあらしめたる外科界現代の一權威たる齋藤眞博士は、東大系大正四年組にて、近藤外科門弟中の一秀才として知られ、大正十二年四月母校より學位を得せる所謂東大派の名醫博中、最も將來を囑望せらるる最高學府中の少壯教授たるを至囑す。氏の學位論文は「レキサス、ヒオリオイデウス」ノ病理」にして原著は獨逸文なり、本論文の學問的價値は既に其の當時の學界に認められ、嘖々たる批判あれば敢て茲に贅言を要せざるまでも、氏が努力研鑽の跡を物語るに足る。其後發表せる論著素より夥多にして枚擧の追なしと雖も、嘗て(昭和四年の春)日本外科學總會が仙臺に開かれたる時、氏は宿題たる「腦及ビ頭蓋外科」に就き報告を擔任し、外科の新領域を開拓したるものとして滿場の賞讃を博し、日本のクツシグとまで呼ばれたるは特筆に値し、氏の業績中に見逃すべからざるもの也。

△博士は仙臺市名門の出身にして一流の素封家を以て知らる、明治二十二年生にして當年正に不惑に入る七歳、學者肌にして、年壯の紳士として的人格者也。本來、名門育ちの苦勞知らずにして鷹揚の所あり、又學界に於ても順調であつただけにこせつく所なく、寛厚にして融和性に富み、能く人を容れ後進を愛し、學生を指導するに篤く、名古屋醫大に於ける中堅として厚き人望あるも亦偶然ならざるを思ふ。春秋猶豊富にして、前途洋々たるの秋、幸に健康にして、爲學界益々精研奮盡あらん事を祈るや切也。名古屋市東區千種町元古井に住む。

野谷昌臣

△東京市麴町富士見町一丁目九段坂病院に外科醫長として多年の聲望を博し、民衆診療界の爲め努力貢獻しつゝある野谷昌臣博士は、東大系の外科臨床家として錚々たる名醫博也。氏は鳥取縣の出身にして、明治十七年生る。明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學近藤外科に勤め、恩師指導の下に研究すること多年、大正十二年四月母校より學位を授與せられ、震災後三番町日本赤十字支部病院々長として就任、同十五年十月

より現病院に勤務、外科醫長として今日に至る。

△學位主論文は「脾臓ヲ摘出セル家兎ニ於ケル血清學的研究」にして原著は獨逸文なり、其他論著夥多あり。愛書家にして業餘能く讀書精研修養に勉む、尙ほ趣味としては演劇、義太夫、野球等を好む。壯齡今や知命に入る二歳、益々元氣にして其の職務に勵精努力するの仁也。牛込區拂方町二七に住す。

鳥居武雄

△東京市淺草區須賀町に在る明治病院は歴史あり、帝都診療界に於ける私立病院中重要な地位を占め、依然として抜くべからざる繁榮を持続しつゝあり。院長は鳥居武雄博士にして、博士經營の下に主宰し自ら外科の診療に起ち、他科の擔當醫を督勵協力して院務に勵精努力しつゝあり。博士は東京高師附屬小中學校より四高を経て、大正五年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同大學副手囑託、同七年八月任同大學助手、同十年十一月同附屬醫院醫員を被命、同十一年四月依願助手及び醫員を被免、同年五月歐米へ私費留學、獨逸國グライフスワルド大學フリードベルゲル教授の教室に入る、業績三篇を發表、次でミュンヘン大學ザウエルブルフ教授、ベルリン大學ケールテ教授及び米國メヨーククリニック等にて見學し、翌十二年歸朝す、同年六月九州帝大にて學位を授與せられ、爾來現明治病院副院長として診療に従事す、震災にて全燒當時、百餘名の患者と職員、附添等を合して三百五十餘名中一名の負傷者もなく無事避難し、大正十二年九月二十三日より再び診療に従事し、同院長として今日に至る。

△學位主論文は「輸血ニ關スル實驗的及臨床的研究」にして、原著は獨逸文なり。參考論文としては、(1)腎石症ノ臨床的並ニ病理解剖的所見ニ就テ、(2)人血ト獸血トノ鑑別法、(3)輸血ノ實際地醫家ニ必要ナル注意事項ニ就テ等なり。其他論著夥多。

△出身地は山形縣山形市香澄町宇大寶寺にして、明治二十二年生れ、鳥居文雄博士の兄也。學究的濃厚の紳士にして、壯齡今や不惑に入る七歳、臨床家としては最も腕の牙え盛にて、學識、手腕、識見共に愈々圓熟の域に達して一段の貫祿を有す。其の今日あるもの、病院經營の才と臨床的手腕の卓越せるものに非ざれば其の繁榮を見る能はず、此の意味に於て博士の評価は定まり批判の餘地なし。

尹治 衛

△京城府寬勳洞一九七回生病院長尹治衛博士は、京城醫專出身の篤學者にして、朝鮮出身者中醫學博士の學位を獲得せる先驅者として、代表的名譽を負ふ初代の醫博也。學系よりすれば大正七年京城醫專卒業後、直ちに朝鮮總督府官費留學生を被命、九州帝大醫科大學に於て外科學專攻、後藤七郎教授に師事すると共に、附屬醫院第二外科教室に勤務すること二ケ年、同九年五月カナダ宣教會城津濟東病院外科々長として勤め、旁々同九年十月より京城外科病院を經營し同十一年三月之を廢す、同十一年五月私費獨逸國に留學し、主としてプレスラウ大學病理學教室及び外科學教室にて研究、同十三年正月歸朝、直ちに九大醫學部第二外科教室に入り、再び後藤教授に師事すると同時に附屬病院第二外科に勤務す、同十三年七月九州帝大にて學位を授與せられ、同年四月京城醫專囑託となり外科解剖學を分擔し傍ら回春醫院長を勤む、同十四年十月新設京城回生病院經營今日に至る。外科を専門として殊に結核病科を得意とす。

△學位主論文は「健康肺並ニ結核肺ニ對スル人工氣胸ノ作用」にして原著は獨逸文、參考論文としては、(1)部分的肝切除例、(2)外科的疾患ニ於ケル血清蛋白ノ定性的及定量的検査ニ就テ、(3)胃腸管内ニ於ケル原發性肉腫ニ就テ、外に獨逸文原著一篇あり。明治二十九年朝鮮咸鏡南道長津郡に生る、兩班尹應觀の長男也。篤學者にして、特に結核病治療法の研究に對して多大の興味を有し、讀書精研相俟つて今猶孜孜として研鑽に餘念なきが如し。學者としての該博なる學識並びに不斷の努力に對しては、著者は敬意を表するに敢て吝なる者に非らざれども、學者を氣取りて餘りに

自惚強く、學者たるの美名に隠れて信義に缺け、己に厚うして人に薄く、甚だ得手勝手なる振舞なきや、著者の體驗より其の人格を疑ふ者也、將來ある博士の爲め甚だ惜まざるを得ず。

◇ 松井權平

△京城帝大教授として外科學を擔任し、兼ねて附屬醫院長たる松井權平博士は、東大系の外科學者にして名醫博たるに耻ぢず、朝鮮醫學界に於ける重鎮たるのみならず、現代日本外科學界に於ける一權威たるべし。氏の學歴より觀れば、獨逸協會中學より一高を経て、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學外科學教室副手として勤務、大正二年五月任同大學助手同六年五月迄勤務、同八年より十二年迄東大法醫學教室にて三田教授指導の下に血清化學を研究し傍ら私立醫學專門學校講義をなす、同十三年十二月東京帝大にて學位を授與せられ次で京城醫學專門學校教授並に朝鮮總督醫院醫員を歴て現職に就き今日に至る。

△學位主論文は「腸管ノ種々ノ部位ニ於ケル蛋白質及一二含水炭素吸收ニ關スル血清學的的研究」にして、參考論文は(1)腸瘍殊ニ癌腫ノ酵素ニ就テ(2)「クロロホルム」麻醉後發死等なり。其後「クロロホルム」麻醉ノ後發死症例、同實驗的研究其他發表せる論著夥多あり。出身地は東京府西多摩郡平井村にして、明治十七年生る。壯齡知命に入る二歳學究的純眞なる學者にして、元氣益々旺盛、帝大教授として今や一段の貫祿を備え最も重望せらる。無趣味にして醫育と研究とを終生の天職として亦他事を顧みず、至誠以て公に奉ずる熱誠の士にして人格高潔也。京城府苑南洞六六に住む。

◇ 上田 溫 良

△滋賀縣彦根町宇一番にて外科を標榜して開業せる上田溫良博士は、大阪醫大系の外科學者にして、學位は京都帝大より獲得せる名醫博として其の手腕を稱せられ、今や牢固たる地盤を有して一流に在り。學歴より觀れば、滋賀縣立第一中學校を経て、大正三年大阪府立高醫を卒へ、直ちに同校助手を命ぜられ附屬病院外科教室勤務、次で同病院醫員兼務拜命、同八年十一月大阪醫大助手に被任、同九年四月秋田縣扇田公立病院長として赴任、同年九月之を辭し京都帝大醫學部專修科入學、鳥瀉教授指導の下に外科學一般專攻、同十四年一月鳥取縣米子町博愛病院外科部長に就任、次で大阪府堺市立公民病院外科部長より臺灣總督府臺中醫院外科部長として赴任す、其間大正十三年十二月京都帝大にて學位受領、其後辭職歸郷、現住地にて開業今日に至る。

△學位主論文は「細菌性特殊沈澱子ノ血清學的性質ニ就テ 附抗體一元説及ビ抗體一元説」にして、參考論文は、(1)容量的補體結合反應検査方法及容量的補體結合反應微量検査方法並ニ補體結合反應基礎的所見、(2)補體結合反應ヲ指標トセル虎列拉抗原ノ研究、(3)「コレラ」孤菌ニ關スル「イムペド、ン」現象の外三篇あり、其他論著夥多。出身地は現住地たる彦根町にして、士族上田安常の長男、明治二十一年生る。壯齡今や不惑に入る八歳、學究的溫厚の紳士、益々元氣にして診療に餘念なく、至誠以て仁術の爲め最善を盡し、其の天職なるを樂しむの士也。業餘の趣味としては遠足を好み、又植物栽培を道樂とす。

◇ 若山 要 二

△東京市小石川區新諏訪町一三に外科、X線科を専門とせる若山病院あり、院長若山要二博士の經營にして、開業拮据十有餘年、今や牢固たる地盤を有し、噴々たる好評を博す。氏の學歴より觀れば、山口縣立山中中學校より山口高等學校を経て、明治四十二年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學佐藤外科教室助手勤務、次で麴町區木澤病院副院長として數年勤務の後、久原鑛業株式會社日立鑛山病院長として赴任、文部省醫師試驗委員拜命、大正二年日赤神奈川支部病院外科醫長就任、同十三年十二月東京帝大にて學位を授與せられ、大正十四年より現住所にて開業今日に至る。學位論文は「化膿性筋炎ノ發生ニ就テ」にして、他に論著夥多あり。遞信省囑託醫、區醫

師會理事たり。

△山口縣萩市の出身、舊藩士宇野弘義の二男にして、明治十四年生る、壯齡當に知命に入る五歳、元氣旺盛今や老大家として一段の貫祿を備ふ。性來學者肌の人にして、所謂血液O型の性格の持主として長短あるにあらざるか、圍碁と運動を趣味す。

飯島 清

△茨城縣土浦町に外科内科を専門とする霞浦病院あり、院長飯島清博士經營の私立病院なり。氏は茨城縣の出身、明治二十年生にして、京都帝大醫科大學を大正四年卒業し、學位論文「神經切斷後ト臍切斷後トニ起ル筋萎縮ノ比較研究」を提出して、大正十四年一月京都帝大より學位を獲得せる整形外科學者として錚々たる者也壯齡今や四十有九歳にして、學識、手腕相俟つて圓熟の域に達し最も重望せらるゝ時に在り。

村上德治

△東京第一衛戍病院附にして外科診療主任たる陸軍二等軍醫正、村上德治博士は、京都帝大系の外科學者にして、陸軍々醫界に最も囑望せらるゝ一人物として茲に推獎す。博士は新潟縣立柏崎中學校 七高を経て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに陸軍見習醫官を命ぜられ、近衛歩兵第二聯隊に配賦せらるゝ、九年六月任二等軍醫、補京都衛戍病院附、十一年十二月任一等軍醫、十二年四月京大大學院へ入學を被命、故伊藤隼三教授、鳥瀉隆三教授、伊藤弘教授等指導の下に外科學を專攻す、十四年四月京都衛戍病院外科及騎兵第二十聯隊附に補せらるゝ、十五年一月京都帝大にて學位を授與せられ、陸軍々醫學校教官を経て現職に在り。

△學位主論文は「關節逆體ノ成因ニ關スル實驗的研究」にして、外傷論及び炎衝論の二篇より成る。參考論文は、(1) 内臟神經節刺戟ニ由ル實驗的膽尿、(2) 象皮膚ニ對スルコンドレオン氏手術ノ治療的價値、附所謂「ピツチン」病ニ就

テ、(3) 鼠蹊ノ墨丸ノ手術ニ就テ、(4) ホヂキン氏病ノ原因ニ就テ、(5) 腹壁ニ發生セル畸形腫ニ就テ等なり。

△博士は新潟縣刈羽郡刈羽村字刈羽小林平次郎の三男にして、明治二十六年生る。潮水は其號にして、俳句(層雲派)を能くし、文藝趣味豊か也。壯齡漸く不惑に入る三歳、意氣益壯にして意志強固、研究心旺盛にして精研に今猶餘念なし、學究的有爲の資に富む前途や洋々たり、切に自重加餐を祈る。麻布區富士見町四三に住む。

西田次磨

△名古屋市中區長池町一ノ一七にて外科専門を以て開業せる西田次磨博士は、長崎醫專出身の外科學者にして、特に内臟外科を得意とし、學位は慶大より獲得せる名醫博として其の手腕を稱せらる。學歷より見れば大正三年長崎醫專を卒業し、同年十一月より京都帝大衛生學教室に入り、細菌學及び免疫學を研究し、同四年八月同教室を辭し、同年九月より九州帝大病理學教室に轉じ、病理學及び病理解剖學を研究す、同五年三月同教室を辭して東上、同年四月より東京外國語學校選修科に入り獨逸語を修め同七年三月退學す、同年四月九州帝大三宅外科教室勤務を被命、同八年八月迄勤務、同年九月より九年三月迄東京濟生會病院に勤務し、同九年四月慶大醫學部外科教室助手拜命、同十三年四月同學部講師となり、同十四年二月學位受領、爾來四谷區愛住町にて開業、四谷簡易療養所醫長囑託、其後釧路市浦見町にて開業の後、現住所に移轉開業今日に至る。

△學位主論文は「藥劑ノ創傷ニ對スル生物學的研究」にして、參考論文は、(1) 胃ノ殺菌作用本態ニ關スル實驗的研究 (2) 瘻孔ノX線検査並ニ其造影劑ニ就テ、(3) 創傷療法ニ於ケルデーキン氏液ニ就テ、(4) 腹腔内寄生蟲性膿瘍ニ就テ等なり他に論著夥多。氏は福岡市下洲崎町の出身、士族西田熊吉の嗣子にして、明治二十四年生る。年壯の紳士にして、壯齡今や不惑に入る五歳、臨床家としては最も腕の冴え盛にて篤き信望を博す。多趣味の人にして、運動殊に柔道、水泳を好み、音樂を愛し、又時に旅行を楽しむ。

角田 博 △千葉縣北條町北條病院に在る角田博博士は外科を擔任す。博士は九大系三宅教授の門弟にして所謂九大派の名醫博たる外科臨床家として錚々たるもの也。氏は、一高を経て、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手に任ぜられ生理學教室勤務、同十二年三月より同學部三宅外科教室に轉勤す、昭和二年九月學位を授與せらる、其後大阪市大野病院を経て北條病院に就職今日に至る。

△學位主論文は「氣胸ニ關スル實驗的研究」にして、(1)一側外科的氣胸ノ家兎ト犬トノ間ニ危險度ノ差異ヲ生ズル條件、(2)氣胸ノ大循環系統血統血壓ニ及ボス影響ニ就テの二篇より成る。參考論文は、(1)腸結核ニ關スル統計的觀察、(2)牡蠣ノ心臟ニ對スル「アドレナリン」ノ作用ニ就テ等なり。出身地は千葉縣北條町にして、明治二十八年生る、年齒漸く不惑に入る一歳、學究的濃厚の紳士也。手腕壯熟の域に入り、臨床家としては最も活躍を要するの時にあり。診療と研究との外何等の趣味を有せず、一意専心、唯だ孜々として其の職務に勵精し、以て仁術に最善を盡すを唯一の樂しみとする熱誠の士也。猶前途洋々、折角の努力奮盡を望むや切也。千葉縣北條町北條に住む。

桐原眞一 △名古屋醫大教授として桐原外科の今日あらしめたるは桐原眞一博士也。獨り學内の重鎮たるのみならず、外科界現代の一權威たるべし。氏は大阪府の出身、明治二十二年生にして、大正四年東京帝大醫科大學を卒へ、學位論文「人類血液ニ於ケル同種血液反應ニ就テ」(獨逸文)を提出して、大正十四年二月東京帝大にて學位を受領せり、其の今日あるもの博士の面目を語るに充分也。學究的純正なる學者肌の人にして、有爲の將來を最も囑望せらる、最高學府の一人物として敬意を表し、茲に推薦す。名古屋市中區御器所町神田甲六一に住む。

岩田 清臣 △埼玉縣比企郡唐子村上唐子に著名なる岩田病院あり、院長岩田清臣博士の經營にして、外科、整形外科を専門とし、博士獨特の手腕は、犀利にして鋭敏なるメスの評判と相俟つて、益々近郷の人氣を焙り、開業日尙淺きにも拘はらず、近來著るしく發展の盛況を現はし居れり。氏は千葉醫專の出身にして、京大教授故伊藤博士同鳥瀉教授、同磯部教授等指導の下に研究の結果、京都帝大より學位を獲得せる少壯醫博として名聲を馳せ、今や氏の獻身的努力と其の手腕に對し、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め大に人意を強からしむ。

△更に氏の略歴を概括すれば、大正十年千葉醫專卒業後、日赤群馬支部病院外科勤務(醫長桑原政榮博士)、同十二年十一月より京都帝大醫學部整形外科教室にて伊藤教授の指導を受く、昭和二年十月日赤京都支部療院外科擔任、同十二月京都帝大醫學部講師囑託、在職のまゝ大阪市財團法人北野病院整形外科々長を被命、同三年二月京都帝大にて學位受領、同年九月長岡市長岡病院外科醫長を被命、同六年五月日赤新潟支部病院副院長兼外科醫長を被命、同九年六月退職、歸郷開業今日に至る。

△學位主論文は「固定繃帶ニ因スル筋攣縮並ニ筋萎縮ニ關スル實驗的研究」にして、(1)固定繃帶ニ因スル筋攣縮ニ關スル實驗的研究第一回報告、(2)同第二回報告、(3)固定繃帶ニ因スル筋萎縮ノ成因ニ關スル實驗的研究、(4)固定繃帶ニ因スル筋萎縮ニ對スル交感神経切除ノ影響ニ就テの四篇より成り、參考論文は、(1)骨折ノ觀血の手術ニ際シ骨端固定ニ使用セラル可キ諸種異物殊ニ金屬ノ比較研究第一報筋肉内異物挿入實驗、(2)同上第二報骨膜上異物移植實驗、(3)同上第三報假骨形成ニ及ボス異物ノ影響、(4)同上第四報骨髓内異物挿入實驗、(5)關節疾患ニ因スル筋萎縮ノ成因ニ關スル實驗的研究、(6)筋ノ異常固定ニ際スル筋「クレアチン」消長ニ就テ、(7)去腦硬直ニ就テ等なり。著書「實用看護學教科書」(上下二卷、吐堂屋發行)。

△埼玉縣比企郡唐子村上唐子岩田六郎の長男、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳也。臨床家として多年の経験を積み、少壯の意氣と共に今や手腕漸く壯熟して最も多量の分別を有す。讀書家にして研究と醫療そのものに趣味を集中して今猶卷を放たず、拮据黽勉、精研修養相俟つて、仁術の爲め一路邁進しつゝある前途は益々輝かし。

熊埜御堂進

△熊埜御堂外科の今日あらしめたる金澤醫大教授熊埜御堂進博士は、東京帝大系の外科學者として錚々たるものにして、嘗て獨逸に留學し、學位論文「胃ニ至ル神經ト胃潰瘍治癒トノ關係」を完成、北海道帝大醫學部へ提出して、大正十四年二月學位を得、其の今日ある位地と名望を博せるもの、名醫博として其の大なる存在を認められ、今や學内に最も囑望せらる中堅たるのみならず、外科界に逸すべからざる現代の一權威として茲に推獎し、敬意を表す。氏は大分縣の出身にして、明治二十四年生れ、當年四十有五歳の働盛也。慎重なる學者肌の仁也。金澤市下本多町二番町一二に住む。

加藤清一郎

△大連市三河町四に新興せる外科専門の加藤病院あり、院長加藤清一郎博士の新設せる診療所に於て、外科一般及び整形外科を専門とし、特に運動器(主として四肢脊柱)外科を最も得意として内部の設備を整へ博士自ら診療に當面して獨特の手腕を揮ひ、圓熟練達せる手術の好評は、篤實濃厚なる氏が性格と相俟つて益々人氣を獲得し、開業日尙淺きにも拘はらず、近時著るしく醫務の繁忙を極め、遠近よりの外來患者日々輻輳して門前常に市をなすの盛況を呈しつゝありと聽く。

△博士は三高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部助手に任ぜられ整形外科學教室勤務を命ぜらる、同十五年二月同助手を免ぜられ、直ちに福岡市外科補仁堂病院勤務、昭和二年二月同病院を辭し大阪市外科住田

病院(院長住田正雄博士)に勤務す、同四年六月より六年四月迄大阪帝大專攻生として病理學教室に於て主に骨病理學を專攻し、昭和七年八月大阪帝大にて學位を授與せらる、其後住田病院を辭し現任地にて開業今日に至る。斯間、恩師住田正雄教授及び大阪帝大片瀨淡教授に師事して整形外科及び病理學を專攻せり。

△學位主論文は「アチド―ジス」性骨病犬ニ於ケル胸廓ノ變化並ニ「ローゼンクランツ」ノ發生ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)シユラツテル氏病ニ就テ、(2)同上追加、(3)人工的關節長軸固定ノ關節體特ニ骨端線及關節頭骨ニ及ボス影響、並ニ其ノ臨床方面ニ就テ、(4)胸骨並ニ椎體長徑成長ニ就テ(及び蔗糖或ハ CaCl_2 鹽ノ其等骨作用ニ及ボス影響)、(5)異常體質ト骨折治療現象、(6)九大整形外科教室開講以來約十二ケ年間ニ於ケル觀血的骨縫合ノ治驗等なり。就中「シユラツテル氏病ニ就テ」及び「同上追加」は博士の會心の著作にして、氏の論文中の最も得意のものとして特筆すべき也。

△博士の感想に曰く「學界に於ける力量評價は一つに「アルバイト」如何による可くして、政略、情實、宣傳、廣告によるべからず」云々。至言なる哉の感を深うす。氏は京都市下京區西院土居ノ内町加藤清七の長男にして、明治二十九年生る、當年漸く不惑に達す、學究的少壯の紳士也。臨床家としての手腕技倆は、既に多年の経験と相俟つて多量に有し、今や學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、愈よ獨立の舞臺に躍進せる向後の活躍は、多大の期待を以て大に囑望せらる。進取的氣象に富み、快活にして人に厚く、親切にして同情あり、又能く公共の事に盡す。趣味としては戶外運動及び音樂を好む。京都帝大經濟學部教授小島昌太郎博士とは近親の間柄なり。折角の努力奮勵を望む。

志村國作

△水戸市日赤茨城支部病院副院長兼外科部長としての志村國作博士の名聲は、既に其の地方の診療界に喧傳して餘す所なし。氏は神奈川縣立第三中學校より七高を経て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き

同大學病理學教室に入り、同九年四月近藤外科教室に轉じ、同十一年四月衛生細菌學教室に移り、同年七月歐米留學の途に就き、獨逸伯林大學病理學教室ルバルジュ教授の下にて研究し、同時に外科學教室オーガストビール教授に師事し、大正十三年歸朝後直ちに東大近藤外科教室に入り、同十四年三月東大にて學位を得、同年四月より現職に就き今日に至れり。

△學位主論文は「腦内水腫ノ實驗的研究」にして、原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)炎性ニ及ボス中樞及ビ末梢神經ノ影響ニ就テ、(2)生物體內ニ於ケル色素ノ沈着、排出及再吸收ニ就キテ及ビ其鐵色素沈着トノ關係ニ就キテノ實驗的研究等、何れも獨逸文なり。其他論著夥多。出身地は神奈川県中郡大根村北矢名にして、明治二十五年生る、志村宗平博士の弟也。年齒今や不惑に入る四歳、年壯にて學識、手腕、人格共に圓熟して最も得意の時代に在り。勵精格勤、稀に見る至誠の士也。水戸市下川崎町三五一に住む。

新藤輝雄

△山口市新道に新裝せる外科新藤病院あり、院長新藤輝雄博士の經營にして病床數十八、レントゲン其他理學的療法及び一般の設備を完備す。患者には大概自炊の方法を採らせて時代の要望に應ぜんとする主義也。博士獨特の手腕は既に一般に認められ、特に其の最も得意とする内臟外科に至りては他の追隨を許さず、簡易化せる經營の好評と相俟つて益々近郷の人氣に投じ、開業日尙淺少なるにも拘はらず、近時著しく醫院の發展を實現化して盛況を極めつゝあり。

△博士は大正九年岡山醫專卒業後、同年六月より廣島縣立病院勤務、同十年八月より大阪回生病院勤務、同十五年七月より大阪市港區南境川町にて外科開業、昭和三年七月より岡山醫大泉外科教室專攻生として外科學專攻、同六年四月同大學にて學位受領、同六年四月より山口縣三田尻弘中病院副院長兼外科部長就職、同七年五月より現地に於て外科

病院開業今日に至る。斯間主として母校の恩師故泉五郎教授に就て研究し、特に内臟外部に長ず。

△學位主論文は「ビリルビン」腸管循環ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文に、(1)肝機能判定ニ對スル血清及十二指腸膽汁「ビリルビン」ノ意義ニ就テ、(2)諸種肝臟疾患ニ於ケル十二指腸膽汁、膽汁酸ト「ビリルビン」反應トノ關係、(3)肝臟膽汁採取法ノ一新術式ニ就テ(榊原亨、内田ト共著)、(4)副腎移植を併用センアデソン氏病ノ治驗例(榊原亨共著)、(5)興味アル腎臟水腫ノ一例等あり。

△山口縣豊浦郡豊田下村大字中村の人、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳也。年壯にして多年の經驗と共に、今や學識、手腕、人格相俟つて愈々圓熟の域に達し、多大の信望を博す。讀書家にして精研修養克く勉め、書見を業餘唯一の樂しみとし、又時に圍碁に親しみて其の日の勞を慰す。學究的温厚の紳士にして、有爲の臨床家として的人格を尊重す。

片山國幸

△慈惠會醫大教授にして得意の整形外科を擔任し、傍ら東京市牛込區東五軒町五一に整形外科、接骨科、X線科を標榜して獨立開業せる片山國幸博士は、世人周知の如く、我邦法醫學の先覺者にして、精神病學の初期に與つて功勞あり、又禁酒家で著名なりし故片山國嘉博士の嗣子にして、東大系の田代整形外科を巢立ちたる名醫博として整形外科を以て立ち、今や斯科の大家として日本醫學の功勞者たる國嘉亡翁の後を恥づかしめぬ、良教授たり又良醫たるの貫祿を備ふ。

△博士は明治四十三年東大醫科の出身にして、傳研の宮川、東大の増田、前名古屋醫大の藤井、千葉の高橋等々の諸博士と同期生也。卒業後整形外科を志して母校の田代教室に入り、後ち轉じて和泉橋病院に入りて研究を積み、學位主論文「坐骨神經切斷家兎ノ血液並ニソノ下肢筋肉ノ血清化學的研究」を完成、母校に提出して大正十四年七月學位

を受領せり、その前後より慈惠會醫院に迎へられ、同校の昇格と共に慈惠醫大教授となり今日に及べり、その傍ら自宅にて開業一般の診療に従事し居れり。明治十七年の生にして、壯齡今や知命に入る二歳、元氣旺盛にして今猶精研に餘念なく、醫育と實地診療とに興味を集中して亦他に道樂を需めず、至誠公に奉ずるの信念を以て唯だ其の天職なるを樂しむの概あり。性格は外科特有の男性的にして快活なり、思慮あり識見に富み、學士會などにも大に氣焰を昂げ中堅振りを見せて居るとの評判也。春秋猶豊かにして、前途洋々たるの秋、切に自重加餐を祈ると共に益々努力奮盡あらん事を望む。

小田敬進

△岡山縣後月郡井原町一〇七四に外科専門を以て開業せる小田敬進博士あり、岡山醫大派の新人として最も囑望せられ、學位獲得後引續き泉外科にて研究中なりしが、教室を巢立ちて診療界に躍進して以來日尙淺きも、多年蘊蓄せる獨特の手腕を發揮せんとする前途の展開や頗る囑目に値す。

△博士の略歴より見れば、岡山縣興讓館中學校、松江高等學校を経て、昭和四年三月岡山醫大卒業、同六年九月廣島市内海病院外科醫長に就任、同年十二月同院辭任、直ちに岡山醫大泉外科助手として同教室に勤務の傍ら研究に従事し、同七年十月同大學にて學位を授與せられ、同八年九月開業す。斯間故泉伍郎教授指導の下に外科學一般を專攻せり。△學位主論文は「コレステリン」新陳代謝ニ關スル知見補遺並ニ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)脾臟「ホルモン」ノ「コレステリン」新陳代謝ニ對スル影響、(2)單開胸術ニ據ル外科的肺結核療法ニ就テ、(3)後腹膜腔ヨリ發生セル交感神經形成細胞腫ノ一例、(4)非器質性成人幽門痙攣症ノ治驗例、(5)「メツケル」氏蕪室ヲ内容トセル嵌頓「ヘルニヤ」ノ治驗、(6)野球ニ據ル肩胛骨々折ノ治驗例等なり。△博士の感想に曰く、(一)醫育施設増設過多、(二)學位を研究方面に依り區別し、專攻科目修業年限の最少限を規定し、以て世人を學位崇拜より技術本意に廻らしめること、(三)非醫者を徹底的に掃蕩し之に體刑を附し、社會の誤れる偶像崇拜を覺醒せしむること、(四)醫藥分業に反對云々。

△博士は岡山縣後月郡芳井町大字梶江の人、小田寅の男にして、明治三十五年生る、年齒未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士也。意志強固にして研究心に富み、切磋卓勵甚だ勉むる所あり。趣味としては洋畫、音樂、釣を好む。岡山縣後月郡芳井町大字梶江に私邸あり。

江守彌次郎

△東京市豊島區池袋町池袋病院外科醫長として江守彌次郎博士あり。氏は福井縣の出身、明治十八年生にして、東大醫科大正三年の出身也、卒業後引續近藤外科教室勤務、同七年七月日赤富山支部病院外科醫長として赴任、同十年十二月之を辭して直ちに東大大學院入學、同十三年卒業、同年七月日本醫專教授兼外科醫長就任、同十四年十二月東大より學位受領、同十五年十一月より現職に就任今日に至る。學位主論文は「骨組織再生現象ニ及ボス「ヴァイタミン」Aノ影響ノ實驗的研究」にして、他に論著夥多あり。運動と圍碁とを趣味す。好箇の臨床家として敬意を表す。自宅は淀橋區戸塚町二ノ七三に在り。

伊東一生

△愛媛縣吉田町公立吉田病院長としての伊東一生博士の名聲は、既に其の地方の診療界に喧傳して餘す所なし。當病院は吉田町外五ヶ村衛生組合立病院にして、内科、外科、産婦人科、小兒科、眼科を有する綜合病院として、當地診療界に於ける公共的最高の診療機關たり。同病院長としての博士の責任や決して輕からず、日々自ら率先して臨床に勵しみ、外科を擔任して獨特の手腕を揮ひ、併せて他科の擔當醫を督勵協力して益々院務の發展を圖り、診療手術の好評は氏が德望と相俟つて益々遠近の人の望を博し、名實相伴ふ名病院長として大衆より多大の信

頼と尊敬とを受けつゝあり、地方診療界の爲め大に人意を強からしむるに足る。

△博士の學歴より見れば、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部近藤外科副手となり、近藤教授退職後引續き青山外科に助手として勤務、同十五年四月愛媛縣吉田町公立吉田病院外科醫長として赴任、昭和五年四月内地留學として同病院より岡山醫大にて研究に従事せしめられ、同七年五月滿期歸院し、同年十月岡山醫大より學位を授與せられ、同年十二月より同病院々長に就任し現在に至れり。斯間、主として東大名譽教授近藤次繁博士、東大教授青山徹藏博士、岡山醫大教授緒方益雄博士等に師事して外科學を專攻せり。

△學位主論文は「過敏症ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は「過敏症抑制作用ニ關スル實驗的研究」の外三篇あり。氏の出身地は長崎縣南高來郡土黒村にして、明治三十二年生る。學究的温厚の紳士にして、篤學者としての閱歷は氏が面目を物語り、同時に精勵恪勤、至誠の士として推獎に値す。年齒未だ三十有七歳、少壯の意氣と共に研究心に燃え、診療と研究とに興味を集中して亦他事を顧みず、至誠以て公に奉じ「醫は仁術也」をモットーとす。賦性謹直にして寛厚能く人を容れ、後進を愛撫し指導に務む。將來有爲の臨床家として敬意を表し、茲に推獎す。愛媛縣吉田町北小路に住む。

三村忠雄

△前長崎醫大助教授にして整形外科學擔任たりし三村忠雄博士は、姫路市光源寺前町二番地をトして、近く外科病院を新築、昭和十年九月落成と共に開業、外科一般の診療を開始せり。博士は京都帝大系新進の外科學及び整形外科學者にして、大學院在學中、専ら伊藤教授の親しき指導を受け、京都帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。應て展開せんとする博士の將來は茲に獨立の基礎を確立し、洋々たる前途を語るに餘裕綽々たるものあり。△博士は六高を経て、大正十四年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに外科教室に勤め外科並に整形學を專攻す、十五年十

二月三重縣志摩郡鵜方高砂病院に奉職、副院長に任ぜられ外科を擔任す（同病院初代外科醫長）、昭和三年十月同病院辭職、同年十二月京大大學院入學、整形外科學專攻、六年十二月退學、引續き整形外科教室に勤務す、七年八月任長崎醫大助教授、同年十月學位を受領す、同九年十二月辭職、同十年九月現住所に病院新築開業す。

△學位主論文は「固定繃帶ニヨル筋攣縮ト壞疽トノ關係ニ就テ」にして五篇より成る。參考論文は、(1)交感神經ト迷走神經ノ接合ニ就テ實驗的研究（三篇）、(2)「ミエログラフィー」ノ實驗的研究（二篇）、(3)オスグート、シュラツテル氏病ノ原因ニ就テ、(4)黒色肉腫ノ一例ニ就テ等なり。

△博士は兵庫縣明石郡垂水町鹽屋に本籍を有し、同縣飾磨郡四鄉村見野赤藤多一郎の三男、明治三十二年生れ、昭和五年三村に改姓す。年齒未だ三十有七歳にして意氣潑刺たり、學究的温厚の紳士にして、志操堅實、柔道五段にして剛健の氣象に富む、平生の趣味としては柔道以外研究に熱心甚だ務め、今は開業勿々診療に余念なく大に將來に待つあらんとす。賦性穩健篤實、謙遜克く自抑して銜はず、恬澹として功名榮達を意に介せず、人と接するに親切にして能く愛し、己を虚うする態度の奥床しさは人に敬慕せらる。

中村喜重

△前の陸軍歩兵學校附兼同校研究部々員より昇進して、現在にては陸軍大學校附兼陸軍々醫學校部員として在勤中の中村喜重博士は、千葉醫大派の名醫博中の錚々たる外科學者にして、今や陸軍々醫界に於ける新進教授として、最も囑望せらるゝ新人物也。氏の學位論文は「三叉神經（節前）切斷ノ該神經領域ニ及ボス影響ニ就テ」が主論文にして、外に參考論文として、(1)胃切除術式ノ檢討、(7)胃腸筋ニ多發セル癌腫ニ就テ、(3)「マクロシクマ」ニ因ル「イレウス」ノ治療法、(4)診斷困難ナリシ胃、十二指腸癌ニ就テ等あり。本論文に對する學問的批判は既に學界に定評あり。

△博士の學歴より見れば、昭和二年三月千葉醫大卒業、同年六月任陸軍二等軍醫、補近衛歩兵第四聯隊附、同年八月陸軍々醫學校入學、同三年七月同校卒業、同年十月補千葉衛戍病院附、同五年四月千葉醫大研究科入學、同七年三月同科修業、同年四月補陸軍歩兵學校附兼同校研究部々員、同年十一月千葉醫大にて學位を授與せられ、同九年三月補仙臺衛戍病院附、同十年八月現職に補せられ今日に至る。斯間主として母校の恩師高橋信美及び伊東彌惠治兩教授指導の下に研究せり。

△博士は千葉縣山武郡豐海村眞龜の人、中村吉徳の三男にして、明治二十八年生る。學者肌の人にして物に動せず、名利に恬澹にして自信に強く、少壯の意氣益壯にして研究心潑刺たるものあり、今は醫育と研究とに趣味を集中して亦他を顧みず、一意専心、至誠奉公の念に燃ゆる純潔の學者たり。而かも春秋猶頗る豊富にして、洋々たる前途は益々有爲多望なるの秋、幸ひ健康にして、軍醫界の爲め折角の精研努力あらん事を望むや切也。

田中義憲

△競争激烈なる浪速診療界に割據して以來、東淀川區國次町二九八に自己經營の第一診療所を設け、内容の充實と相俟つて、外科を標榜して躍進的に發奮勵精しつゝあるは田中義憲博士也。開業日尙淺くも、博士獨特のメスの好評と、至誠以て公に奉ぜんとする熱誠努力とは、漸次独自の地盤を獲得して堅實なる發展振りを示し今や抜くべからざる繁榮を實現しつゝあり。學系は慈惠醫專出身の外科學者にして藥理學の造詣深く、大阪帝大より學位を受領せる名醫博たる一人物也。

△更に學歴より概括して見れば、大正九年慈惠醫專卒業後入隊、補近衛歩兵第三聯隊、野戰重砲兵第六聯隊附を経て大正十二年任陸軍二等軍醫、依願豫備役に編入せらる、同十三年より城南病院副院長として勤務の傍ら、大阪帝大へルテル外科にて研究、昭和三年末より大阪帝大藥理學教室にて研究を續行す、同七年十一月學位受領、爾來現任所に

て開業今日に至る。斯間恩師長崎仙太郎教授に就て藥理學を專攻せり。
△學位主論文は「中間代謝ニ及ボス諸種麻酔劑ノ影響ニ就テ」にして、參考論文としては、(1)「ノイリン」ノ蛋白質新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「バラオシ、フェテル」ブレントラウベン」酸並ニ「オキシフェテル」乳酸ノ灌流蓋肝出糖及ビ家兎血糖ニ及ボス影響、(3)健常及飢餓家兎ノ血清沃度酸値ト殘餘窒素並ニ「二單糖類」ノ輸入ニ因スル其變化、(4)血清沃度酸値及殘餘窒素ニ及ボス「三内分泌臟器劑」ノ影響ニ就テ、(5)右旋性「アルギニン」メチールエステル」ノ作用ニ就テ等あり。

△出身地は島根縣八東郡津田村大字西津田にして、明治二十五年田中龜太郎の二男に生る。當年漸く不惑有四歳にして、年壯銳氣、臨床に多年の經驗を有し、今や手腕、學識、人格共に圓熟の域に入る。不斷の勵精努力は、臆て成功の大なるものを齎らすべき前途あるを期待せらる。居常の趣味としては、研究と醫療そのものの外特筆すべきものなきが如し。將來有爲の資に富む臨床家としての前途を期待すると共に、折角の努力奮闘を望むや切也。

今牧 甲子男

△前の津市館病院長として活躍し、嘖々たる名聲と共に其の玲瓏たる手腕を稱せられ、外科の大家として仰がれたる今牧甲子男博士は、現在松坂市魚町に於て獨立開業し、其の専門とする外科領域に獨特の手腕を發揮し、致々營々として独自の地盤を開拓しつゝあり。學系は新潟醫大専門部の出身にて、母校より學位を得たる篤學の名醫博也。研學多年の結果、専門的智識の堪能なるは言はずもがな、臨床的經驗に富み卓越せる手腕を有す。今や獨立の活舞臺に躍進して堅實なる發展を遂げつゝあるは刮目に値す。感想に曰く「人として此世に生を受けたる以上此世に何等かの足跡を印して人生を終りたいと云ふのが私の念願である醫者として立つた私は此世に百萬の富を残す事も高貴なる名譽を残す事も不朽の藝術品を残す事も出来ない、そこでせめて醫學の研究に進み多少とも業績を残

し微かながらも世界醫學文獻に自分の名を留むると云ふ事が無力なる私に出来る唯一と考へた、之が私の學位論文完成の動機である」云々。

△博士の學歴及び閱歷を顧みて、之を公開すれば博士は大正十一年新潟醫大専門部を卒へ、同大學外科學教室に入り助手として故池田教授及本島、中田教授に師事する事四年、大正十四年十一月三重縣桑名病院副院長に就任し専ら外科を擔任し、昭和四年三月辭して二度母校に歸り、川村、中田兩教授の指導の許に腫瘍學の研究に従事し、昭和七年七月三重縣津市館病院長に就任せり、同年十二月新潟醫大にて學位を受領し、退職後現住地に開業今日に至る。

△主論文は「可移植性内被細胞腫ニ關スル實驗的研究及組織培養ニ據ル内被細胞腫ノ研究」にして、外に參考論文としては、「犬腫瘍ノ比較病理」外三篇あり。

△博士は長野縣下伊那郡伊賀良村の人、明治三十一年生る、當年三十有八歳也。學究的渾厚の紳士にして、其の閱歷は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ、手腕漸く壯熟して最も得意の時代に在り。勵精家にして其の診療に臨むや熱心甚だ力め、誠意親切を以て終始し、患者をして信頼と敬慕の念を起さしむる徳を有す。賦性篤實渾厚、臨床家としての特徴を具備するを多幸とす。趣味としては、スポーツ、洋書、讀書を好む。今猶臨床の餘暇研究を捨てず、讀書精研修養相俟つて、研學切磋甚だ勉むる所あり。人格の尊重を高調するの今日、博士の如きは學德兼備せる人物として推獎するを慶ぶ。

大武 喜代治

△多士濟々たる海軍々醫界に於ける少壯醫博にして、錚々たる外科學者として最も矚目せられつゝある海軍々醫少佐大武喜代治博士は、現在横須賀海軍病院に於ける中堅にして、外科長として活躍し、内外相呼應して多大の信望を博しつゝあり。學系よりすれば、氏は金澤醫大に屬し、海軍々醫學校出身の恩賜銀時計組の秀才に

して、專攻は外科の外、耳鼻科及び婦人科にも長ず、斯間の指導教授は主として東大の竹内教授、海軍の石原、長田比企、三島の各博士にして、學位は東京帝大より獲得せる新進人物也。

△更に氏の略歴を概括して公開すれば、大正七年六月金澤醫專卒業直ちに海軍入籍、同九年任海軍々醫中尉、同十二年任海軍々醫大尉、昭和三年海軍々醫學校高等科卒業の時、成績優等に付銀時計下賜せらる、同年十二月任海軍々醫少佐、同時に横須賀海軍病院外科長に任ぜられ、同年同月東京帝大にて學位を授與せられ、現今に至る。

△學位主論文は「葡萄狀球菌ノ生物學的性状研究」にして三篇より成る。參考論文としては、(1)一種ノA型「バラチフス」菌ニ就テ、(2)酵素ヲ應用セル寒天培養基ノ再製法ニ就テ、等あり。

△感態の二、三を披瀝して曰く(一)政黨政治の傀儡に依る醫學校設立を絶対に反對し、醫師の人口増加と不平均なる過剰を防止せんとす。(二)如何はしき醫育機關の現存する今日は、新卒業生に對し當分の間、嚴正なる國家試験に合格せるものに限り醫師たるの資格を與ふる事最も緊要なり。(三)非醫者の根絶を期する事急務とす(柔道技師に接骨術の開業權を附與するが如きは言語同斷なり)。

△博士の出身地は福井市佐佳枝上町にして、明治二十八年生る、當年漸く不惑有一歳也。少壯の意氣益壯にして研究心潑刺たるものあり、研究と醫療そのものに對しては多大の興味を有し、熱心と誠實とを以て診療に臨むの餘暇、孜孜として精研修養相俟つて研學切磋甚だ勉むる所あり。賦性謹直にして、至誠公に奉ずるの念に篤く、勵精努力主義をモットーとする概あるを觀る。平生人に接し後進を待つに、懇切にして寛容なるは、將來を大ならしむる人格者たるの感を深からしむ。業餘の趣味としては庭球と麻雀なりと聽く。春秋猶豊富なるの秋、幸に健康にして、爲國家益々努力奮盡あらん事を望むや切也。横濱市外金澤八景聚綠庵に住む。

安達 安

△陸軍一等軍醫安達安博士は現に歩兵第六十一聯隊に在り。大阪醫大出身の外科學者にして、卒業後陸軍々醫界に出仕して以來、外科修學の傍ら専ら觸接免疫に關する研究を進め、學位論文は主として夜間祭日休日を利用して、恩師現堺市民病院長武銚宜博士指導の下に實施せしものにして、之を大阪帝大醫學部へ提出、恰も興安嶺作戰に齊々哈爾出發の前夜教授會を通過せる結果同大學より學位を受領せり。要するに氏の此の研究は、氏が軍務に奉職の餘暇に許可を得て、職に忠實を盡しながら靜かに日夜毎に眞劍に努力研鑽せるありのまゝ發表せるものにして、その獨學不羈の精神と、不撓不屈の努力とは、立志傳的篤學の士としての範を示すに足り、斯間氏の面目を語るに充分なり。たま／＼氏の感想を聽くに、博士曰く「いづれの世界も然あらんも、活動舞臺に人數が多くなりますと各自の本分と不知不識の間に遠ざかる様な氣がいたします、醫界もどうもさうなりつゝあるのではないかしらと思はれます醫術國營もさげられてゐますよいことではありますが、いかに組織を改變いたしましたも各自が靜かに反照しつゝ進むのでなければ一妄去り一妄現で何の効もありません」云々。氏の眞面目さを語りて餘蘊なし。

△博士は大正十四年大阪醫大卒業後、見習醫官として歩兵第三十七聯隊に入隊、同年六月二等軍醫に任官し、善通寺衛戍病院附となる、昭和四年三月一等軍醫に進級、同年四月大阪醫科大學研究科に入學を命ぜらる、ヘルテル、小澤凱夫教授及び武銚宜博士の指導を受け、外科修學の傍免疫に關する研究をなす、昭和六年騎兵第四聯隊附となり、七年八月鐵嶺衛戍病院附として出征し、同年十月關東軍野戰病院長として野戰勤務に従事し東邊道興安嶺吉林東境に流轉す、翌八年二月公主嶺陸軍病院長に轉じ、九年八月歩兵第六十一聯隊附となり歸還す。斯間、學位主論文「觸接免疫知見補遺」及び參考論文「觸接免疫ニ關スル研究」十篇を大阪帝大に提出して、昭和八年一月學位を受領せり。

△博士は茨城縣稻敷郡大須賀村脇川青野敬三郎五男にして、長村長幸安達仙太郎（叔父）の養子となる、明治二十八年生也。眞面目なる學究的好學の士にして、年齒漸く四十有一歳、少壯の意氣に燃え興學心に富む。勵精奮勵、至誠

以て國家に奉じ、熱心克く忠實を盡し以て天職と爲すの概あり。而かも性來謙讓にして自己の識見を尙はず、偏に恩師先輩の助力を感謝し、淡々として己れを薄うし、寛厚克く同僚に親しみ、又能く後輩を受撫す。強ひて言へば可なり短氣の方なれど、數年來禪書を愛讀して自抑するに勉めつゝあり。趣味としては擊劍を好み心身を鍛鍊す。家庭には妻いしとの間に三男一女あり。横須賀海軍共濟組合病院婦人科、根本衛博士とは親戚なり。和歌山市西濱一一五に住む。

長井 忠

△大阪市東區北久大郎町一丁目、外科界の泰斗住田正雄博士の經營する外科住田病院あり、浪速診療界に頭角を抜き關西外科界の一勢力たり。新進の長井忠博士は副院長として克く院長を輔佐し、博士獨特の新手腕を發揮して餘す所なく、殊に其の最も得意とする整形外科、寧ろ運動器外科及び畸形の外科領域に就ての犀利なるメスの評判は噴々たるものあり。博士は九大系の外科學者にして、恩師住田正雄博士に多年師事して整形外科を、又大阪帝大教授片瀨淡博士に就きて病理學を專攻し、大阪帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、研鑽多年、學理と共に實地の經驗に富み卓越せる手腕を有す、其の今日ある博士の面目を語るに充分なり。感想に曰く「四方八面ドツチを見ても、しかつめらしく一人前の大人の様な顔をしてゐるのが面白く、我々中々大人になれない者からすれば羨ましい様でもあるけれ共、皆が皆モットこの童心に歸つて、毎日小學校へ通つてゐるやうな心算になつたら、世の中の進歩も多少早からうし一緒に遊んでも愉快だらうと思ふ」云々。博士の心境を物語りて痛快を覺えしむ。

△博士は大正十四年九州帝大醫學部卒業後、整形外科教室に入りて住田博士に従ひ、間もなく住田博士に従つて大阪外科住田病院に來り現在に及ぶ、その間阪大醫學部病理學教室片瀨教授に師事すること二ケ年、昭和八年三月大阪帝大より學位を授與せらる。

△主論文は「榮養ノ創傷治癒ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)各種養素ト實驗的パロー氏論、(2)各種養素ト胸腺トノ相關ニ就テ、(3)骨肉腫剔出後ノ廣汎ナル骨移植ニ就テ、(4)大腿骨頸部骨折ノ治療法トソノ治驗、(5)太陽光線ト創傷治癒、(6)血液ノ「アナドージス」ト「アルカロイド」ニヨル副腎内「アドレナリン」含有量ノ消長、(7)頸肋骨ニ就テ等なり。著書には、(1)浪華名醫列傳、(2)日本整形外科疾病史（一部發表）等最も著はる。△博士は静岡縣周智郡城西村奥領家長井米吉の長男にして、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歳、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。其の今日ある經歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、今は腕の冴え盛りにて最も得意の時代に入る。殊に勵精恪勤の士にして、學究的濃厚の少壯紳士たる氣品を備え、又眞面目なる臨床家としての特徴を具備す。其の患者に對する態度の熱心忠實にして親切なるは評判にて、篤き信望を博する所以かと思はる。性格より見たる長所としては、純眞にして物に熱し易く、何でも彼でもうんと遣る主義にて、徹底的に成し遂げる熱と力とにあるが如し。研究以外に古典籍の聚集に興味を有し、日本醫典特に外科に關する古典の聚集は關西にその右に出づるものなし。聞説、北海道の關場博士とは常に交歡文通あり、殊に外科に關する限り東の關場、西の長井と自他共に許す評判なりと。南涯、醉堂、亞米齊等を號とす、又スポーツ、長唄等を好み、酒を嗜好す。大限市住吉區昭和町東四丁目三四に住む。

岩藤良秋

△住友別子鑛山株式會社醫務職員たる岩藤良秋博士は、現在別子住友病院山根分院外科勤務、博士獨特の手腕、聲望は、不斷の勵精努力と相俟つて内外の信用を博す。學系は岡山醫大派にして、恩師津田誠次教授に就て外科學を專攻せり。特に内臓外科及び外傷外科を最も得意とし自信を有す。住友病院は別子鑛山株式會社、住友化學工業株式會社、住友機械製作株式會社、水力發電株式會社、アルミニウム株式會社等の住友連系會社職員、

勞働者の診療を主とし、併せて外部患者の診療を行ふ當地方診療界に於ける最高の診療機關たり。住友病院本院（新居濱所在）及び岡山根分院は各科を有し、地方赤十字社病院又は縣立病院に比し、内容設備に於て優るとも劣ることなし。

△更に學歴より見たる博士は、岡山縣立一中より松江高校を経て、昭和三年三月岡山醫大を卒へ、直ちに日赤香川支部病院に奉職、同四年九月迄勤務、それより直ちに岡山醫大津田外科教室副手、同七年十一月同大學助手となり、同年同月より現在に至る迄現職にて別子住友病院勤務、斯間昭和八年四月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「實驗的急性腹膜炎ト肝臟病理組織學的所見」にして五篇より成る。參考論文は、(1)慢性炎症性網膜腫瘍ニ就テ、(2)正中神經ニ發生セル巨大惡性神經腫瘍及レックリングハウガン氏病ニ就テ、(3)側頸部血囊腫ニ就テ、(4)脊椎「カリユス」及其他二、三外科的疾患ニ於ケル腦脊髄液高田、荒氏「フクシン」昇末反應ニ就テ、(5)再ビ「ノイタノーム」ニ就テ、(6)同種血球凝集現象ヨリ見タル腫瘍細胞に就テ、(7)先天性胸骨破裂症ノ一例ニ就テ等なり。

△感想に曰く「實地醫家は何と云つても患者の病を治すのが目的だから腕を常に磨がいてゐなければならぬかと存じます、かくせば自然非醫者の横行も少くなる道理です。そしてつと醫業を高尙にし、又醫師自身の人格を陶冶し他より輕侮されない様にしなければならぬ」云々。氏は岡山縣上道郡古都村藤井堀野孫三の二男にして、明治三十六年生れ、現在本籍地たる岡山縣上道郡高島村國府市場岩藤丑衛の養子となる、年齒未だ三十有三歳の少壯紳士也。學究生活より診療界に躍進して以來、日尙淺くも、孜々として倦まざる努力勵精振りは、光る學位の前途を益々大ならしむる所以と見るべく、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。有爲の資に富む臨床家としての博士や、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望む。讀書家にして書見を楽しみ、又將棋を趣味す。現住所愛媛郡新居郡角野村山根。

竹村文祥

△札幌市カトリック天使院經營札幌天使病院に外科、婦人科部長として竹村文祥博士あり。本病院はベット百三十、醫師六人、他に北廣島分院、無料診療所、社會事業部、幼稚園、附屬印刷所の附帶事業を行ひ社會救濟事業の急先鋒として堂々たるものなり。博士は北海道帝大出身の新進にして、大學院在學中、恩師柳博士指導の下に外科學を、同今裕博士に就て病理學を專攻し、大學院を卒業して母校より學位を獲得せる少壯の名醫博として知られ、専門は婦人科及び外科特に内臓外科を最も得意とす。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、如何に學究の該博なるかを語るに足る。而かも年齒未だ少壯にして研究心に富み、今や新手腕を發揮して獨特の領域に精進し、學を鍊り腕を磨くに餘念なき前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

△博士は北海道帝大豫科を経て、昭和三年北海道帝大醫學部を卒へ、直ちに柳外科教室に入局し、研究の傍ら家計困難の故を以て札幌逓信診療所外科に隔日通勤す、而かも生計日に非なるを以て、同年七月郷里に開業せるは實に同氏が、學生時代つとに精勵を怠らず「卒業したら獨り立ちが出来る」との信念を全ふせるものと云ふべし。昭和五年一月歸局し、大學院學生として診療の傍ら専ら腸閉塞の研究を行ひ、二ヶ年にして大學院卒業、七年八月札幌市天使病院外科婦人科部長として就任、八年五月學位授與、以て現在に至る。

△主論文は「實驗的腸閉塞論」にして七篇より成る。外に參考論文としては、(1)唾石ノ臨床的知見補遺、(2)「シヨック」ノ成因ニ關スル知見概観、(3)メツケル氏憩室炎ニヨル絞扼性腸閉塞症例補遺、(4)外科的疾患ト沃度酸値、(5)本邦ニ於ケル外傷性腸管皮下破裂ノ統計的觀察、(6)「ヌペルカイン」腰髄麻痺ノ一年、(7)自家體験蟲様突起症例補遺、(8)「レントゲン」線放射ト血清「コロイド」、(9)氣管支喘息患者ノ血清無機「イオン」ニ就テ、其他數篇あり。單行本として發表せるもの、(1)趣味の生體科學(誠文堂版絶版)(2)圖説小外科學(南江堂版)(3)人體遍路(平凡社版)(4)人體九ミリ半(最近刊)等。

△博士が目下執筆中の斷片を探るの一節を借りて氏の感想に代えんとす「醫師は唯物主義者であるか?。否、藥品が唯物主義なのである。どんな病氣でも薬とメスの対象になり得ると思ふ所に唯物主義といふ生活の剝製品が生れる。

醫學的安心立命とは何か?。それは、人の問題であつて薬の問題ではない。病と薬とは對立しない。對立するのは人と人である。この故に醫師は病を慰すのみならず病める魂をも慰さねばならない。病めるが故にその人は健常のカテゴリを脱却して心理的平衡を缺いて居る。醫師の患者に對する第一の認識はこゝから出發せねばならない。ダイナミカルな肉體の甦生に鞭うつマテリアリズムの擡頭は潜れたる心理的殺人を敢てするものと云へやう」云々。

△青森縣南津輕郡居村竹村由雄の次男にして、明治三十五年生る。年齒未だ三十有四歳、少壯の意氣に燃え、向學の精神鬱勃として禁ぜざるものあり。研究室を離れて診療界に進出するや、拮据匪勉、熱心克己誠意誠實を以てし、患者に對するに飽迄親切を盡す點は、博士の特徴として傳へられ評判極めて良し。賦性濃厚篤實、人と接するに快活にして懇篤なる一面には、謙讓にして恩師先輩の助力を説き、克く自抑して自己の才學を衒はず、淡々として己れを虚うする態度の奥床しき所に、高邁なる人格を窺はれ、人に敬慕せらるゝ徳を有す。研究は博士の最も趣味とする所にして、業餘猶精研に餘念なく、其の最も得意とする生物學的外科領域に一路邁進しつゝあり。春秋猶頗る豊富なれば、向後の活躍と相俟つて前途の大成大に期待せらる。なほ氏は生來文筆に長じ所謂口も八丁、手も八丁、大學時代は北大辯論部主任、醫學部學友會主任として活躍し、現時寧日なき診療の餘暇幾多の著書あり、その一代の念願は綜合醫學の大乗的著述にありといふ、以てその意氣を知るべし。札幌市北十一條三丁目に住む。

長峰恒信

△大分縣中津市殿町長峰外科醫院長長峰恒信博士は、長崎醫專出身銀時計組の秀才にして外科を以て起ち、九大教授石原誠博士に就て生理學を專攻し、九州帝大より學位を獲得せる名醫博中の篤學者也。殊に特筆

すべきは、氏が幼時家運没落の後を承けて備さに辛酸を嘗めたるも、天資英才にして興學心に燃ゆる此の天才兒を空しく郷里に埋れしむるに忍びずと、伯父竹尾文四郎氏の厚意により、小學校卒業後壹岐中學に進むに至り、其學資を補助されて在學中常に首席を以て終始し、第一回の卒業生として同校を卒ゆるや、壹岐の醫師井手康治氏の後援により更に進んで長崎醫專に入學するを得、同校も優等の成績を以て卒業するや、直ちに聘せられて小倉記念病院に外科擔任として赴任し、精勤十一年に及ぶや、時の院長副島博士の特志により九大醫學部に内地留學として入り研究する事を得、滿三星霜に亘る努力研鑽の結果、美事學位を得、多年の宿志を茲に始めて實行し得たる厚志篤學の美點にあり。斯くて現住地に開業以來、日尙淺くも、十四名迄の入院設備と併せて診療室、手術室其他の設備成り、多年鍛へ上げたる博士獨特の手腕の好評は、美德に富む氏が聲望と相俟つて、益々遠近の有望を吸収し、近時著るしく發展の進境に向ひ、門前常に市をなすの盛況を呈しつゝありと云ふ。

△更に氏が學歴より概括して見れば、壹岐中學校を経て、大正七年長崎醫專卒業（銀時計授與）、同年より昭和三年迄滿十ヶ年、小倉記念病院外科奉職、院長副島豫四郎博士の特志に依り九大醫學部に内地留學研究、昭和八年五月學位受領、爾來現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「保生液酸素量ノ小腸ニ對スル影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)先天性膀胱破裂症ニ對スル觀血的療法ニ就テ（副島博士共著）、(2)海狸小腸ニ對スル「アドレナリン」作用ニ就テ等の二篇なり。特に内臟外科に興味を有し、主として腸の研究に没頭せり。

△博士の感想に曰く「毎朝合掌向佛、世の恩人の有難さに泣く。學界にも一般社會にも何一つ不平は無い、唯唯難いばかりである。相當額の診療費ふみ倒しにも時に逢ふが、貧乏の味を十分に知る自分には、何もかも貧乏のこと、同情して請求等はしない。副島博士と言ひ石原教授といひ何も日本一の大家、自分は實に師匠運がよかつた、進も

あんな偉い大家學者には成れない、その點は全くあきらめて居る。自分は貧乏人の味方となり親切な涙もろい點では誰にも負けない日本一の仁の實地家となつて世、人、師匠達にせめてもの御恩返しを仕度い念願で一杯である」云々以て博士の心境を物語り、博士の美德を察せらる。氏は長崎縣壹岐郡沼津村士族戸主長峰要助の長男にして、明治二十七年生る。學究的濃厚の紳士にして、篤學者として輝しき閱歷は燦として氏の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。趣味は語學、麻雀、筑前琵琶を好む風あり。性來短氣にして潔癖の癖あるも、快活能く人に接し、同情あり温情に富む殊に報恩謝恩の念に深く、氏を今日あらしめたる先輩恩人諸氏の肖像を壁間に掲げて、其溫容に接し「今日獨立して門戸を張り得たるは皆是等の恩人の餘澤のみ、故に一身の富貴を願はず、之等恩人への報恩として生涯を天職に奉仕したい、而して誠心誠意、愚直で働くのを見て下さい」と、日夕修養に努めつゝあるは誠に床しき限りにて、氏の云ふ愚直とは此の意味にありと云ふ、澆季の世稀に見る徳操の士と言はざるを得ず。一面又氏は頗る教育に關心を持ち且つは母校へ報恩の一端として郷里の小學校其他へ高價なる圖書、學校用品等絶へず寄贈しつゝあり、浮華輕薄の士への一服の清涼劑として可也。家庭には多津子との間に四男一女あり。阪大耳鼻科教授山川強四郎博士及び廣島中央病院松尾信吉博士とは従兄弟半に當る。

金澤哲郎

△廣島遞信診療所に於て、外科、整形外科を擔當しつゝある金澤哲郎博士は、熊本醫專の出身にて、九州帝大より學位を獲得せる少壯醫博として其の手腕を認めらる。斯間の指導教授は九大教授神中正一博士にして、整形外科を専攻せり。學位主論文は「脊椎椎體發育層ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文として、(1)大腿骨頸部内側骨折後ニ於ケル骨頭ノ組織學的研究、(2)脊椎々體骨折ト横突起骨折トノ頻度ニ就テノ小統計等あり。本論文に對しての學問的批評は既に學界に定評あれば贅せずもがな、多年努力研鑽の跡を物語るに充分也。今や其の蘊蓄せ

る學識と經驗とを以て、獨特の手腕を自由に發揮し得るの立場に在り、氏の得意や想ふべく、同時に又向後の活躍を期待すべき也。

△更に學歴より見たる博士は、大正十一年五月熊本醫專卒業後、直ちに熊本市片岡病院外科勤務、同年十二月一年志願兵として熊本歩兵第十三聯隊入隊、除隊後引續き片岡病院勤務、同十四年十一月縣立鹿兒島病院副院長(レントゲン科主任)を被命、同十五年四月任陸軍三等軍醫、昭和三年九月鹿兒島病院辭職、直ちに九大醫學部附屬醫院醫員囑託となり整形外科教室勤務、同八年二月依願醫員解囑、同年三月熊本醫大副手として東外科勤務、同年五月九州帝大にて學位授與、同年八月副手辭任、直ちに福岡縣筑紫郡朔病院外科勤務、昭和八年十二月廣島逓信局局醫囑託、廣島逓信診療所外科整形外科擔當今日に至る。

△熊本市春日町士族故金澤武源太の五男にして、明治三十三年生る、當年漸く三十有六歳也。少壯氣鋭に富む學究的臨床家にして、至誠以て公に奉ずる熱誠の士也。多趣味の人にして音楽(洋樂)、寫眞、スポーツ(特に野球、水泳)釣等を最も好む。前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈る。廣島市牛田町南區一六に住む。

篠原 一幸

△徳山海軍共濟組合病院外科醫長篠原一幸博士は、岡山醫專出身の外科學者にして、北海道帝大教授西川義英博士に就て外科學を專攻し、北海道帝大より學位を得たる名醫博として其の手腕を認めらる。學歴より見れば大正八年岡山醫專卒業後、引續き同校西川教授に就き外科學一般專攻、同十五年より北海道帝大醫學部西川外科教室に勤務の傍ら研究を續け、昭和八年七月學位を授與せらる、同九年現職に就き今日に至る。學究生活より離れ實地診療界に進出して以來、未だ其の過去を語るに餘り日尙淺少なれども、今や博士獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、孜々として勵精し不斷の精進を續けつゝある前途は益々有爲多望にして、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。

△學位主論文は「遊離骨膜移植ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文として、(1)横隔膜下膿瘍、(2)ペルテス氏病特ニ組織學的知見補遺、(3)大轉子結核、(4)大腿圓靱帶切斷ノ大腿骨々頭ニ及ボス影響等あり、就中「ペルテス氏病特ニ組織學的知見補遺」は氏の會心の著作にて、博士の最も得意とせるものと見るべき也。

△感想に曰く「學界!!學問或は情實に依て教授を選擇するを止め、人材を天下に求めること、醫師界!!革新日本の姿を凝視し、徒に現状維持に躊躇せざること」云々。出身地は金澤市彦一番丁にして、篠原謙吉の長男、明治二十九年生る、年齒漸く不惑に達する少壯の紳士也。篤學者にして、其の今日あるは既に氏が閱歷に燦として輝き、今は壯熟せる手腕と共に最も活躍時代に入る。讀書家にして書見を唯一の楽しみとし、精研修養相俟つて甚だ勉むる所あり又散歩を趣味す。「イデオロギー」に執着することが長所にして、且短所と見るべきか。居常應答禮を重んずる人たるは、又以て其の爲人を窺はれ人格を尊重す。故上坂熊勝博士は伯父に當る。山口縣徳山町浦石病院舍宅に住む。

葛原 輝

△東京市大森區入新井六丁目一二二に新設せる葛原外科病院あり、院長葛原輝博士の經營にして外科、内臓外科、レントゲン科を専門とし、病床數二十六、其他新裝せる内部の設備完備す。開業早々刀圭多忙を極め、博士獨特の手腕はメスの好評と相俟つて益々人氣を吸收し、遠近よりの外來患者日々輻輳するの活氣を呈しつゝあり。氏は千葉醫大出身の新進にして、九大教授赤岩八郎博士に就て外科學を專攻し、特に内臓外科の造詣深く、九州帝大より學位を獲得せる少壯醫博として、向後其の新手腕を發揮せんとする前途の發展や頗る囑目に値す。

△更に學歴より見たる博士の年歴を概括すれば、昭和三年三月千葉醫大卒業後、直ちに同大學第一外科教室入局、同四年三月辭職、同年四月より九州帝大醫學部赤岩外科教室入局、同八年九月學位受領、同九年三月辭職、同十年四月

より現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「外科的内臟疾患(特ニ胃痛)ノ肝臟機能ニ就テ」にして、参考論文として、(1) Leber die Beziehungen Zwischen der Magenkrebsresektion und der Leberfunktion (2)胃痛切除術後ノ死因ニ關スルニ、三ノ考察、(3)我教室ニ於ケル最近五ケ年半間ノ胃痛手術患者五二五名ノ統計的觀察、(4)我教室ニ於テ最近五ケ年半間ニ施セル直腸癌手術七三例ノ統計的觀察等あり。氏は東京市京橋區新佃島東町一丁目三葛原彈司の三男にして、明治三十七年生る、年齒未だ三十二歳の少壯紳士也。學究生活を巢立ちたる博士の向後の躍進は、學究的有爲の臨床家として最も囑望せらる。切に自重加餐を祈ると共に、希望ある治療界の爲め益々努力奮盡あらん事を。

◇

行岡忠雄

△大阪市北區浮田町六に片岡外科病院及び大阪接骨學校あり、接骨術の學究的新進大家として躍進せる行岡忠雄博士の經營にして、前者の病院長並に後者の學校長として活躍し、接骨、脱臼、及び理學的療法一般に就き、又外傷外科を標榜して一生面を展開せんとする所に、博士獨特の手腕は愈々其の精彩を發揮せんとす。博士は大阪醫大系に屬し、大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博にして、外科一般並に接骨術を専門とせる學究的臨床家として名聲を馳せ、特に整骨一般を最も得意とする所に一段の貫祿を備ふ、向後の活躍と相俟つて前途の發展や頗る囑目に値す。

△博士は大正十四年大阪醫大の出身にして、卒業後同大學附屬病院ヘルテル外科勤務、後ち東北帝大醫學部杉村外科教室にて研究、次で大阪高等醫學專門學校教授に任命せらる、昭和八年十一月大阪帝大にて學位を授與せられ、大阪接骨學校創立及同校長、行岡外科病院經營同院長として今日に至る。斯間主として古武教授、フリツ、ヘルテル教授、小澤凱夫教授、杉村教授、藤田博士等指導の下に研究せり。

△學位主論文は「コペプトン分解産物ノ血清沃度酸値ニ及ボス影響ニ就テ」にして、参考論文は、(1)拇指脱臼ノ整復法、(2)丹毒療法ノ比較研究、(3)「フロリジント」血清沃度酸値、(4)小兒皮下外傷ニ就テ、(5)膀胱腫瘍ニ就テ、(6)肋骨々折ニ就テ等なり。

△博士は三重縣一志郡倭村中村醫師行岡宗郎の長男にして、明治三十四年生る。年齒未だ三十有五歳の少壯紳士也。學究生活を巢立ちて、接骨治療界に一生面を展開すべく躍進せる有爲の臨床家にして、至誠以て仁術に盡さんとする熱心と、奮闘的努力を傾倒して大に將來に俟つあらんとする熱誠の士也。研究以外、政治に興味を有す。爲斯界、折角の努力奮盡を望むや切也。自宅は大阪市東淀川區國次町三五二一に在り。

◇

中根太郎

△三重縣三重郡羽津村羽津病院長として中根太郎博士の名聲は既に江湖に著聞す。歴史ある同病院は、地方稀に見る名病院として名高く、現在にては醫員五名、藥劑師二名、事務員三名ありて、外科、内科、小兒科を診療科として内部の設備を整へ、附屬看護婦養成所(公認)あり。同病院長及び同養成所長としての博士は診療と併せて經營及び統率の任に當り、博士獨特の手腕は愈々其の特技を發揮して餘す所なく、犀利なるメスの好評は他科擔當醫の手腕と相俟つて益々近郷の人氣を吸収し、依然として抜くべからざる繁榮を持続しつゝあるもの、博士の責任の重大なると同時に亦與つて力あるを想ふべき也。

△博士は愛知醫大の出身にして、昭和三年卒業後引續き同大學桐原外科教室に勤務の傍ら、同八年五月迄外科學を専攻し、同八年六月より現職に就き、同年十二月名古屋醫大より學位受領今日に至る。斯間主として桐原眞一教授の指導を受く、特に輸血を最も得意とす。

△學位主論文は「人同種血球凝集反應ノ消長」にして、(1)同種血球凝集素ノ年齢並ニ型的差異、(2)同種血球凝集原ノ

年齢並ニ型的差異、(3)輸血並ニ瀉血ニヨリ血清凝集質ノ消長、(4)同種血球凝集反應ヨリ看タル人血液型ノ安定性ニ就テの四篇より成る。参考論文は、(1)愛知縣島嶼及ビニ、三町村ニ於ケル血液型分布状態ニ就テ、(2)「グツタデアフオート」ニヨル給血者貧血ノ恢復状態、(3)瀉血並ニ輸血ニヨル正常溶血價ノ消長、(4)外傷性桡骨神經完全麻痺ニ於ケル手術的治験例、(5)桡骨ニ骨頭全脱臼ノ二例等なり。

△出身地は愛知縣豊橋市西八町にして、明治三十六年生る、兄弟共に醫博也。博士の年齒未だ三十三歳、學究的少壯の紳士にして、研究室を巢立ちて以來、診療界に躍進して誠意誠實を以て努力精進しつゝあり、洋々たる前途は向後の活躍と相俟つて大に期待せらる。踏石は其號にして文才あり、趣味としては旅行と圍碁とを好む。將來有爲の資に富むの士、好箇の臨床家として、治療界淨化の爲め益々精研奮盡あらん事を望むや切也。



渡邊 一九 △神戸市灘區徳井四〇三に渡邊一九博士の經營する渡邊外科病院あり。外科一般の治療に關する内部の設備を整へ、専門は外科一般特に博士の最も得意とする内臓外科及び肛門病科を以て著聞す。開業日尙淺くも博士獨特の手腕の好評は、氏が熱誠努力と相俟つて益々人氣を集め、漸次堅實なる地盤を開拓して日増盛況にあり。博士は大阪醫大系に屬し、大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博にして、斯科の新進大家としての手腕を認められ、今や神戸診療界に重きを爲す新人たり。斯間、阪大教授岩永仁雄博士の指導を受くる所厚く、學術の研究と共に臨床の經驗に富む、潑刺たる前途の發展や更に大に期待せらる。

△學歷より見れば、昭和二年大阪醫大卒業後、直ちに同大學岩永外科教室に入局、勤務の傍ら昭和九年八月迄外科學一般の研究に従事し、斯間昭和九年二月學位を受領す、爾來現任所に開業今日に至る。

△學位主論文は「運動力實驗的パーロー氏病性骨變化ニ及ボス影響ニ就テ」にして一篇より成る。参考論文は、(1)結核性乳腺炎ニ就テ、(2)後腹膜淋巴囊腫ノ有柄療法ニ就テ、(3)消化管内異物ニ因ル穿孔性腹膜炎、(4)生體血管「レ」線撮影法應用ニ依ル四肢異物摘出法ニ就テ、(5)副乳腺癌腫ニ就テ、(6)尿道裂傷ノ診斷ニ對スル「レントゲン」映像法ノ應用、(7)種々ナル藥液注入ニ對スル皮下組織ノ態度ニ就テ等なり。

△感想の一片を寄せて曰く「自己の専門科なる外科を心からたのしく日々實施してゐるのみ」云々と、博士の熱心振りを察せらる。氏は廣島縣高田郡用立町五〇八渡邊茂作の長男にして、明治三十四年生る、年齒未だ三十有五歳也。研究と醫療そのものに多大の興味を持ち、殊に其の専門領域に懸命の努力精進を續け、以て其の天職とせる仁術の爲め最善を盡さんとする熱心の臨床家たり。翠園は其號にして文才あり、研究以外の趣味としては音樂、觀劇(歌舞伎劇)輕き運動を好み、嗜好としては支那料理を好む。將來有爲の臨床家として、切に自重加餐を祈ると共に、益々精研奮闘あらん事を。



角田 英 △京都府立醫科大學醫員として外科教室に新進の角田英博士あり。京都府立醫大出身の外科學者にして、恩師望月成人博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる、少壯醫博としての將來を期待せらる。今猶恩師中村登教授指導の下に學理と共に臨床に精進して精研に餘念なし。博士の感想に曰く「今更 過去の業績貧弱なるを痛感する次第である。事情の許す限り將來之を補足し度き希望なれど、將來の研究費迄も父兄の出資に俟つに忍びない。現代の學徒は自家の生活費を充たし、且研究費としての剩餘を得ると云ふ事は至難である。日本にも米國のロツクフェラーの如き學術研究に理解ある出資者の續出を望む次第である。特に京都府立醫科大學の如き公立大學に於ては他の官立大學に於るよりも研究費の拮出は將來の難問題たるを免れない。國家的健康の増進と、衛生施設の完備は醫師の責務であるが、之に對する社會的理解と協力とを俟つ可きや當然と云ふ可きである」云々。

△博士は昭和四年京都府立醫科大學卒業後、望月成人博士並に横田浩吉博士兩少壯學者の膝下に在りて、外科學臨床の實地に就て指導を受くる事滿五年有半、傍ら剩餘の時間を利用して直接臨牀の實際に觸れたる諸問題をテーマとして検討するの便宜を興へられ着々研鑽を進め、昭和九年二月母校より學位を獲得せり。更に臨牀の見地を擴大し且綜合的ならしめん目的の下に同大學中村登博士臨牀に於て目下耳鼻咽喉科學を修得しつゝあり。外科、耳鼻咽喉科學を専攻し、特に化學に興味を有す。

△主論文は「「アニリン色素の毒物學的並ニ外科臨牀的考察」にして、第一回報告より第五回報告まであり。參考論文は、(1)二三「アニリン」色素ニヨル局所的並ニ全身的制腐處置ニ就テ、(2)余ノレーン氏骨接合法ノ變法、其他七篇あり。就中主論文及び參考論文の外「別腐の組合せに關する余等の見解」並に「腸管運動に及ぼす有機色素の影響の研究補遺」等は博士の最も得意とする論著と見るべき也。

△京都市の人京都府立醫大教授角田隆博士の長男にして、明治三十六年生る。年齒未だ三十有三の若年にして少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。「科學に根底を有する事、之實に現代醫學の特徴にして今日の醫師は確かに昔の醫師と性質を異にせるものである。此の認識を自他共に堅固にする必要があると思ふ。醫師は基礎醫學者たるに臨床醫家たるを問はず、寸時も自己は一介の科學者であると云ふ感を念頭から離す可きでないと思ふ。世に生物現象程複雑なるものは他に無いと云ふも過言でない。従つてこの生物現象を對象とせる醫學程至難なる學科は他に見出し得ない、生物現象は巍然として總ての物理的化學的研索を後に墜若せるの觀がある。其れだけ醫學の前途は益々多事多端なる理であると惟ふ」云々。との持論者にして、流石少壯學者としての清新なる識見を窺はる。頭腦明晰、志操堅實、研究に對する態度眞剣にして熱あり力あるは言はずもがな、他に從順ならざる性質の持主たるは見逃すべからず、強めて言へば或はそれが少壯醫博の短所とも云へよう。趣味としては工場見學、ラヂオの聴取、嗜好としては、スキ

ー、テニス、旅行位の所か、公道學人は其の雅號也。角田俊吉醫博は伯父にして、上田寛醫博は叔父なり。京都市上京區幸町廣小路下に私邸あり。

佐藤秋義

△千葉縣野田町北總病院に新進の佐藤秋義博士あり、外科、耳鼻咽喉科醫長として活躍し内外の聲望を博す。院長張谷圃一郎博士は内科、小兒科を、稻葉勤博士は産婦人科を擔當す。病室(普通)十八、傳染病室七、レントゲン設備等々ありて内部諸般の施設完備す。佐藤博士は新潟醫大専門部出身の篤學者にして、外科、整形外科、耳鼻咽喉科を専門とし、特に内臟外科の領域に就て獨特の手腕を有す。斯間、母校の恩師池田廉一郎及び中田瑞穂兩博士に外科、同本島一郎博士に整形外科、同鳥居惠二博士に耳鼻咽喉科、同川村麟也博士に就て病理學を研鑽し、新潟醫大より學位を獲得せり。年齒未だ少壯にして、潑刺たる前途は向後の精研活躍と相俟つて、更に將來の大成を期待せらる。

△博士は大正十一年新潟醫大専門部卒業、同年六月同大學附屬醫院外科、整形外科勤務、副手囑託、同十三年六月任同大學助手、同十四年一月宮城縣古川町片倉病院外科、皮梅科醫長として赴任、昭和四年九月同大學病理學教室に入り副手囑託、後研究科學生となり病理學研究、同八年八月頭書の病院に外科、耳鼻咽喉科醫長として赴任今日に至る同九年二月新潟醫大にて學位受領。主論文は「昇汞中毒症ニ關スル實驗的研究」にして、(1)機械的外傷ニ關スル陰莖皮膚全缺損ノ一例、(2)葡萄狀及連鎖狀球菌性敗血濃毒症屍ノ網狀織内皮系統ノ起因菌分佈ニ就テ、(3)人體ノ昇汞中毒ノ二例の三篇より成る。從來昇汞性大腸炎の成因は該部に排泄せらるゝ水銀化合物の直接の影響に依りて起るものとされたるが、實驗犬數十頭を使い、種々なる腸管手術を施したる犬に昇汞中毒を起さしめ、昇汞大腸炎は主として上部消化管、特に膽汁中に排泄せられたる水銀化合物が大腸に至り、大腸の水分吸收作用に依り濃縮せられ、特有なる

懷死性大腸炎を起すものなることを實證したり。

△感想に曰く「現代の醫界の最高の表徴たる醫博が、實地經驗及び實地醫家としての識見歴史に乏しき者多き事が最も醫博を世間が輕視する所以と思ふ、故に實地經驗に乏しき者の學位は文部省に於て或は各大學に於て許可せざる事を希望す」云々。出身地は大分縣玖珠郡南田村大字菅原にして、明治三十一年佐藤幸市の三男に生る。學究的濃厚な紳士にして、臨床家として實地の經驗に富み、卓越せる手腕を有す。其の今日ある閱歷と其の篤學は、既にして博士の面目を語るに充分なり。殊に勵精恪勤の士にして、熱心克く誠意誠實を以て診療に臨み、飽迄親切を盡す點は篤き聲望を博する所以と見らる。趣味としては油繪、圍碁、魚釣などを好む、殊に洋畫に於ては精緻なる技工と豊なる天分は優に専門家をも肯定せしむるものありと聽く。近親中には義兄關西學院大學教授法學士松澤兼人、義弟朝鮮公州判事法學士豊島正巳、義弟北海道廳土木課工學士小川讓二等々あり、其他略。千葉縣野田町中野臺四〇七に住む。

櫻井芳香

△朝鮮道立醫院醫官にして、黃海道立海洲醫院外科長として活躍しつゝある櫻井芳香博士は、愛知醫大系に屬し、名古屋醫大より學位を獲得せる外科界近來の少壯醫博也。指導教授は名古屋醫大教授齋藤眞博士にして、外科學を専攻し學位論文を完成せり。主論文は「四肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテノ實驗的研究」第一篇「下肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテ」にして、參考論文は、(1)同前篇二篇上肢動脈結紮後ノ側副血行新生ニ就キテ、(2)「ガスフレグモネ」ノ二例なり。研鑽多年、學理と共に臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、前途の發展や大に矚目せらる。

△學歴より見れば、大正十五年愛知醫大卒業後、直ちに同大學齋藤外科教室に入る、昭和二年十月長野縣大町公立大町病院外科部長、同五年五月同病院院長となる、同七年四月名古屋醫大齋藤外科教室に入る、同八年十一月現職に就き同九年二月學位を受領し今日に至る。出身地は靜岡縣榛原郡勝間田村勝間にして、明治三十一年生る、年齒未だ三十有七歳、學究的少壯の紳士也。臨床家としては多年の經驗を有し、今は光る學位に氏の仁術は一段の光彩を副ふ。勵精恪勤の人にして、至誠以て公に奉じ治療界の爲め努力奮闘する熱誠の士也。朝鮮黃海道中町一二四に住む。

村田文雄

△豫備海軍々醫中佐にして、久しく病臥靜養中の村田文雄博士は、慈惠醫專出身の外科學者にして、慈惠醫大研究科に在學中、恩師永山教授指導の下に生化學を研究し、同大學より學位を獲得せる斯學界の名醫博として其の存在を認めらる。學位論文に對する學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、生化學的領域に於ける學識の該博なるかを語るに足る。聞説、三四年來健康を害し、靜に病臥中にて専ら靜養に力めつゝあり。たま／＼感想の一片を寄せて曰く「近來病弱殊に齡不惑に達し今更學位でも有ませんが海軍現役中生體臟器のOxytationに付少しく仕事した關係上生化學方面より研究をしたに過ぎません健康が許すならば尙ほ研究を持続したいと思居ります」云々。折角の自重加餐を祈り、馳て恢復後の展開活躍や大に期待せらる。

△博士は明治四十二年東京慈惠醫專卒業後、海軍々醫少尉に任官、爾來累進して海軍々醫中佐となり、大正十三年病氣の爲め依願豫備役編入せらる、翌十四年九月日本海員救濟會橫濱病院副院長兼外科部長に就任、昭和五年研究の爲め辭任、直ちに母校研究科に入り、永山教授指導の下に學位論文を完成し、同八年三月卒業後同大學教授會へ提出の結果、翌九年三月學位を授與せらる。斯間、高木兼寛、本多忠夫兩博士に外科學を、永山武美博士に生化學を、矢部軍醫總監に内科學を研究せり。

△主論文は、(1)動動體内ニ於ケル還元「グルタチオン」生成ニ關スル生化學的研究、(2)鶏卵孵化ト還元「グルタチオン」量ノ消長及ビ之ニ對スル「グルタミン」酸「ナトリウム」ノ影響ニ就テ、(3)無機硫黃及ビ有機硫黃化合物體投與ニ

依ル家兔各臓器組織ニ血液ノ還元「グルタチオン」量ノ消化、(4)血液還元「グルタチオン」測定法ニ就テ、(5)窒扶
斯菌免疫家兔ノ臓器組織還元「グルタチオン」ノ消化の五篇より成り、外に参考論文として、(1)窒息死ト組織還元「グ
ルタチオン」(2)幼若並ニ成長家兔ノ胸腺及睪丸ノ還元「グルタチオン」量ニ就テの二篇あり。

△出生地は東京市日本橋區瀬戸物町四番地にして、明治十七年村田竹次郎の長男に生る。學究的温厚の紳士にして篤
學者たり、其の今日ある閱歴は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり。年齒知命に入る二歳、今は病臥中
に現職を有せずと雖も、學識、手腕、人格共に益々圓熟の佳境に入りて一段の貫祿を加ふ。人と爲り敦厚篤實、眞面
目にして志操堅實、人に對するに親切にして温情に富む。業餘の趣味としては旅行、園藝、水泳、ヨット等を好む。
家庭には良妻ユキとの間に一男あり。東京市目黒區自由ヶ丘一六六に住む。

金澤 信太郎

△舞鶴海軍共濟組合病院長として重大なる責任を負ひ、至誠以て公に奉ずるの熱誠と不斷の努力
を傾倒して勵精活躍しつゝあるは海軍々醫中佐金澤信太郎博士也。學系は東北帝大(専門部出身)系に屬し、熊本醫
大にて學位を獲得せる少壯醫博として、其の學問及び手腕を認めらる。嘗て歐洲各國を視察し、歸朝後熊本醫大外科
學教室にて研究の結果、學位論文を完成せり。本論文の學問的批判は既に學界に定評あれば、敢て贅言を要せざる迄
も、氏が斯間の努力研鑽の跡を物語るに足る。拮据匪勉、職に忠なると共に精研に餘念なき前途は猶洋々たり。

△學歷より見たる博士は、大正五年東北帝國大學醫學專門部卒業、直に海軍々醫として海軍に入り、その間歐洲各國
を視察す、目下軍醫中佐の印綬を帯び現職に在り、昭和九年四月學位を授與せられ今日に至る。斯間主として東北帝
大各教授の指導を受け外科學を専攻せり、特に外科手術を得意とす。
△學位主論文は「急性血腫炎起炎ノ臨床的、細菌學的並ニ病理學的觀察」にして、参考論文は「悪性腫瘍並淋巴腺結

核ニ對スル「レントゲン」線深部治療成績ニ就テ」外八篇あり。感想に曰く「臨床の研究に對し學生時代より更に醫
師になつても努力され度い、指導さるゝ側でも一層御骨折り下され度い」云々。

△博士の出身地は宮城縣仙臺市二日町にして、明治二十七年生る。年齒漸く不惑有二歳、意氣旺盛にして研究心に富
み、熱心なる臨床家にして、研究と醫療そのものに趣味を集中し、日常患者の診療に精進するを趣味とし唯一の道樂
とす。性格は眞面目にして正直なれば、或は短氣の嫌なしとせず、而かも能く自覺して克く自ら之れが修養に力むる
風あり。親戚中には六七名の博士ありと聽く。京都府新舞鶴町海軍共濟組合病院長官舎に住む。

中島 定次

△九州帝大派の一勢力たる新人にして、外科特に内臓外科を最も得意とする中島定次博士は、臺
灣總督府基隆醫院外科醫長として在勤中也。氏の學歷より見れば、長崎縣立大村中學校、佐賀高等學校を経て、大正
十四年九州帝大醫學部へ入學、昭和四年三月卒業後、直ちに同學部附屬醫院第一外科教室入局、同九年五月學位受領
同年七月同教室を辭し、現職に就き今日に至れり。斯間恩師赤岩八郎教授、兒玉桂三教授其他に就き外科學を専攻せ
り、特に内臓外科に長ず。學究生活を巢立ちて診療界に躍進せる氏が向後の活躍は頗る囑目に値す。

△學位主論文は「「ナフタリン」白内障成因ニ關スル化學的研究」にして、参考論文は、(1)總輸膽管結紮ノ血液表面
張力及ビ血中膽汁酸ノ消長ニ及ボス影響並ニ胃腸膜淡瘍形成ノ統計的觀察ニ就テ、(2)消毒性關節炎ニ對スル「レント
ゲン」線放射療法ニ就テ、(3)「ポリープ」性ノ字結腸炎ノ一例、(4)化膿性骨盤炎ニ對スル「レントゲン」線放射療法
ノ治驗ニ就テ等なり。氏は長崎縣西彼杵郡瀬川村中島銀太郎の長男にして、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳
の少壯也、學生氣質の人にして快活なり、診療に臨むや熱誠克く親切を以てす。硬式庭球を業餘の趣味とす。有爲の
資に富む臨床家としての前途洋々たるの秋、切に自重加餐を祈ると共に、診療界淨化の爲め、益々努力奮闘あらん事

を。基隆市壽町一丁目三〇に住む。

朝比奈 徳一

△名古屋醫大派の新醫博にして、一般外科特に内臓外科を最も得意とする朝比奈徳一博士は、學究生活を奠立ちて診療界に躍進し、現在兵庫縣洲本町に在る洲本病院外科に勤務中也。本病院はベット數四十、診療科は内科、小兒科、X線科（博士）、産婦人科（學士）、耳鼻咽喉科（博士）、外科の四科を有する綜合病院にして當地方診療界に於ける私立病院中の一勢力たり。博士は即ち其の得意とする外科を擔任して内外の信望を博す。△更に學歴より見たる博士の年歴を概括すれば、昭和四年愛知醫大卒業後、直ちに同大學桐原外科學教室に入りて研究、同八年九月現職に就き、同九年五月名古屋醫大にて學位を授與せられ今日に至る。斯間恩師桐原眞一教授に就て外科學を専攻せり、特に内臓外科に就ての造詣深し。主論文は「「バプロフ」小胃々液分泌ニ及ボス胃ノ手術々式ノ影響」にして、参考論文は、(1)悪性化セル尾膵骨部畸形腫ノ一例、(2)各種胃疾患及手術胃ノ胃曲線ニ關スル研究なり。

△醫界に對する博士の感想に曰く「今の醫者は昔のまゝにかたつむり様だ。もつと／＼我利々々の自己を捨て、大局に着目し團結してやつて行つたらよからうが。職業が一人でやつてゆける（或はごまかして）せいからも知れないが何とか自覺してよき斯界の指導者を得ぬ限り醫者がゆきつまるのは當然だ」云々。博士の出身地は埼玉縣熊谷市大字熊谷にして、明治三十年生れの少壯也。年齒未だ三十有九歳にして、霸氣あり研究心に富む、日常患者の診療に精進するを樂しみ、研究と醫療とに趣味を集中して亦他を顧みず、時に太公望を極め込みて一日の勞を慰することあり有爲の臨床家としての前途は洋々たり、折角の活躍と相俟つて益々精研努力あらん事を望む。兵庫縣洲本町常盤町乙四四二に住む。

吉田 定男

△福井市佐久良中町に堂々たる陣容を構えたる、富田病院に外科醫長として吉田定男博士あり。本病院は當市隨一の私立大病院にして内科、外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、皮膚泌尿器科を有し、各種の理學的設備を完備し、各科専門醫師分擔し、病室三十五を有す、尙附屬として産婆看護婦養成所あり。博士は外科一般を擔任し、特に其の最も得意とする内臓外科に至りては他の追隨を許さず、嘖々たる好評を博し、内外の信望を其の一身に蒐む。△博士は長崎市鎮西學院より、五高を経て、大正十四年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部第一外科に入局、三宅教授に師事す、同十五年夏より宮崎縣都農町都農病院に勤務、次で昭和六年春九大へ歸學、更に大學院にて研究、同九年春現職に就き、同年七月大學院卒業に依り學位を受領し今日に至る。斯間恩師三宅速教授、赤岩八郎教授、進藤篤一教授及び石澤政男教授の指導を受けて研究せり。

△學位主論文は「小腸ノ「リポイド」吸收ニ關スル研究」にして、参考論文は、(1)「ミトコンドリア」染色法、(2)胃組織ノ細胞學的研究、(3)放線狀菌病ノ治驗例等なり。殊に「「ミトコンドリア」ノ改良簡易染色法」は博士の最も得意とせる論著と見るべき也。吉田寅太郎の養子にして、長崎縣西彼杵郡面高村天久保郷に本籍を有し、明治三十一年生る。年齒三十有八歳、少壯にして多量の分別を有し、手胸漸く壯熟の域に入り、好箇の臨床家として最も囑望せらる。研究以外の趣味としては謡曲（梅若流）を好む。春秋猶頗る豊富にして、前途益々努力を要するの秋、折角の自重加餐を祈る。福井市外木田村山ノ奥五二ノ一三に住む。

三宅 坦

△大阪市東區北濱三ノ四三外科松岡病院に三宅坦博士あり。博士は愛知醫專出身の外科學者にして、松岡病院長元京大教授松岡道治博士に師事して指導を受け、齋藤眞博士の了解を得て論文を名古屋醫大に提出し

て、學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。學位論文は、既に學界に定評あれば贅せずもがな、研鑽多年、既にして其の蘊蓄せる學殖の豊富なるを語るに足る。殊に又臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して能く院長を補佐し、其の犀利なるメスの好評は院長の聲望と相俟つて益々人氣を博する所に、博士の面目の躍如たるものあるを窺はる。松岡外科病院は院長松岡博士外醫員五名、同院に内務省指定松岡外科病院看護婦學校ありて看護婦を養成する事十數年間、大阪に於ても著名なる外科病院にて、外來患者も多く、入院も常に満員の盛況を呈す。

△博士は大正二年愛知醫專卒業後、愛知病院皮膚花柳病科に見學、同年十一月京都帝國大學病院整形外科に研究、大正四年四月京都帝國大學整形外科教授松岡道治博士大阪北濱三丁目に病院開設に付、同院に副院長として赴任し現在に至る、斯間昭和九年八月名古屋醫大より學位を受領せり。主なる指導教授は松岡道治博士及び林喜作博士にして外科學特に整形外科學を専攻せり。主論文は「先天性股關節脱臼ノ骨盤骨ニ就キテ「レントゲン」像ノ研究」にして原著は獨逸文なり、參考論文は、(1)下駄履キノタメニ屢々起ル第五趾骨凸起部並ニ基底部骨折ニ就キテ(和文)、(2)薦骨ノ腰椎骨化セル「レントゲン」線ノ所見(獨文)の二篇なり。本籍香川県丸龜市風袋町にして、明治二十三年生る。學究的濃厚の紳士にして篤學者たり。正義に立脚して萬事を處する故に時に融通のきかぬ事あり、而かも其の今日あるまでに學を練り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、人格者たる院長松岡博士に私淑して自ら克く品性の陶冶に怠らざる事實は見逃すべからず。殊に博士の特徴として傳へらるゝ所は、診療に臨むや熱心忠實にして飽迄親切を盡す點にあるが如し、其の眞面目にして誠意誠實なる態度は、賢明なる臨床家として執るべき道にして最も尊ぶべき也。趣味としては繪畫、音樂、寫眞、旅行等、然し終日終夜多忙のため趣味に親しむ暇なきが如し。兵庫縣武庫郡住吉村字花田一四一四に住む。

沖井磯吉

△岡山醫大派の新博士中の一勢力と見るべき沖井磯吉博士は、外科學者にして現に岡山縣矢掛町

町立矢掛病院長として活躍し内外の信望を博す。本病院は病室十二室、醫師三名、内部の設備と相俟つて當地方診療界に於ける唯一の治療機關たり。氏の學歴より見れば、大正十年岡山醫專卒業後、同年青島守備軍民政部醫務囑託坊子醫院勤務、同十二年同濟南醫院勤務、同十五年同醫院同仁會に移管、昭和六年同醫院を辭し岡山醫大專攻生として入學、同九年岡山醫大副手を経て現職に就き、同年八月學位を授與せられ今日に至る。斯間恩師清水教授及び津田教授に就て生化學及び外科學を専攻せり。學究生活を奠立ちて診療界に躍進せる氏の向後の活躍は大に期待せらる。

△學位主論文は「「カルシウム」及び燐新陳代謝ニ及ボス膽汁酸ノ影響」にして、參考論文は、(1)脂肪酸ヨリ肝臟糖原質生成ニ及ボス膽汁酸ノ影響、(2)動物體內「フェノール」硫酸合成ニ及ボス膽汁酸ノ影響、(3)不飽和脂肪酸投與ト尿沃度散值ニ及ボス「ホルモン」ノ影響等なり。他に「石灰及び燐出納平衡ニ及ボス膽汁酸ノ影響」と題する一篇は氏の會心の作と見るべき也。

△感想の一片に曰く「醫師諸賢の人格の向上を痛感する」云々、以て氏の爲人を窺はる。氏は廣島縣佐伯郡深江村沖井吉次の三男にして、明治二十九年生る、當年漸く不惑に達し、學究的濃厚の紳士也。勵精恪勤の士にして、診療に誠意誠實を以てし、眞摯にして親切なる臨床家としての聞え高く、診斷手術の好評と相俟つて多大の信望を博す、蓋し氏が人格の尊重を自覺して自ら品性の陶冶に力むる修養の反映に歸する處あるべし。一面人と接するに磊落にして快活なるは、人に親しまるゝ所以ならん。業餘の趣味としてはスポーツ特に庭球を好み、嗜好としては酒を嗜しむ。前途洋々たるの秋、折角の努力奮闘を望む。岡山縣小田郡矢掛町大字矢掛に住む。

住田立

△富山縣西礪波郡松澤村鷺島に外科、耳鼻咽喉科を以て其の地方を風靡し、名聲嘖々たる住田醫

院あり。院長佳田立博士は金澤醫專出身の篤學者にして、恩師中村八太郎博士指導の下に病理學を專攻し、金澤醫大より學位を獲得せる近來の名聲博也。學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、如何に學殖の豊富なるかを語るに足る。殊に臨床方面にては多年の經驗に富み、其の最も得意とせる領域に努力精進を續け、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、打診の好評は多年の聲望と相俟つて遠近の人氣を吸収し、既にして牢乎拔くべからざる地盤を有す。感想に曰く「醫がその業とする處により社會にその存在の意義を發揮し得るは幾多先進の苦心研究の結果を利用するに依る事多し、されば自らも亦何等かの新知見を斯學に加ふるべく努力するは先進に對する報恩の意味よりするも必要なる事なるべし、さり乍ら吾不敏にして事志に副はざるを憾とするものなり」云々。博士の心境を物語りて餘蘊なし。

△博士は明治四十四年金澤醫專卒業後、母校に於て宮田篤郎教授指導の下に外科學及耳鼻咽喉科學を修め、大正三年六月郷里に歸り父喜正の經營せる醫院に外科及耳鼻咽喉科の診療を擔任し、その後父君が宿痾の爲休養せらるゝや代つて醫院の經營に當れり、昭和六年五月より金澤醫科大學專攻生として病理學教室に入り、昭和九年十一月より副手として同大學石川外科教室に轉じたり、同年十二月同大學にて學位を授與せらる。主論文は、「結核症ニ於ケル脾臟ノ病理解剖學的並ニ組織學的研究」にして、參考論文は、(1)「腸チフス」脾ノ病理解剖學的並ニ組織學的研究、(2)男子孔腺病ノ症例、(3)限局性鬱血硬化脾等。

△富山縣平民醫師住田喜正の長男にして、明治二十二年生る。學究的温厚の臨床家としての特徴を具へ、高邁なる人格を備ふ。其の今日ある閑歴は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に開業の傍ら幾星霜の間、常に學を鍊り腕を磨くに孜々として倦まず、研學切磋、終に克く學位を獲得せる篤學は立志傳的にして特筆に値し、博士の面目の躍如たるものあるを窺はる。今は腕の牙え盛りにて、年齒不惑に入る七歳、年壯の意氣と共に學識、手腕益々圓熟の

域に達して一段の貫祿を加ふ。熱心克く診療に誠意誠實を以て當り、患者に對するに飽迄親切を盡す點は、博士の長所として傳へられ篤き信望を博す。一面に人と接するに快活にして懇篤、謙遜自抑して自己の識學を衒はず、淡々として己れを虚うする態度の奥床しき所に其の人と爲りを敬慕せらる。家庭には妻とみとの間に四男三女あり。

大野捷助

△伊豆下田町長田病院に勤務中の大野捷助博士は、東大系の一勢力たる新博士中の最少年にして外科の新手腕家として最も囑望せらるゝ新智識也。氏の學歴より見れば、昭和五年東京帝大醫學部卒業後、直ちに同學部鹽田外科教室に勤務の傍ら、鹽田廣重教授指導の下に専ら外科學の研究に従事す、同八年八月現職に就き、同年一月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。鹽田外科を巢立ちて實地治療界に躍進して以來、日尙淺くも、博士獨特の新手腕と、氏が熱心にして眞摯なる診療振りとは、益々遠近の人氣を集め、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、長田病院の隆盛を祝すると共に、半島治療界の爲め欣幸とする處也。

△學位主論文は「急性腸管閉塞時ニ於ケル尿ニ關スル實驗的研究並ニ組織水素「イオン」濃度ノ實驗的研究」にして參考論文は、(1)十二指腸瘻時ニ於ケル組織水素「イオン」濃度ノ實驗的研究、(2)火傷患者五十二例ニ於ケル臨床的並ニ尿所見等なり。氏は埼玉縣北足立郡大宮町大字大宮大野專助の長男にして、明治三十八年生る、年齒未だ三十有一歳の少壯也。潑刺たる意氣と共に臨床に熱心にして、患者に對する態度の親切なると、學生氣質の朗快さとは好感を抱かしめ、評判極めて良好なりと聽く。猶氏は研究心旺盛にして意志強く、診療と研究とに趣味を集中して物に動ぜず、拮据勤勉、精研に餘念なき前途は洋々として輝かし、向後の活躍と相俟つて益々努力を要するの秋、切に自重加餐を祈ると共に一層の奮闘あらん事を。静岡縣賀茂郡下田町大安寺前に住む。

林 堅 藏

△外科特に腎臓外科を最も得意とせる林堅藏博士は、南滿醫學堂及び日本醫專出身の篤學者にして外科を以て起ち、多年地方の診療界に活躍し、或は教授として醫專の教壇に立ち、學生の指導に盡力する所ありしが、最近退官後名古屋診療界に躍進すべく、目下開業の準備中にありと聽く。多年蘊蓄せる學識と經驗とを以て、聽て展開せんとする博士の仁術や刮目を以て大に待望せらる。

△略歴より見たる氏は、南滿醫學堂の出しにして、大正五年日本醫專を卒業して、醫術開業試験に合格し、縣立鹿兒島病院外科勤務の後、三菱鑛業株式會社社員となり、大正九年より十三年迄東北帝大醫學部外科教室に勤務の傍ら研究に従事し、同十五年臺北醫專外科講師となり、次で助教を経て教授に任命せらる。昭和十年一月東北帝大にて學位を授與せられ、同年八月依願退官、目下開業準備中なり。斯間、鹿兒島にて汲田元之丞博士及び東北帝大教授杉村七太郎博士に就て外科學を專攻し、特に腎臓外科の造詣深し。

△學位主論文は「外科的腎疾患ニ於ケル分取腎尿尿素定量ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)井上氏法ニヨル尿及血清「アミラーゼ」ノ定量殊ニ其外科的腎機能検査上ノ應用ニ就テ、外十篇あり、全部臨床成績なり。就中「お粗末な脈」(追付印刷公表)は博士の會心の作と見らる。

△感想に曰く「臨床家は患者が一日も早く自ら働いて喰へる様にしてやるべきである」云々、以て博士の診療に對する態度の誠實と眞摯なるを察せらる。氏の本籍地は岐阜縣大野郡高山町字三町にして、明治二十年古橋清吉の五男に生れ、高山町雲龍寺(和尚)林孝道の養子となる。當年當に不惑に入る九歳、學究的温厚の紳士にして、其の今日ある閱歷は篤學者として光彩陸離たるものあり、今は年壯の意氣と共に、臨床家として最も重望せらるゝ時代に入り、學識、手腕、人格共に圓熟の域に達して一段の貫祿を備ふ。愚卿は其號にして、尺八を愛好す、本來多趣味の人に於て常識に富み、社交上に惠まると動しとせず。東大法科教授牧野英一博士とは親戚の間柄なり。假住居名古屋市中

外庄内町岡崎勝一方氣附。

三 藤 寛

△東京女子醫專に外科學教授として三藤寛博士あり。附屬醫院には世人周知の如く内、外、小兒産婦人、耳鼻咽喉、眼、又線科等各科の整備あり、綜合病院としての本質を具備す。女子醫學獨特の領域有りや否やは別問題として、女醫發展の可能性に就ては有望なること既に識者一般の認識する處にして、東京女子醫專は、斯界の第一線に起ちてリードする最高機關として推すべき也。博士は該校の教壇と併せて臨床に立ち、其の蘊蓄せる學識と獨特の手腕を揮ひ、熱誠にして諄々と學生指導の任に當り、至誠以て女子醫育の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり、斯界の振興發展上大に多とすべき也。

△學歷より見れば、博士は六高を経て、東北帝大醫學部を卒へ、昭和二年四月より東京帝大醫學部鹽田外科教室に入局、同九年五月現職に就き、同十年一月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る。斯間鹽田廣重教授に師事して外科學を專攻し、特に恩師の亞流を汲みて腹部内臓外科に興味を有す。

△學位主論文は「實驗的十二指腸塞時ニ於ケル形態學的的研究特ニ其時間的推移ニ就テ」にして、參考論文は、(1)外科的腹部内臓疾患特ニ脾臓疾患時ニ於ケル尿「ヂヤスターゼ」ニ就テ、(2)特發性脱疽ノ腰薦部深部照射療法、(3)實驗的十二指腸閉塞症ニ於ケル鹽素ノ血球血漿間移動ニ就テ等なり。就中急性腸管閉塞症に關するものは博士の最も得意とする論著と見るべき也。

△感想に曰く、學界に對しては「現代學界に就て遺憾なるは露骨なる學問的分野の對立なるべし、之を抹消せしむるを得ば、更に明朗なる學究の世界を現し得らるべし。又學界の老大家の出席し果敢なる討論を行はれて後進を刺戟されんことを希望し居れり」醫師界に對しては「醫師界に對しては深刻なる體驗なきも、醫師全體として餘りにも他を

言ひて自らを顧ることなきの缺なきや、之生活擁護のために出づる所あるも、今少しく寛容にして相克することなくば醫師の品位を高め得べしと嘆ずるものなり」云々、同感に堪えざる也。氏は愛媛縣今治市末屋町三藤猛の長男にして明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳也。少壯の意氣益壯にして、清濁併せ呑むの氣概を養ひつゝあり、嚴肅主義の人にして徳義的には或はビュリタンに過ぐる嫌なきかと思はる、而かも人に對しては親切あり同情に富む。愛讀家にして精研修養相俟つて克く讀書す、時に圍碁に親しみ、又散歩を好む。今治市開業の三藤香吉博士は義兄に當る。東京市本郷區駒込千駄木町五七に住む。

岡崎卓一

△岡山市八番町十三に新装せる堂々の陣を張り、外科専門を以て嶄然頭角を抜きつゝある岡崎外科病院あり、院長は斯科の新進大家を以て著名なる岡崎卓一博士にして、博士の經營主宰の下に先年新築成る、總建坪百五十五坪、病院敷地面積二百餘坪、病室數十五、ベット數二十五、診療室、準備室、手術室、レントゲン室、紫外線、赤外線、X光線)等外科病院としての設備を遺憾なく整へ、今や當地私立病院中の一流を占む。博士は岡山醫大派の一勢力と見るべき名醫博にして、當地診療界に於ける重鎮として、最も囑望せらるゝ新進人物也。

△大正六年五月岡山醫學專門學校卒業、同年六月より昭和六年三月迄岡山市石本外科病院に就職、専ら外科臨床實地研究、昭和四年八月岡山醫科大學專攻科學生として衛生學教室に入學、同六年九月より岡山醫科大學津田外科教室見學、傍ら岡山市八番町十三番地に於て病院新築、外科開業今日に至る。斯間、昭和八年一月岡山醫大にて學位を授與せらる。斯間主として指導を受けたるは緒方教授、及び津田教授にして、外科及血清學を專攻、外科を以て起てり。

△學位主論文は「諸臓器内各種杭體ニ就キテノ研究」にして、(1)臓器杭體抽出法ノ比較研究、(2)能動免疫動物ニ於ケル血液並ニ諸臓器内各種杭體ニ就キテノ研究」(特ニ沈降素ニ就キテ)、(3)被動性免疫動物ノ血液並ニ諸臓器内

幾斯中ニ於ケル免疫體量の關係ニ就キテの三篇より成る。參考論文は、(1)免疫體臟器移行ニ及ボス墨汁填塞並ニ過敏症ノ影響、(2)脾臟局所免疫ニ就キテ、(3)動物體ニ於ケル皮膚水泡形成並ニ水泡液中ノ免疫體量ニ就キテ(歐文)等なり、其他論著夥多。

△感想に曰く「患者に對して親切に何處までも相談相手となり、眞面目に成るべく患者の負擔を軽減ならしめ、不必要なる手術、注射、其他施術を行はざる様、常に考慮し診療したならば醫業難をかこつ事はないと思ふ。尙ほ日進月歩の醫學の事なれば常に新刊の雜誌等に目を通して時代におくれぬ様心懸くべきである」云々。博士の診療に對する態度の眞摯にして熱情あると、同時に精研に餘念なき熱心振りを窺はる。

△博士の本籍地は岡山縣吉備郡富山村大字延原にして、岡崎謙一郎の四男、明治二十七年生る。學究的臨床家としてその今日あるは、輝しき氏が前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に特筆すべきは、身體頑健、努力主義をモットーとして、朝から晩まで一意専心、唯だ醫業そのものと研究との他に特別の道樂を求めず、不斷の活動を續けて倦むことなき點にあり、強ひて言へば生來眞面目にして生一本正直の方なれば、短氣にして僅かの事が氣になり、直ちに癩癢玉を破裂することあり、若し短所を指摘すれば或はそれならんか。而かも患者に對し人に接するに親切にして、同情あり熱情に富み、人に親しまるゝの徳を有す。研究以外にはスポーツに興味を有す、但し觀る方にて野球、庭球、柔道、劍道等を好む、嗜好にては茶を好み、酒を嫌はず。博士の年齒今や不惑に入る二歳、最も活躍時代にて、頗る春秋に富む、前途洋々たるの秋、折角の自重加餐を祈るや切也。

日域旭丸

△廣島縣吳市外大柿町柿浦に内科及び外科を以て著聞する、藝南病院及び内外結核の療養所たる附屬松ノ濱療養所あり、院長日域旭丸博士の獨力經營せる私立病院にして、俱に内部の設備整ひ、患者をして快朗の

念を抱かしむる特徴を有す。博士は院務を主宰し日々診療に直面して外科を擔任す、博士獨特の診療手術の好評は益々遠近に喧傳し、内外の患者は門前常に輻輳する盛況を呈し居れりと聽く。氏は岡山醫大派の少壯醫博にして、臨床の經驗に富み、今は腕の冴え盛にて最も得意の時代に在り、その今日の繁榮を見るもの、近來の成功と云ふべき乎。

△博士は縣立岩國中學校を経て、大正七年岡山醫專を卒へ、開業の傍ら岡山醫大にて研究を爲し、昭和十年一月同大學より學位を受領せり、斯間主として恩師故泉伍朗教授及び石山福次郎教授指導の下に外科學を専攻せり。

△學位主論文は「含水炭素新沈代射障時ノ血糖調整ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)肝臟ノ血液凝固血中「フィブリノゲン」並ニ補體ノ消長ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究、(2)腸壘積症(特ニ其ノ壘積程度ト腫瘤ノ形狀トノ關係)ニ就テ、(3)頸動脈腺腫瘍ニ就テ、(4)肋骨ヨリ發生セル軟骨腫ノ一例、(5)比較的早期ノ結核性膝關節強直ニ對スルバイヤー氏手術法ノ應用等なり。

△氏は廣島縣佐伯郡大竹町、日域顯尊の三男にして、明治二十八年生る。學究的臨床家としてその今日あるは、燦として既に氏の閱歷に輝き博士の面目を語るに充分なるが、殊に氏が開業の傍ら學術の研究を志して、努力研鑽、終に克く其の宿望を貫徹して學位論文を完成せる篤學は特筆に値し、光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放てるを見る。博士の年齒漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣益々旺盛にして今猶研究を捨てず、一意專念、唯だ仁術を以て任じ、醫療と研究とに努力精勵するの他に何等の趣味なく、誠意誠實を盡して天職たるを樂しむ熱誠の士也。

春田 操

△臺灣總督府醫院醫長にして高雄醫院長たる春田操博士は、京都帝大出身の錚々たる外科學者にして、研鑽多年、實地の經驗に富み獨特の手腕を有す、大學院在學中、京大教授石川日出鶴丸、島瀉隆三、磯部喜右衛門、伊藤進等諸博士に就て研究の結果、學位を獲得せる臨床醫博として名聲を博し、昭和七年現職に赴任して以來

臺灣診療界に躍進して得意のメスを揮ひ、鍊磨せる手術の好評は内外の信望と相俟つて、今や臺灣刀圭界に於ける名國手として重きを爲す一人物也。

△學歷及び閱歷を概括すれば、大正六年第五高等學校第三部卒業、同十年京都帝國大學醫學部卒業、直ちに京都帝國大學醫學部外科副手となり、同十一年七月神戸市佐野病院外科赴任、同十三年一月本籍地熊本縣水俣町にて開業、同十四年より昭和三年末迄京都帝國大學醫學部生理學教室に於て大學院學生として研究、昭和四年十二月より翌年九月迄高知縣室戸町共愛病院外科勤務、同五年十一月より同七年二月迄岐阜縣中津川病院長勤務、同七年四月現職に任ぜらる、斯間昭和三年六月學位を授與せらる。專攻は生理學及び外科にして、學位主論文は「自律神經系ト腦脊髓神經系トノ干涉」なり、參考論文なし。

△氏は熊本縣葦北郡水俣町大字濱に本籍を有す、飯田洞敬の五男、明治二十八年生る。當年漸く不惑有三、學究的年壯の紳士にして、臨床家としてその今日ある閱歷は、既に博士の前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。今は分別盛にして滿々たる意氣に充ち、多年の經驗と相俟つて學識、手腕、人格共に愈よ圓熟の域に達し、最も得意の時代に入る。勵精恪勤の士にして、至誠以て仁術の爲に最善を盡し、以て自己の天職と爲す。賦性篤實敦厚、謙讓禮あり、人に對して親切也。學究以外の趣味としては運動を好み、短歌を能くす。家庭は夫婦との間圓滿也。高雄市山下町四ノ二に住む。

日野 信

△宮城縣栗原郡築館町に日野病院あり、外科を以て著聞し當地方の刀圭界を風靡す。院長日野信博士父子の共營にしてベツト十五、レントゲン科、手術室等其他内部の諸施設完備す、開業拮据日尙淺きも、新進にして氏が有する獨特の手腕は、的確にして懇篤親切なる診療振りと相俟つて、好評嘖々の裡に遠近の人氣を吸収し、繁

榮歳と共に近時著しく向上發展の盛況を呈す。ベツトは此地方に珍らしく始終満員にして狹隘を訴へらるゝを以て、近く病室大增築の計畫あり。氏は東北帝大派の出身にて、外科學界現代の權威たる東北帝大教授關口蕃樹博士の秘藏弟子として知られ、多年恩師に師事して親しき指導を受け、東北帝大より學位を獲得せる少壯の臨床醫博として名聲を博し、其の學識、手腕を認めらる。

△學歴及び閱歷を概括すれば、大正八年三月宮城縣仙臺第二中學校卒業、同九年七月第二高等學校理科乙類に入學、同十二年三月同校卒業、同年四月東北帝國大學醫學部入學、昭和二年三月卒業、直ちに同學部關口外科入局、次で宮城縣登米町公立登米病院副院長となる、同五年十月再び關口外科入局、大學院學生となる、同八年十一月退局、現住所に開業、同九年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「麻醉劑ノ赤血球沈降速度ニ及ボス影響」にして、參考論文(1)外科的結核ニ對スル減食鹽食餌療法(二冊)、(2)外科的疾患ニ於ケル尿中脂肪定量(二冊)、(3)バセドウ氏病並ニ甲状腺腫患者ノ血液沃度定量等あり。

△氏は宮城縣栗原郡築館町字屋敷八五に本籍を有し、明治三十三年生れにして、栗原郡將校團長、衛生組合長、縣醫師會代議員、町會議員たる徳望家日野靜の養子也。年齒未だ三十有八、學究的温厚の紳士にして、臨床家に相應しき性格と圓滿なる人格とを備ふ、その今日ある閱歷は既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。少壯の意氣益々壯にして、思想高遠堅固、今は最も得意時代にて學識、手腕共に漸く圓熟の域に入り、努力奮闘日も尙足らざるの觀あり。學究以外には喜多流謡曲に多大の趣味を有し、習ひ始めてより既に十八年餘、仙臺市喜多流澁谷豊吉教授の指導を受け、習免狀を得、築館町に喜多流親誼會を組織し其の會員數十名に達す。近時軍部當局により壯丁の體格低下と之が向上とを叫ばるゝに及び、此の地方にも青年體格の向上發達を圖る目的を以て體育協會生れ、氏の圓滿なる思想と高潔なる人格とは、地方人の信賴するところとなり推されて同協會長となれり。今後の同氏の活躍は此の方面にも大に

期待される。家庭には兩親健在、妻、娘一、男兒四、團樂裡は賑かにて朗らか也。

福岡三徳

△日本赤十字社島根支部病院外科醫長として活躍しつゝある福岡三徳博士は、京大系の新人にして、槍投の覇者より一轉して學位の榮冠を贏得たる變り種として著名なる少壯醫博也。回想せば、博士はもと京大の福岡三徳選手にして、明治神宮の競技場が創設された頃、大正十三年十月初めて行はれたる第一回の神宮競技に、當時としての大記録四十九メートル四一五を投げて見事優勝、奉納額に永久にその名を刻まれたる人なるが、昭和三年京大醫學部卒業と同時に懐しの槍に見切りをつけ、爾來専ら學究生活に入り、母校の恩師鳥瀉教授指導の下に「イムベヂン」研究の結果、母校より學位を獲得せり。今や多年の蘊蓄を傾け、不斷の勵精恪勤と相俟つて、内外多大の信望を博し、氏が獨特の手腕を自由に發揮し得る活舞臺にあり、氏が懷舊の情を偲ぶと共に、その今日ある氏が得意や想ふべき也。

△氏の學歴及び閱歷を略述すれば、松江高等學校を経て、大正十三年京都帝國大學醫學部に入學、昭和三年同醫學部卒業、卒業後直ちに同醫學部外科教室に勤務、助手、講師を経て、昭和九年三月島根縣立松江病院外科部長に就任、同十年一月學位受領、同十一年四月松江病院廢止され、日赤島根支部病院設立せられ、引き続き外科醫長に就任して今日に至る。専攻は外科、整形外科なるも、特に外科を最も得意とす。斯間主として鳥瀉教授及び磯部教授に外科、伊藤教授に整形外科の指導を受けたり。

△學位主論文は「増容反應「イムベヂン」現象」にして九篇より成る。外に參考論文として氏の最も得意とする「超腹膜腎臟切開法」の一篇あり。

△感想に曰く「全國學校を統一してやたらに病院爭奪など起らない様協定したらどうか」云々。氏は島根縣安濃郡大

田町の出身、明治三十四年生れの少壯紳士也。年齒未だ三十有七、スポーツに趣味を有する丈ありて、身體強健にして若き意氣に燃え、今は唯だ忠實なる醫師として奮闘活躍を続け、至誠以て民衆治療界の爲め人事の最善を盡し、今後の精研修養と相俟つて大に將來に期する所あらんとす、洋々たる前途の躍進に伴ふ發展振りは更に刮目に値するものあらん。性格は眞面目にして快活なり、人に親切にして自抑淡々たる態度は、蓋し氏の長所といふべくも、聊か筆不精の癖なしとせず。家庭には夫婦との間に娘二人あり。松江市北堀町六一に住む。

三木良定

△第十師團軍醫部々員陸軍一等軍醫正七位勳五等三木良定博士は、陸軍々醫中將三木良英博士の令弟にして、岡山醫大派の外科學者として知られ、特に軍陣外科學を最も得意とする少壯醫博たるの名に恥ぢず、今や多年蘊蓄せる學識と手腕とを以て、拮据勤勉、至誠奉公の念に燃えつゝ發奮努力する所あり。而かも年齒未だ少壯にして、精研修養に餘念なき前途は潑刺として洋々たるものあり。陸軍々醫界に於ける將來有爲の人材として矚目に値す。

△學歷及び閱歷より言へば、姫路中學校、松江高等學校を経て、昭和三年岡山醫科大學卒業、同三年八月より同四年七月迄陸軍々學校乙種士官學生として入校、同六年四月より同八年三月迄岡山醫科大學研究科入學、津田外科教室副手を囑託せられ、津田誠次教授指導の下に外科學を専攻す、同八年四月より同十年迄岡山醫科大學専攻生として研究を續行し、同十年四月岡山醫科大學より學位を授與せらる。

△學位主論文は「蟲様突起炎ノ成因ニ關スル實驗研究」にして、参考論文(1)「アベルチン」麻醉ニ關スル研究(三篇)、(2)「ドルチオンスゲストニー」ノ一患者ニ於ケル外傷性前額部大脳皮質囊腫ニ就テ、(3)裂手ニ就テ、(4)直腸癌ノ診斷並ニ手術成績ニ就テ、(5)巨大十二指腸ニ就テ 等あり。

△感想に曰く「我國に於ては國家總動員が行はれる際目下の狀況にては第一、第二乙種の補充兵役を全部軍醫に配當しても、猶全國では千數百人の軍醫が不足して居る、徴兵検査の成績でも概して醫師は丙種以下に判定せられる者が多い様である、何故であらうか。醫者の不養生の爲だらうか、兎に角醫師は眼鏡をかけた者が非常に多い。將來醫者は少々眼が悪くても動員時にはメスを探つて戦線に立つの覺悟が必要である。將來は醫科大學に於て現今よりもつと豫防醫學に就て研究せられねばらぬと思ふ。又軍陣衛生勤務學を全學生に教育するを必要とす。特に結核豫防や一般國民休位向上策或は毒瓦斯に對する生理衛生學等をもつと教育せられねばならぬ。之が爲には現在歩兵の佐官級が配屬將校として、戦史や戰術を教へて學校教練が行はれて居るが將來はどうしても醫科大學には軍醫が配屬せられて、前述の様な軍陣衛生勤務又は軍陣醫學を學生全部に深刻に教育しなければ一朝有事の際、國家總動員に當りて合理的に準備が完成せられて居るとは言へない」云々と。

△氏の出身地は兵庫縣姫路市平野町四〇番地にして、故三木駿三(在郷一等軍醫)の五男に生る、長兄三木良英博士(内科)と共に父の遺志を繼ぎて軍醫となる。因みに次兄良恭は藤尾姓を名乗り兵庫縣神崎郡香呂村に眼科醫を開業し名望高し、即兄弟三名は内、眼、外科の各専門を以つて亡父の業を繼承しあり。氏は學園を出でて嚴肅なる軍隊生活に終始し、隊附高級醫官、病院附庶務主任、教育主任等を経歴し、其の間克己奮闘、精研と修養と相俟つてその今日あるは、既に博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、年齒未だ三十有五の少壯にして、活氣滿々、漸く圓熟せる學識、手腕を益々發揮する上に自由の立場に在りて、氏が最も得意の時代に入る。學究以外の趣味としては圍碁、乗馬、切手蒐集などを好み、又よく讀書修養して自ら品性の陶冶に力む。春秋猶頗る豊富にして、前途一層の發奮努力を要するの秋、爲國家切に自重加餐を祈る。姫路市五軒邸二二二番地に住む。

五木康允 △廣島市大手町中央病院に外科部長として新進の玉木康允博士あり。當病院は内科の老大家院長黒川巖博士の經營にして、開業古く、目下内科、外科、皮梅毒の三科あり、病室五十、病床五十二、手術室、レントゲン室、研究室等々、内部の設備の完璧を誇るに足り、當地診療界に於ける私立病院中の霸王たり。氏は外科を擔任し、特に其の最も得意とする内臓外科及び脳外科に至りては、他人の追隨を許さざる所にして、博士獨特の手腕と相俟つて多大の聲望を博す。學系より言へば、氏は岡山醫大の出身にして、九州帝大派の臨床醫博として逸すべからざる新手腕家と云ふべく、今や多年の蘊蓄を傾倒して益々其の特技を發揮し得るの立場に在り、躍進的將來の向上發展や更に期待せらる。

△學歷及び閱歴を概括すれば、大正十四年三月第六高等學校卒業、昭和四年三月岡山醫科大學卒業、同年四月九州帝國大學醫學部副手囑託、赤岩外科教室勤務、同九年十月九州帝國大學醫學部助手被任、赤岩外科教室醫局長被命、同十年二月九州帝國大學醫學部講師囑託、同年五月學位授與、同年十一月中央病院外科部長に赴任今日に至る。斯間主として醫博赤岩八郎教授、醫博石原誠教授の指導を受けたり。

△學位主論文は「特發性脱疽症ニ於ケル交感神経系切除手術ニ就テ」にして、參考論文(1)プロツヂー氏骨膿瘍ニ就テ、(2)癩狀象皮病ニ關スル知見補遺、(3)結腸巨大症ニ就テ(赤岩八郎共著)、(4)生體血管「レ」線撮影ニ對スル「ウロセレンクタン」及「アブロデイル」溶液應用ノ實驗的並ニ臨床的經驗 等あり。

△感想に曰く(一)我國醫學は夙に世界的水準を突破してゐると稱されて居るのは同慶に堪へぬ所であるが、其内容を検討する時更に一段の獨創味が望ましいのではあるまいか、このために眞に有能の士は派閥を超越して其驥足を延ばさせ、依つて以て更に一醫學の進歩を促し名實共に世界第一のものとしたものである。(二)非醫者の跋扈は我々醫師の耻辱である。然し斯る情勢を惹起させたのは矢張り醫師の罪である。治療醫學が進歩せぬからだ。醫學の發見

の目的である治病の道を發達させて非醫者が蠢動の餘地を無い様にした。 (三)年々歳々新しい醫師が夥しく作られて行く、大量製産結構だが粗製であつてはならぬ、量よりも質に重きを置きたい。それは人の生命をあづかる醫師であるから特に大切だ。大量製産であるためやゝもすると亂造に墮しては居ないだらうか、それが醫師全體の品位と、信用を落す因を作つては居ないだらうか、大量でなくてよい良質のものを造ることが大切と思惟する。

△香川縣大川郡長尾町字長尾西一七九玉木百次郎の二男にして、明治三十六年生る。年齒未だ三十有五の少壯、滿々たる意氣に充ち、潑刺たる研究心を有す、剛毅、誠實にして情味に厚き點は、氏の長所と見るべきも、曲つた事は一分一厘にても蛇蝎の如く嫌ふ餘り、不正をにくむ感情激しくして動もすれば圭角あらはれんとする點は指摘すべき缺點と云ふべきか。讀書を唯一の趣味として、常に精研修養相俟つて、自ら自己の缺點を陶冶するに力めつゝあるは多とす。時に暇を得れば旅行を楽しむ。前慶應義塾大學總長林毅陸法博とは近親の間柄なり。家庭には夫人元子(二四)との間に長女博子(二〇)あり。廣島市大手町八丁目二十八番地ノ一に住む。

村山益勇

△那覇市沖繩縣立病院に副院長兼外科部長として新進の村山益勇博士あり。氏の學歷より言へば、氏は九州帝國大學醫學部の出身にして、昭和六年卒業後直ちに同醫學部赤岩外科入局、同大學副手、助手を経て昭和十年五月學位を得、爾來頭書の現職に就任せり。斯間主として赤岩八郎教授、石坂友太郎教授、福田得志教授の指導を受け、外科學及び藥理學を専攻せり。學究生活より診療界に轉向して以來、日尙淺きも、多年蘊蓄せる博士獨特の手腕は益々其の特色を發揮して餘す所なく、的確にして鋭利なるメスの評判は、眞摯にして誠實なる氏が聲望と相俟つて益々人望を博し、今や縣下診療界に於ける外科界に逸すべからざる臨床醫博として重きを爲し、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあり。而かも年齒未だ少壯にして精研に餘念なければ、輝しき前途の大成測り知るべか

らざるものあり。

△學位主論文は「腸管運動機能ニ對スル血液ノ作用ニ關スル研究」にして、外に參考論文及び主なる業績を擧ぐれば(1)腸管運動觀察描寫ノ新裝置ニ就テ、(2)腸管運動並ニ緊張ニ及ボス血液ノ作用、(3)血液内腸管作用物質ノ本態ニ關スル研究、(4)肝臟、肝臟X線造影法ノ臨床的應用、(5)高壓電流ニ依ル電擊症ニ就テ、(6)輸血ノ麻痺腸管ニ及ボス影響ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究、(7)胃痛切除後ニ發セル慢性腸重積症ノ一治驗例、(8)嚥下セシ魚骨ガ腸管ヲ刺通セシ一症例、(9)高張食鹽水靜脈内注射ガ麻痺腸管運動ニ及ボス影響、(10)血管造影劑トシテノ「バリウムゾル」に就テ等。

△出身地は佐賀縣三養基郡其山村にして、明治三十七年村山正の四男に生る。年齒未だ三十有四、學究的熱心なる臨床家にして、是迄に多くの研究論文を發表し其の學識、手腕を認められ、其の今日あるは既に博士の閱歷よくこれを語りて餘蘊なし。今は活氣満々として奮闘活躍の全盛時にて、漸く壯熟せる手腕は益々冴え、不斷の努力と相俟つて最も得意時代に入る。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、精研修養相俟つて自ら品性の陶冶に力め、洋々たる前途を有す。那霸市松下町五七に住む。

酒井美雄

△軍港都市吳の一端鍋港に酒井病院院長兼外科々長として新進の酒井美雄博士あり。本院は内科、外科、婦人科の綜合病院にして、特に地方外科病院として頭角を現はす。氏は院長として統率の宜しきを得、診療方面にては得意の外科を擔任し、獨特の手腕を揮ひて多大の信望を博す。學歷及び閱歷より觀たる氏は、昭和六年三月岡山醫科大學卒業、直ちに同大學副手となり衛生學教室勤務、同八年二月同大學津田外科教室勤務、同十年五月學位受領、同年八月吳海軍共濟組分院鍋分院長兼外科々長として勤務、更に同十一年十二月獨立して酒井病院を經營し自ら院長兼外科々長となり今日に至る。新聞主として岡山醫大教授津田誠次博士に外科を、同緒方益雄博士に血清化學の指導を受く。

△學位主論文は「血球及び血球核ニ關スル血清學的研究」にして、(1)有核赤血球核ニ赤血球核ノ特異性ニ關スル研究、(2)有核赤血球ノ各部分ノ溶解現象並ニ凝集現象ニ就テ、(3)白血球核ニ白血球核ニ關スル研究の三篇より成る。參考論文は(1)抗原ノ腸管透過ニ關スル研究、(2)花粉過敏症ニ就テ、(3)各種米麥ニ關スル免疫學的鑑別ニ就テ、(4)淋巴肉腫ニ就テ等なり。主論文は血球を血色素、基質、核の三種に分離し、之が血清學的見地より研究したるものにして、此方面の一大飛躍と信す。尙國字問題に熱心なる研究をなし日本式ローマ字に關する論文多し。

△感想に曰く「近時醫師の素質向上を計る爲に國家試験を云々せらるゝも、國家試験の如きものにて醫師の素質を決定し得ずと信す、素質向上を計るには醫學校を制限し、又醫學生數を制限し學生中十分なる教養と指導をなすにありと思ふ」云々。

△出身地は兵庫縣明石市櫻町一一六〇にして、明治四十年酒井奎太郎の長男に生る。年齒未だ三十有一にしてその今日あるは、如何に頭腦の明晰なるかを語り、眞面目なる學究的臨床家として氏の面目たるを證するに足る。而かも今は漸く奮闘の時代に入り、若き意氣と熱と力とを以て起ち、至誠一貫、努力主義を標榜して人事の最善を盡さんとする所に、氏の長所を窺はれ其の人格を敬慕せらる。研究と醫療、醫療と人格とは常に氏の念頭を去らず、精研修養相俟つて自ら品格の陶冶に力む。南秋期はペンネームにして、文學趣味豊かなり、又碁を好む。將來有爲の資に富み、春秋猶頗る豊富なるの秋、折角の自重加養を祈るや切也。吳市警固屋町新開通六五に住む。

古川通貫

△熊本縣人吉町公立人吉病院に外科部長として古川通貫博士あり。學歷及び閱歷より言へば、氏は金澤醫科大學出身の新進にして、昭和五年四月卒業後、直ちに同大學細菌學教室に入りて研究、同六年二月陸軍衛生部

幹部候補生として丸龜歩兵第十二聯隊に入營、同年十二月九州帝國大學醫學部赤岩外科教室に入局、外科專行、同年六月九州帝國大學へ學位論文を提出し學位を授けらる。同年十月赤岩外科教室を辭し入吉公立病院に赴任す。斯間主として九州帝大教授赤岩八郎博士、同小川政修博士の指導を受け、細菌學並に外科を專攻し、外科を得意とす。入吉公立病院は約六十年の古き歴史を有す、恐らく此種町村組合病院としては最古のものならん。現在にては内科、外科兩科にして、院長掛井博士は内科を、古川博士は外科を擔任し、兩博士の聲望共に厚く、入院ベット數五十あり、目下更に一病棟を新築中にて、最新式防電撃「レントゲン」機械及び往診用自動車等の設備あり。氏今や獨特の手腕を發揮して得意の時代に在り、診療手術の好評と相俟つて多大の信頼と尊敬を受けつゝあり。

△學位主論文は「丹毒ニ於ケル免疫抗體ノ消長並ニ溶血性連鎖球菌型特異性ニ就テ」にして、參考論文(1)感作赤血球ノ物理學的及ビ化學的研究、(2)家兎微毒ニ於ケル「アルコール」中毒並ニ「エーテル」麻醉ノ影響ニ就テ(齋藤勘四郎共著)、(3)微毒家兎流血中ノ「スピロヘータ、パリダ」ノ濃度(舟田秀太郎共著)、(4)潜伏性肺虛脫診斷ノ斷法トシテ「ブノイモグラフ」ノ臨床的價值(石山福二郎共著)等四篇あり。

△出身地は徳島縣阿波郡土成村字土成にして、明治三十七年古川三郎の三男に生る。年齢未だ三十有四の少壯にして學究生活より診療界に躍進して以來日尙淺きも、新進の意氣と熱と力とを以て醫道の本分を盡すに餘念なく、拮据勤勉、不斷の勵精と相俟つて内外の信望を博し、猶前途の輝しき努力奮闘を期待せらる。研究と醫療とは氏の最も趣味とする所にして、精研と修養と相俟つて自ら品性の陶冶に力む、以て氏の性格を窺はれ、高邁なる人格を尊ぶ。將來有爲の資に富み、學究的臨床家として春秋猶頗る豊富なるの秋、幸に健康にして、切角の自重加餐を祈るや切也。熊本縣人吉町出町鍋屋別荘に住む。

保田 哲太郎

△和歌山縣海南市日方三九一に於て、その最も得意とする外科を標榜して、最近開業せる保田外科醫院院長保田哲太郎博士は、昭和五年大阪醫科大學を卒業せる新進にして、卒業後直ちに大阪醫大助手を拜命し、次

で官制改正の結果大阪帝大醫學部助手を拜命して昭和十年一月まで勤続し、辭職と同時に大阪財團法人日本生命濟生會附屬日生病院醫員拜命す、同十年七月大阪帝大にて學位を授與せられ、同十一年十月以降本籍地に於て開業今日に至る。專攻は生理學及び外科にして、斯間大阪帝大教授故中川知一博士及び同久保助教授の指導を受けたり。診療界に躍進して以來、拮据開業日尙淺きも、既にして蘊蓄せる實地の經驗を以て起ち、今や氏が卓越せる手腕を發揮するに自由の舞臺に在り、適確なる診療手術の好評は、氏が不斷の熱誠努力と相俟つて益々人望を博し、多大の信頼と期待とを以て、洋々たる前途の向上發展を囑望せらるゝ所に、氏の尊とき使命ありと云ふべき乎。

△學位主論文は「細胞膜ノ顯微解剖的研究」にして三篇より成る。參考論文は(1)家兎眼前房水ノ滲透壓並ニ之ニ及ボス交感神經ノ影響の外六篇あり、その學問的價值は既に學界に定評あり。

△現住地たる和歌山縣海南市日方の出身、戶主保田安次郎の次男にして、明治三十九年生る。意志堅固の人にして、熱心なる研究家を以て知られ、その今日ある閱歷は氏が面目の躍如たるものあるを語るに足る。年齢未だ三十有二の若年にして、少壯の意氣に燃え、今は獨立の舞臺に活躍して自由にその手腕を展べ、聽て希望ある將來の發展に向つて邁進努力しつゝある前途は洋々たるものあり。平生短氣にして動もすれば苦言多く見ゆる癖あるも、生來眞面目なれば正直の現はれにして、多く外科臨床家に見る通有性たるを免れず、而かも純情にして不正を惡み、正を愛して同情心に富み、誠意誠實を以て、人に接し患者に對する態度は好感を以て迎へられ、敬慕の念を深からしむ。狩獵、寫眞、ピクニックを趣味とす。和歌山の岡室徳之助博士は遠縁なり。

中村豊彌 △岩手縣釜石町に在る日鐵製鐵所附屬病院外科に中村豊彌博士あり。氏は東京帝大派の臨床醫博として新進の氣を吐き、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在ると同時に、其の責任も亦重大なりと云ふべし。現在の病院は綜合病院にして設備は未だ十分とまでは完備せざる迄も、外來患者は全科を通じ一日約一千名を下らず、鑛業所病院なるが故、外科が其の主體たるべきものにして患者一日三百二十三名に及ぶ、開腹術は平均一年二百五十名を下らず、優に東北隨一と稱し得べし。製鐵所の擴張に伴ひ、本院の擴張工事は着々進行し、近く研究室の完成も見るべく、院内は瓦斯、水道、スチーム等の設備をなしつゝあり、近傍に結核療養所の設備計畫もあり、聽て之等の完成を見たる曉後の、氏の手腕努力に須つもの益々多大なるを期待せらる。

△學歷及び閱歷より言へば、昭和三年東北帝國大學醫學部卒業、直ちに同學部關口外科教室勤務、副手を經て同八年助手に被任、同十年六月同教室を辭し、岩手縣釜石町製鐵所附屬病院外科に轉じ、同年十月學位を授與せられ、以て現在に至る。斯間主として關口蕃樹教授の指導を受け、外科學を専攻せり。

△學位主論文は「アヴェルチン」直腸麻醉ノ血液「アルカリ」貯藏並血糖ニ及ボス影響ノ臨床的觀察」にして原著は獨逸文より成る。外に參考論文(1)腹腔内輸血ノ血液像並血色素量ニ及ボス影響ニ就テ(獨文、共著)、(2)「アヴェルチン」直腸麻醉ノ臨床的統計的觀察(共著)、(3)「アヴェルチン」直腸麻醉ノ血液像並血色素量ニ及ボス影響ノ臨床的觀察(共著)、(4)「アヴェルチン」直腸麻醉ト肺臟疾患ニ就テ、(5)「アヴェルチン」直腸麻醉中絶法ニ就テ、(6)女子外陰部黒色肉腫ノ臨床的組織學的知見補遺、(7)肋骨軟骨腫ニ就テ 等あり。

△感想に曰く(一)各大學共學位制度の不公平あり、學位の價值低下せるの傾向は何人も首肯するところたり。臨床家としては自己の専攻せんとする科目に對し、充實せる設備を有する大病院又は大學に於て指導醫の下に滿五ヶ年以上、臨床醫學を専攻せるものに學位を與ふべきものなり、大學院學生二ヶ年の研究に對し直ちに學位を授與するは將來の

國家醫學上缺陷ありと信ず、要は大學院制度を改良するか又は學位制度の全廢にあり。(二)大學教授の品質向上を計るべきこと、教授の椅子は親類關係又は學問關係に拘泥せぬこと、經濟上の影響を蒙らず、身體健全にして學問に興味を有し、且つ統裁力ある人物を選ぶべきこと、(三)早く衛生省を創設して本邦醫界を清淨すべきを望む、要は實質的の臨床家の學者を作り上げべきである。

△青森縣東津輕郡瀧内村大字西瀧字富永一五六中村次五兵衛の長男にして、明治三十五年生る。學究的臨床家として今は躍進奮闘の時代に於て、圓熟せる手腕と若き意氣とを以て起ち、診療界淨化の爲め實質的醫師たるの使命を果さんとし、常に徹底的主義を實行する人なり、而かもその反面には又獨斷的主義の傾向なからずとせず、蓋し其間には自ら氏の長所と短所とを見出すに首肯せしむるものあり。業餘の趣味は尺八を樂しみ、又嗜好では酒類を好む。親戚には武沼龜四郎あり、家族は三人なり。岩手縣釜石町構内日鐵社宅四號ノ一に住む。

川野秀夫

△八王子本町七四に右田病院あり、外科、整形外科、婦人科、皮膚科、泌尿器科、レントゲン科あり、各科専門醫分擔、病室十八、設備充實す、當市診療界に於ける綜合病院として第一流の地位を占む。川野秀夫博士は外科部長として得意のメスを揮ひ、特に内臓外科に至りては好評噴々、他人の追隨を許さずとの評判也。氏は東京醫專出身の新進にして、東北帝大醫學部に八年間、外科學の泰斗杉村七太郎教授指導の下に臨床的經驗を積み、且學位論文も亦同教授の指導を受けて之を完成し、同醫學部教授會審査の結果、學位を獲得せる所謂東北帝大派の臨床醫博として其學識、手腕を認めらる。今や其の蘊蓄せる氏が得意の技倆を發揮するに自由の立場に在り、猶向後の努力と相俟つて輝しき前途の活躍を期待せらる。

△學位主論文は「外科的腎疾患殊ニ腎結核ニ於ケル血液形態學的並ニ理學的變化ニ就テ」にして原著獨逸文より成る

外に参考論文(1)腎「カルブンケル」ニ就テ、(2)腎結核粗大結節型ニ就テ、(3)プレーグル、ハーベル氏法腎機能検査法ニ就テ、(4)中心性下顎骨々纖維腫ニ就テ、(5)骨折ノ統計的觀察等あり。

△感想に曰く「眼頭の實利に眩惑し當面の打算に熱中し醫道を惡用せるもの現今無きにしもあらず最も厭むべき事なり、余は正を踏み常に斯等の研鑽に精進すると共に病を診、社會の爲に自己の使命を全ふせんことを希ふ」云々。

△福岡縣京都郡黒田村字上黒一四九〇川野虎市の長男にして、明治三十八年生。學究的少壯の紳士にして、眞面目なる臨床家に相應しき人格者たるを多とす。性來純眞にして誠意誠實を旨とし、正を重んじ邪を排し、功利に恬澹として一意専心、醫道の本分を盡す上に精進して亦他を顧みず、仁術の爲め人事の最善を盡し、以て自己の天職なるを樂しむ熱誠の士也。殊に氏の長所と見るべきは、意志強固にして忍耐力の強き點に在り。又氏は熱心なる研究家として知られ、常に精研修養相俟つて學を鍊り腕を磨くに餘念なし。庭球に多大の趣味を有し、東京醫專に在學中には、庭球部主將として庭球界に活躍し、數回優勝、關東關西庭球試合に關東選拔選手として推されたり。石炭礦業聯合會理事池上駒衛は岳父にして、家庭には妻す多子との間に長男辰夫あり。八王子平岡町三五に住む。

長野敬三

△静岡鐵道治療所主任として斯界の爲め勵精努力しつゝあるは長野敬三博士也。氏は金澤醫專出身の外科専門家にて、大正十二年三月同校卒業後直ちに日本赤十字社長野支部病院に奉職し、同十四年二月同病院を辭し豊橋市豊橋病院に奉職す、同十五年一月同病院辭職、同時に名古屋鐵道病院に奉職、昭和七年八月静岡鐵道治療所主任を命ぜらる、昭和十年十月名古屋醫科大學より學位を授與せられ今日に至る。斯間名古屋醫大教授小宮喬介博士指導の下に血清學を専攻し、外科を最も得意とす。顧みれば學園を出で、以來、研鑽多年、實地の經驗を積み、今や臨床醫博たるの名に恥ぢず、適所に適材として多大の聲望を負ひ、蘊蓄せる氏獨特の手腕を益々發揮しつゝあるは刮

目に値す。

△學位主論文は「諸種障礙時ニ於ケル正常溶血素ノ消長」にして、外に参考論文(1)諸種障礙時ニ於ケル赤血球抵抗 其他六篇あり。

△出身地は兵庫縣揖保郡林田村林田にして、明治三十二年生る。學究的溫厚の紳士にして、眞面目なる臨床醫博として高邁なる品格を備え、賦性穩健篤實也。その今日ある博士の前半生史を顧みれば、氏の面目の躍如たるものあるを語らしむ。精勤家にして、年齢未だ三十有八、今は奮闘躍進の時代にて、潑刺たる意氣と共に漸く圓熟せる手腕と熱誠とを以て起ち、一意専心、醫道の本分を盡し以て自己の天職を果たさんとするところに、氏の尊き使命あり輝しき將來ありと云ふべし。生來謙遜家にして自己の識學を衒はず、人に對するに溫情に富み、自抑淡々として己を虚うする態度の奥床しさは、自ら人を敬慕せしむる徳を有す。家族六人ある家庭は團樂の楽しみあり。静岡市南町鐵道官舎第二十一號に住む。

堀江信吉

△滿洲國黒龍江省北安鎮陸軍衛戍病院黒河分院に陸軍一等軍醫堀江信吉博士あり。慈惠醫大派の新人にして、「ぐりこーげん」の研究を以て學位を獲得せる少壯醫博として、潑刺たる前途を囑望せらる。氏の學歴及び閱歷より觀れば、大正十一年三月北海道廳立札幌師範學校卒業、同年四月東京慈惠會醫科大學豫科入學、同十三年四月同學部入學、同年七月陸軍衛生部依託學生を被命、昭和三年三月東京慈惠會醫科大學卒業、直ちに見習醫官を被命、歩兵第三聯隊に配賦せらる、同年五月醫籍登録、同年六月任陸軍二等軍醫、補歩兵第三聯隊附、同年八月陸軍々醫學校に入學を被命、叙從七位、同四年七月陸軍々醫學校乙種課程を修了す、同年八月補歩兵第七十八聯隊附、同六年四月東京慈惠會醫科大學研究科に入學を被命、同七年八月任陸軍一等軍醫、叙正七位、同八年三月東京慈惠會醫科

大學研究科滿期退學、同年四月補工兵第一大隊附、同九年三月補習志野衛成病院附、斯間昭和六年四月東京慈惠會醫科大學研究科に入學し、外科學教授松山陸郎博士及び病理學教授木村哲二博士の指導を受け、同九年三月同研究科修了、同十年九月學位を授與せられ、爾來現職に在り。

△學位主論文は「ぐりこーげん研究補遺」にして、(1)鼻茸ノぐりこーげんニ就テ、(2)體表被覆上皮增生ヲ主變トセル成熟型腫瘍並ニ腫瘍類似變化組織内ニ發現セルGニ就テ、(3)腺上皮增生ヲ主變トセル成熟型腫瘍並ニ腫瘍類似變化組織内ニ發現スルGニ就テの三冊より成る。參考論文「胃潰瘍性病ニ就テ」は二篇二冊より成る。

△感想に曰く「限られた期間を陸軍から命ぜられて研究に従つたのですが時間が足りないと思つたので随分頑張りましたが、研究して見ると今迄氣附かなかつた自然界の理法が實に美しく整然として顕微鏡下に窺はれ知らず知らずの内に時が過ぎました。研究時代には臨床上に何の縁故もないと思つたことが意外に役立つこともあり、年を経るにつれ恩師の御高恩に感謝してゐる次第です」云々。

△氏は秋田縣由利郡象潟町佐藤竹次郎の次男として、明治三十三年生れ、望まれて醫師堀江東馬の跡を繼ぐ。陸軍々醫界を彩る眞面目なる學究の人にして、その今日ある輝しき閱歷は氏が前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。年齢未だ三十有八歳、少壯闊達、意氣旺盛にして奉公の念に厚く、至誠以て國家に忠實を盡し、陸軍々醫界將來の爲め努力奮闘を續けつゝあり。生來至純、眞面目にして事に當るや責任を重んじ熱心甚だ務む、人に對しては寛厚能く交はり又能く部下を愛撫す。研究以外の趣味としては洋畫をよくし、琵琶を弾じ邊境の隙地に克く獨を樂しみつゝあり。氏は又柔道の達人にして講道館四段の實力を有し、黒龍江岸に於ける黒龍館道場に於て第一線の荒武者に日本固有の武士道精神を吹込みつゝあり。

◇

高安康 祐

△長野縣飯田町通り四丁目に新興の高安外科醫院あり、院長高安康祐(舊名九郎)博士の新設經營にかゝる外科専門醫院にして、外科一般、特に内臟外科、整形外科、レントゲン科に特色を有し、新裝せる内容の設備と相俟つて、博士獨特の手腕の好評は、普く近郷まで喧傳して日々繁榮をいや増しつゝあり。學系より見たる氏は東京醫專出身の臨床家として錚々たるものにして、臨床方面に多年の經驗を有し、學術方面にては千葉醫大教授松村壽博士指導の下に衛生學を専攻し、千葉醫大派の臨床醫博として大に氣勢を昂げ、今や多年の蘊蓄を傾倒して自由に其の手腕を發揮し、前途の發展豫測すべからざるものあり。

△氏は濱松第一中學校を経て永らく浪人を續け、漸く大正十一年東京醫學專門學校を卒へ、翌年より二ヶ年兵役を務め、大正十四年三月より昭和二年四月まで沼津市澤病院にて外科を習學し、同年五月千葉醫科大學高橋外科(教授高橋信美士博)醫員助手となり、同四年同大學副手を囑託され高橋外科教室勤務を命ぜられ、同六年三月同大學衛生學教室(教授松村壽博士)に轉科し、同八年二月同教室を辭す、同時に長野縣飯田町飯田病院外科主任として就任し、同十年十二月學位受領、同十一年三月同院を辭し同年七月現住地に獨立開業す。

△學位主論文は「移入菌株ノ消化管内ニ於ケル運命ニツイテ」にして、參考論文の「葡萄狀球菌ノ研究」は(1)葡萄狀球菌ノ色素産生力ト生物學的性狀トノ關係ニ就テ、(2)葡萄狀球菌ノ病原性及ビ非病原性ノ鑑別ニ就テの二篇より成る。博士曰く胃液の游離鹽酸には強力なる殺菌的作用の存在は已に議論の餘地なし、然れ共余の實驗上小腸液には殺菌的物質を認めず。畜に大腸管内に於ける移入菌の消失せる事實より推定して大腸液内に殺菌的作用物質の存在するや、或は大腸管内は移入菌に對して他の力即ち物理的並に化學的要素の合成作用が一大障害となるや何人かの研究を切望す、云々。

△感想に曰く「醫學、宗教、體育の大調和を基本となす大學の新設を熱望す」云々。氏は静岡縣磐田郡袖浦村字中平

松八高安健次の三男にして、明治二十七年本籍地に生る。中學校卒業後、浪人より奮起して醫學を志せる氏の今日あるは、氏が前半生史をして異彩あらしめ、氏の面目を躍如たらしめたるものあり。今や一開業醫として診療界に躍進せる氏は、健康にして潑刺たる意氣と共に、多年鍊磨圓熟せる學識手腕を以て起ち、誠實と親切とをモットーとして、醫道の本分を盡さんとする所に、氏の重き使命ありと云ふべし。スポーツ特に庭球と競馬とに興味を有す。實兄二名とも醫師として活躍しつゝあり。氏の年齒漸く不惑に入る四、春秋猶豊富にして、今は活氣満々最も得意の時代に在るの秋、折角の努力奮闘を望むや切也。

◇ 金 晟 鎮

△京城府瑞麟町一三三に金晟鎮外科醫院あり、院長金晟鎮博士の經營にかゝり、府の都心地帯の中央に結構新装せる陣を構え、煉瓦建二階にして暖房スチーム、レントゲン、太陽燈、ソラックス等の設備を完備す氏は京城帝大派の新勢力と見るべき新進の臨床醫博にして、その最も得意とする外科的手術に至りては、多年の經驗と相俟つて獨特の手腕を有し、噴々たる好評と共に益々人氣を吸收し、堅實なる地盤の上に、今や優秀なる位地を占む。殊に氏が忠清南道の出身者として、祖國朝鮮の爲め氣を吐けるは痛快事にして、學究的成功を祝福すると共に、氏が興學の精神及び其の堅志篤學を壯とすべき也。

△學歷及び閱歷より言へば、大正十二年三月京城第一高等普通學校卒業、同十五年三月京城帝國大學豫科修了、昭和五年三月京城帝國大學醫學部卒業、同年四月同醫學部助手拜命、小川外科勤務、同九年四月同醫學部助手拜命、同十一年一月學位受領、同年八月同上助手を辭し頭書の現住地に於て開業す。斯間主として小川蕃教授の指導を受け外科學を専攻す。

△學位主論文は「腸閉塞時ニ於ケル消化液分泌ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文(1)高化腸閉塞犬腸管灌流液ノ

研究、(2)急性腸閉塞症ニ對スル食鹽水補給ノ治療的意義並ニ補給方法ノ選擇ニ就テ、(3)パウロウ氏小胃ニヨル胃液分泌實驗ニ對スル注意事項等あり。

△感想に曰く(一)醫藥分業の實現、(二)學位制度改革、(三)治療機關の完備 等云々。氏は朝鮮忠清南道扶餘郡九龍面太陽里二二五金瑞圭の長男にして、明治三十八年扶餘に生る。少年時代より興學の念に厚く、終に醫學を志してその今日あるは、輝しき氏の閱歷に燦然として精彩を放ち、氏の面目を語るに足る。而かも年齒未だ三十有三の少壯にして、潑刺たる意氣に満ち、今は最も働盛にて、獨立の舞臺に自由にその手腕を揮ひ、得々として群雄割據の間を横行闊歩しつゝあり。謙遜家にして自己の學問を衒はず、不言實行主義にして誠意誠實をモットーとし、人に接するや自抑淡々として親切を盡す、その眞摯なる態度は氏の長所と言ふべく、若し強ひて氏の缺點を指摘すれば、古川氏所説のA型所有者の短所そのまま、が或は當嵌まる所なきか。讀書家にして圍庭を號とす、音樂を愛し、喫茶を好む。家庭には妻徐點男との間に一男四女あり。

◇ 谷 岩 太

△東京市下谷區車坂町三三(上野驛前地下鐵ストア裏)に谷肛門病院あり、斯科専門の大家谷岩太博士の經營にして、開業拮据十數年に垂んとす、既にして牢乎たる地盤を築き、博士獨特の手腕は益々冴え、好評噴々の裡に繁榮をいや増し、今や超然として名流の位地を占む。氏は愛知醫專の出身にして、嘗て米國に次で瑞西に留學し、直腸肛門外科及び細胞の滲透性に關し研究する所あり。又東京慈大研究科にては木村教授指導の下に「たる注入ニ依ルらつて前胃ノ腫瘍狀變化ニ就テ」研究せる結果、醫博を獲得せる近來の名家として其の學識、手腕を認められ、博士の診療に一段の貫祿を備ふ。

△學歷及び閱歷を概括すれば、大正二年三月高知縣立第一中學校卒業、同三年四月愛知縣立醫學專門學校入學、同七

年五月同校卒業、同年七月醫師登録、同時に芝區櫻川町東京肛門病院勤務、同八年十二月北里研究所第九回講習會に於て臨床細菌學、傳染病學、熱帶病學等の講習修了、同十一年六月渡米、紐育「ニューヨーク、ポストグラジュエート、ホスピタル」に於てヒル助教に就き直腸肛門外科を研究、同十二年五月瑞西ベルン醫科大學生理學教室に於てアツシャー教授に就き細胞の滲透性に關し研究、同十三年一月歸朝、同年八月下谷區西町に、谷肛門病院を新設開業す、後現住所に移轉開業今日に至る、斯間昭和二年四月より同八年五月に至る、東京慈惠會醫科大學研究科に於て木村哲二教授の指導を受け病理學を専攻す、同十年十二月學位を受領せり。

△學位主論文は「たゝる注入ニ依ルらつて前胃ノ腫瘍狀變化ニ就テ」にして、參考論文(1)たゝる水抽出液ノ皮下注射ニ依ル紡錘形細胞肉腫形成、(2)肉腫家兎血液ノ水素いおん濃度ノ測定、(3)たゝる注入ニ依ルらつて前胃ノ腫瘍狀變化ニ就テ の三篇あり。

△氏は高知縣谷嘉久馬の三男にして、明治二十七年生る。學究的温厚の紳士にして、その今日ある臨床家としての輝しき閱歷は、氏が前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。殊にその堅志篤學は立志傳的範を示し、氏の面目の躍如たるものあり。當年漸く不惑に入る三、年壯の意氣益壯にして學識、手腕、人格共に圓熟して最も得意の時代に在り。賦性篤實穩健、人に接するに懇篤親切にして同情を以てす、功名榮達に對しては甚だ恬澹たり。趣味は學究と醫療以外に何等の道樂無し。

吉川竹藏

△帝都診療界割據の地、京橋區銀座西一丁目七に外科吉川醫院長として著聞する吉川竹藏博士あり。開業拮据日向淺きも、新裝せる内部の設備を整へ、博士自ら診療に勵みて氏獨特の手腕を揮ひ、牙えたるメスの好評は益々人氣を煽り、近時著るしく發展の盛況を呈す。氏は慈大派の新進にして外科を以て起ち、研鑽講究、實

地の經驗に富み、母校研究科に於て永山教授指導の下に醫化學專攻の結果、學位を獲得せる近來の少壯醫博として名聲を博し、現代外科界に氣勢を揚げつゝあり。

△學歴及び閱歷を概括すれば、大正十三年三月私立海城中學校卒業、同年四月東京慈惠會醫科大學豫科入學、昭和五年三月同大學學部卒業、直ちに芝區三田松山病院外科勤務、同年八月辭職、同年九月日本橋區外科吉川病院勤務、同六年七月東京慈惠會醫科大學研究科に入學、永山武美教授に就きて醫化學專攻、同九年十二月同研究科修了、同十年一月外科吉川病院辭職、同年二月現住所に外科開院今日に至る、斯間同年十二月學位を授與せらる。

△學位主論文は「糖質ノ腸管内吸收ニ對スル Phlorizin ノ影響ニ就テ」にして、參考論文(1)Pepton 血非凝固性ノ本態ニ關スル生化學的研究、(2)糖質代謝ニ及ボス硫黃ノ影響、(3)十二指腸機能ニ關スル知見補遺、(4)十二指腸ノ全別出ニ就テ、(4)小腸逆行性嵌頓ノ一例、(5)手術後急性胃擴張ノ一例 等五篇あり。

△氏は福島縣二本松在僻村の地に明治三十八年生る。年齒未だ三十有三、少壯の意氣に燃え、診療界に躍進して以來誠心誠實をモットーとして努力奮闘を續け、其の熱心にして懇篤親切なる診療振りは、大衆より信望を博する所以にして、篤實温厚なる性格と相俟つて、氏が特徴と見るべき乎。性來謙遜にして自己の識學を衒はず、功名榮達に恬澹として自己の職務に忠實を盡し、以て天職と爲し仁術の最善を期す。學究以外の趣味としては、弓道を好み心身の鍛錬に力む。家庭には一男一女あり。

荒武不二男

△宮崎縣北諸郡三股村に有名なる父子共營の荒武醫院あり、内科、小兒科は博士の父荒武本二擔任し、レントゲン科、一般外科、整形外科は荒武不二男博士擔任す。當醫院は病室三棟、ベット數十、レントゲン並に物療室及び暗室、診察室及び處置室、手術室及び準備室、患者控室及び應接室、藥局其他内部の充實せる點に於て

斷然當地方に一流の位地を占む。父子多年の聲望と相俟つて、博士獨特の手腕に負ふ所亦大なるを想ふべき也。氏は日本大學専門部醫學科の出身にして、外科を専門とし、特に整形外科を最も得意とす。學位は九州帝大より獲得し、新進醫博として益々其の新手腕を展べつゝある所に、輝しき氏の將來ありと云ふべし。

△氏の學歴及び閱歷より言へば、大正十四年三月宮崎縣立都城中學校卒業、翌十五年四月日本大學専門部醫學科へ入學、昭和五年三月同校卒業、同年五月九州帝國大學醫學部整形外科教室へ入局、同大學附屬醫院醫員囑託を命ぜられ神中正一教授の指導を受け専ら整形外科を研究、同十年十一月同教室退局、醫員囑託を解かる、爾來自己病院に於て診療に従事す、同十一年一月學位を受領す。

△學位主論文は「運動並ニ固定ニ依ル膝關節囊伸展性ノ變化ニ關スル實驗的研究、附關節内壓増加ニ依ル關節囊萎縮ノ豫防ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究」にして、參考論文二篇あり、(1)野球選手ノ肘關節尺骨側ニ見ル骨増殖ニ就テ、(2)筒狀有莖皮膚移植法ニ就テなり。要するにスポーツ、體育運動に依る外傷疾病、殊に關節障りに關する多方面に亘る研究が、博士の最も得意とする點かと首肯さる。

△感想に曰く(一)醫療機關の偏在、例へば比較的疾病、外傷の多い農山村民は、都會人に比して醫療機關に恵まれてない、都會には有名な醫者や病院があるが農村は之等に恵まれない、完全な診療を得る爲めには多額の旅費や時間を要する。(二)醫人の一般的人格の下落、醫は仁なりと云ふ昔日の俤は更になく、農村に於てすら昔日の美風が破壊されつゝある、醫術は商品化され、醫師は商店の注文取り見たいになつて來た、往診は患者の注文取りですらある。醫者が極めて儲かり易いと云ふ世評から、商賣人の子供や、慾の深い親の子弟が醫師になりつゝある。極端かも知れないが醫師の子弟のみ醫師たるを得る様な制度が望みたくなる。(三)現代の學界も醫師界も頗る賣名的である、廣告宣傳的である。モット國家社會本位に考へる様に熱望したい。(四)余が農村に開業した所のもは、余はあくまで農村

民である、農村は余の誕生地だ、高給や名譽を追ふて都會に走る農村青年の心理が、結局農村の今日の疲弊を來した。祖先傳來の田地畑畑を賣つて迄教育された智識階級が農村を捨てて行くのだ、農村にこそ指導機關が欲しい、農村に歸る土に親しむ教育こそ日本を救ふだらう。余は醫師として又被教育者として農村更生に微力を盡す覺悟だ。醫界に對しても醫師に對しても、モット郷土愛、祖國愛の精神を持つて貰ひたい。學問や教授閣の狭い偏見にとらわれず、モット度量人になつて欲しい」云々。

△本籍地は宮崎縣北諸縣郡三股村大字樺山にして此所に現住す、醫師荒武本二の長男にして、明治四十一年三股村に生る。醫師として愛郷の念に厚く、熱情家にして正義心に強く、涙もろく同情心に富む、一面には又物事に熱中し、徹底的に完璧を期して止まぬ氣性なり。強ひてその缺點を挙げれば、短氣にて激し易き癖なきか。スポーツに多大の趣味を有し、酒を嗜しむ。祖父、叔父共醫師にして、親族中にも多くの醫師あり、家族は兩親、兄弟三人、子供一人、他は書生、女中、下男等にて一家十四名の一世帯は賑かなり。

新井一雄

△埼玉縣所澤町に著名なる外科新井病院あり、本病院は副院長新井一雄博士の外、院長長兄喜一及び次弟保男の兄弟三人が協力して之を經營し、和協一致の下に各々その特色を發揮して餘す所なく、充實せる内部の設備と、適確なる診療手術の好評とは、兩々相俟つて益々近郷の人氣を吸収し、遠近よりの外來患者日々輻輳して年來の繁榮を持續し、今や堅實なる地盤と共に一流の位地を占め、當地方診療界を風靡しつゝあり。學系より見たる博士は慈惠醫專出身の錚々たる外科學者にして、研鑽多年、實地の經驗と共に母校の恩師、高木喜寬及び松山陸郎兩教授の指導を受けて外科學を専攻し、次で慈惠醫大研究科に於て木村哲二教授指導の下に病理學研究の結果、慈惠醫大より學位を獲得せる臨床醫博として其の學識、手腕を認められ、多年の經驗、聲望と相俟つて博士の仁術に一段の

光彩を放てり。

△氏の學歴及び閱歴を概括すれば、大正三年三月埼玉縣立川越中學校卒業、同四年四月東京慈惠會醫院醫學專門學校入學、同八年四月同校卒業、直ちに同校病理學教室助手拜命、同九年四月助手辭任と同時に東京慈惠會醫院外科醫員拜命、高木喜寬、松山陸郎兩教授の指導を受く、同十二年五月同上醫員辭職以來現住所に開業、同十五年五月東京慈惠會醫科大學研究科に入學、木村哲二教授に就き病理學專攻、昭和九年三月同研究科修了、爾來新井病院副院長として一般診療に従事す、同十一年二月學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「種々ナル飼料ノ骨折治癒機轉ニ及ボス影響ニ就イテノ實驗的研究」にして、參考論文(1)らつてノ飼養法(第三報告)、玄米、小麥、そば粉ヲ主食トセル場合及ビ飼料中ノ Ca:P = 注意シテ飼育シタル實驗、(2)右側鼠蹊へるにあラ伴ヘル男性内假性半陰陽ノ一例、(3)脾臟囊腫ノ一治驗例の三篇あり。

△埼玉縣入間郡三ヶ島村新井巳之吉の次男、明治二十八年生れにして、當年不惑に入る漸く三、臨床家に相應しき性格の持主にして、篤實濃厚、學究的紳士たるの人格者也。その今日ある位地と聲望とは、氏が前半生史よくこれを語りて餘蘊なからしむ。身體健康、元氣旺盛にして、奮闘活躍に耐へ、多年の研鑽修養と相俟つて學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、今は最も得意の時代に在り。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、人と接するに自抑淡々、親切にして誠實を以てす。家庭には妻いくとの間に一男、二女あり。

星子直行

△東京帝大醫學部講師として第一外科教室に新進の星子直行博士あり。氏の學歴及び閱歴より言へば、大正十一年第五高等學校卒業、同年四月東京帝國大學醫學部入學、同十五年三月同學部卒業、直ちに同學部附屬醫院青山外科教室勤務、昭和五年四月千葉醫科大學講師となり、同六年十月更に東京帝大醫學部助手に任じ、同八

年九月同醫學部附屬醫院外來診療所醫長を被命、同九年東京帝大醫學部講師囑託となる、以上卒業以來終始青山外科教室勤務、専ら青山徹藏教授指導の下に外科學を專攻し、同十一年四月學位を授與せられ以て今日に至る。年齒未だ少壯にして、常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、精研修養に孜々として倦むことなき前途は、多大の期待を以つて氏が將來の大成を囑望せらる。

△學位主論文は「交感神經、副交感神經、上皮小體及ビ副腎ノ甲狀腺代償性肥大ニ及ボス影響」にして、參考論文なし。

△感想に曰く(一)醫師の品位の向上をはかること。醫學醫術の修練は勿論、醫業の商業化をいましめ、インキキ性を最も戒めることが絶対必要である。學閥抗争を止め、情實人事を廢すべきである。(二)給血者制度の確立。現今日本に於ける輸血協會は殆んど企業であり、血液は商品である、速かに公共事業として統制ある給血者制度の設立を望む(例へば府縣廳、赤十字社病院等の監督の下に)云々。

△熊本縣鹿本郡米田村星子貞太郎の長男にして、明治三十五年熊本に生る。熱心なる學究の人としてその今日あるは既に博士の學歴よくこれを語りて氏の面目あらしむ。年齒未だ三十有六なれば、少壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、今や學生指導と併せて自己の研究に精進して亦他を顧みず、常に正義を重んじ、邪説を排しインキキ性を絶対戒しむ、人に對しては寛容にして溫情に富み、後進に厚く又能く學生を愛撫す。醫博岡本直徵は義兄に當り、家庭には老母、妻、二男ありて一家團欒たり。東京市豊島區目白町三の三五九七に住む。

秋山義春

△大阪市北區東野田町五ノ六六櫻之宮病院長に新任せる秋山義春博士は、九州帝大派の新進醫博にして、外科を專攻し、特に内臟外科(特に腹部)、外科的中毒性疾患を最も得意とす。氏の學歴及び閱歴より言へば

昭和三年九州帝大醫學部に入學し、同七年學士試験合格と同時に同醫學部外科學第一講座教室に入り、一般外科特に内臓外科を赤岩教授に就きて研究し、外科的中毒性疾患特に急性穿孔性腹膜炎「イレウス」症毒の死因について研究し、「ヒスタミン」の藥理的並に化學的研究を福田教授の下にて研究す、同十一年五月「ヒスタミン」に關する研究にて學位を得、爾來引續き赤岩外科教室助手として更に「ヒスタミン」の解毒に就て研究す、同十二年一月同教室を辭し大阪市櫻之宮病院長として赴任す。今や學究生活より診療界に轉向して、多年蘊蓄せる氏獨特の手腕は益々展び、打診の好評は向後の活躍と相俟つて、前途の向上發展を大に期待せらる。

△學位主論文は「ヒスタミン」ニ關スル研究にして、第一篇「ヒスタミン」定量ニ就テ、第二篇健全生體ニ於ケル「ヒスタミン」ニ就テ、第三篇「イレウス」症ニ於ケル「ヒスタミン」ノ研究、第四篇急性汎發性腹膜炎ニ於ケル「ヒスタミン」ノ研究、の四篇より成る。參考論文には「胃及十二指腸潰瘍術後ノ障礙ニ就テ」他一篇あり。氏の論文中(1)「ヒスタミン」ニ關スル研究、(2)「ヒスタミン」ト腦下垂體、(3)外科的中毒性疾患ノ解毒療法 等は氏獨特の作にして最も重要なものと見るべき也。

△感想の一片に曰く「現今の所謂行きつまれる醫學は内分泌並に臟器「ホルモン」の研究に新見を開拓す可きものと痛感す」云々。氏は鳥取縣鳥取市榑屋町一四秋山常藏の八男にして、明治四十年鳥取市に生る。學園を巢立ちて以來、恩師の指導と薰陶を受けて學究生活を續け、今や忠實なる臨床家として起ち、拮据勤勉、誠意誠實を以て醫道の本分を盡す上に、努力奮闘日も尙足らざるの觀あり。而かも年齒未だ三十有一の少壯にして、潑刺たる前途は洋々として輝かしき希望に滿つ。生來感激性強く、従つて偏屈、頑固の嫌なしとせず。スポーツに興味を有し、殊にテニス野球、柔道を好み、その他謡曲、魚釣を樂しむ。家庭には妻安代との間に長男陽彦あり。大阪市北區東野田町五丁目櫻之宮病院内に住む。

山本八治

△都心の樞區に據り病院街に占位して、茲日本橋區矢ノ倉町に新たに結構白聖の高厦を据え、外觀の豪華と共に内容充足せる山本病院の偉容は人目を敬てしむるものあり、之と相隣りせる姉妹院「日本橋産院」は、病床三十有餘を擁し一般大衆的に設立せるもの也。右兩病院はドクトル・オブ・メヂシン、ドクトル・メヂチーネ山本八治博士院長として、拮据經營二十年餘の結晶にして、院礎歳と共に鞏く、聲價噴々市井に布き、尙將來多大の發展を約束づけらるゝものあり。氏は閱歷の示す如く、獨立獨往、立志傳的一異彩にして、切磋研學、多年の尊き實驗を累ね、其後開業の傍ら夙夜研鑽怠らず、遂に學位を獲得せる名實兩全の臨床醫博として、斯界出色の名醫博といふべきなり。今や老熟せる博士が最も得意とする、肛門疾患の診療手術の神技は、益々其の靈腕の冴えを見せて他の追隨を許さず、遠近相響應して門前市を爲す、亦當然といふべきか。

△翻つて氏の閱歷を尋ねれば、博士は既に中學在學中専門學校入學試験に合格し、明治四十年東京慈惠醫專を卒ゆ、同年傳染病研究所講習證書を受くるや、即ち以後自立自恃その目的達成を決心し、朝倉病院(故文三博士經營)に勤務後渡米、同四十一年ワシントン州醫師開業免許證を受け、後ドクトル・オブ・メヂシンを得、此間青年醫として大に手腕を認められ、加ふるに母校英語教科の恩恵に依り善く短年月間にて、獨逸留學並に開業費を得、同四十二年渡獨、ロストツク醫科大學ミルレル教授に就て外科學を研究し、同四十四年ドクトル・メヂチーネを受け、英佛埃伊瑞丁等の各國を歴巡視察して歸朝す。大正四年九州帝大皮膚科教室勤務を辭し、大阪慈惠病院に於て高安道成博士に就き外科、肛門病の實地研究を遂げ、尙産婦人科を濱田病院其他にて修む。開業に方り資金乏しき爲め、夫人と共に只二人にて始めて神田區和泉町に開業、同十年現住所に移轉、やがて大震災に罹り一朝にして烏有に歸し、幾何もなく「山本病院」を復興し、後日本橋産院を併置す。其間慈惠醫大に於て故新井春次郎名譽教授、森田齊次教授、中村爲男

教授指導の下に研究し、昭和十年同校より學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は『内痔靜脈叢中直腸肛門内部ノ靜脈ニ於ケル形成體ノ解剖及ビ病理組織學的研究並ニ之ニ基ク痔核ノ觀察、第一編痔靜脈ニ於ケル形成體即チ余ノ所謂痔靜脈擴大累束ニ就テ』にして、其主旨は直腸肛門部の内痔靜脈叢に痔核と緊密なる關係を有する特異の形成體を證し、之に痔靜脈擴大累束と命名して其本態を明かにし、二歳以前には存せざるも其以後に於ては悉く存し、且之れが發現靜脈、位置的關係等の究明にして既に學界に定評あり。參考論文は(1)閉鎖靜脈ノ異常ニ就テ、(2)原發性攝護腺腫ニ就テ、なるが他に「腎臟膿瘍ニ就テ」、「膀胱微毒」、「男性乳癌ノ臨床統計的補遺」(獨文)等の發表報告あり。

△氏は宮崎縣東臼杵郡門川町山本森四郎の三男にして、明治十四年生る。學究的聰敏の紳士として、其の明朗清高の稟性は千代田小學校後援會長、町會長等幾多の公職兼務に迄及び、其の餘力を社會公共の爲め盡瘁しつゝあり。而して多年力行慘憺、開業の傍ら一大業績を完済して、茲に學位を得たる輝かしき閑歴は、博士の生涯を飾る前半生史といふべく、今や知命を超え、専門的學識、手腕、人格とも豐熟境に入り、一段の貫祿を添うるに至りたるも而も之に満足せず、學位獲得を一劃期として更始一新の勇を鼓し、不撓不屈の精神と壯者を凌ぐ偉大の健軀に撻つて、更に後半の事業——即ち學位論文の續篇とも云ふべき二、三論文の完成に志すと共に、益々精神修養に努めて人格の鍊磨向上を期しつゝあり。斯く自ら一生老書生を以て任する博士は、一たび其の診療に臨むや懇篤親切、態度また眞學を極む。質豪毅なれども緻密、能く慮りよく斷ず、天真流露、些かも言動を飾らざる半面また甚だ友誼に渥く、苦勞人なるが故に溫情よく青年後進を導く、「人間山本」としての聲望盛んなる故ありと謂ふべし。學究以外の趣味としては運動、書畫を好む。家庭には妻キヌ(宮崎縣立高女卒)、長男八洲夫(慶大醫學部豫科在學)あり。又海軍中將後藤章、九大教授工博岡本勇象、宮崎中學校校長日高重孝等は義兄弟なり。

藤岡正人

△組合組織にして宮崎縣富高町に在る、保健組合岡村病院院長兼外科部長として、縣治療界の爲め努力貢献しつゝあるは藤岡正人博士也。氏は九大出身の新人にして、外科界の權威赤岩八郎教授の愛弟子として多年恩師の指導を受け、醫化學は兒玉桂三教授指導の下に専攻し、胃腸疾患に關する論文を完成して學位を獲得せる、斯科界近來の臨床醫博たる名に恥ぢず、今やその蘊蓄せる新手腕を發揮して餘す所なく、診療手術の好評と相俟つて、多大の信望と重大なる責任を擔ひ、拮据勤勉、至誠以て醫術の本分を盡す上に餘念なし。

△氏の學歴及び閑歴より言へば、徳島縣立富岡中學校を経て、昭和三年高知高等學校を卒へ、同年九州帝國大學醫學部へ入學、同七年同學部を卒業するや、直ちに同大學赤岩外科教室に勤務す、同十一年六月學位受領、同年八月九大を辭し、宮崎縣富高町保健組合岡村病院に院長兼外科部長として赴任し現在に及ぶ。

△學位主論文は「膽汁酸胃潰瘍ニ及ボス諸種物質ノ影響ニ就テ」にして、參考論文二篇あり、(1)胃及十二指腸潰瘍手術例ノ統計的觀察、(2)胃及十二指腸潰瘍ニ對スル「ムチン」療法ニ就テ(第一報)胃内「ムチン」ノ作用機轉ニ關スルニ三ノ考察。胃腸疾患に關する研究論文は、氏が最も得意とせるものと見るべき也。

△出身地は徳島縣那賀郡今津村小延にして、明治四十年本籍地に生る。年齒未だ三十有一の少壯にして、その今日ある博士の閑歴は氏の面目を語り、餘裕綽々たる將來の大成を期待せらる。若き意氣と共に活氣滿々、漸く壯熟せる手腕は益々冴え、臨床家に相應しき誠實にして懇篤なる氏が性格と相俟つて、近郷の民衆より多大の信望と尊敬とを受け、好評噴々たるものあり。學究以外には尺八と寫真とを趣味し、平生刀圭多忙の裡にも常に精研修養相俟つて品性の陶冶に勉め、希望ある將來に向つて濶歩しつゝあるを見る。家庭には妻暎子との間に二男二女あり。宮崎縣富高町新町に住む。

三枝正孝 △腦外科學者にして、特に腹部「トリアス」即ち胆嚢病、胃、十二指腸潰瘍、蟲様突起炎を最も得意とし、目下石川縣日本鑛業株式會社尾小屋鑛山病院長として活動しつゝあるは三枝正孝博士也。氏は新潟醫專出身の臨床家として錚々たるものにして、研磨多年の經驗に富み氏獨特の手腕を有す。殊に其の最も得意とする専門領域に至りては、他の追隨を許さず、東京帝大より學位を獲得せる臨床醫博として斯科界に名聲を博し、今や多年の蘊蓄を傾倒して鑛山治療界の爲奮盡活躍し、勵精恪勤相俟つて、多大の信望と尊敬とを受けつゝあるは大に人意を強からしむるに足る。

△氏の學歴及び閱歷より言へば、福島縣立磐城中學校を経て、大正七年新潟醫專專門學校を卒へ、同七年より同九年迄東京鐵道病院外科勤務、同十年より茨城縣磯原町多賀病院外科醫長、同十二年同院々長、同十二年より同十五年迄勤務の傍ら東京帝大醫學部講師井上文藏博士に就き内科學一般の指導を受く、昭和六年多賀病院を辭し、同年四月東京帝大醫學部專攻生となり、西成甫教授の指導を受く、同九年東京帝大醫學部介補となり、同大學附屬醫院分院外科に入局、大槻菊男博士の指導を受け、同十一年四月辭任す、爾來現職に就任し今日に至る、斯間同十一年七月東京帝大より學位を受領す。

△學位主論文は「日本人頭蓋ノ外科的解剖學的研究」の外一篇あり。感想に曰く「現代醫學界は愈々微に入り細を穿つに汲々として餘りに物質科學に惰しはしないか、もつと精神科學を加味したより潑刺たるのが欲しい。現在の様な無能醫師會は寧ろ無い方が相互の爲めになる様だ、もつと強力な眞に醫師の福利を圖る様な統制機關が欲しい」云々。

△青郊と號す。繪畫(曾て木村武山の門に入りしことあり)、俳句、短歌などを能くし、また謠曲を愛し、狩獵をも好む、多趣味の人たるを想はしむ。性格は眞面目にして意志堅く、忍耐力に富みて粘り強きは、特筆すべき氏の長所にして、臨床方面と言はず學究方面と言はず、徹底的に成遂げる迄頑張る點は甚だ多とすべき也。茨城縣多賀郡磯原町の出身、三枝徹夫の二男にして、明治二十六年茨城縣大津町に生る。當年漸く不惑有五の年壯にして、精力旺盛、圓熟せる手腕は愈よ冴え、至誠以て醫道の本分を盡す上に寧日なし。家族は母、妻、二男一女ありて一家圓滿也。石川縣尾小屋鑛山社宅に住む。

伊藤正之

△滿洲國鐵道總局醫員にして、現に滿洲國濱綏線横道河子鐵路醫院に勤務中の伊藤正之博士は、北海道帝大出身の外科學者にして、外科界の權威柳壯一教授の指導を受け、母校より學位を獲得せる臨床醫博として其の學識、手腕を認められ、今や博士獨特のメスを自由に振ひ得るの活舞臺に在り、氏の得意や想ふべき也。而かも年齒未だ少壯にして潑刺たる前途を有し、研究心旺盛にして精研に餘念なく、勵精恪勤相俟つて自己の本分を盡さんとする所に、氏の尊き使命ありと言ふべし。

△學歴及び閱歷より言へば、大正十二年三月愛知縣熱田中學校卒業、同年四月北海道帝國大學豫科入學、昭和五年三月北海道帝國大學醫學部卒業、卒業後直ちに同大學醫學部第二外科教室(柳壯一教授)に入局し、同十年一月退局す、爾來樺太大泊の個人病院に就職し、同十一年二月滿洲國鐵道總局醫院に赴任し、同年八月學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「低溫ノ生體ニ及ボス影響ニ就イテノ實驗的研究」にして、參考論文六篇あり、(1)低溫ノ生體ニ及ボス影響ニ就イテノ實驗的研究(種々ナル條件ノ生存時間ニ及ボス影響及ビ復活 Wiederbelebung ニ關スル視察)、(2)同上(十勝岳白銀莊ニ於テノ戶外實驗)、(3)兩側頸部、交感神經切除、片側迷走神經切除並ニ之等兩手術併合ノ家兎血清

「カルチウム」及「カリウム」量ニ及ボス影響ニ就イテ、(4)氣管支喘息患者ノ血清「カリウム」及「カルチウム」量ニ就イテ並ニ之ニ及ボス頸部交感神経切除術ノ影響、(5)血清「カルチウム」ニ及ボス植物性神經毒特異作用ノ頸部交感神経切除ニヨル影響ニ就テ、(6)膝蓋骨結核ニ就テ等なり。

△本籍地は名古屋市南區熱田旗屋町二〇〇にして、明治二十八年伊藤東太郎の四男に生る。學究的少壯の紳士にして外科界に躍進せる新進醫博としてその今日あるは、既に氏の輝かしき閱歷に盡きて餘蘊なく、今や清新の意氣と共に奮闘活躍の全盛時に在り。性來謙遜にして銜はず、眞面目にして熱誠克く職務に忠實を盡す。人に接し患者に對するや自抑淡々として溫情に富み、誠意誠實を以て親切を盡す、その態度の眞摯にして臨床家に相應しき性格は、人をして自ら敬慕せしむるの徳を有す。學究以外には、一般スポーツに興味を有し、殊にテニスを好み、又圍碁と撞球とを樂しむ。家庭には妻との間に一女あり。滿洲國濱綏線横道河子鐵路醫院内に住む。

橋本 健

△恩賜財團濟生會吳病院副院長兼外科醫長として活躍しつゝあるは橋本健博士也。當病院は内、外、婦、眼科の綜合病院にして、床數六十餘、外來數一日百五十乃至二百人あり。病室常に滿員、醫員數九名(囑託を含む)、看護婦十八名、藥劑師三名、事務員三名、小使三名等、吳診療界に於ける唯一の治療機關とす。氏や外科を擔任し、特に其の最も得意とする内臓外科に至りては好評噴々たり、又消化器病學の造詣深く、其の蘊蓄せる手腕は他の追隨を許さずとの評判也。適材適所にありとの氏の現位地よりして、氏が獨特の手腕を發揮するに今や自由の立場に在り、内外の厚き信望と相俟つて氏が得意や想ふべき也。

△氏の學歴及び閱歷より言へば、兵庫縣三田中學校、松江高等學校理科乙類を経て、岡山醫科大學に入り、昭和七年同大學卒業後直ちに同大學病院外科に入り、津田誠次教授の下に外科を專攻す、同十一年二月津田教授の推薦により

恩賜財團濟生會吳病院副院長兼外科醫長を拜命す、同年八月學位を授與せられ以て今日に及ぶ。
△學位主論文は「急性脾臟壞死ニ關スル研究」にして三篇より成る。参考論文は(1)種痘後腦炎ニ因ル大脳蜘蛛膜囊腫ノ一例、(2)原發性顎骨放線狀菌病ニ就テ、(3)カルベ・レング・ペルテス氏病ニ就テ、(4)肋骨「カリエス」ノ統計的觀察の四篇あり。

△感想に曰く「現代の學者の中に賣名的の多くなつた様なことが考へられて、常に心痛してをる。醫師會に對しては私利を捨て、醫師の前途實に不安なる現況に對して、一致協力すべき團結力の乏しきを甚だ残念と思ふ、且つ、現代醫育機關は殊に徳育を重すべきを痛切に感ず、即ち現代の醫育の缺陷を改良すべきなり」云々。

△兵庫縣有馬郡山口村下山口戸主橋本榮太郎の三男にして、明治三十八年本籍地に生る。年齒未だ三十有三の少壯紳士にして、學究的臨床家としての特徴を備へ、篤實溫厚、殊に同情心に富み、患者を待つに飽迄親切を以てす、若し強ひて其の缺點を指摘すれば、眞正直にして或は短氣に過ぎる嫌なきか。讀書家にして、榮山と號し、趣味としては和歌を能くし、尺八、寫眞、書畫、骨董を愛好す。子供なし、家庭には平和の裡に妻あるのみ。吳市兩城町二八番地に住む。

佐野 眞一

△青森縣五所川原町増田病院外科部長として活躍しつゝあるは佐野眞一博士也。當病院は外科、内科、婦人科、小兒科、耳鼻科、皮膚科、理療科等より成る大病院にして、内容及び設備共に完備し當地方唯一の治療機關として有名也。氏は慶大派の一勢力と見るべき新血にして、外科を専門とし、特に蟲様突起炎を最も得意とする臨床醫博として其の手腕を認められ、今や多年の蘊蓄を傾倒して獨特のメスを揮ひ、診療手術の好評は、氏が性格たる熱實にして親切なりとの人望と相俟つて、大衆より多大の信頼と敬慕とを受けつゝあり。

△學歴及び閱歴より言へば、大正十年三月大分縣立宇佐中學校卒業、同年四月慶應義塾大學醫學部豫科入學、昭和四年三月同大學醫學部卒業、直ちに同醫學部助手拜命、藥物學並に外科學を專攻し、次で芝區恩賜財團濟生會病院外科醫長に轉ず、同九年十一月青森縣五所川原町増田病院外科部長として赴任し今日に至る、斯間阿部勝馬教授に就て藥物學を、茂木藏之助教授に就て外科學を專攻し、昭和十一年十月學位を受領す。

△學位主論文は「コレステリン代謝ニ對スル神經性影響」にして、參考論文は(1)膽汁の「コレステリン」代謝ニ及ボス影響、(2)パンチ氏病ノ手術治驗例、(3)蟲様突起炎患者ノ血液所見殊ニ蟲様突起ノ病理的變化トノ關係ニ就テ、(4)蟲様突起ト寄生蟲トノ關係、(5)妊婦蟲様突起炎ノ診療ニ就テ、(6)蟲様突起炎ノ診斷並ニ手術的療法其他あり。就中「蟲様突起炎ノ診斷並ニ手術的療法」は、氏が最も得意の作にして、氏の業績中の主要論文と見て可也。

△感想に曰く「現代醫學界に於て豫防醫學、治療醫學の兩者發展の跡著しきは喜ばしきことなり、疾病に對する完全なる豫防並に治療を期するため、醫界の學術的研究に向一般民衆の醫學的智識の完全なる涵養を切望するものなり」云々。

△氏は大分縣宇佐郡長峰村大字佐野三二八佐野晋の長男にして、明治三十五年生れの學究的少壯の紳士也。その今日ある氏が輝しき閱歴は言はずもがな、年齒未だ三十有六の活氣滿々たる時にして、漸く圓熟せる手腕は益々冴え、猶今後の修養努力と相俟つて洋々たる前途を有し、期待すべき將來を語るに餘裕綽々たるものあり。性格は純情にして邪氣なく、物事に對し熱中力の強大なることは、特筆すべき氏の長所と見るべく、但だ正直過ぎて短氣なるは、氏の短所かと思はる。趣味としては寫眞と弓術を好み、職務に對しては拮据勤勉、孜々として精研に餘念なし。家庭は妻と二人にて圓満也。青森縣五所川原町川端八五に住む。

産婦人科

福井正(政)憑 △帝都診療界の一部、醫師群集の環境たる赤坂區青山北町四の一〇六に福井産婦人科及び附屬福井産婆養成所あり、猶外に分院として京橋區京橋三ノ四(京橋際)に福井不妊症診療所あり。何れも斯科の大家として現代診療界に其名を謳はる、福井正憑博士に依りて經營せらる。本院は現代式洋風の陣容結構にして、大ならずと雖も感じ好き玄關に次で應接室、待合室、診察室、手術室、階上及び後庭には産室及び病室等々、婦人に相應しき設備に最善を盡して係員看護婦等の待遇と相待つて頗る好感を覺えしむ。博士は千葉醫大系の一先輩として錚々たる専門家にして、産婦人科界の著宿後藤自助教授並に故望月寛一博士に師事する外多年獨學造詣する所大なり。特に其の最も得意とする不妊症及び月經異常の診療は、博士の獨創にして博士獨特の手腕を有し又た自信を持す。加ふるに副院長として博士の令弟にして、斯科の新進手腕家中井卓次郎博士(日醫大・京大系)あり。俱にその圓熟せる手術の評判は、兄弟兩博士の徳望と相俟つて、益々人氣を集中し國內は勿論、遠く殖民地まで喧傳す。今や私立病院中斷然頭角を抜き、日々遠近より外來患者の輻輳するもの多く殷盛を極む。

△博士は獨逸協會中學並に二松學舎(夜學)を経て、大正三年千葉醫專を卒へ、直ちに母校の助手として病理學並に生理衛生學を專攻すると共に、縣立千葉病院醫員として勤務の傍ら三輪徳寛(外科)、井上善次郎(内科)兩博士に就て内、外科學一般を實地習得す。更に五年五月より東京帝大醫學部介補並に東京市醫員として、同大學及び東京市養育院に於て、内科を確居龍太博士に、物理的療法科を眞鍋講師(現教授)に、外科を井上善吉學士(現醫博)に、

眼科を河本博士に就て夫れく指導を受けつゝ實地習得す、尙勤務の傍ら、私立望月産婦人科院（院長故望月寛一博士）に於て同科の實地習得。七年春右職務を辭して歸郷、本籍地に於て私立福井療病院を創設し、後更に三重縣名張町に名張病院を設け、兩院の長として診療に従事せしが、十二年十二月再び上京、慶大醫學部助手に任用せられ、藤浪剛一、草間滋、小泉丹各教授に師事、レントゲン學、病理學及び生物學特に生殖生理を研究、兼ねて産婦人科學を専攻す。十五年十一月醫博の學位を受領。昭和二年郷地病院を閉ぢ、引續き滯京、研究の傍ら假診療所を麴町區富士見町二ノ三五に設け診療に従事し居りしが、三年三月故望月博士の創立經營せる望月産婦人科病院を繼承し、之れに改修を加へなほ病産室を完備し、福井産婦人科と改稱、同時に前記假診療所を閉鎖。次で福井産婦人科分院不妊症診療所を京橋に増設。爾來専ら産婦人科並に婦人内科の一般診療に従事し今日に至る。特に不妊症治療の第一人者として盛名あると共に、兼て優生學の見地より民族の優化を目的とする「母性保健協會」を創設して、處女に對する保健教育、結婚改良の輔導、母性に對する健康相談、妊産婦に對する保護、産婆の改善とその普及等に、あらゆる方面より努力し、これ等に關する著書も亦尠からず。夙に「お産の家」、「産婆養成所」等を設けて、着々その實蹟をあげつゝあり。猶同協會は、畏くも皇儲殿下の御降誕奉祝記念事業として、思想善導の根源に資する目的に、「お産の家」を更に擴張し、理想的なものを、赤坂區青山五丁目電車通（青山師範の側）の地を下して近く新築するの計畫あり。

△學位主論文は「レントゲン」去勢ニ關スル研究にして、副論文は、(1)「レントゲン」線ニヨル血液像ノ變化ニ就テ、(2)幽門狹窄ト誤診サレ易キ高度ノ胃擴張ヲ伴フ十二指腸狹窄ノ一例、(3)「レントゲン」診断ヲ迷ハシメタル膽囊疾患ニ因ル幽門部陰翳に就テの三篇なり。著書としては、(1)「レントゲン」去勢ニ關スル研究、(2)最新妊娠調節の實際、(3)花柳病の新智識、(4)夫婦愛の破綻を防ぐ性の衛生、(5)最近生理衛生教科書、(6)最新妊娠より育児までと胎教

(7)貞操破壊と結婚淨化、(8)實踐家事新教本、(9)最近博物概論、(10)教範生理衛生、(11)中等博物（生理衛生篇）、(12)教範女子生理衛生、(13)實業生理衛生綱要、(14)婦人性典、(15)性病實鑑、(16)千の庫より子は實、(17)實驗産婆學等あり。

△専門は産婦人科（特に不妊症月經異常）なれど、博士の特徴とするは千葉醫專卒業後、内科、外科、物理的療法科、眼科、耳鼻科、レントゲン科、病理學、生理衛生學等、その全般に涉り各科の究理と實習とを續け、綜合的臨床の經驗を有する點に大に強味あるを想はしむ。會々博士の感想を聽けば、曰く「現今の若い醫者には眼かくしされた馬車馬のやうに自分の専門以外の診断がつかぬ人が多くて困る。例へば内科のある友人が一患者を診察して胃潰瘍として治療したところ依然として治らず、自分に依頼されてそれが悪阻であつたことなど、すべて自分の専門科に何んでもかんでも引き入れて治療を誤ることが随分あるのだ」云々と、その一片を吐露せり。一般臨床家にとりては、亦以て他山の石とすべき乎。

△博士の抱負として聽くに、又曰く「自分はある目的のために産婦人科をやつて居る、これを最後にもつて來るまでには外科もやり眼科も心得えて居る。だが本來開業が目的ではなく、結局は私の主宰する母性保健協會の目的達成、即ち結婚淨化、民族の優化改良が、私の生命である。萬病と云つても花柳病、癩病、不良兒の撲滅が何年後かに於て表はれることを確信して社會的救濟事業の一として「福井×××」と云つたものを建てたいのが多年の宿望であるが、唯だ資金が無いので開業して居るのである」云々。著者曰く、社會事業の急先鋒として富豪階級の反省と考慮とを煩はし、聽て如斯救濟機關の實現を待望して止まず。また博士は、最近醫療方面と併せ、宗教方面よりも、思想の動搖を救ひ、時弊を矯めんと努めつゝありと傳聞す。斯の如く獨り醫業のみに止らず、多方面に活動しつゝある博士が、期待する理想の實現は、必ずや刮目に値するものあるべきを信じ、敢て宿願成就の爲に、益々加餐自重あらん事を祈る者也。

△博士は奈良縣宇陀郡三本松村大野の人、福井義成長男、政憑、正憑は同人なり。明治二十二年生れにして、當年四十有七歳也。愈よ圓熟の期に入りて元氣益々旺盛、その今日あるは素より其の玲瓏たる手腕と、努力主義の發現に主因するものなれども、又一つには患者に對する親切本位をモットーとせる、博士の天資濃厚篤實なる性格の反映と見るべき點尠しとせず。要するに、その今日までに成業せる閱歴は、燦として輝き成功と云はざるべからず。又博士が外國人の診療にも特種の信頼と技能とを有することは、曩時國際愛破綻をもつて有名となれる南歐の美人フェリシタ夫人も亦、博士の産室において一貫三百餘のカルメン嬢を安産したるをもつて知るに足る。一度び其の醫咳に接せんか、如何なる場合と雖も決して城壁を設けず、雄々しき風貌には威權を具へ溫容を以て人を迎ふ、その態度悠揚として迫らず、話題豊かにしてユウモアに富み談快活なり。清淡寡慾にして人を愛することは診療室壁間に掲ぐる、「見利思義、見危授命」の扁額を觀ても知るべく、又謙和にして物と争はず、然も世に阿らず人に求めず、自己宣傳的行爲を絶對に嫌ひ、獨力貫行、一意その信する所を守つて動かざる處に其の人物の大なるを見、益々敬慕の念を深からしめたり。また醫師會方面にも、その要職を占め、現に赤坂區醫師會事務所が病院内に置かれ、博士これを管掌しつゝあるを見ても、同業者間における信望亦薄からざるを知るに足るべし。

△學生時代よりの讀書家にして學力の優秀なることは、五年制の中學を拔擢せられて四ヶ年にて卒業し、又醫學校において試験答案に獨逸文を用ひて大澤岳太郎博士の賞嘆するところとなりたる等の事實が證するところなり。殊に心理學修身上に就て明治三十九年以來高島平三郎翁に師事し、その高弟たること、周知に屬す。別名を富久居正寄と號す。また醫家稀に見る常識の持主にして、その所說文章優に一家をなすをもつて、醫家中有數の評論家として、各方面よりその意見を徵せられ、常に新聞、雜誌の座談會や記事にその顔を見ざるものなく、頗にその名喧傳さる。其の筆墨亦雅健にして曲折に富む、たま／＼或宴會の席上に於て隠し藝を望まれて疊拾疊敷の紙に筆を以て壽と云ふ字を

左文字にて紙一杯に鮮やかに書いて一同を驚かしめたと云ふ事は一つの挿話とし、今猶同僚の間に囁さる。又未だ全く世に知られざる博士の趣味の文字と篆刻とは、これ亦天下一品にして、その典雅實に愛好するに足る。著者に與へられる盆額に曰く「重義避濁富、醫心貴清瘦」と、又以つて博士の人格を知るべし。

△尙聞説、博士の父は、往年、文部内務の兩省より第一回の選奨を受けたる模範青年團の創設者にして、教壇に立ちし人、後、郡政に參與し或は村政を統率したることもあり、今尙郷黨の先覺長老として古稀を迎へて愈々壯健なりと。而して母も亦健在にして孝養を盡され孝行博士を以て知らる。獸醫福井駿太郎及び醫博中井卓次郎は實弟にして、京大教授岡林秀一博士は義兄（博士の夫人靜子は岡林博士の妹）に當り、猶醫博高橋正義、醫博釜本四郎とは親戚の間柄なりと、餘慶ある家柄と云ふべし。博士人物として學德兼備せる人格者たるを尊び、其の精神氣概は世の臨床家たる人の採つて以て學ぶ處少しとせず。私宅は澁谷區原宿二丁目一七〇ノ一〇に、本邸は出生地に在り。

太田鑒吉

△多士濟々たる帝都醫博界に割據して、江戸川區東小松川町二ノ四〇七四に外來診療室、手術室、内診室、手術準備室、應接室、病室（六室）等々新装せる陣容を構へ、産婦人科を標榜して昭和四年以來開業せる太田醫院あり。院長太田鑒吉博士は、京大系の少壯學者、産婦人科界現代の權威たる恩師岡林秀一博士の指導を受けて斯學の蘊奥を究め、微生物學は清野謙次教授に就て專攻し、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△「現代多數の醫學者が各自獨特の研究に絶えざる努力を續けらるゝ點は大に敬意を拂ふ。邦家の爲め否世界の爲に益々奮闘努力あらん事を偏に希望して止まぬ」云々とは、博士の著者に寄せられたる感想の一片なり。又た醫師に對する感想に就ては「輓近往々にして醫師諸君の心事が甚しく狭少にして只自己の利益を計る事にのみ汲々として他を顧みざる傾向の少からざるものは余の大に遺憾とする所なり。今少しく度量を廣大にし一般民衆の健康上の苦惱

を癒す事は、即ち自己を利用する點なりと考へ互に連絡して業務に精勵せられん事を希望する」云々と、同感に堪えず、一服の清涼劑たるべし。

△東京市の人、明治二十七年生れにして、東京府立三中、二高を経て、大正八年京都帝大醫科大學を卒へ、直に副手として産婦人科教室に勤め、同十年大學院入學、岡林、清野兩教授指導の下に研究、同十四年二月學位受領、同年朝鮮釜山鐵道病院産婦人科部長兼副院長就任、同十五年之を辭し堺市堺病院産婦人科醫長就任、昭和四年依願辭職上京して開業今日に至る。

△主論文は「「デアテルミー」ニ因ル雌性生殖器脂肪ノ消長ニ就テ」にして、參考論文は、(1)諸種細菌體及ビ其ノ毒素ニ因ル妊娠時卵巢及ビ子宮ノ形態學的研究、第一、二、三回報告、(2)諸種細菌毒素ニ因ル心筋ノ變化ニ就テ、(3)卵巢及ビ子宮殊ニ産褥粘膜炎ニ於ケル糖原質ニ就テ、(4)子宮腔部ニ生ジタル「ポリープ」様筋纖維腫ニ就テ、(5)種々ナル下熱劑ノ溶血作用ニ及ボス影響ニ就テの五篇なり。

△性來卒直、人に對するに眞摯にして熱情あり、誠實にして温情の掬すべきものあるは敬慕の念を深からしむ。たゞ短氣にしてよく怒ることあり、強ひて言はしむれば、或は之れが短所ならん乎、然しこの點は手術方面を主とする醫師の共通性と見るべき弱點には非ざるかも考へらる。趣味としては音楽を愛好し、殊に尺八を能くす、鬢雪は尺八に於ての號とす、又克く讀書して精研に今猶餘念なし。春秋豊富、潑刺たる前途や益々輝かし。

山田一夫

△京都府立醫科大學産科婦人科學教授山田一夫博士は、獨り學内に重きを爲す重鎮たるのみならず、斯科界現代の權威たる一人物たるを失はず。博士は京大系大正五年組の一異彩にして、大學院在學中、恩師高山尚平博士指導の下に産科婦人科學の蘊奥を究め、岡林秀一博士教授となるや其後任として助教に擧げられ、後に母

校より學位を獲得せる斯科界の新進教授也。

△學位論文は家兔に就き麻酔の經過に及ぼす出血の影響を研究し、次で麻酔經過中に於ける出血時の救急處置に關する實驗を行ひ、以下必要なる各項に就き夫れ々々經過を觀察し且其が考察を附し、出血時に於ける麻酔の警戒すべきを研究せるもの也。即ち主論文は「麻酔ニ關スル知見補遺、殊ニ出血時ニ於ケル研究」これなり、參考論文は、(1)「ラヂウム」照射ニ因ル腫瘍ノ運命並ニ其移植ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「ラヂウム」ノ殺菌作用ニ對スル小實驗就中大腸菌ニ就テ、(3)子宮瘤腫組織學的檢索補遺、(4)子宮頸腔部痛患者ノ生命持續ニ就テ 附其保存的處置ノ價値ヲ論ズ、(5)執拗ナル子宮出血症例附輓近ニ於ケル該治療ノ二三、(6)畸形兒、(7)假性半陰陽、(8)第七頸推附近ノ高サニ表ハル、可透視性毛細血管ニ就テ、(9)喇叭管妊娠病理知見補遺、(10)臍帶ノ統計的觀臍、(11)臍帶ノ組織學的檢索補遺附彈力纖維並格子狀纖維ニ就テ等なり。「畸形兒圖譜」の著書あり。

△博士は愛知縣立一中、八高を経て、大正五年京都帝大醫科大學を卒へ、同六年一月同學大學院入學、同時に産婦人科教室副手囑託、同八年四月同學醫學部産婆養成所講師囑託、同九年九月大學院退學、同時に同學醫學部講師囑託、同十一年十月任京都帝大助教授、同十四年三月學位受領、同年十一月任公立大學教授、補京都府立醫大教授、産科婦人科擔任を以て今日に至り。

△博士は名古屋市東區清水町山田直臣二男、明治二十三年生れにして、當年不惑に入る五歳。學者タイプの風貌に威嚴を存し、溫容の裡に謹嚴そのものの性格を表はす。其の蘊蓄を披瀝して教壇に起つや、諄々説くところに熟あり力あり、學生間に篤き信望を博す。而かも猶春秋豊かにして精研に餘念なき前途は、洋々たる博士の將來を語るに餘裕綽々たり。讀書家にして和歌の嗜みあり、園藝を好む。靄々たる家庭には妻さく子との間に一子文夫あり、京都市出町榊形上ル東入に住む。

山崎義男

△松本市蟻ヶ崎に山崎病院あり、産婦人科専門を以て著聞し、私立病院中嶄然其地方に一頭地を抜く。院長山崎義男博士は千葉醫專系の一異彩にして、嘗て獨逸に留學し、伯林大學實驗的生物學教室にてビツケル教授に師事し、次で伯林ウイエルヒヨウ、克蘭ケンハウス醫化學部長ヴォーグムト教授指導の下にて研鑽せり。其今日の聲望と成功とを贏ち得たるもの、遠く其由つて來る所以あるを想はしむ。

△博士は明治四十四年千葉醫專を卒へ、直ちに東京順天堂病院産婦人科部長吾妻勝剛博士の助手となり、大正三年一月まで實地研究、次で同年滿鐵營口醫院産婦人科主任として赴任、同六年大連滿鐵醫院婦人科へ轉勤、同八年奉天南滿醫學堂産婦人科講師となる、同十一年滿鐵より滿二ヶ年間歐米留學を命ぜられ、主として獨逸にて研究の後歐米各地の大學を見學し、同十三年歸朝す、爾來引續き滿洲醫大講師として婦人科學を講じ、同十四年四月學位を受領す、同十五年滿洲醫大を辭し、郷里松本市に私立山崎病院を開設今日に至る。

△主論文は「「ヴァイタミン」及び無機鹽類缺乏ノ生殖腺ニ及ボス影響ニ就テ」と題する獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)二三藥物ノ輸送ニヨル家兎卵巢變化ノ組織學的研究、(2)胎盤脂肪含有量ノ性的差異、(3)家兎ノ胎兒及胎盤ニ於ケル糖原質含有量ノ性的差異、(4)家兎胎盤ニ於ケル窒素含有量ノ性的差異、(5)皮膚ノ酵素ニ就テ(獨文)、(6)子宮筋腫ニ對スル「レントゲン」線ノ作用ニ就テ(獨文)、(7)人類胎盤ニハ「ヒスタチン」ヲ「ヒスタミン」ニ變化セシムル作用アリヤ(獨文)、(8)家兎ニ於ケル特發性肝硬變ノ一例(獨文)、の八篇なり。

△感想に曰く「醫は仁術なり、金儲けには非ざるなり、醫師に必要缺く可からざるは金錢にあらずして道德なり、就中温情信義の美德なり。然るに近時開業と云へば直ちに金儲けを想像せらるるもの如く、所謂開業醫の成功者とは専ら金儲けに成功せる人物をのみ云ふもの如し。甚だしきに至りては醫師にして高利貸等を成し善財に没々たる者有りと聞く。斯かる貪慾下劣の輩等には義理も無く人情も無く仁術もヘチマもあつたものに非ざるべく一にも金二にも金三にも亦金なるべし。嗚呼淺ましき限りならずや。世の開業醫諸氏と希くば卿等は徒らに金錢のみを欲せず、私利私慾に耽らず、貧者も卑しめず富者にも諛はず、造次顛沛も人格の修養を忽せにせず以て眞の國手として天職を辱しめざらん事を」云々。學位に伴ふ人格の向上尊重を高調絶叫するの秋、自省の清涼劑として三思傾聽に値す。

△博士は長野縣北安曇郡七貴村山崎延次長男、明治二十一年生れにして當年四十有八歳也。年壯銳氣、研鑽多年の經驗と共に手腕今や圓熟の域に入り、臨床家としては最も重望せらるる腕盛にして一段の貫祿を加ふ、博士の得意や想ふに餘りありと云ふべし。業餘能く讀書精研して新智識の吸収に力め、又たく自ら陶冶して品性を養ふ。而して居常人に對するに禮儀に嫻ひ、眞摯にして親切あり、温情に富む博士の態度は歡迎すべき也。

北井幾八

△東京市の中樞、日本橋區濱町二ノ一七に在る北井産婦人科病院は、院長北井幾八(通稱成憲)

博士の診療所也。附近は著名なる開業醫の群集せる環境にして、博士は楯比する此の群雄割據の間に獨立して以來、拮据勤勉、十年有餘にして既に抜くべからざる地盤を築き、産婦人科とさへ云へば北井を聯想せしめ、今日の隆盛あらしめたり、蓋しその過去奮闘の歴史を顧みれば、立志傳的成功の篤學者として、筆者は推獎するに吝ならざる者也。博士は醫術開業試験出身とはいへ、天資學究的向學心に燃え、東大教授佐藤外科を振出し三浦内科に次で、諸所病院に於て多年實地の經驗を積み、後ち私費を以て歐洲に遊び、獨逸伯林大學産婦人科教室にてはエルストブナム教授に師事し、同科病理學教室にてはローベルト、マイヤー教授の指導を受けて研究する所あり、歸朝後は慶大の長老川添教授の下に斯學の研究を續け、慶大より學位を得たる篤學の名醫博として其の學識手腕を認めらる。既にして其の今日ある輝しき閱歴は博士の面目を語るに充分也。

△更に其の學歴及び閱歴を公開すれば、明治四十五年東京市私立日本醫學校を卒ゆ、在學中同四十三年既にして内務省醫術開業前期試験に合格し、卒業後其年後期學說試験に、翌大正二年後期實地試験に合格して醫師免許證を下附せらる、同年東大醫科大學佐藤外科教室に於て約六ヶ月間見學、次で三浦内科に轉じ約二ケ年間研究、同五年順天堂醫院に入局、約九ヶ月間X光線學研究、同六年日本橋區濱町山村外科病院に勤め一ケ年間實地研究、同七年日本橋區矢ノ倉町櫻井産婦人科病院に轉じ、同十五年まで勤続、此間同十二年私費歐洲留學、主として獨逸伯林大學にて研究し同十四年歸朝す、次で慶大醫學部産婦人科教室にて研究を續け、同十五年七月學位を受領す、爾來獨立して現住所に私立病院を開設經營今日に至る。

△學位主論文は、(1)子宮内膜ニ基因スル「アデノミオージス」ノ解剖及發生ノ論文、(2)外性子宮腺筋增生「アデノミオージス」及卵巢ノ「テール」嚢腫ニ就テの二篇より成り原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)内性「アデノミオージス」ノ解剖的關係殊ニ細胞異常位置増殖ノ組織學的作用ニ就テノ豫告 附サンプソン氏學說ノ簡單ナル觀察、(2)子宮ト癒着セル卵巢假性粘液嚢腫ノ細胞位置異常ヨリ發生セル子宮體部「アデノミオージス」ノ一例ニ就テ、(3)女性生殖器ノ「アデノミオージス」及「アデノフィブrosis」ノ論說、(4)喇叭管ニ於ケル閉鎖及上皮細胞位置異常増殖ノ炎症性原因ニ就テの四篇にして何れも獨逸文の原著なり。

△感想に曰く、(一)將來開業醫たらんとする者は専門的に醫學を修めなければならぬ、一人で二三の科目を無缺に完ふする事は不可能である宜敷學校卒業後一定期間學校又は病院で専門的實地研究をなし専門醫的國家試験即開業試験を受け皆一定せる開業資格を得る様になす可きである。然し開業せざる人は開業試験を受けると否とは自由である。

(二)現代日本の醫學界は世界に對し遜色は無いと思ふ。誠に立派なものである。然し各大學で博士を御手盛りで造る事は如何なものでせうか、之れからは醫博の權威を保つ爲には少なくとも其の提出論文に對し日本中の大學專門教授

の賛否を問ふ位の必要は有りはせぬかと思はれる同一「アルバイト」で甲の大學で否決され乙の大學で可決された等と云ふ事を耳にして居る。(三)醫者は何處へ行く勢の越く所仕方が無いと云つても今の醫師界の現状を見るに常識では判斷出來ぬ程の泥試合か勢力争ひである、吾醫會を醫師會幹部達が玩弄物の如く考へて居る様である。然しながら幹部連のみを責める理けには行かぬ一般會員の放任主義及び不明も亦責めなければならぬ。(四)今の様な醫界の状態では是れから新らしく卒業する過剩の醫者はどうなるか雇はれたくも雇ひ手が無い開業しても患者は來ない然し醫者も生きなければならぬ上に住まはなければならぬ着なければならぬ、之れでは多少赤くなるかも知れぬ醫者が赤くなつたら大變な事だ、それよりも大なる希望があれば日本の勢力範圍にある新興滿洲國への進出がより多くの光明を齎すであらう。醫者も人間である以上餘暇が必要である四六時中夜の夜中まで診療せねばならぬと云ふ法律は改制すべきである。(五)今までの開業醫制度を是とする人と非とする人とあるが、僕は日本の開業醫制度は外國に比較して誠に結構であると思ふ。(六)醫藥分業問題も賛成者と否賛成者とあるが、今迄の日本の開業醫制度に照して醫者が診療して自ら投藥する事は誠に賛成であるのみならず患者は大いに得策である。(七)醫師法の改正は結構の所もあるが悪い所も有る。患者の秘密までも發くのは如何なものでせうかそれよりも醫藥類似業者及藥劑師の問診投藥を取締る法律が出来なければならぬ。(八)内務省では醫藥國營論を稱へる人もあると聞いて居るが中々困難の事である第一政府で其れだけの金が無いではないか露西亞の前例等も良く考慮せなければならぬ、醫者の中でも政府で生活を保證して呉れるなら月給取りでも結構である等と云ふ人もある月給取りも無くては困るだらうが、實に歎かましい次第である意氣も人間味も失せてしまふ。(九)今は以前とは多少異つて居るでせうが醫者の經濟思想の乏しい事はお話しならぬ。昔から傳統的に甚だ良くない習慣がついたものだ今になつて眠氣の醒めた連中も随分あるだらう。(十)思ふに之等は皆不景氣と人心の變化が持つて來た産物である僕等が醫者になつた頃は醫者が困つた等と云ふ事は藥にしたくも聞け

なかつた將來一番吾等の醫界を改革善處すべきであると同時に來る可き好景氣に備へ腕を研く必要がある一方社會學も充分會得す可きである。

△神奈川県鎌倉郡中川村の人、北井喜代松の二男、明治二十四年生る。年齒不惑に入る六歳、年壯の意氣益旺也。學究的温厚の紳士にして、福徳圓滿なる風貌を備へ、崇高なる人格を敬慕せしむるの徳を有す。博士の最も特徴とするところは、其の壯熟卓越せる手腕と相俟つて其の診療に臨むや甚だ熱心にして、終始患者本位を主義として克く誠實と親切とを盡す點にあり。其の眞摯にして熱情あり温味ある態度は、博士の篤き聲望を博する所以にして其の今日あるも亦た偶然ならざるを首肯せしむ。研究以外、業餘の趣味としては音楽を好み、又た園藝に親しみ、日常多忙の裡に清遊して心身の疲れを休養す、春秋猶豊かにして潑刺たる前途は益々多望也。

山田 康

△東京市、省線中野驛南口前（中野區宮園通五ノ二）に産婦人科山田病院あり、院長山田康博士の經營する所、新装の陣容結構にして、外觀の美と併せて、診察室、手術室、病室、院長室等々内部の設備整ひ好感を與ふ。入院患者の如きは常に満員の有様にて、門前は日々外來患者を以て賑ひ、活氣横溢して頗る盛況を呈す。博士は東大系大正七年組の出身にして、母校の恩師磐瀨雄一教授の指導を受けて、産科婦人科學を造詣する所深く、又醫化學は等しく東大教授柿内三郎博士に就て研鑽する所あり。その學術の蘊蓄は言はずもがな、多年の經驗と相俟つて實際的手腕の圓熟せる點と、天資温厚にして眞摯なる態度とは、その今日の成功を贏得たるものと云ふべく、此の實際を目標したる筆者は改めて敬意を表するもの也。

△博士は福開縣山門郡柳河町南長柄町の人、明治二十五年生にして、大正十年將原姓より山田家に入籍す。縣立熊本

中學校、五高を経て、大正七年東京帝大醫科を卒へ、直ちに醫化學教室に入り柿内教授に師事し、更に神田駿河臺産婦人科濱田病院に入局す、同八年一月一年志願兵として入營、同十二年任陸軍三等軍醫（同十四年後備役編入）同十二年東大醫學部副手として産婦人科醫局に勤め磐瀨教授の指導を受く、同十四年濱田病院副院長となり、同年六月東京帝大より學位受領、同十五年木下正中教授の推薦により大分市犬塚病院の招聘に應じ同病院長として赴任、産婦人科の診療を司る、次で昭和二年山形市立病院濟生館産婦人科醫長の囑託を受け、同五年迄勤続す、爾來頭書の地に産婦人科山田病院を新築開設して一般の診療に従事、日本婦人科學會評議員として今日に至る。

△學位主論文は「妊娠時ニ於ケル腎臟機能ニ就テ」にして英文の原著なり、参考論文なし、他に、(1)妊、産、褥婦ノ血液及び尿中窒素配分率ニ就テ、(2)子癩患者ノ血液及び尿中ニ於ケル窒素配分率ニ就テ、(3)妊娠患者ノ腎臟機能ニ就テ、(4)産婦人科領域ニ於ケル血壓動態ニ就テ、(5)妊娠時各種臓器内ノ酵素活能量ニ就テ、(6)新生兒ノ臍帶切斷ノ極機ニ就テ、(7)柔道活法ト假死新生兒ノ人工蘇生術法トノ比較並ニソノ處置ニ就テ、(8)妊娠時腎臟機能失調ニ對スル治療方針ニ就テ、其他論著澤山あり。

△博士の趣味とする柔道は講道館五段にして、その柔道界に於ける業績は、大正五年東龍柔道會を、同十一年濟美柔道會を組織し、昭和七年來東京柔道有段者會豊多摩郡支部長たり、更に講道館柔道醫事研究會委員、講道館文化會發行雜誌「作興」の編輯部相談役として今日に及べる等なり。年齒不惑に入る漸く四、引締りたる體格の持主にして意氣潑刺たるものあり、その日常は醫務頗る多忙殆ど席を暖むるの暇なしと雖も、孜々として倦まざる熱心と、不斷の努力とは甚だ多とすべし。其學殖、經驗は向後の活躍と相俟つて、猶春秋に富む前途の大成を期待す。